

第10章 暴風雨の前の変転

——都、潁州、揚州、定州

■定風波

げんゆう
元祐6 (1091) 年、蘇軾^{そ しよく}56 歳。

蘇軾は、3 月上旬、寒食^{かんしよく}のころに杭州^{こう}を発ち、船で都を目指して大運河を北上した。3 月 18 日、呉興^{ごこう} (湖州) に至り、この詞を詠んだ。序文がある。湖州はかつて知事を務め、そこで逮捕された地である (第 5 章 384 ページ)。

私は、昔、張先^{ちやうせん}、劉述^{りゅうじゆつ}、李常^{りじやう}、陳舜俞^{ちんしゆん ゆ}、楊繪^{やうかい}と、呉興^{ごこう}で一堂に会した。時に張先は「六客の詞」を作り、その終わりの章に、

尽道賢人聚呉分。(賢人が呉の分野に集まっていると誰もが言います)

試問、(ちょっと尋ねてみましょう)

也応傍有老人星。(星々のかたわらにあるのはきっと老人星でしょうね)

と、あった。

それからおよそ十五年、再び呉興を通過し、五人はすでに亡くなってしまった。時に、

曹輔^{そうほ}、劉季孫^{りゅうきそん}、蘇堅^{そけん}、張弼^{ちやうひつ}が私に同行し、張詢^{ちやうじゆん}が「後の六客の詞」を作るよう求

めた。

(張先^{ちやうせん}ら6人が集まったのは蘇軾^{そう}が杭州副知事の任を終えて密州^{みつ}に向かう途中でのことで、そのことを記した文章を第6章204ページで見えて、一部字句が異なるが張先の詞もそこに引用されている。そして再び呉興^{ごこう}に、顔ぶれは異なるが6人が一堂に会したのである。張詢^{ちやうじゆん}は湖州知事で、その他の4人は杭州からここまで蘇軾を送ってきたのだ)

月滿苕溪照夜堂、(月の光が苕溪^{ちやうけい}の流れを満たし、夜の堂を照らしています)

五星一老鬪光芒。(ここに五つの星と一つの老人星が光を闘わせています)

十五年間真夢裏。(十五年などはまことに夢のなか)

何事。(何があったのでしょうか)

長庚対月独凄凉。(金星がぼつんと月に向き合っています)

綠鬢蒼顏同一醉。(黒髪と老いた顔が一緒に酔います)

還是。(またここで)

六人吟嘯水雲鄉。(六人が水雲^{すいうん}の郷で吟唱^{きと}します)

賓主談鋒誰得似。^{あるじ}(主と客が鋒を交えるように語り合っています)

看取。(見るとそれは)

曹劉今対両蘇張。^{そう} ^{りやう} ^そ ^{ちやう}(曹、劉と、二人ずつの蘇、張です)

(初めにある「苕溪」は近くにある有名な川。「五星一老」とあるのは、かつての「老」

ちようぜん
は張先で、今の「老」は蘇軾である。この時代に56歳ともなれば立派な長老格なのであろう)

■破琴詩

この詩が詠まれたのはこの年の6月であるが、序文には上と同じ時期にあった出来事が記されている。

ふる
旧い言い伝えにこのようにいう。

とう ぼうかん げんそう かいげん
唐の時代のこと、房琯(玄宗皇帝の次の皇帝のもとで宰相にまで昇った人)が開元年間
ろ し けい わ はく か こうそん
に盧氏県の知事であったとき、道士の邢和璞と一緒に遊びに出て、夏口村に来て、荒れ果てた仏寺に入り、古い松の下に腰をおろした。邢和璞が従者に命じて
かめ
地面を掘らせると、甕が出てきて、中に婁師徳が永禪師に与えた手紙があった。
おぼ
邢和璞は笑って房琯に言った。「このことを憶えていましょうか」。房琯は悵然として
ちようぜん
己の前生は永禪師であったのを悟った。

りゆうきん
私の旧い友人の柳瑾はこの出来事を描いた画を宝としていた。柳瑾によると、もと
そうてき
は唐代に描かれた画を、宋迪が模写したものである。

げんゆう こう ごしょうこう
元祐六年三月十九日、私は杭州から都に還る途中で呉淞江に船を泊めた。夢
ちゆうしゅ
に、仲殊長老が琴を携えて訪ねてきた。仲殊が琴を弾くと、すばらしい音色であった。よく見ると、琴は破損がひどく、十三弦(秦の時代の琴)であった。私が嘆息して
しん
やまずにいと、仲殊は言った。「損なわれてはいても、なお修理はできましよう」。

「十三弦をどのようにするのですか」と尋ねると、仲殊は答えずに詩を誦した。

度数形名本偶然、ど すう けいめい もと ぐうぜん(度数 形名 本 偶然)

破琴今有十三弦。は ぎん いま あ じゅうさんげん(破琴 今有)十三弦)

此生若遇邢和璞、こ せい も けい わ ぼく あ(此の生 若し邢和璞に遇うなら)

方信秦箏是響泉。まさ しん しん こと こ いずみ ひび(方に信ず 秦の箏は是れ 泉を響かすと)

私は夢の中ではあったけれど、その意味するところがはっきりとわかった(詩は、琴は古代の音を今に伝えるということを歌っているのだろう)。そして目覚めると、そのことを忘れてしまった。

明くる日、昼寝をしていてまた夢を見て、仲殊が来て、前の通りに言い、またその詩を誦した。そしてちょうど覚めたところに、仲殊がたまたまやってきたので、夢と見たのは実は夢ではなかったのかと思った。仲殊に問うと、何も知らずにいた。

この年の六月、柳瑾の子の柳子文りゅう し ぶんに都で会った。邢和璞の画を求めて譲ってもらい、詩を作り、ならびに夢に見たことを画の上に書いた。

柳瑾あざな し ぎょくは字を子玉といい、よく詩を作り行草を上手に書いた。宋迪ふく こは字を復古といい、山水草木を描いて当時絶妙とされた。仲殊はもと書生で、家を棄てて仏教を学び、俗を脱して執着するところがない。みな奇士である。

(ここに挙げられている幾人かの人物について説明を加える。(1) 房瑄ぼう かんは、安祿山あんろくざんの反乱軍によって占拠された長安ちやうあんを奪還すべく大軍の指揮を任された人物。教養があり過ぎたのだろう、不可解なことに古代の戦術を用いて大敗した。蘇轍がここに記した伝説によると、房瑄は前世では脱俗の道士で、そのことを邢和璞が思い出させてくれたのだ

った。しかし、次の詩では、せっかく前世が知れたのにかわらず、すっかり墮落してしまっていたということが歌われている。(2) 仲殊^{ちゆうしゆ}は第9章123ページで見た蜂蜜好きの僧である。仲殊は、蘇軾^{こう}に先立って杭州を出て、このあたりを巡り歩きつつ待ち受けていたのだろうか。(3) 劉瑾^{りゅうきん}は蘇軾の旧い知人(第4章6ページなど)で、その子の柳子文^{りゅうしぶん}(字は仲遠^{あざな ちゆうえん})は第8章102ページに登場している。(4) 宋迪^{そうてき}は山水画の名手で、蘇軾^{さうりやうせん}にはその画を詠んだ詩がある(訳出しなかった)。(5) この序文や参寥泉の銘(第9章208ページ)を見ると、蘇軾には予知能力があるかのようだ

破れた琴は修繕されないままでも、
その中に琴^{こと}の意があるのならそれで十分である。

これがかの昔の十三弦であると誰が言うのか、
佩玉^{はいぎよく}が触れ合うような妙音を発する。

新しい琴は、ことさらに立派に張られてはいても、
弦の声は琴の台木と調和していない。

美しい七弦の琴は、
ややもすれば世俗の好みを逐うだけのものである。

思えば、房瑄^{ぼうせん}は心根の低い者で、
世俗のなじむところに墮^たしてしまった。

房瑄^{らんていらん}が好んだ琴造りの職人の董庭蘭などは、
無弦の曲(最上の音楽)などわからずにいたのだった。

(1) 蘇軾のこの詩は、都に行っても房冢ぼうかいんのようにはなるまいとの思いを籠めたものであろうか。(2) 上の序文とほぼ同じ内容の短文が別紙にあり、夢で仲殊ちゆうしゆが詩を誦してから後が少し異なるので、そこだけを訳しておこう)

……夢の中ではっきりとその詩の意味を知った。覚めてからそれを書き記した。今晩は蘇州そに至り、ひょっとして仲殊ちゆうしゆが来るかもしれない、来たら渡そうと思って、その詩を書いたのである。写し終わってここにまできて、筆をまだ手にしているときに、仲殊ふなばたが舷を叩いて現れた。驚き嘆息して、これを仲殊に贈る。時に蘇州まで五里のところであった。

(一段と劇的になっているので、蘇軾本人か後人が話を盛ったのであろう)

■再乞発運司応副浙西米狀

前年の7月、蘇軾は自然災害の発生を危惧し、朝廷に先手先手での対応を要望していた(第9章128ページ)。朝廷の動きは鈍く、災害が現実のものとなり、蘇軾は船旅の間に惨状を目の当たりにした。すぐにこの書状を書き、対策を急ぐよう朝廷に強く求めた。

元祐六年三月二十三日、竜図閣りゆうと学士左朝奉郎前知杭州蘇軾は書状をもって奏上けんじやういたします。

右の臣は近ごろ恩詔おんしやうを受け取り、都に赴くよう召されました。

せつせい

浙西の地はこの二年間は水害に遭い、蘇州、湖州の被害が甚大でありますことを詳しく聞いておりました。百聞は一見に如かずと申します通り、杭州から湖州を経て蘇州に入ります間に実地に見ましたところ、溢れた水はまだ退かず、下位の田は深い水の中に没したままで、今年の稔りは恐らく絶望的でありましょう。中位、上位の田も水が広がったままで、婦女や老弱の者までも昼も夜も水車を踏んで水を吐き出そうとしていますが、雨は止むことがなく、水位が一寸下がったかと思うと、一尺上がるというありさまで、いまは春の終わりに至っていながら、どこも種を蒔くことができていません。村々には食べる物のない者が大勢いて、糟や糠や水草を食べてしのいでいます。しかも水をかぶったために薪も藁も得ることが難しく、冷たいま食べるしかなく、腹を壊して死ぬ者が大勢います。これらのことは私自身が見たもので、決して伝聞によるものではありません。

春から夏にかけて流民が出て、疾疫も必ず起るでありましょう。各州は去年のうちに備蓄米をほぼ用意していて、いま州県はそれを売り出していますので、米価はまだそれほどは上がっていません。しかし、遠くの村の飢えた民衆は町に行って米を買うことができませんし、役人は船に米を載せて村々に配ろうとしてはいても、あまりに広範囲に及ぶために、恐らくは十分に満たすことができないでしょう。夏から秋にかけてきつと食糧が絶えてしまいます。もしも今すぐにも雨が止み、農民がいつもより十倍の努力で農事と排水に励みましたなら、米の収穫は間に合うこともあるのかもしれません。しかし、今すでに食糧不足は始まっているのを見るなら、耕作の功を期待するのは難しく、たとえ天候がよくなっても望むようにはならず、公私ともに狼

狼するでありましょうことは理の必然であります。……(以下、対策について具体的に述べる)……

■和林子中待制

蘇軾^{ちようこう}は長江^{じゆん}に臨む潤州^{りんき}に至り、知事^{あざな}の林希^{しちゆう}(字は子中)に会ってその詩に和した。林希とはかねてから詩の贈答があり(第9章79ページなど)、なおかつ林希は蘇軾の後任として杭州知事として赴任することになっていた。

二人の老人はぐずぐずしているうちに頭は真っ白、
ずぼらで頑固者だと、人に笑われている。
ともかくにも酒を手にして、この美しい風光のもとで会ったのだ。
貴君は、孔子^{こうし}が古^{いにしえ}の人の生き残り^{いきのこり}と讃えた人のようであり、
かつ、私に先んじてすばらしい詩を詠み上げる。
私は近々^{どうぜんめい}陶淵明^{ききょらい}の「^じ帰去来^{ききょらい}の辞^じ」を賦して去り、
斜川^{しゃせん}で自由に歌って老いるつもりでいる。

(1) この詩は、要するに杭州^{こう}のことは林希^{りんき}に託すということが言いたいのだろう。(2)

陶淵明^{とうえんめい}が斜川^{しゃせん}に遊び、味わい深い叙景詩を詠んだことは第5章331ページで見ている。

同じような境地に至りたいとの願望を最後に歌っているのだが、岩垂憲徳・釈清潭・久保天随^{くわんそく}訳『蘇東坡詩集』(1927年)は「帰ると言い、帰ると言う、公の常套語、応酬

の作、心にも無きことを饒舌して一篇の詩と為す」と、実に手厳しい評を加えている。実際、蘇軾は口を開くたびに「帰る」とぼやくといってよいくらいに、頻繁に詩に詠んでいる。この詩は、もともと蘇州を通過したときに知事の黄履が詠んだ詩に蘇軾が次韻したものを手紙に添えて林希に送り、蘇軾が潤州に到着すると林希がそれに和した詩を示したので、さらに次韻したものである。次韻を重ねれば、故事をあれこれこじつけ、「心にも無きこと」も並べるようになるのであろう。ただし、蘇軾はこのときは心ならずも都に召され、帰隠したいとの思いは本当に強くあったのだろう。それでも、国と民のために働くのが己に課せられた義務であると、より強く思っていたのだ

■西江月

同じときに林希（字は子中）に贈った詞。上の詩より平易で蘇軾の真情を汲み取りやすい。

昨夜扁舟京口、(昨夜、ちっぽけな舟で京口(潤州)に着いたばかり)

今朝馬首長安。(今朝はもう長安(都)に馬の首を向けるのです)

旧官何物与新官、(旧く官にあった者(蘇軾)は新しく官に就く人(林希)に何を与えるのでしょうか)

只有湖山公案。(杭州の湖や山を詩に詠むという課題です)

此景百年幾變、(杭州の風景は百年でどれほど変わったのでしょうか)

個中下語千難。(言葉にするには千の難しさがあります)

使君才氣卷波瀾、(新知事殿の才気は波を巻き起こすばかり)

与把新詩判断。(その新しい詩は人をうならせることでしょ)

(公人としての蘇軾^{りん き}が林希に託した課題は災害対策であった。林希は努力したものの、
蘇軾のように高太皇太后のバックアップが期待できず苦勞しなければならなかった)

■留別蹇道士拱辰

蘇軾^{じゆん}は潤州で蹇拱辰^{けんきようしん}という道士に会い、この詩を贈った。

黒い月に濁った水――

明るく澄むことがあるだろうか。

荊棘^{いばら}に満ちた田畑――

梨^{なつめ}や棗が生えることがあるだろうか。

いつか吾^{まこと}が真に返ることができるのか。

歲月ばかりが山のように高く聳えてゆく。

方外^{ほうがい}の士(世俗を超越した道士)としばしば接し、

俗縁の軽さは早くから知っていたつもりだった。

『莊子』^{そうじ}に記される庚桑先生^{こうそう}は、

「まだ教えを受け入れる状態になっていない」として、

弟子の南榮^{なんえい}を敢えて導こうとしなかった。

私もまたそのようであったのだろう。

老年に至ってようやくこの道師(蹇道士)と識ることができて、

宿世の念願が果たせたるかのようなのである。

師は笑って北の山の雲を指さし、

早く帰耕しないのをお叱りになる。

師は漢の時代の有名な仙人のように、

普通の人と変わらぬ姿のままで仙境を歩いて行かれる。

仙境はすぐ近くにあるのに、私には見えない。

師を煩わしてせめて我が名をそちらへ伝えていただきたい。

願うのは、

両の手だけをひっさげて、大海に横たわる鯨を取り押さえることだ。

■臨江仙

潤州じゅんにいる間に金山寺きんざん じを訪ね、了元長老りょうげん（仏印ぶつ いん禅師）（第7章76ページなど）のために壁に画を描き、また、杭州こうを出たときから同行して最後まで残っていた張弼ちやう ひつともついに別れた。

長江ちやう こうを渡ったのは4月の初め、すぐに揚州ように至った。この詞には「夜、揚州に到り、席上で作る」との副題がある。

（蘇軾そ けきは一生の間に10回ほど揚州を通過していて、この詞がいつの作であるのか、実はいろいろな考証がある。薛瑞生箋注『東坡詞編年箋注』（1998年）は杭州に副知事として赴任する途中の作としているが、ここでは、孔凡礼撰『蘇軾年譜』（1998年）に従

げんゆう
って元祐6年の作としておく)

尊酒何人懷李白、(盃り はく おもの酒を前にすれば誰もが李白のことを懐きます)

草堂遙指江東。(杜甫は成都の草堂で遙とほかに揚よう州のあたりにいる李白を詩に詠みました)

珠簾十里卷香風。(ここは杜牧が「十里の春風とほくに珠の簾たまが巻き上げられる」と歌ったところ)

花開花又謝、(花は開き、花は落ち)

離恨幾千重。(悲しみは千枚にも重なって降り積もります)

輕舸度江連夜到、(輕やかな船ちようこうで長江を渡って夜にここに至りました)

一時驚笑衰容。(笑い、そして同時に衰えた顔に驚きます)

語音猶自帶吳儂。(私の言葉はまだ呉ごのなまりを帯びています)

夜闌相對處、(夜のふけゆくまに向かい合っていると)

依旧夢魂中。(またまた夢の中にいるかのようです)

((1) 詞の前半では、唐代の著名な詩人である李白、杜甫、杜牧り はく とほ とほくを引いて、揚よう州が歴史に彩られた都市であることを歌っている。(2) 後半は、杭こう州から戻ったばかりで、まだ向こうのなまりが抜けないまま懐かしい人々と再会していると歌っている。蘇軾は気分としては江南こうなんを故郷とする人間なのである))

■杭州召還乞郡状

蘇軾は、都に召されて翰林学士という大変名誉な称号を頂戴することに

なっていた。しかし、杭州こうにいる間にそれを辞退することを申し出ていて
 (第9章 195 ページ)、揚州ようにいる間にも、その後で南京なんけい応天府おうてん ふに着いてか
 からも同じ趣旨の書状を朝廷に提出し、さらに5月19日にもこの書状を作
 って朝廷に差し出している。蘇軾は何としてでも都に帰還するのを避け
 たかったのである。

(この書状は、これまでの官界人生について蘇軾自身が総括したものとして読むこと
 ができる。すでに前半部分の訳を第5章 389 ページで見ているが、ここで改めて全文
 を読んでおこう)

元祐六年五月十九日、竜図閣りゅうと学士左朝奉郎前知杭州蘇軾、書状をもって奏上
 いたします。

右の臣は近ごろ詔書せい し さつ しおよび聖旨わたくし劄子せいのしを頂戴しましたが、臣はそれにふさわしくない
 と、翰林かんりん学士承旨がく し しゅう しの恩命を辞退し、地方知事の任を授かりますようお願い申し上
 げました。臣はそのことを記した三通目の書状をすでに出し、揚州よう、越州えつ、陳州ちん、
 蔡州さいのいずれかを希望いたしております。竊ひそかに思いますに、臣わたくしのわずかな誠は
 天のような御恩に報いることがないままに、さらに本心をことごとく露わにして重ねて
 聖聴こうきやう し ざいを犯しますことは、恐れ多くも死罪にも当たるものであります。惶恐死罪。

臣わたくしは昔、治平年間に鳳翔ほうしやうの職から替わって朝廷に入り、初めて英宗皇帝の知遇
 を被りました。皇帝陛下は臣を用いようとしてくださいましたが、当時の宰相の韓琦かん き
 は臣わたくしがまだ若く資質に浅いところがあり、官の任に耐えられるか試められてもいな

いことから、しばらくの間はと館職かんしよくを与えてくださいました。

わたし臣は父の喪に服するために官職を去ることとなり、喪が終わって改めて朝廷に参内

いたしました。そこで、神宗皇帝のお招きをいただき、面と向かって激励のお言葉を

わたし賜り、臣が職掌外のことについても申し上げることを許してくださいました。そのとき

わたし臣は、遠国からきた臣下はまだこれほどまでの優遇を受けるはずがないので、こ

れはきっと英宗皇帝が臣を知ってくださったことによるのであらうと思いました。

このとき王安石が新たに政治を司り、法度を変易しました。わたし臣がもしも少ばかりで

も王安石に擦り寄りましたならば、きっと昇進して用いられたであります。しかし、

わたし臣は朝廷から遠い人間でありながら、英宗皇帝、神宗皇帝の特別な知遇を蒙り、

それでいて天を欺き自分の心に背くようなことはできないと、王安石がしようとしてい

て施行してはならないことを具さに論じて、万に一つでの国政に補うところがあれば

と考えました。しかし、神宗皇帝の御心が臣のことをどれほど認めてくださっている

のか、その浅い深いをまだ測ることができませんでした。折しも、上元の節に四千

の灯笼をお買い上げになって、しかも役目の者が理由もなく価を値切っているとい

うことでありましたので、わたし臣はそのことを論じて意見書を出しましたところ、先帝(神宗

皇帝)は大いに喜ばれて、即時に臣が申し上げ通りに施行してくださいました。わたし臣は

これによって、先帝が聖明にして、言葉を尽くした意見を受け入れてくださると知り、

六千余言にわたって新法のよろしくないことを詳しく論じた意見書を提出いたしました。

また、科挙についても意見を申し上げ、王安石には人を見る力がなく、王安石

が勧める人間は用いてはならないことを申し上げました。先帝はそれを聴いて従っ

てくださったわけではありませんでした^{わたし}が、臣の愚直^{けんもん}をよとして、譴問されることはありませんでした。しかし、王安石は大いに怒り、その仲間は皆齒嚙みをして怒り、臣を傾けよう^{わたし}としました。御史台^{しゅけいおん}の謝景温が首謀者となって必死にあら捜しをして、臣が父の喪に服して帰郷した際に、舟の中で私的に塩を販売したとの告発をしました。そして、各地に指令を下して、当時の舵取りから竿さしまでも捕えて拷問にかけて、証拠を集めよう^{わたし}としました。しかし、その実体はなく、罪をでっちあげることはできずに終わったのです。

臣はこれによって禍を懼れ、都の外に出ることを乞い、三回連続して地方官に任ぜられました。それでも、先帝は臣を大切に思ってください^{わたし}ることは衰えず、臣が差し出す文章が届くと、それを左右の者に示して褒めてくださいました。それで、改革派の人々は臣がまた朝廷で用られるのではないかと疑い、李定、何正臣、舒亶の三人が、飛語を組み合わせ、いろいろな罪状を作り上げて、必ず臣を死罪にしよう^{わたし}としました。先帝は初めは許しませんでした^{わたし}が、この三人が訴え続けてやまなかったために、臣は罪を得て獄に下ることになりました。李定らは乱暴な役人である皇甫遵を派遣し、皇甫遵は吏卒を率いて湖州にきて、臣を盗賊のように捕えました。

臣は妻子と訣別し、手紙を弟に留めて、後の処置を託しました。自分で思うに、必ず死ぬであろうと考え、長江を過る際に、江中に身を投げよう^{ちようこう よぎ}としました。しかし、吏卒が監視していたために果せませんでした。獄に到ると、何も食わずに死のうとしました。しかし、先帝は使者を獄に遣わしてお命じになるところがあり、獄吏は敢えて非道な仕打ちを加えるようなことはなくなりました。それで、臣は、先帝に臣を殺す^{わたし}

お気持ちはないと知ったのであります。それによって、余命を留めて今日に至ることを得ました。

こう^{こう}黄州に流されるに及んでからも、臣^{わたくし}より朝廷に文書を提出するたびに、先帝は左右の者に向かってその文章を褒めてくださり、臣^{わたくし}を哀れみ、大いに奨めて再び用いようとなされました。しかし、左右の者が固く争ったためにそれはできませんでした。

臣^{わたくし}は遠くにおりましたが、そのようなことが具に聞こえてまいりました。古の人はこのように言っています。「蚊も集まれば雷のような音になり、羽も積めば舟を沈めることさえできる」。これは、寡は衆には勝てないという意味です。先帝^{わたくし}が臣^{わたくし}のことを特別に考えてくださっていながらも、臣^{わたくし}がついに艱難を免れなかったのは、左右の者に臣^{わたくし}を憎む者が大勢いたためであったのです。

陛下が御即位されますと、臣^{わたくし}は貶所より起つことができ、一年もしないうちに朝廷に並ぶ地位に昇りました。遭遇するところの変わり方の激しさは古今に比べられるもののないほどでありました。臣^{わたくし}はいつも自ら思いますに、昆虫草木のような微小な身でありながら、天地を生成するような陛下の徳に遭うことができましたからには、独り立って誰かに倚ることもなく(徒党を組むことなく)、知っていながら申し上げずにいることもなく、御恩の万分の一にでも報いなければならないのだと。

それで衙前差顧(人民に労役を課すこと)に関連する利害について、孫永、傅堯俞、韓維と議論を争い、また司馬光とも論を異にしました。司馬光はこのような臣^{わたくし}を初めから怒ることもなかったのですが、御史台の人々は司馬光の意の内を探って、つい^{わたくし}に臣^{わたくし}を敵とみなしたのであります。臣^{わたくし}はまた程頤がよからぬ者であると知

て、言葉においても顔色においても容赦することなく対応しましたところ、程頃の党人は皆が臣に白い目を向けたのでありました。朝廷は大奸(改革派の中心人物)のうち数人を排除いたしました、その余党がなお陛下のお近くにいて、密かに挽回の機をはかりつつ、まだ実行に移すのを控えている状況でありました。地位の低い周種なる者が、王安石を配享するよう要請し、それによって朝廷の意向を探ろうとしました。臣は竊かに、周種が雑草のような微小の身をもってこの議を建てたのは、必ず陰に首謀者がいるはずだと考えまして、上書してその悪だくみの鋒先を折り、周種を遠くに追い払って、小人どもの謀を破るよう朝廷に願いました。これによって、党人たちは臣のことをますます怒り憎むようになったのであります。その後、陛下に御進講する役目にあずかり、黄河の流路を変えるのは不可能であることを論じて、そのことを上疏して争いました。それによって執政から心よく思われないようになったのであります。このような幾つかの事が重なって、禍が再び起こるであろうことを恐れ、また臂が痛み目が昏くなったこともあって、都の外に出してくださるよう何度も強くお願いしたのであります。

竊かに伏して思念しますに、朝廷に用いられてから三年の間に、御史台が臣を批判することは数回に及びましたし、批判の文書を作るに当たっては言葉を作り上げて臣を謗ろうといたしました。もとより似たことさえもないのに罪を作りあげようとして、まことに曖昧なことでありながら臣を貶めようとしたのであります。陛下は無実であると察せられて、幾度となくそのような書状を却下されました。もしも二聖(皇帝と太皇太后)の仁明によって臣の胸中を洞照されるのでなかったならば、臣は党人たちに

よって傾けられるがままとなって、この首を保っていることはできなかったのであります。^{わたし}臣はまた先帝が赦してくださったようなことをまた敢えて望みはしませんが、ただ地方に出してくださることを望んだのであります。

^{わたし} 臣は杭州知事として出てから二年の間は、人から何か言われるのをほぼ免れることができました。その間に、法の適応外の措置として、^{がんしやう}顔章、^{がんえき}顔益の二人を入れ墨して流罪に処しましたが、これは長年積もってきた弊害を改めるためにやむを得ないと考えたからでした。^{わたし}陛下も臣を赦してくださいましたが、赦すべきでないと言う者がいて、そのことを論じていまま奏上し続けています。よもや顔章等のためにと考えてそのようなことをしているのでないのです。党人たちは一日も欠かさず^{わたし}に臣を傾けようと考えていることはこれによっても知れるのであります。垢を洗い落して傷を探し出すようなことをして、ようやくこのひとつの事を得たというわけなのであります。

^{わたし} 臣は今たちまち聖恩を蒙り召還、拔擢されることとなりました。その一方で、^{わたし}臣の弟の蘇轍は執政に任命されました。この二つのことはいずれも大臣の本意ではないのでありましょう。竊かに考えますに、^{わたし}党人たちは必ずひどく臣を嫌って武器を磨いて待っておるでありましょう。勢いとして必ずそうなのであります。^{わたし}臣は新たに任命されると聞きまして、福をもって災いとなるものであると恐れ慄き、即日文章を提出して、召還を辞して郡職を乞いました。都に向かう途中で、果たして弟の轍は御史台の批判を受け、官舎を出て罪を待っていると聞きました。そして、陛下が細部にわたって事情を御覧になって、弟は身を保つことができたのであります。

^{わたし} 臣が偏った強情者であることは誰もが知っております。^{わたし}党人たちは弟よりも激しく臣

を嫌忌しております。衰病のなれの果ての身でその鋒先の前にどうして立てましようか。罪があるとされるようなことはない^{わたし}と臣自身がいくら知っておりましても、いま罪を言う者にとっては事実であるとか正しいとかはどうでもよいのです。

竊かに思いますに、主君が臣下を用いるのは、公の道を論じるのを聞いて判断してのことであります。また、党人たちが嫌悪する者に報いるときには、必ず巧みに仕掛けて陰に法の罠にひっかけるのであります。臣は、二聖が公の道をもつて^{わたし}臣を知ってくださっていることをだけを頼りとして、党人たちが禍に陥れようと陰に企んでいることに無頓着でいてよいものなのでありましようか。

煩わしさをもって陛下を汚し申し上げるようなことまでして、臣がお仕えて以来の進退の一部始終を自ら申し上げましたのは、臣が危言危行にして、独り立って周囲を顧みないことが衆人の怒りを買ってきたことは、遠い昔からのことであったのを陛下に知っていただきたいからであります。また、臣が平生からこのように患難、危険を冒して歩みきて、今や余命がいくばくもなく、禍を遠く避けて身を全うしたく思う心が生じるのを免れずに、再三にわたって辞退申し上げたのは嘘や飾りの言葉ではないことを陛下に知っていただきたいからであります。

『論語』に柳下惠がこのように言ったと記されています。「道を真っすぐに歩んで人に仕えるなら、必ず三回は免職になるのだ」。臣がもしも得ることを貪り、失うこと患う者で、世間にうまく追隨して、己のやり方を改めるような者であるのならば、陛下はきっと臣をお用いにはならないでありましよう。一方で、臣がその初心を守ってついに^{わたし}変わらないのなら、群小の者どもが横目で睨んで、臣が安らかにしていられる

ことわり

理はないのであります。二聖に深く知っていただいてはいても、衆人の口には勝てないのを恐れるのであります。でありますから、繰返し熟慮した結果として、都を去るべきだと考えたのであります。二聖の天地、父母のような御恩を懷恋しないものではありませんが、衰老の余りの身で、群小の者たちと短長、曲直を比べ合って、世間の高人、長者に笑われてしまうのを恥じるのであります。

伏して聖慈を望みますに、臣^{わたし}の至誠を察せられ、特に執政に御指示をくだされて、これまでにたびたび奏上しましたものを検討して、朝廷の高位に親族が並び立つのを回避することを理由にして、臣^{わたし}を一部^{わたし}の長に命じられますように。そして、臣^{わたし}が奏上しましたこれまでの書状は外にはお出しにならずに、臣^{わたし}の命を保っていただけますように。臣^{わたし}の大きな願いとしてこれ以上のものではありません。もし朝廷が臣^{わたし}の不才をもってしてもなお駆使すべきであるとするのでありましたなら、最も困難な国境の郡でありましても臣^{わたし}は辞退するものではありません。国に報いようとの心は死んで後に已むのであります。おそばにあって党人たちの猜疑を受けて陰に陥れられるのを願わないだけなのであります。

……(以下、畏れ多いということを、数十字にわたって書き連ねて結ぶ)

(1) この文章が果たして皇帝の心に響いたかどうか、本章の終わりに見ることになる。(2) この文章を提出する前に通過した南京応天府では恩人の張方平^{ちやうほうへい}に会い、前年に亡くなった滕甫^{とう ぽ}の墓誌銘の代筆を頼まれている(第9章152ページ)

■元祐六年六月自杭州召還汶公館我於東堂閱旧詩卷次諸公韻三首

蘇軾は上に記した通り、何度も辞退したものの、その希望はいれられないままに2年ぶりに都に戻り、5月26日、朝廷に帰還を報告し、6月1日、学士院に召された。

これはそのころに詠んだ詩。詩題は次の通り。「元祐六年六月、杭州より召されて汶公^{ぶんこう}の館^{とうどう}に還った。私は東堂で旧い詩巻を見て、諸公の韻に和して三首の詩を作った」。「汶公^{えぶん}」とは僧の恵汶で、「汶公の館^{こうこくじ}」とは興国寺の浴室院^{よくしつゐん}で、「東堂」はその中にある建物。興国寺は、蘇軾が21歳のときに科挙を受験するために初めて上京したときに宿舎にして以来馴染みの場所で（第8章218ページ）、そこには若き蘇軾が記した詩巻が残っていて、いろいろな人がそれに詩を書き加えていた。それらに次韻したのが以下の3首である。

其の一

黄梁^{こうりょう}がまだ蒸し終わらず、

日がまた斜めにならないくらいの時間しか経っていないのに、

玉堂^{ぎょくどう}に栽えた花の木は大きな陰を作るまでになった。

三十年前の味いを尋ねようとすると、

思い出されるのは、

かの王播^{おうはん}のようにいつも腹をすかせていたことだ。

(1) これは黄庭堅の詩に次韻したもの。(2) 二つの故事が使われている。一つは有名な「邯鄲一炊の夢」。黄梁が蒸し終わるまでの短い時間に、これから人生の全てを夢に見てしまったという話。もう一つは、唐の王播の苦勞話。王播は若い頃は貧乏で、寺に寄宿して勉強していたのだが、寺の僧は王播があまりにも頻繁に食事をねだりにくるのを嫌って、食事の時刻を告げる鐘が鳴る前に食べてしまった。原詩の最後はそのことを「未飯鐘時已飯茶」(未だ飯鐘の時ならざるに已に茶を飯す)と詠んでいる。そのような嫌がらせにも耐えて勉強したのである。ここではよい話として引かれているが、後で王播を批判する詩を見ることになる(本章 254 ページ)。(3) 玉堂は学士院にある建物で第8章で何度も見ている。そこに植えた木がいない間に大きく成長したのだ

其の二

夢から覚めると、

廊下に高く^{あした}屨の音が響く。

我がゆかりの人の像(恵汝の師の肖像画)の前で香を焚くために僧がきたのだ。

私の髪はすっかり白くなったが、

何か成し遂げたものがあったのだろうか。

ここには褚遂良の書帖が残されているではないか。

(1) これは秦觀の詩に次韻したもの。(2) 恵汝の師とは、蘇軾がかつて世話になった僧である。(3) 最後の句には蘇軾自身の注で、「法貼の中に褚遂良の書があって、『即日、遂良の鬚髪は尽く白し』とあった」と記している。褚遂良は唐の名臣である。褚遂

良と比べて同じなのは、髪が白くなっただけだと蘇軾は嘆いたのである)

其の三

天子の詔書が東に来て、私は呼び返された。

年々衰えて、もう故郷に帰るべき時が迫っているのに……。

曹植そうちのように文章が波瀾に富んでいると評されたこともあったけれど、

いまや笑ってしまうのは、

その波瀾なるものだって、このちっぽけな詩の中にちんまり納まってしまうのである。

((1) これは誰の詩に次韻したのかわかっていない。(2) 曹植そうちは三国時代の英雄の曹操そうそうの五男で、詩文に優れ、杜甫は「文章は曹植、波瀾 闊し」と詩に詠んでいる。曹植はその優れた才能のために兄に嫌われ、側近を次々に殺されるなど不遇のうちに 41 歳で死んだ。蘇軾は自分の置かれた状況を曹植になぞらえたのである)

■六一居士集叙

蘇軾は、欧陽棐おうようひからその父欧陽脩おうようしゅうの遺稿を託され、欧陽脩の詩文集『六一居士集』の編集を進めていた。都に着いてすぐにこの序文を記した。

(詩文集の題は欧陽脩おうようしゅうが晩年六一居士ろくいち こじと号したことによる。「六一」の意味を欧陽脩自身が記した文章を第3章84ページで見ている)

そもそも言には、いかにも大きすぎるようにいて誇誕こたん(見掛け倒し)ではないものがある。

衆人は疑わしく感じるが、道理に達する者はその言を信とする。

そのような言として、孔子が(窮地に陥ったときに)言ったこの言がある。

「天が斯の文(周の文王以来の文化の伝統)をいま(私とともに)喪ぼそうとしているのなら、(周の文王よりも)後から死ぬ者(孔子)はそもそも斯の文を得られなかったはずである」(孔子は「斯の文」を継承し得たのであるから、天がこの窮地から自分を救わずにいるはずがないと、言ったのである)

また孟子のこの言がある。

「禹(古代の聖天子)は洪水を抑え、孔子は『春秋』(儒家が非常に重要視した歴史書)を作り、そして私は楊子と墨子の学問がはびこるのを防いだ」。

孟子は自分自身が禹と同列であるかのように言ったのである。

文章(学問)が栄えたり喪んだりすることに果たして天が関与するのだろうか。禹の功績は天地と肩を並べるほどに大きいなものである。孔子と孟子は空言をもって己を天や禹と並べ、それこそ全くの誇誕なのではなかろうか。

『春秋』が作られてから、世を乱す臣下や賊になる子は懼れを抱くようになり、孟子が学問を説くようになってから、楊子、墨子の説は廃れた。天下は、それがもとより当たり前のことだとして、二人の功績であるのを知らなかった。孟子が没すると、申不害、商鞅、韓非子といった人々の学説が行われ、道に違いて利に趨り、民を害して主君に厚くするようになった。その説ははなはだひどいものがあるのだが、士(統治に關係する知識人)はそれによって上に立つものを欺き、上に立つ者は出たとこ勝負のかりそめの功績を得ようと、一斉にその説に靡いたのだった。そして世の中に

孔子や孟子のような度量の大きな先生がいなかったために、物事の本質と末梢を分けし禍と福の軽重を量って人々を惑いから救うことがなされないままに、いかさまなその学説が広く行われてしまったのだった。^{しん}秦はこの学説によって(天下を統一したものの、やはりこの学説によって)天下を失ったのであって、瞬く間に衰えた末に、^{ちんしやう ご こう りやうほう こう う}陳勝、呉広、劉邦、項羽らの起こした反乱の禍に至り、民の十人のうち八、九人が死ぬようなことになり、天下はすっかりさびれてしまった。洪水の患いといえどもここにまで至ることはない。

秦がまだ天下を統一する前に、もしもう一人の孟子がいたならば、申不害や韓非子がいうことは^{そらごと}空言となって、その学説が人の心に起こってその為すことを害したり、その学説によって為すことが政治を害ったりするようなことは、きっとここまで烈しくはならなかったのである。

もし楊子や墨子が思うがままに天下に学説を広めていたなら、その禍は申不害や韓非子に劣るものではなかったであろう。このことからしてみれば、孟子を禹に並べてもよいのである。

^{し ば せん し き}司馬遷は『史記』にこう記した。

「^{がいこう かん}蓋公(漢の始めの学者、詳しくは第5章 124 ページで見ている)は^{こうてい ろうし}黄帝と老子の学問について言い、^{か ざ ちやうきく}賈誼と晁錯(二人とも漢代の人)は申不害や韓非子の学問を明らかにした」

晁錯は取り上げる価値のない人物であるにしても、賈誼(若くて様々な進言を皇帝にした人物で、蘇軾もたびたび取り上げている)までもこのようであったのだ。邪説が人をあら

ぬところに移動させてしまうことから、豪傑の士(特に優れた士)といえどもなかなか免れ難いものだということがわかる。まして普通の人はなおさらである。

漢より後の時代は、道術(学問の実践)は孔子から出発するのではなく、天下はしばしば乱れた。晋朝は老莊しんちよう ちうそうの学で滅び、梁朝は仏教で滅んだ。このような事態を正す者がいないままに五百年が経過してから、天下はようやく韓愈かん ゆを得たのだった。いま学問を修める者が韓愈を孟子に並べているのは、きっと正しいのであろう。

韓愈から二百年余り後に欧陽先生おうようが現れた。欧陽先生の学問は韓愈と孟子から推し進めて孔子に到達するものである。礼、楽、仁、義の本質を明らかにし、それは大いなる道に合致するものである。その言は簡潔ことばにして明瞭で、信を表して広く通じ、事例を引いて類するものを並べ、それらを分析して真理に至って、人の心を納得させるものである。それによって天下は挙って欧陽先生を師として尊敬するようになった。欧陽先生が出てから、世の中の喜ばない人々は騒がしく批判するようになった。欧陽先生の身を苦しめはしたが、その言を折ことばって屈服させることはできなかった。士は賢人もそうでない人も一致して同じように、「欧陽先生はいまの韓愈である」と言ったのである。

宋そうが興ってから七十年余り、民は戦争を知らずに過ごし、民を富まして教化するとは(仁宗皇帝じんそうの)天聖、景祐てんせい けいうのころに極まった。しかし、「斯の文」(先に孔子が言った周の文王以来の伝統)は古いにしへに対して愧はじなければならない状況にあった。士は無定見に旧習を守るだけで、議論は低劣で気迫に乏しかった。欧陽先生が出てからは、天下は争って己を鍛えて磨くようになり、第一に、經典に通じて古を学ぶことを価値

が高いとし、第二に、時代の課題を解決して道を実践することを賢いとし、第三に、天子の顔色を犯してでも諫めを納れさせないようにするのを忠であるとした。士を育成することが長い間にわたって成就し、嘉祐の末に至って、士が多く並ぶようになったと称せられたのには、欧陽先生の功績が大きかったのである。ああ、これは人の力だけによるものなのだろうか。天がこうにしたのではないだろうか。

欧陽先生が亡くなって十数年後に、士は新学なるものを始めた(王安石らが学問の潮流を改めたことをいう)。新学は仏教や老子の学に似たものをもって、周の文王、孔子以来の真の学問を乱したので、識者はそれを憂いた。幸いにも(代替わりした)天子の明聖によって、士を採用する方法を改め、学問を学ぶ人を励まして、専ら孔子を学んで異端の学を退けるよう詔が出されたので、風俗は一変したのだった。

かくて、いま師とする者、あるいは友とする者が何を源として学んでいるのかということ考察してみるなら、欧陽先生の書物を唱えて習ってきたと知れるのである。

私は欧陽先生の詩文七百六十六篇をその子の欧陽棐から得て、それを並べ、論じてこのように言う。

「欧陽先生が大道を論じるのは韓愈に似ている。政事を論じるのは陸贄(唐代の名臣)に似ている。事実を記録するのは司馬遷に似ている。詩賦は李白に似ている。これは、実は私の言ではなく、天下の言なのである」

欧陽先生の諱は修、字は永叔。老年に至って自ら六一居士と号した。

(1) 最初に、誇誕ではない言があるとしたのには、最後に置かれている蘇軾の評言も含まれているのだろう。欧陽脩は学術のあらゆる分野において超一流で、蘇軾といえ

ども史学においてまで立派な業績を残すというわけにはいかなかった。(2) 中ほどに、
まこと
 「信を表して広く通じ、事例を引いて類するものを並べ、それらを分析して真理に至った」(原文は「信而通、引物連類、折之於至理」)
しん し つう もの ひ るい つら
 (信に而て通じ、物を引いて類を連ね、
これ し り お さだ
 之を至理に於いて折める)とあるのは、演繹と帰納によって真理に至るということを言うのであろう。(3) なお、蘇軾の次男の蘇迨(22歳)はこの春に行われた科挙の二次試験に落第し、その後、欧陽棐の娘と結婚した。蘇軾の息子は3人いて誰も科挙には合格しなかったようだ)

■次韻子由書王晋卿画山水一首而晋卿二首

都に戻ってきた蘇軾にとって大きな慰めとなったのが王詵おうしん あざな しんけい(字は晋卿)の画(第8章243ページなど)であったようで、この時期に王詵の画に寄せた詩を幾つも詠んでいる。これは、王詵の画に弟が書き添えた詩に王詵が和して2首の詩を作り、それにまた蘇軾が次韻したもの。

其の一

おうしん
 王詵君が画を描く腕前は、

誤って墨を落としても、ごく自然に描いたようにしてしまう。

王詵君が詩を詠む心は、

まことに昔の隠者と同じである。

王詵君は自らこの画の中におさまっていて、

雲の湧く山から私に手紙を寄せる。

雪を照らす月光のもと、谷に浮かべる貴君の舟を追いたくなる。

この画をいくら嚴重に篋^{はこ}に納めておいても、

貴君は仙人となって飛び去ってしまうであろう。

画中の貴君はまことに古の隠者、

風にあおられて斜めに雨が降り注いでも濡れることはない。

(この詩は故事のてんこ盛りで、例によって大意とおぼしきものを取っての「ずっぱ訳」である)

其の二

眼にありありと見えても、

画中の情景は妄想でしかない。

実際に自然の内で真に休息できる者は幾人いるのだろうか。

それでもこの画の前にいるとき、

私の心は池に映る月のようである。

貴君は巨大な船のように私を安らかに乗せてくれる。

貴君の画に詩を題する者(蘇軾と蘇轍)は二人とも白髪的身で、

ひとひらの褰^{フット}をまとって故郷で老いを送るべきなのである。

来年こそは遠く去って行き、

無限の波の広がりの中へと二羽の鷗は消えるのである。

■次韻子由書王晉卿画山水二首

これも王詵（おうしん あざな しんけい字は晋卿）の描いた山水画に弟が詩を書き添え、それに次韻したもの。

其の一

老いた君（弟のこと）は、もはや山水を画中に見るだけ。

僕は、かつて夢の中でここに遊んだようだ。

桃の花が散ってもそれを見る者は誰もいない。

水は流れ出て人間界に至ると、地の下に伏してしまう。

其の二

昔、山の人（蘇軾）は雲とともに出てしまった。

それからは俗界にいて、水の流れを遡って帰ることができずにいる。

せめて胸の内にある佳き処を頼りに、

画に対して盃を持とうと思う。

（画中に遊ぶことで心の安らぎを得ようとしたのだろう）

■又書王晋卿画四首

これも王詵（おうしん あざな しんけい字は晋卿）の画に書き添えた詩。4首のうち3首を訳す。

さんいんちんせき
山陰陳跡

かの年の王羲之の蘭亭がいに清真であったのか。

それを知らぬ者は、無理やり石崇の金谷園に比べたりした。

どちらも人間世界の営みの跡ではあるけれど、

金谷園に集まったのは群がり飛ぶ蚊のような連中だったのだ。

(1) 書聖といわれる王羲之の蘭亭(山陰(紹興)にあった)を描いた画に添えた詩である。(2) 石崇は王羲之より少し前の時代の大金持ちの貴族で、蘇軾は愚物の大横綱としてしばしばその名を挙げている(第7章76ページなど)。あろうことか、贅を凝らした石崇の金谷園での馬鹿騒ぎと、王羲之の蘭亭での清真な遊びを比べた者がいた。それがいかに無意味な比較であるのか、この画を見れば一目瞭然であるというのがこの詩の意味)

しめいきやうきゃく
四明狂客

たまたま地上の塵をかき集めてこの端くれの身体とした。

ならば、どこの溪山であろうともこの身でないものはないのだ。

かくて狂客(賀知章)は帰郷することを思った。

帰りたいなら帰るのでよい、

その天真を天子の勅旨でこれ以上曲げることはないのだ。

(1) 題にある「四明の狂客」とは唐代の賀知章のこと。賀知章は何度も見てきた

ように、身の引き際がみごとだった脱俗の士。(2) 韓愈^{かん ゆ}は、地上の塵を集めてこの身が成り立っていると、「一塵^{いちじん} 毫端^{もうたん}に集まる」と詩に詠んだ。天地と我が身が一体であることを、いわば分子論的に喝破したのである)

せいさくふうう 西塞風雨

斜めに風が吹き、細かい雨がやってきた。

我にはもともと家はない。

どこに帰るということもない。

雲に覆われた天を仰ぎ見ると、それはまことに箬笠^{竹のかさ}ではないか、

ならば我が蓑の衣を翻してその中に江も海も入れてしまおうではないか。

((1) 西の涯の地で風雨にさらされる隠遁者を描いた画に添えた詩。その隠遁者の衣の内に大地が包み込まれると見たのである。(2) なお、第8章172ページで見た『挑耳^{ちょうじ} 図^ず』の跋文を記したのはこのころのことである)

■書破琴詩後

本章2ページで見た「破琴詩」はこのころに詠んだもので、さらにこの詩を作った。短い序文がある。

私は「破琴^{は きん}の詩^し」を作り、宋復古^{そうふくこ}が描いた邢和璞^{けい わ ぼく}の画^えを柳子文^{りゅう し ぶん}に求めて手に入れた。柳子文はその画を王詵^{おうしん}に託して模写してもらい、短軸^{けんしよく}にして「邢房悟前生^{けいぼうご ぜんせいす}図^ず」

(邢和璞によって房瑄^{ぼうけん}が前生を悟った図)と名付けた。詩を作ってその上に題した。

この身は何にでもなる。

どこに宿をとるのか、浮雲はどこへ流れるのか、

自分で知ることではない。

(房瑄^{ぼうけん})はたまたま一枚の古い紙を見たので、

この身はもとは永禪師^{えいぜんし}であったかと疑ったのだった。

■乞擢用程遵彦状

蘇軾は時に驚くほど義理堅く面倒見のよいところを見せる。都で厳しい状況に置かれていながらも、杭州^{こう}で親しくした程之邵^{ていししょう}（字は遵彦^{あざな じゅんげん}）（第9章78ページ、159ページ）を朝廷に推薦している。

元祐^{げんゆう}六年七月某日、翰林学士承旨左朝奉郎知制誥兼侍読蘇軾は書状をもって奏上いたします。

右の臣^{みそ}は竊かに思いますに、朝廷が人を用いる際には、まず実績があるかどうかで判断し、急に必要ときには才能の有無で判断します。実績と才能を兼ね備えるのはたやすくなく、そのために偏った採用もありがちとなってしまいます。慎重^{しんしん}な士は、人よりも優れた行いがあり事に応じる才能がありましても、それを顕^あわにすることなく時節が訪れるのを待つものでありまして、自ら進んで用いられようとはしないた

めに、朝廷はなかなかその人を知ることがありません。ですから、臣^{わたし}のような者が、耳にするとところの者を挙げて、朝廷が有用の士を育てられるよう手伝わなければいけないのであります。

伏して見ますに、左朝散郎前僉書杭州節度判官^{さちょうさんぜんけんしよこうしゆうせつどはんがんちゆうこうじ}庁公事の程之邵^{ていししやう}は、公務全般をよく知り、学問を広く修め、文詞は雅麗で、この三点ともに優れたものがあります。しかも母に仕えて孝謹であることは他に比べられる者がおりません。母は非常に厳格な人で、母が程之邵の妻を悦ばなかったために、程之邵は妻とは仲がよかったにもかかわらず、母のために妻を離縁しました。妻は家を出されても、姑への孝行を変わずに果たし、嫁であるときと同じように節目ごとに仕えるべきことをしました。それでも母はついに悦ばず、程之邵は再び娶ることなく十五年になります。自身で僕妾^{めしつかい}の仕事をして母に仕え、歴史に伝わる孝行の者であってもそれを超えはしないほどであります。

臣^{わたし}と同僚になること二年、実際に程之邵のことは見ておりました。いま程之邵は先の任務を終えて都に来ておりますが、いまだに次のお指図がなく、衆人の中で無為に過ごしております。それでも人に支援を求めようとしておりません。臣^{わたし}は竊かにこのことを残念に思っております。

伏して聖慈をもって特に察せられますことを望むものであります。人の才能を量って用いますことは、賢者を探し出す路を開くだけでなく、孝悌を世に推奨し、良俗を励ますことともなります。もし後に推薦するに及ばない者であったとなりましたなら、臣^{わたし}は甘んじて処罰を受けるものであります。

慎んで奏聞申し上げ、伏して敕旨をお待ちいたします。

((1) 最初に都における蘇軾の肩書が記してある。「侍読^{じどく}」とあるのは、皇帝のために書物を読む役目、つまり教育係を授かっているという意味、はなはだ名誉な肩書である。

(2) このとき程之邵^{ていししょう}は、第9章159ページで見たように杭州^{こう}を發って都に来ていたのだが、次の職務を与えられずに待機していたのだろう。(3) 程之邵は、母が嫌ったので妻を離縁し、その妻は離縁後も同じように姑に仕えたとあるのは、現代の我々には到底受け入れられない理不尽なことであるが、当時としては賞賛に値することであった。ただし、宋代の女性は意外と権利を認められていた面もあり、程之邵のようにするのは希であったから特にここに記したということもあるのだろう)

■黠鼠賦

蘇軾は恐れていた通り、都に帰還して以来、何かと批判の声にさらされ、賈易^{かえき}なる者が、8月2日、新たな論拠を持ち出して蘇軾を声高に弾劾した。6年前の元豊^{げんぽう}8年5月1日に蘇軾が揚州^{よう}で詠んだ詩は先の皇帝を誹謗するものであったとし、さらには蘇轍^{しんかん}や秦觀^{しんそく}をも巻き込んで様々なことを並べて立てたのである。問題とされた詩は、神宗^{しんそう}皇帝が亡くなって間もないときの作で、その訳文は第7章179ページで見ているが、再びここに掲げておこう。

この身は、きっと、全て何事もないなかにあるのだろう。

しかも、今年は大豊作の年に当たりそうだ。

この寺に来てからは好い言葉ばかりを聞く。

野の花も啼く鳥も喜んでいるではないか。

この詩の後半部分（原詩は「山寺帰来聞好語、野花啼鳥亦欣然」（山寺に帰来して好語を聞き、野花 啼鳥 亦た欣然たり）は、神宗皇帝が亡くなったのは自分にとって嬉しいことだと、蘇軾は言っているのだと、賈易は批判したのである。どう見ても無茶な言いがかりでしかないのだが、ぎゃあぎゃあ騒がれるのは煩わしく、周囲も辟易し、執行部は喧嘩両成敗ということにして、8月5日、蘇軾は^{えい}潁州知事として、賈易は^ろ廬州知事として兩人ともに都を出るよう命じられた。その直後に作ったのが、悪賢い鼠を詠んだ「黠鼠^{かつそ}の賦^ふ」である。

ある夜、蘇先生が座っていると、鼠^{ねずみ}が齧^{かじ}る音がした。床を叩くとそれは止み、止んだかと思うとまた音がした。

童子^{こーい}を呼び、蠟燭^{ろうそく}で照らすと、からっぽの橐^{ふくろ}があって、中で^{ちやうちやう}嚶^お聲^{こゑ}と声^{こゑ}がした。蘇先生は言った。

「ああ、これは鼠が閉じ込められてしまって逃げられないのだな」

橐を開いて中を見ると、しーんとして何も無い。蠟燭を挙げて探すと、中に死んだ鼠がいた。

童子が驚いて言った。

「こいつが齧っていたのでしょうか。今しがた死んだのでしょうか。それとも、さっきの
声は鼠^{ソウ}の鬼のものだったのでしょうか」

橐^{トウ}をひっくり返してこれを出すと、地面に墮^オちた。墮ちるとすぐに走り出し、いかなる
敏捷の者も捕まえることができなかった。

蘇先生は感心して言った。

「すごいものだ。鼠がこうも悪賢いとは。橐の中に閉じ込められてしまい、橐が堅くて
穴をあけられなかったのだろう。それで、齧ってみたり止めてみたりして、その音で人
を呼んだのだ。死んでいないのに死んだふりをして、うまいことやって脱出した。生き
ているもののなかで、人よりも智恵のあるものはないと聞いている。人は竜さえも手
懐^{ミズチ}け、蛟も退治し、霊力のある亀を占いに使い、麒麟も捕まえ、万物を使役してそ
の上に君臨している。ところが、私ときたら、一匹の鼠にしてやられてしまった。こい
つのはかりごと^{ガリゴト}に墮^オちてしまったのだ。はじめは少女のようにおとなしくして、脱兎^{ダット}
のように走り逃げるのに驚かされた。こんなことでいったい私に智恵があるといえる
のだろうか」

そのわけを考えながら眠りにつくと、ある者がこのように告げたかのようにだった。

「そなたはたくさん学んでたくさん^シのことを識^シっているようだが、道^{ミチ}(究極の真理)を望み
つつも、まだ見ていないのだ。己のこともわかっていないし、外界のこともわかって
いない。だから一匹の鼠が齧るのにすっかりやられてしまったのだ。千金の価値が
ある壁^{タビ}を砕くような勇気のある者でも、釜がいきなり割れたら声を出さずにはいられ

ない。猛々しい虎を撃ち殺せるような勇敢な者でも、蜂や蠅^{さそり}にいきなり襲われたら顔色を変えてしまう。これは己のことがわかってないことからくる患^{わずらい}なのだ。そなたのためにこのことを言いにきた。忘れてはならないぞ」

私は俯いて笑い、仰ぎ見て目が覚めた。

童子に筆を持たせてこのことを記した。

（蘇軾がこころに置かれていた状況とこの寓話はどのように関係するのか。賈易等が悪賢い鼠ということなのだろう。自身のことがわかっていないから、鼠のようなものにも翻弄されてしまうのだ）

■漱茶説

蘇軾がいろいろな健康法を実践していることはこれまでに見ているが、これは茶で口を漱^{すす}ぐことの効用を記した短文。どうしてこの時期に記したのかはわからないが、それこそ「煩膩^{はんじ}」（厭な感じ）を何とかしたかったのだろうか。

茶は、煩膩^{いやなかんじ}を取り除くのに欠かすことができないものとなっている。しかし、茶がいつの間にやら人^{そこな}を害ってしまうことも少なくはない。

昔の人はこのように言っている。

「茶を飲むことが盛んになってから、人は多く気を患^きう（陰陽の気のバランスを崩す）ようになった。黄疸^{おうだん}を病むことがなくなった点では、損益は半々であろうか。しかし、陽

の気を消して陰の気を助けることでは、益するものは損なうものを償ってはいくれないのだ」

私に一つの方法があり、これでいつも重宝している。食事の後すぐに濃い茶で口を漱ぐのである。煩膩いやなかんじは取り除かれ、胃腸に影響が及ばない。歯の間にある肉は茶に浸して漱がれることでひきしまり、歯が抜けなくなり、痛みに煩わされることもない。歯も漱がれることによって緊密になって虫歯にならない。しかも、中等から下等の茶を用いるので十分で、上等の茶を具えなくてよいのだ。そして、数日に一度だけ飲むのなら害になることはない。これは大いに理のあることでありながら、ほとんどの人が知らないので、ここにことさらに書いてみた。

『大唐新語』だいたうしんご どうだい(唐代の逸事を集めた書物)にこのようにある。「右補欠の母癸う ほ けつ む けいは博学で著述の才があった。茶は全く飲まなかった。『茶序』ちやじょを記し、『滞り』とを釈といて壅ふさぎを消すことでは、一日の利としてしばし佳よいものがある。気を瘠やせさせ精せいを侵せかすことでは、終身の累として実に大きなものがある。益を獲たときはその功を茶の力に帰し、患ったときには茶の災いにははしないというのは、諺にいう「福は近くにあって知りやすく、禍は遠くにあって見難い」というものではなからうか』

げん ゆう
元祐六年八月十三日。

(茶を常飲することが長い目で見ると健康を損なうと、蘇軾も考えていたようだ。それで、ふだんは茶は飲まずに口を漱ぐだけにすれば、口腔衛生に資するし、爽快な気分も得られるという方法を実践し、人にも勧めているのである)

■書韓李詩

甥^{りゅうこう}の柳閑^{あざな てんじょ}（字は展如）を相手に、李白^{り はく}、韓愈^{かん ゆ}の詩について論じてこの短文を記した。

（柳閑^{りゅうこう}は、劉瑾^{りゅうきん}の子の柳子文^{りゅう しぶん}（本章5ページ）の子である。柳子文の妻は、蘇軾^{そ かん}の伯父の蘇煥^{い と こ}の娘である（第4章164ページ）。従って、柳閑は蘇軾の従姉妹の子で、甥の世代ということになる）

げん ゆう
元祐六年八月十五日。

柳閑君^{りゅうこう}と酒を飲み、一杯飲んですぐに酔い、数枚の紙に字を書き、李白^{り はく}の詩を記した。

遺我鳥跡書、（私に与えてくれた書は、鳥が飛んだ跡）

飄然落巖間。（ひらひらと岩の間に落ちてきた）

其字乃上古、（それは上古の文字）

読之了不閑。（読んでほとんどわからない）（泰山に遊んだ折の詩）

戯れに柳君にこのように言った。

「李白は氣迫を見せようとする人で、それがかえってここでは己が字を識らないことを明らかにしてしまった。大いに笑うべきだ。それでも、韓愈^{かん ゆ}が意地っ張りなのには及ばない」

それがこの詩である。

我寧屈曲自世間、（私は世間で縮こまってなどいない）

安能随汝巢神仙。(そなたに従って神仙の地に住むのだ) (「夢を記す」という詩)

■感旧詩

えい穎州知事として都を発つに当たってこの詩を弟に残した。序文がある。

か ほう嘉祐年間に私は弟とともにせい か制科の試験を受けることになり、(都の近くにある)かい えん懷遠駅に寓居した。ときに二十六歳、弟はまだ二十三歳だった。

ある日、秋風が立って雨になった。夜中にに わ か倏然に、弟と離合することの感慨が心の内に湧き上がった。

それから官員として四方に出て、弟の顔を見ないときが七割から八割となった。

夏と秋の境のころに、風雨が起り、落葉が進んで草が枯れると、いつもせい ぜん凄然として同じ感慨が生じるのだった。それがおよそ三十年になる。

げん ほう元豊年間に私はこう黄州に謫居となり、弟はいん筠州に流された。そのときに詩を作ってこしたについて記した。

げん ほう元祐六年、私はこう杭州から召還され、弟が住むとう ふ東府に寓居した。数カ月でまた私はじょ いん汝陰(穎州)に出ることになった。時に私は五十六歳である。

この詩を作って弟に残し、都を去る。

(1) 制科の受験勉強中に、弟とはいずれ別れることになるであろうと思ってにわかに悲しく感じたということ、蘇軾はしばしば記している(第2章12ページなど)。(2) 秋になると同じ感慨が生じると書いているが、秋から冬にかけて体調を崩すことが多い

のはそれと関係するのかもしれない。(3) 黄州で詠んだという詩は第6章 413 ページで見ている。(4) 都に戻った当初は興国寺こうこくじに仮住まいをした(本章 21 ページ) のだが、その後、弟のところに移ったのだった)

かるとき、

枕のすくくに先には都の大通りがあり、

皇城はまだ夜半にはなっていないだろうと思っているうちに、

車が行き交う響きが、あたかも枕の中で鳴り出し、

故郷を遠く離れた者の夢は、長くは続かなかった。

あおざり 梧の葉に新らたな秋が入り込み、

雨まじりの風のような音が奥の部屋にも届いてきて、

僕はふと起き上がり、

明けの空に残る月のもとを独り歩き、

秋の始まりの涼しさにも悲しさを感じたのだった。

そのときかいえんえきに懷遠駅で僕ら先の官途を占って、

よもや黄州こうに謫居するとは念いもしなかった。

ひとたび進みきてすでに三十年、

かのときの懐いは忘れたことがない。

扉を叩いて君を呼んでみるけれど、

君は安らか眠り続けている。

そうだ、

僕の白髪を青い山々に映しつつ故郷に帰るには、

三カ月分の食べ物があれば十分なのだ。

そうであるならば、汝陰^{じょいん えい}(潁州)に行ったら、

そこからただちに、潼^{とう}、江^{こう}、章^{しょう}(蜀への道筋)へと行こうではないか。

想い見るのは氷の盤の上に載せた石蜜^{せきみつ}と柿霜^{し そう}(蜀の食べ物)だ。

気の毒なことに、君は明主^{めいしゅ}に見込まれて、

これから憂患を重ねて行かなければならない。

報国^{ほうこく}はいつまでも終わらないものであるのだが、

僕の心はもう降りてしまっているのだよ。

(最後の句の原文は「我心久已降」で、ほぼ直訳である)

■題張乖崖書後

蘇軾は8月の終わらないし閏8月の初めに都を発^{えい}って潁州に向かった。

都にいたのはおよそ3カ月間であった。途中、陳州^{ちん}に立ち寄って、この短文を残した。

(船で都から潁州^{えい}に行くには、途中で陳州^{ちん}を通ることを第6章6ページでも見ている)

ゆる
寛い政治によって民の愛を得ることができただろう。しかし、そのような愛はその時だけのものである。厳しい政治によって民の畏れを得ることができただろう。しかし、そ

のような畏れは力の及ぶ範囲にとどまるものである。であるから、寛い政治によって民から畏れられ、厳しい政治によって民から愛されるのは、聖賢にしても難しいことであって、その畏れと愛は遙か遠くにまで及ぶのである。

張忠定公(張詠)が蜀を治めたとき、諸葛孔明のように法を厳しく用いた。諸葛孔明と公の遺愛はともに今に至るも蜀の地にあって、人々は位牌を立てて祀り、社を建てて供え物をしている。

元祐六年閏八月十三日、陳州を過って公の曾孫の張祖に会ったところ、蜀人の蘇軾は公の徳の深さ思う者であるによって、張祖は公の遺墨を出してきて、その後ろに文章を書くよう求めた。

(これは張詠(字は復之、号は乖崖、諡は忠定)の書の後ろに書き添えたもの。張詠は蘇軾の90年先輩。宋の初めのころ、蜀の地は非常に治め難い土地柄とされていた。それは、蜀が武力によって宋朝に制圧され、その後の統治方法が強権的ではなはだ拙劣であったことに起因する。張詠は厳しくとも愛のある政治によって蜀の地を治め、以後、蜀は穏やかに宋朝の統治を受け入れるようになった)

■医者以意用薬

船は潁州へと入って行き、蘇軾はこの短文を記した。

欧陽文忠公(欧陽脩)はかつてこのようなことを私に言った。

「ある病を患った者がいた。病を患ったときの様子を医者に尋ねられ、『船に乗って

いて風に遇い、恐ろしいと思ってからこのようになりました』と答えた。医者^{いしや}は、長年
 使いこまれた^{かじ}枳^し牙^がから船頭^{せんとう}の汗^{あせ}がたっぷり染み込んだ部分を削り取った粉^{たん}に、丹
 砂^さ(^{しやう}霊^{れい}妙な働^{はたら}きがあるとされた^{しやう}硫化水銀^{すいぎん})と^{ふくしん}茯^ふ神^{しん}(特別な薬効があるとされた^{きのこ}茸^こ)の一種を混
 ぜて飲ませた。すると病^{びやう}はたちまち治^{なを}った。『本草^{ほんそう}』(博物学)の注釈書である『別業^{べつやく}
 性論^{せいろん}』を見ると、『汗^{あせ}を止めるには、麻黄^{まおう}の根と、古びた竹の扇^{あふぎ}を削った粉を混ぜて
 飲ませる』とある。このように医^いは意^いをもつて薬を用いることが多いのだ。初めは子供
 の戯れのように思えても、しかし実際に効果があるのなら、とがめるべきではない」
 私はこのように文忠公に言った。

「ならば、筆や墨を焼いて灰にしたものを学生に飲ませれば怠^{たい}け癖^{へく}が治りましょうか。
 さらにこの方法を推し進めていくな^{はく い}ら、伯夷^{はく い}(古^{いにしへ}の賢者^{けんしや})が顔^{かお}を洗った後の盥^{たらひ}の水^{みづ}を
 飲ませれば貪欲^{ひ かん}が治り、比干^{ひ かん}(古^{いにしへ}の暴君^{ばうきん}を諫めて殺された人)の食^くべ残^{ざん}しを食^くべるなら
 へつらいが治り、樊噲^{はん かい}(漢^{かん}の時代^{じだい}の勇者^{ゆうしや})の盾^{たて}を舐^なめたなら臆病^{おくびやう}が治り、西施^{せい し}(古^{いにしへ}の美
 女)の耳飾^{みみづから}りを嗅^かいだなら不細工^{ふさいく}な顔^{かお}が治るであります」

公はついに大笑^{たうしやく}をした。

^{げん ねう}元祐六年閏八月十七日、船は^{えい}穎州^{えいしゅう}の境に入り、二十年前に文忠公にここで会
 ったことを思い、笑い合^あって話した記憶^{きおく}がふとよみがえった。いささかそのことを記した
 までである。

(1) 欧陽脩^{おうようしゅう}とのこの楽しい会話は、第9章 157 ページで見た司馬光^{しばこう}とのやりとりと
 似ている。どちらもやや奇矯な説を開陳した大家に対して絶妙なまぜっかえしをした
 もので、欧陽脩や司馬光のような度量の大きな人であるから笑い話になったのだが、狭

量な人であるなら怒り心頭に発したであろう。実際、程頤^{てい い}は終生消えることのない恨みを抱いたのだった（第8章76ページ）。(2) かつて蘇軾^{そう せき}が杭州副知事として赴任したときに、陳州^{ちん}を経由して弟とともに穎州^{えい}に隠棲する欧陽脩を訪ねたことは第3章116ページで見ているが、まさしく20年前のことである）

■祭欧陽文忠公夫人

蘇軾は閏8月22日に穎州^{えい}に到着した。

（前任者は蘇軾より6歳下の陸佃^{りく でん}で、どちらかというところと改革派の人で、時折言及してきた陸游^{りく ゆう}（南宋時代の詩の大家）の祖父である。このころ、穎州^{えい}では八丈溝^{はちじょうこう}という新運河を開削するかどうか議論になっていた。陸佃はその事業に懐疑的で、蘇軾もそれを引き継いで、新運河は開くべきではないという意見を朝廷に具申するようになる。杭州では積極的に土木工事を推進したのだが、工学的に理屈に合わないものは無理であるとの至極当然の判断を下したのである）

穎州^{おうようしゅう}は欧陽脩の最後の隠棲地で、亡くなった後も家はそのままあって、薛夫人^{せつ}が住んでいた。蘇軾は2年前に杭州知事として赴任する際に、穎州に立ち寄って薛夫人に逢おうとしたのだが、病に臥せっているとのことで果たせなかった。そして夫人の訃報を杭州で聞き、祭文を作って穎州に送った。蘇軾は穎州に来ると改めて夫人を祭る文を作ってその霊前に供えた。折しも、母の喪に服するために欧陽棐^{おうよう ひ あざな}（字は叔弼^{しゆく ひつ}）（本章23ページ）、欧陽弁^{おうよう べん}（字は季默^{き もく}）が帰郷していた。2人は欧陽脩の三男と四男で、長男

と次男は早くに世を去っていた。

げん ゆう 元祐六年九月一日、^{せいしやく こう か}蘇軾は謹んで清酌と肴果をお供えて、^{こ たい し えん こく ぶん ちゅう}故太師亮国文忠公(歐陽脩)の^{あん こう ぐん}安康郡夫人(薛夫人)の^{せつ}霊に申し上げます。

^{あ あ}嗚呼、私軾は童年のころより勉学を喜び、童子としてよくはわからぬままに文忠公は我が師であると思い、昼はその文を誦し、夜は師を夢に見ておりました。十五年が経ってついに公にお会いできると、公は私の手をとって笑い、「君は我が仲間である。他の者と同じではない。私は老いて休もうとしている。^{こ ぶん}斯の文(学問の伝統)は君に託そうと思う」と言われた。私は^{さいはいけいしゅ}再拝稽首し、公の言葉は過分であると思った。そうであるとわかっていても、励まずにはいられなかった。

私は様々な^{じょいん えい}艱難を経て汝陰(潁州)で公にお目にかかった。朝廷に多士が賑やかに並ぶ中から、私だけが南に去って行ったのだが、公は「君が来てくれたのは、実に我が心を得た思いがする。我が思うところの文(学問)は必ず道とともにあるべきであって、利を見てそちらに移るような者は我が仲間ではない」と言われた。私は、また再拝稽首し、死んでもそのお言葉に^{たが}違えることはないと言えた。

公は亡くなってしまわれたが、そのお言葉は白日のようにいまもある。

げん ゆう 元祐の初めに私が^{こう}黄州から都に遷ると、^{おうよう ひ}歐陽棐と^{おうよう べん}歐陽弁が朝廷におられ、あたかも公のお顔を見るかのようであった。夫人に拝謁すると、大勢の孫が並んでおられた。私が敢えて我が次男と^{こう}歐陽棐の娘との婚姻を願うと、夫人は承諾してくださった。

師友として公とお会いしてからおよそ二十年、再び公の堂に上り、位牌の前に礼服の身を置くと、涙が垂れて声も出ない。

白髪のやつれた顔で潁州の人々にまた会くと、人々はいま公のことを思っていて、私を公の門下生であると言ってくれる。公の恩に報いることはできないが、せめてその門を辱めることはしない。

清らかな潁水は洋洋として東の淮河に注ぐ。公からの学問の流れも大河となって悠々と流れ行く。私は涯しなく先生を懐い続けるのだ。

(この祭文は薛夫人の霊に捧げるものでありながら、もっぱら欧陽脩について記している。薛夫人については、朝廷の高官であった薛奎の娘だということ以外に伝えられていることはあまりない)

■西湖秋涸東池魚窘甚因會客呼網師遷之西池為一笑之樂夜歸被酒不能寢作放魚一首

潁州には西湖という湖があり、かつて欧陽脩と船を浮かべたことがあった(第3章116ページ)。周囲二里ばかり(1キロ強)というから、名は同じでも杭州の西湖に比べるとかなり小さい。この詩の題は「西湖は秋になると水位が下がり、東側(東池)の魚はひどく苦しめられる。そこで、客人を集め、漁師を呼び、網で東の魚を掬って西側(西池)に移し、皆で笑い合って楽しんだ。夜に帰り、酒を飲んで眠れなくなり、戯れに魚を放つ詩一首を作った」。

東の池では、

浮草が^{かたま}べったりと塊になり、

^{あお}碧かった水面を草の青が^{みどり}すっかり塞いでしまい、

魚の背が現れ出てしまった。

西の池では、

まだ秋の水に空が映っていて、

^{じゅんさい}荇帯が、広いところでは水面に舞い、

深いところでは水中で揺れている。

老いた知事殿は、

いかにも食い意地は張っているのだが、

さすがに^{なます}膾にして食べてしまうのは気の毒であると、

東の池の魚の引っ越しを思い付いた。

網で掬われた魚どもは、

驚いて口から玉か花のような泡を、音を立てて吐き出し、

縦に横に銀の刀(魚体)を振り回して争い合う。

魚どもは、鱗が網によって損なわれてしまうのを愁うだけで、

堤の向こうに波立つ水面があるなどということはまだ信じていない。

^{ぎゃあぎゃあ}滅発^{あじた}するの**は**まんの**しば**らくのこと、

^{ゆうゆう}圉圉^{ひる}洋洋と、とてつもなく広いところに出るのである。

これらの魚どもの中に、竜に成長するやつがいなくても限らない、
 いつしか風を呼び雲を起こして天に昇るのを、心配しなければならなくなるのだ。
 来年になって春の水が西湖にみなぎるときには、
 ここから去って、広大な海を泳ぐ楽しみのうちに、
 いまの大変さの全てを忘れたらよいだろう。

■復次放魚前韻答趙承議陳教授

上の詩の題に「客人を集め」とあったなかに、この詩の題にある趙承議ちょうしょうぎと陳教授ちんきょうがいた。趙承議＝趙令時ちょうれいじ（字は景貺あざな）は潁州けいしゅうの役人、陳教授＝陳師道ちんしどう（字は履常りじょう）は州学校の教授である。この2人が上の詩に次韻したので、蘇軾がさらに次韻して答えた。

（1）陳師道ちんしどうはいわゆる蘇門六学士そもんろくがくしの1人で、蘇軾そが杭州知事として赴任する旅に一時同行したことを第9章1ページで見ている。陳師道はもとは曾鞏そうきよう（蘇軾と同年の人、第1章64ページ）の門人であったので、蘇軾は陳師道を友人として遇していた。（2）のときに陳師道が次韻した詩は残っていて、科举に合格できないままに教授の職にある境遇を詩中に詠んでいる。陳師道は蘇軾の推薦じょで徐州の州学校の教授になり、その後潁州に移ったところで、たまたま蘇軾が赴任してきたのだった。（3）趙令時ちょうれいじは皇室の流れを汲む者で、後に詳しく見ることになる）

この世には擾擾うじゃうじゃとたくさんの生き物がいる。

いってみればすべては同じ一つの大きな塊のようなもの。

やと^に榆の木に飛び移れるだけの虫けらが、

背に風を受けて九万里の高さを飛ぶ^{おのどり}鵬を羨んでも仕方がない。

仙界から見たら、

洞庭湖^{どうていこ}だってひと呑みに^{あくた}してしまう芥のようなもの、

黄河^{こうが}だっくると帯に巻くには足りないようなものでしかない。

韓愈^{かんゆ}は頑固で了見^{そし}が狭いとずっと諺られてきたのだが、

鯨^{なます}を膾にして腹いっぱい食べたいと、

そんなちまちましたことを得意がって詩に詠んだ。

東坡先生^{とうば}は憐れむべき繊細な人で、

泥の中から細かい砂粒のような魚までも集めた。

望む^{はくらくてん}のは、かの白樂天のように八節灘^{はちせつたん}に隠棲するか、

かの駱賓王^{らくひんおう}（唐の詩人）が釣りをした七里瀨^{しちりせ}に糸を垂れるか、

せいぜいそれくらいのことで、

いってみれば、これらの魚どもが網から逃れたのとそっくりで、

造物者の手の外に出て遊ぶことなどさらさらできないのである。

かくて、秋のさなかに湖の上で風月を楽しむ会を二君ととし、

新しい句をひねり出して貴君らに戯れているのである。

さあ、諸君等のためにこの朴念仁が、

船べりを足で叩きながら、

忠烈の士を悼^{いた}んだ昔の歌をうたってみせようか。

(蘇轍は、東の池から西に池にかろうじて移された小魚に自分をなぞらえている。最後の結びは知的技巧を弄して故事を難しく使っているのも、いつもの「ずっぱ訳」である)

■九月十五日観月聴琴西湖一首示坐客

九月十五日、西湖で月を観^{せい}て琴を聴き、一座の人々にこの詩を示した。

白い露がもろもろの草に下り、
 碧^{くろ}い空に薄い雲が巻いている。

月の光は誰のために来るのか。

私や諸君のためであるのだろうか。

我等が浮かぶのは、水のような天、天のような水。

我が盃へと、天の川が流れ落ちてくる――

我が腸^{はらわた}を雪や氷のような清らかさのままにして、
 酒による酔いを受けさせないためであるのだろう。

それでも残念に思うのは、

琴には弦があり、湖からは魚が出て波紋を乱すこと。

旧くより聞きなれた曲を哀しげに弾き出し、

耳に入る妙音は昔聞いたのと同じではない。

良き時は一瞬にして失われ、

湖は朝に夕に見られるようにいて、実はそうではない。

さてどうなのだろう、

真理を得た眼は一生もう渾^{にご}りはしないのだろうか。

(1) なかなかで、琴に弦があるのを残念に思うのは、無弦の琴こそが最上の音楽を奏でるからである。また、魚によって湖面の完全性が乱されるのである。(2) 最後に「真理を得た眼」と訳した原文は「道眼^{どうがん}」)

■復次前韻謝趙景貺陳履常見和兼簡歐陽叔弼兄弟

上の詩に趙令時^{ちやうれい じ}（字は景貺^{あざな}）と陳師道^{けいきやう}（字は履常^{ちん し どう}）が和したので、それに次韻して答えた。一連の詩を合わせて手紙に記して歐陽棐^{り じやう}（字は叔弼^{おうえん}）、歐陽弁^{おうえん}（字は季默^{き もく}）の兄弟に送った。以降、「四君子^{し くん し}」として趙令時、陳師道、歐陽棐、歐陽弁との交流が続く。

七歳で詩をよく詠^りんだ李賀^が、

奇妙な字まで識^しっていて揚雄^{ようゆう}、

潁州^{えい}の役場には、

この二人のような両君^{りやうきん}がいて、

そぞろに嘯^{さう}いている。

私は遠^{こう}くの江湖^こに去って、

我が大きすぎる瓠^{ひやうたん}を浮かべようとしていたのだが、

未練がましくここに少し留まって、

なお世俗の中で酔い続けようとしている。

ある人は詩を作らないようにと私に勧めてくれる、

ガキども あらぬこと
児輩は織紋をでっちあげるのが得意であるからだ。

それでも、本当の音楽がわかるのは世の中に三人しかいないというから、

俗な耳に何を聞かせても害はないのかもしれない。

さあ、これよりおうよう欧陽兄弟をともに尋ねようではないか。

薪を伐って黄昏を照らして語り合おう。

かの家には甘い井戸がある、

にこ
いくら汲んでもついに渾ることがないのだ。

((1) 最初の部分は、とう り が かん ようゆう唐代の李賀と漢代の揚雄になぞらえて ちょうれいじ ちん し どう趙令時と陳師道を讃えたもの。それぞれに何かしら類似点があるのだろう。(2) 「本当の音楽……」の部分の原文は「しゅげんさんたん朱弦三嘆」で、琴の名器で奏でる妙音を聞き分けられるのは三人しかいないという意味。その三人に趙令時と陳師道、そしておうよう欧陽兄弟も入っているのである。(3) 「汲んでもついににこ渾らない」のはおうようしゅう欧陽脩に始まった学問の流れである)

■弁才次韻參寥詩

こう りゅうせい べんさい
杭州には竜井に隠棲する弁才大師がいた (第9章165ページなど)。参寥と
しんかん
秦觀が唱和した詩に弁才が次韻し、蘇軾がそのことについてこの短文を記した。

さんりょう 参寥は蘇軾の親友、しんかん そもん し がく し 秦観は蘇門四学士の1人、べんさい 秦観と弁才大師が親しくしていることとは第6章106ページなどで見ている)

巖棲木食已皤然、^{いすお}(巖に棲み、木を食らうちに白髪になってしまった)

交旧何人慰眼前。(旧いなじみの人の何人が眼の前で慰めてくれるのだろうか)

素与昼公心印合、^{ちゅうこう さんりょう}(もともと昼公(参寥)とは心が合致し)

每思秦子意珠円。^{しんかん こころ}(秦観の意は珠のように円いといつも思っている)

当年歩月来幽谷、(かのときに谷の奥深くまで歩いてきて〈ださり〉)

拄杖穿雲冒夕煙。(杖をついて、夕暮れ時に、雲を穿って上ったのだった)

台閣山林本無異、(朝廷にしようが山林にしようが元来異なることはない)

故応文字未離禪。(詩句は禪の心から離れないのだ)

この詩を^{べんさい}弁才が作った。ときに八十一歳である。普段から作詩を学んだことはないのだが、風が水を吹いてさざ波を立てるように、自ずから姿もよく内容も広がりがある。これに比べたら、参寥や私の詩などは、職人が織った見栄えがよいだけの刺繍のようなものだ。

■与弁才禪

このころになぜか^{べんさい}弁才大師のことがしきりに思われたのだろうか。上の短文を記し、弁才に手紙を書いて送っている。2通残っているうちの1通を訳す。

お別れしてより仰ぎ思う気持ちが日に日に深まります。このごろはお道体の御様子はいかがでしょうか。某は幸いにも 闇わたしの中から頭だけでも抜け出して、この閑な郡さむがしにくることができました。超然と遠く俗世から離れられたわけではありませんが、老いて退くことに近づきつつあります。呉越こえつ こう(杭州近傍)の諸分野の友人や江山の景勝地を訪ねたいとの思いが湧いて、心から去りません。もしかすると、老いを一時的ながらも会稽かいけい(越州)で送ることができるかもしれませんので、老師様におかれましては必ずこの一郡の人々のためにまだ少しく山中に留まられて、安らかなところへとお帰りにならぬようにしていただけますなら、不肖わたくしもさらに少しく清らかな遊びに接しうることもあろうかと思ひます。それ以上の幸せはありません。惟ただだせんばん 千万保ほ愛あいされますように。

(この手紙がこの年の9月30日に記されたものであることは、次の短文からわかる)

■跋旧与弁才書

これはちょうどこれより1年後に記した短文。表題は「弁才べんさいに与えた古い手紙の跋文」で、「古い手紙」とは上に見たものである。

私はかねて弁才道眼べんさいどうがんと相い照らし合ったばかりでなく、不思議な多くの縁で結ばれていた。

初めて弁才師のおられる山に入ったのは元祐五年九月三十日で、一日中向き

合って話し、老師のもとに数枚の紙を留めた。

翌年えいの同じ日に私は潁州えいにあって手紙を書いた。そこに「老師様におかれましては必ずこの一郡の人々のためにまだ少しく山中に留まられて、安らかなところへとお歸りにならぬように」と記したところが、実はその日に老師は亡くなられたのだった。さらに翌年、その弟子かいその懷楚がその手紙を軸にしたものを持ってこられた。ために私は大いに嘆息したのだった。

五月十一日書く。

げんゆう
(元祐5年に弁才べんさいに会ったことは第9章165ページで見ている。そのときが初対面だったわけではないことはそこに記してある)

■与参寥子

やはり1年後の文章である。関連するものをさらに二つ見ておこう。べん弁才さい大師が亡くなったことを聞いた蘇軾は祭文を作り、それを親友さんりょうの参寥のもとに送った。そのときの手紙。

再びお手紙を頂戴しました。御法体が佳勝でありますことつまびらかにいたしました。

べんさい弁才師が亡くなくなりました。去来も元来無むでありますとはいえ、私のような者は情を撞つかれて凄愴せいそうとなることを免れません。

ここに奠文てんぶん(祭文)一首があります。銀二両を添えますので、茶菓とともにお供えくださいますようお願いいたします。……

■祭竜井弁才文

上に記されている弁才大師の祭文。

嗚呼、孔子と老子は門を異にし、儒学と仏教もまた教えを分けている。仏教の中でも禅宗と律宗は批判し合っている。私は大海を見るに、そこには東西南北がある。様々な河川があるけれども、それが至るのは同じ一つの海である。

大法師(弁才)は自ずから戒律を守り、もはや戒めを持つことも破ることもなく、垢も浄も皆が空となり、全ての学問を内に入れて、事理は皆融け合ったのだった。大法師は不動の山のようにあり、常に鳴る鐘のようにあり、月と水のようにあり、ありとあらゆるものを共鳴させる風のようにであった。

八十一年にして生にはついに終わりがあったが、物に遇えば必ず応じ、施すものは無窮であった。

私は初めて呉に行ったときに五公とお目にかかることができた。講師としては弁才師と慧弁師と梵臻師がおられ、禅師としては懷瑾師と契嵩師がおられた。それから二十年が経つとただ大法師だけがおられた。いままた大法師が往かれ、その後に生きる者は誰を師と仰げばよいのだろうか。僧侶も俗人も悲しみ、山や谷まで顔を暗くしている。

誰か一杯の酒を持って竜井で吊ってくれないだろうか。私が杭州を去ったときに、老人も若者も来て、山中に住むようにと私に言ってくれた。しかし、山にこの大法師

がおられないなら、行って誰に従えばよいのか。

ああ参寥師よ、この祭文をどうか自身で行って捧げてほしい。他の人では私の胸の内を伝えることはできないのだから。

(蘇軾が副知事として杭州に赴任したときに会ったという五公のうち、慧弁は弁才の兄弟弟子で、天竺寺の慈雲霊応尊者に学び、後に海月法師の号を贈られた。蘇軾が杭州に来て間もないころに亡くなり、蘇軾は慧弁を弔う詩を詠んだ(訳出しなかった)。梵臻は銭塘の人で、上天竺寺、金山寺で学び、西湖の南屏山興教寺の住持となった。懷琬師は父の蘇洵とも交流のあった大覚禪師で、都を出てしばらく各地を巡る間に杭州に滞在したこともあるということを蘇軾は記しているので(第9章173ページ)、ちょうどそのときに会っているのかもしれない。契嵩師は蘇軾が副知事として杭州にいる間に靈隱寺で亡くなった円通禪師である)

■送欧陽主簿赴官韋城四首

欧陽脩の孫の欧陽憲が滑州韋城県の役人として赴任することになったので、この送別の詩を詠んだ。

(欧陽脩の夫人の喪に服してその一族が潁州に集まっていたのだが、これより順次去って行く。欧陽憲は欧陽脩の長男の欧陽発(すでに没している)の子である)

其の一

貴君は鳳の雛にして名馬の子、日に日に高く伸びあがり、

白髪にしてやつれ顔の私なんぞはただ笑われてしまうだけだ。

貴君はすでに三万巻の書物を学び終えているのに、

牛刀をもって鶏を割くような場違いな小さな町に行かされてしまうとは。

其の二

残念なのは、

貴君の出处進退が、ずっと貴君には釣り合わないこと。

川に臨んで一杯の酒を酌み交わすこの別れを記憶に留めよう。

私はもう間もなく江湖^{いなか}に引込んで老いるだけの身。

じゃすい^{じょすい} えいすい^{えいすい}
汝水、潁水は東に流れ、貴君は西に行くのだ。

其の三

貴君が着く頃には、

かつ^{かつ} はくぼ^{はくぼ} わたし^{わたし}
滑州の白馬の津には春の水が流れ来て、

この地と同じ白魚が貴君を喜ばせてくれるだろう。

知事^{ちじ}殿は欧陽公^{おうえいこう}が考案された冰堂酒^{ひやうどうしゅ}を復活させたというから、

が^が ぼうさい^{ぼうさい}
貴君には画舫齋^{がぼうさい}を新たに造られることを期待したい。

おうえいしゅう^{おうえいしゅう} かつ^{かつ}
(欧陽脩はかつて滑州の知事となり、新しい酒を造ったり、書齋を建てたりしたとい
う)

其の四

貴君がかかの地に行くなら、

道の傍に立つ老人は、

おうよう

欧陽公が黒々とした髪になったと、

ハンケチ

涙で 巾を濡らすであらう。

ゆかりの地には高い木がそのまま聳えるの譬えの通り、

貴君はそっくりの老成した立派な姿をかかの地の人に見せるのである。

■美哉一首送韋城主簿欧陽君

おうようけん

同じく欧陽憲を送る詩。蘇軾にしては珍しく平易な詩で、内容は上の詩を

そのままなぞっているので、読み下し文だけを示す。

うつく かな みず

美哉水、(美しい哉 水)

ようよう こ

洋洋乎。(洋洋乎たり)

われ せんせい おうようしゅう おも

我懷先生、(我 先生(欧陽脩)を懷い)

こ し おうようけん まち すみ おく

送之子於城隅。(之の子(欧陽憲)を城の隅で送る)

ようよう こ

洋洋乎、(洋洋乎たり)

うつく かな みず

美哉水。(美しい哉 水)

われ こ し おく

我送之子、(我 之の子を送って)

しん と いた

至於新渡。(新渡に至る)

念^か彼^{すうらく}嵩^{すうざん}洛^{らく}、(彼の嵩洛(嵩山と洛陽)を念^{おも}うて)

眷^{けんえん}焉^{にし}西^{かぜりふ}顧^る、(眷焉として西を顧る)

之^こ子^し於^ゆ邁^ゆ、(之の子 于き邁きて)

至^{はく}於^ば白^{いた}馬^る。(白馬に至る)

白^{はく}馬^ば旧^{きゅう}邦^{ほう}、(白馬は旧邦)

其^そ構^{かま}維^{ここ}新^あ、(其の構えは維に新らたなり)

邦^{くに}人^{ひと}流^{りゅう}涕^{てい}、(邦の人は流涕する)

画^が舫^{ぼう}之^の孫^{まご}。(画舫之孫に)

相^そ其^{くち}口^{ひげ}髯^み、(其の口髯を相るに)

尚^な克^よ似^{これ}之^に。(尚お克く之に似たり)

先^{せん}生^{せい}遺^い民^{みん}、(先生の遺民を)

之^こ子^し往^ゆ字^{やしな}。(之の子 往いて字え)

■ 泛 穎

穎^{えい}水^{すい}に船^{うか}を泛^はべて詠^よんだ詩^し。

私の本性として水に臨むのを喜び、

穎^{えい}水^{すい}を得^{こころ}たのを意^{すてき}にはなはだ奇である思っている。

着任してからというもの、

十日に九日は川のほとりにいる。

役人も民衆もみなが笑いながら、
今度の知事殿は癡^{おろか}なのかもと語り合っている。
知事殿は実は癡^{おろか}ではないのだよ、
流れる水がすばらしい姿をしすぎているのだ。
潁水は郡を巡ること十余里、
速くもなく遅くもなく、
上流は真っすぐに清く澄み、
下流は曲がって波立っている。
船に乗って明るい鏡(水面)を下に見て、
笑って、
「汝は誰なのか」
と問と、
たちまち魚の鱗のような波が立って、
私の髻やら眉やらが乱れて散り散りになり、
なんと百人もの東坡先生^{とうば}になってしまう。
そしてすぐにまた、一人の東坡先生がそこにいるのだ。
これは水が軽薄にも私と遊び戯れているのではない。
耳に聞こえるもの、眼に見えるもの、鼻に香るもの、
それらは心を逆立ちさせてしまうような子供だましである。
同じような児戯^{じぎ}に見えても、

水の戯れは人の本性を失わせるようなことはない。

ちょう ちん おうよう
趙君、陳君、二人の欧陽君は、

てんにん
同じ天人を師とする仲間であるから、

妙所を見てそれぞれ得るところがあるだろうから、

うか ふ
ともに潁水に泛ぶ詩を賦すがよい。

(終わりの原詩は、「趙陳両欧陽、同参天人師」(趙・陳・両欧陽、同じく参す天人の師)である。ちょう ちん りょうおうよう おな さん てんにん
し ちょうれいじ ちん し どう おうよう ひ おうようべん
師)である。趙令時、陳師道、欧陽棐、欧陽弁の4人とは心が通じ合い、それによ
てい
って潁州に来てからの詩は精彩に富み、数も多くなる)

■六観堂老人草書

こう すい じ どう りょうせい
杭州に垂慈堂老人こと了性がいることは第9章 32 ページですで見
ているが、えい
潁州に来てから何かの折に了性の草書を見たのだろう。その感想
を詩に詠んだ。詩題にある「ろくかんどう
六観堂老人」とは了性のことである。この詩
に添えられた蘇軾の自注に、「六観堂の六観とは、こんごうきよう
『金剛經』にある夢、
幻、泡、影、露、電の六物から取ったものである。六観堂老人は僧の了性
で、医学に詳しく、また草書を善くする。筆を下すと遠いひびき
韻がある。し
かし、人はその貴ぶべきことを知らないので、この詩を作った」とある。
詩には夢、幻、泡、影、露、電の六物が詠み込まれている。なかなか理
解の難しい詩で、いつもの「ずっぱ訳」である。

物が生じ、形象が現れる、
形象は万物にわたってたくさんにある、
しかし、それは夢か幻——
もとより根がなく瞬時に成るだけで、
夢の中では無ではないと見えても、
泡と消え影がひとたび失われるなら、
一瞬にして形象は異なり、
露は乾いてなくなり、電光はさらに早くに^ゆ殂き、
全ては滅し、滅し尽して、そこになおあるのは真なる吾か。
このようにいう六^{ろく}観^{かん}堂^{どう}老人は、
吾が心は火の消えた冷たい灰のようだとするが、
実は枯れておらず、
いかなる場にも逢えば戯れをなして三昧境に至るのであって、
その身を医者にするときは、己を忘れて人を救い、
草書をなすときは、学ばずしていささか自分の楽しみにするだけなのだが、
筆を下すと、かの名手の周^{しゅう}越^{えつ}も助手として呼びつけるばかりの勢いで、
鼠の髯の筆に真っ黒な墨をたっぷり含ませて、
雪のように白い特上の紙の上に、天と飛ぶ竜を遊ばせるのである。
かつて南朝の皇帝はある人の書を評して、
「ある高貴な家に仕える腰元がいきなり奥方の地位に昇ったようなもの、

そのココロは、
 その挙止はどうにもぎこちない」
 といったのだが、
 六観堂老人はそうはならず、いまのまま万人を感嘆させてほしい。

■次韻劉景文見寄

こう 杭州で親しくした劉季孫（字は景文）（第9章14ページ以下）から詩が届き、それに次韻した。

わい が 淮河を通して東から鯉がやって来て、
 この江湖へと巧みに手紙を届けてくれた。
 細やかに見れば、
 墨の痕は松のように痩せていて、
 一羽の鶴である貴君が、
 髯をひねって笑う姿がありありと浮かんでくる。
 烈士を輩出してきた家柄からすれば、
 詩なんぞは用いるに足りないものであるのだが、
 学生のような突っ張った気分が、抜けずにあるのも面白いものだ。
 名馬は老いても千里を走りたいと想い続けるという、
 それができない哀しさの余り、

酔っては痰壺を叩いて歌っている。

歌って叩いて、壺を割らないようにしてくれたまえ。

(1) 冒頭の部分は、手紙を鯉に譬える(手紙を魚の形に畳んだことに由来するらしい)ことに基づく。(2) 松も鶴も劉季孫への賛辞である

■贈朱遜之

穎州を含む地域を管轄する京西路の役人である朱勃(字は遜之)が来て、八丈溝という新運河を開削すべきかどうかを議論し、土木工学的に無理があるとの結論に達し、蘇軾は、八丈溝の開削を不可とする意見書を朝廷に提出した。これはその議論とはまた別のことで朱勃に贈った詩。短い序文がある。

元祐六年九月、朱勃と穎州で会って議論した。ある人が「洛陽の人は花を接ぐのが上手で、年々新しい種類を出し、とりわけ菊は品種が最も多い」と言った。すると、朱勃は「菊というものは黄色であるのが正しいのであって、その他のものは鄙しむべきである」と言った。昔むかし叔向は驪蔑が口にしたたった一言を聞いただけでその人物を見抜いたといふけれど、私もまた朱勃のことをこの一言で知ったのである。

(1) 洛陽は園芸の盛んな土地柄で、牡丹や菊の新種がそこで生み出されていた。(2) 叔向は春秋時代の人で、驪蔑は見かけがさえない男であった。叔向は、驪蔑が使用人に対して何気なく発した言葉(内容は不明)を耳にして、優れた人物であることを知った

菊が黄色くなる季節を秋とするのは、

遠い昔の曆に記されている通りだ。

『易経』には裳の正しい色は黄色とされ、

周代には王后の衣は黄色とされた。

人の偽いつわりごとが勝るようになってから、

ついには天の力と争うまでになり、

もとの姓を変更して別の族に無理に入れさせたり、

人の命じるがままに本来の顔を変えさせたりするようになった。

新奇なものは広まりやすく、

雑駁なものは往々にして純粋なものを傾けてしまう。

貴君が偽物を嫌うのは、

かの伯牙はくがが琴の真の音を知っていたのと同じで、

貴君が菊の真のありようを知っているのは、

かの陶淵明とうえんめいに似ている。

貴君の言葉は私の心に印され、

世間の言うことなどもはや論評する必要もない。

願うのは、

貴君が厳しい冬に風となって、

紫の菊やらあか頬あかい菊やらを一掃してしまうことだ。

(蘇軾はしばしば自分を野生の鹿になぞらえ、鹿の本性のままに生きることを理想としている。そうした心性からすると、本来黄色である菊を紫や赤にするのは、とんでもなくおかしいことなのである)

■書汴河斗門

はちじょうこう

八丈溝を巡る議論は興味深いものの、内容を理解するには近傍の地理に関する知識を必要とする。ここでは水利に関連する別の記事を読んでおきたい。必ずしもこの時期に書かれたものではないが、蘇軾が常に治水に関心を抱いていたことがわかるであろう。

数年前、朝廷は汴河に斗門(灌漑用の水門)を作って農地に水を入れようとした(熙寧2(1069)年に最初に提案された)。識者は不可としたのだが、ついに実行され、しかし結局は成果がなかった。水量が盛んなときに斗門を開けると、農地ばかりか墓地や住居にも河水が及んで被害が生じ、秋の水量の少ないときに斗門を開けると、水は浅くて、これを「蒸餅淤」(お好み焼きのように薄い泥水)と呼んだ。朝廷はこうしたことを嫌ってこの事業を取りやめた。

たまたま白居易の議論文を読むと、「転運使(運輸関係のリーダー)は汴河の水深が浅くて舟運に不便なので、兩岸の斗門を塞ぐことを求めた。節度使(軍事関係のリーダー)は、汴河に沿って官営の農地があり、斗門を塞いでしまったなら、軍に供給する食糧がなくなると言った」とあった。これによると唐代には汴河の兩岸に官営田

と斗門があつて、水量が十分であるなら、舟運にもよく、農地に水を灌^{そそ}ぐのにもよかつたということになる。

昔はできたことがいまできないのはどういうことであろうか。知識のある者に問いた
いものだ。

^{はくきょい}
(白居易の時代から 200 年ほどを経る間に、河川に土砂が堆積して、水位の調節が昔
通りにはできなくなったのであろうか)

■次韻趙景貺督兩欧陽詩破陳酒戒

^{ちょううれい} 趙令時、^{ちん し どう} 陳師道、^{おうよう ひ} 欧陽棐、^{おうよう べん} 欧陽弁と蘇軾は気の置けない仲となり、戯れ
の詩を贈答し合った。母の喪に服する欧陽棐、欧陽弁の兄弟は詩を作らず、
また陳師道は酒を飲まない ^{いましめ} 戒 を守っていた。その 3 人に対して、趙令時
はそろそろそうした縛りをほどいたらどうだろうかと詩で促し、蘇軾が
それに次韻したのがこの詩。

^{いにしえ} 古の卜商は母を喪った哀しみをいつまでも忘れることがなく、
歲月はたちまち過ぎ去ってしまった。

ある人が卜商に琴を渡して、
喪の期間はすでに終わり、悲しみをいつまでも留めるべきではないと示した。
詩は音楽ほどに華やかなものではない。

^{おう ぎ し}
王羲之には五人の息子がいて、

いずれも少年のころから字が巧みであったし、

我が蘇家にも、唐の時代に蘇瓌と蘇頲の父子がいて、

二人とも筆を持つと休むことなく文章を書き続けた。

欧陽兄弟のお二人は詩を詠むことができないと言いつれど、

欧陽公の子にしてそのようなことがあるうとは、

誰も信じはしないのである。

古の聖人賢者も酒を飲んだのであって、

百杯飲むと孔子になり、千杯飲むと堯になると言われてもいた。

陶淵明の曾祖父の陶侃は若いときに酒で失敗し、

父と酒量の制限を約束してそれを守った。

しかし、酒の中に失敗させるものがあるわけではない、

その証拠に、酔っているときには鷗も恐れることなく近寄ってくるのである。

陳君に告げよう、

明日は、欧陽兄弟がどうしても詩を作らないのなら、

その罰に酒を飲ませるための杯を洗って用意しておくので、

貴君も来るがよい。

■叔弼云履常不飲故不作詩勸履常飲

上の詩を 3 人に送ったところ、欧陽棐、欧陽弁の兄弟が蘇軾のもとに来て、「陳師道は酒を飲まないと言っているから、自分たちも詩を作らない

と」告げたので、蘇軾はさらに酒を勧めるこの詩を作って陳師道に送った。

私は元来、酒を畏れる人である。

それでも、^{さかづき}觴に臨んでその畏れを訴えることはない。

詩のためには、これまでに罪を得て困窮させられた。

それでも、句を得るとそれを吐かずに我慢することができない。

酒は退け、うまい詩は出さずに呑み込んでしまうようなことをしたなら、

胃も肝臓も悪いものだらけとなってしまうだろう。

ここに得失を比べるなら、

天の思し召しに従うしかないのである。

つまり、私なんぞは酒と詩の二物がなかったなら、

歳月を何とともに過ごしてよいのかわからないのである。

^{しょうぼり}悄焉として長々と愁いているのは、^{はかりごと}計として大いに誤っている。

^{おうよう}欧陽兄弟に詩がないわけではない、

残念なことに、^{ちん}陳君が飲まずにいるのを言い訳にしているのだ。

無理にも一杯だけは飲んでくれないだろうか。

飲むの飲まないで、酒を愁いを生む道具にはしないでくれないだろうか

言葉を出すのは太陽が光を発するのと同じ、

言葉に出して約束したことは必ず守るのであるから、

陳君が酒を飲めば欧陽兄弟はきっと筆を執って詩を賦するのである。

こうして五人で詩を詠み合ったならば、
後の世に五君子の詩として語り継がれることであらう。

(これらの詩は、蘇軾は相手が嫌うのを無理強いするアルハラ、パワハラを揮っている
わけではなく、酒を飲まず、詩を作らないこの状況を知的遊戯の恰好の題材として楽しんで
いるのだろう)

■景貺履常屢有詩督叔弼季默唱和已許諾矣復以此句挑之

戯れはまた続く。詩題は、「趙令時^{ちやうれい じ}と陳師道^{ちん し とう}はしばしば詩を詠み、歐陽棐^{おうよう ひ}、
歐陽弁^{おうよう べん}にも詩を詠むよう促したところ、ようやく許諾したので、さらにこ
の詩でもって督促をする」。

貴君等の家の詩文は堂々として都に冠たるものがある。
ここに詩をもって陣地を築き、
酒を武器として戦を始めたならば、
貴君等は大将軍(欧陽脩^{おうよう しゅう})の真の子孫であるからして、
手を袖に入れたまま眺めているわけにはいかなくなるし、
私もその門下生であるからして、
老いたとはいえ一軍を率いて参戦しないわけにはいかない。
昨夜は、すでに城壁を攻撃されて動揺したらしいが、
(欧陽兄弟がいよいよ詩を詠むのを許諾したことをいう)

明日は、まさか戦わずして城を明け渡すつもりではないだろう。

これからは^{すいおう}醉翁(欧陽脩)が言われた「天下の楽しみ」を我等も楽しみ、
一挙に百の杯を傾けつつ、詩を唱和し合おうではないか。

(無論戯れであるにしても、^{おうよう}蘇軾にこうまで言われては、欧陽兄弟もさぞや困ったであろう。相手が天下の大才の蘇軾で、父の名を辱めないような詩を詠まねばならないとなったら、誰だって躊躇する。欧陽兄弟が果たして沈黙を守り続けたのかどうか、この後で明らかになる)

■臂痛謁告作三絶句示四君子

詩題は「^{ひじ}臂が痛んで^{えつこく}謁告(欠勤を申し出る)し、三首の絶句を作って四君子(趙令時、陳師道、^{ちやうれいじ}欧陽棐、^{ちんしどう}欧陽棐、^{おうようひ}欧陽弁)に示した」。蘇軾が重職を避けて地方に出ることを皇帝に願い出るときにはいつも臂の痛みをその理由として挙げていた。それは慢性的な不良であって、リウマチだったのではないかと推測もある。

其の一

公務より退き、

静かに閑かにしていると、まるでもう退職したかのようだ。

少し酒でもやってみると、

この^{よろこ}飲ばしきは全くもって故郷に帰ったかのようだ。

心を不安にさせるほどではない病があるのも悪くはないようだ、

すだれ
簾にまわりついて上る一縷の香の煙を、

寝そべったまま眺めているのである。

其の二

心が求めるのは何であるかという、

病が消えて安らかとなり、

小さな波さえ立たない古い井戸のようになることだ。

仏陀の部屋をある子供の弟子が覗いたら、

清らかな水がいっぱいに湛えられているのが見えたので、

驚いて瓦礫を投げ込んだ。

大きな音がして、

後に仏陀の胸の痛みになったという。

とすると、どこぞのいたずら小僧が、

我が古井戸に石ころでも投げ入れたのだろうか。

其の三

小さな部屋の低い窓、

日が当たる温もりのもと、

はっきりとわかるものがある。

それを黙っているのでもなく、言葉にして言うのでもない。

かの維摩居士ゆい ま こ じは仮病を使って友を呼び寄せたのだが、

私はこの通り真の病である。

これこそが東坡とう ぽが道みちに至る唯一不二の門である。

（仏陀ぶつ だの弟子の維摩居士ゆい ま こ じが仮病を使ったという話を、蘇軾そ しゃくは好んで用いている（第9章 47 ページなど）。維摩居士のもとには文殊菩薩もんじゆ ぼ ざつが見舞いに行つて、仏教の真理について議論したのだが、蘇軾は文殊の代わりに四君子を誘ったのだ）

■到潁未幾公帑已竭齋廚索然戯作数句

詩題は、「潁州えいに到着してまだそれほど経っていないのに公帑こう とう（公の貯え）がほとんどなくなりかけ、厨房もさびしくなってしまった。戯れに数句の詩を作った」。州知事は駅館を設けて通過する士人の便宜を図るのだが（第2章 51 ページ）、その費用をまかなう公帑が尽きようとしていたのである。

私がかつて密州みつにいたときのこと、
その地の役人は新法を謹んで守り、
節減に努めたために公庫は空っぽで、
春の賑わいもなかったし、
客人が来たとなると、

どうやって接待したよいかと真っ先に私が困ってしまうのだった。

くこ
枸杞を摘んで飯の代わりであると自分をごまかし、
菊も食べて少しも余すことがなかった。
あれから歳月はどれほど過ぎ去ったのか。
幸いにもこの一郡で老を送ってはいるものの、
齒も髪も日に日にまばらになってゆくばかりで、
困るところは十年前と少しも変わらない。
夢の中で酒を飲むのはもとより空しいが、
本当に満腹するなどはついに虚しい望みである。
それでも^{はだし}赤裸足で働いてくれる妻がいて、
くたびれて尾が赤くなってしまったような魚でも上手に煮てくれる。
心に全ては夢であることを知っているのもので、
我が身をここに慎んで、帰ろうとはしないのである。
(蘇軾^{みつ}が密州知事であったときには、厳しく節減が命じられたために、^{くこ}枸杞や菊を摘んで食べるようなこともし、そのことを賦に詠んでいた(訳出しなかった))

■贈月長老

^{いじん}「異人」好みの蘇軾らしい作品。^{えい}穎州のどこぞの寺に住まう^{げつちやうろう}月長老に贈った詩。

「天とは、一つの笠をかぶせたようなものですな。」

地とは、水に浮かんで車輪のようにぐるぐる回るものですな。

天下を定めたと威張り腐った五霸^{ごは}(軍事力を誇った五人の王)にしたって、
何を成し遂げたのかといいますと、

毛の先に一粒の塵をくっつけたくらいのことですな。

天下を取って何をするのかといったら、
半紙に詔^{みことり}を書くくらいでありますよ。

手習いの苦勞だったら、

そらの子供だっしておりますのにな」

そう語る貴僧が持っているのは、

足の折れた鐺^{なべ}が一つ。

中に五合の古米を入れて炊くことができる。

十年こうしてこのあたりで過ごしているのだから、

これこそが英偉にして奇特な大人物である。

地面を切った囲炉裏へと私を招き入れて、

ごく軟らかな言葉で語るのだから、

その意味するところはなはだ真を突いている。

「かように白い灰が雪のように積もっております。

この中には、ほら、真っ赤になった麒麟^{きりん}がおりましてな。

この赤い麒麟には触れてはなりませんぞ。

麒麟が崩れて灰となりましたなら、

大和尚が怒りますでな」

これは何の話であろうかと、

手を組んで考えつつ黙って坐っていると、

なんと壁までが**ぶつぶつ**諄諄言い始めた。

今宵は残念なことに同行の者が多くいて、

貴僧の白頭巾も俗塵で汚れてしまうほどであるから、

後日の夜には独りで来て、

主と客の区別なく語り合おうではないか。

紙の帳の中、蒲の敷物に座って、

とくと我が身を觀たいものである。

■次韻答錢穆父以軾得汝陰用杭越唱酬韻作詩見寄

蘇軾の親しい友人である錢勰（字の穆父）は、蘇軾が杭州知事であったときに近くの越州の知事であったことから、何度か詩を応酬し合った。このとき錢勰は瀛州にいて、かつて詠んだ詩に次韻して送ってきた。蘇軾はそれに次韻して返した。もとになった応酬の作は第9章6ページで見ている。

私は敗軍の将のように、

疲労困憊して人々の群から離れてしまった。

それでも、貴君は慈愛に満ちた兄弟のように、

私のもとに詩を届けてくれた。

びん
髪が真っ白な年齢ともなれば、

立派な旗を立てて車を走らせる高官になっているべきであるのに、

犁を手にするのが似つかわしい私は、

かんりん いん ぎょうどう
翰林院の玉堂などはお呼びでなかったのだ。

えい
潁州に来てみると、

うた おう
豪傑と謳われたかの王兄弟を継ぐ者はいないけれども、

おうよう
欧陽兄弟がなお風流のありようをしっかりと見せてくれている。

貴君の立派な詩を、舞いつつ歌い広めるなら、

くに みやび し
この邦の人々も雅な言葉はかくべきあるものだとしめるようになるだろう。

(途中にある王兄弟とは、王向おうきやうと王回おうかいであると、蘇軾自身の注がある。王兄弟は父を

えい
潁州に葬って以降そこに住むようになり、後に2人揃って科挙に合格した。当時非常
に名高い兄弟で、王安石おうあんせきとも親交があった)

■韓退之孟郊墓銘云以昌其詩拳此間王定国当昌其身耶抑昌其詩也来詩下
語未契作此答之

詩題は次の通り。「韓愈かん けうが作った孟郊もう こうの墓誌銘に『孟郊は詩を昌さかんした』
とある。そこを取り上げて、王鞏おう きやうに『身を昌さかんにすべきか、それとも詩
を昌さかんにすべきか』と尋ねたところ、それに対する答えとして詩が返って

きた。しかし、その語は^{ことば}しっくりとはこなかったので、この詩を作って返事をした。「昌^{さか}んにする」とは、何か^に励んで、その何かを高め、また己も高めるという意味であろう。王鞏^{あざな ていこく}（字は定国）は名家出身の友人で、気位が高かったからなのか、蘇軾の不羈不屈の面ばかりを見習おうとして、官員として地道に励むのが不得手だったようで、蘇軾はたびたび訓戒を垂れている（第8章5ページなど）。

身^みを昌^{さか}んにするのは、腹を満足させるのと似ている。

満腹にしたところで、いずれまた飢えがやってくる。

詩^{うた}を昌^{さか}んにするのは、顔に化粧を施すのと似ている。

要するに、人のために見栄えをよくするのである。

とすると、いずれにしても氣^きを昌^{さか}んにするには及ばない。

氣^きを昌^{さか}んにすれば、老いても生き生きとして衰えることがない。

しかしながら、老いて衰えないといったところで、

この世界が終わるときが来たなら、やはり行き場がない。

とすると、志^しを昌^{さか}んにするには及ばない。

志^しがしっかりと一つであるのなら、氣も自ずとそれに従い、

志を養うなら、天地いっばいに満ちるまでになる。

孟^{もう}子^しがかつて同じことを言っているけれど、

その実例として、魏^ぎ勃^{ぼつ}と魯^ろ仲^{ちゆう}連^{れん}がいるのだらう。

昔、漢^{かん}の時代に魏勃は勇猛であるとの評判であったが、
 小児^{かんえい}のようだと日頃馬鹿にしていた灌嬰の前にいざ出ると、
 震えて何も言えなくなり、ただの愚か者であったと笑われてしまった。
 昔、戦国時代に魯仲連^{しん}は秦の大軍に囲まれた邯鄲^{かんたん}を救うために、
 秦の將軍と語り合うだけで退却させたのだが、
 何の謝礼も受け取らずに立ち去ったのだった。
 志^{さか}を昌^{ほうざん}んにするなら、謗讒を怨むこともない。
 道を得るための一番の基本がここにある、
 汚い泥の中から純白の連花が生じ、
 ごみ屑から靈妙^{きん し}な菌芝が生え出るのだ。
 こうした善知識があるのなら、
 枯れ枝からだってきっと芽が出るようになる。
 とはいえ、このように多くを言う必要はなかった……
 暑いか寒いかということは、貴君が自ずと知るのであるから。

((1) 最後の句は、どうしてわかってもらえないのかという蘇軾のぼやきであるのだろ
 う。(2) ちょうどこのすぐ後で、弟の蘇轍^{おうきょう}は、王鞏のために罪を被りそうになった。
 蘇轍は、王鞏を重く用いるよう朝廷に推薦していたのだが、人物として不適任であるこ
 もかわらず個人的に親しい者を推薦したとして非難されたのである。徒党を組むこ
 とは絶対悪とされ、王鞏には日頃の振る舞いこいささか問題があり、無茶な難癖ではあ
 っても、ふりかかる火の粉を払うには細心の注意を必要とした)

■送欧陽推官赴華州監酒

おうようしゅう おうようじょ か
欧陽脩の孫の欧陽恕が華州に赴任することになり、この送別の詩を作った。欧陽恕が授かったのは酒税を管理する仕事であった。欧陽恕は欧陽脩の次男の欧陽奕（早くに亡くなった）の子で、この詩は主に欧陽奕について詠んでいる。

ぶんちゅうこう おうようしゅう み
私が文忠公（欧陽脩）を観るに、
四人の息子はいずれも世間から超越しておられる。
なかでも次男（欧陽奕）は一寸もの径がある珠のようで、
夜を照らす月のような光を発していた。
詩を好み、まことに脱兎のような勢いで詠み上げ、
筆を下すと、鶴が急降下するよりも早くに文章ができあがった。
かの三国時代の英雄の周瑜と同じく、
音律をよく知り、議論もまた堂々としていた。
文章などはあくまでも余技で、
道を学んで奥深く探究したのだった。
痛ましいことに、
清らかな潁水の下流において、
白い鷗とともに姿を消してしまったのだが、

亡くなってからは、

ちょうはくさん あるじ

長白山の主となって、その名を仙宮に掲げられた。

いま喜び見るのは、三人の少年(欧陽奕には三人の息子がいた)が、

いずれも千里を走る名馬の骨相を具えていることだ。

三人にとって千里に到るのは難しいことではない、

ただ土の塊につまず躓かないようにしなければならない。

別れに臨んでことば苦い語を出したのだけれど、

これを書いて、いつでも見るようにしてもらいたい。

(1) この詩の半ばに、おうようえき 欧陽奕は死んで ちょうはくさん あるじ 長白山の主になったとある。長白山とは北朝鮮の名山、はくとうざん 白頭山である。蘇軾自身による次のような注が記されている。きねい 「熙寧の末に、私は欧陽奕と都の東で会った。欧陽奕は言った。『私は夢の中で、一人の道士から辞令を授かりました。そこには、上帝の命令として長白山の主にすると書いてありました。これはどういう きざし 祥なのでしょうか』。その翌年に欧陽奕は亡くなった」。熙寧の末に都の東で会ったというのは、14 年前、蘇軾が都の門の外に留められて中に入れなかったときのことである。蘇軾はこれまでも見てきたように、未来に起こることを夢に見るとかなり強く信じていたようだ。(2) 詩の終わりに「ことば 苦い語」とあるものの、欧陽恕に向かって具体的には何も言っていない。それでも、欧陽恕にしてみたら、父の欧陽奕、まして祖父の欧陽脩 おうようしゅう を持ち出されるだけで、十分過ぎるプレッシャーになるということなのだろう)

■十月十四日以病在告独酌

10月14日に病気で休みを取り、独りで酒を飲みつつこの詩を詠んだ。
病気は先に見た^{ひじ}臂の痛みなのか、秋から冬によくあるいつもの不調なのかはわからないが、いずれにしても病気を理由に公務を休んでいながら家で一杯やって、それを詩に詠むというのは、現代であればかなりの輦蹕ものだろう。当時としては、飲酒は病を癒す行為として普通に認められていたのだろう。もとより蘇軾は大酒飲みではないから、実際に薬効を得る程度であったのだろう。

^{みどり}翠の^{はく}柏は秋を知らない、
がらんとした庭に落ち葉はない。
このひま人は^よ嘉い木蔭を選び、
地面に座って独り酒を酌む。
月が澄んでゆるやかな顔を見せ、
ささやかな霧の気配が清々しい。
小児等は何もわからずに、
あの爺さんは楽しげにしていると語り合う。
^ろ爐で^{はく}柏の実を燃やし、石の鍋で山芋を煮て、
それを肴に一杯やって、
月と露を賞味すると、

万象があれやこれやと応じてくれる。

この人生はここで幸いを得たのか、

風にさまよう船が初めてともづな 纜を繋がれたかのようなのだ。

自分に誓うのは、

こう し 孔子に褒められながらも若死がんかいにした顔回のようにでもなく、

大盗賊でありながらも長生きをした盗跖とうせきのようにでもなく、

せきしょう し 赤松子や王喬と仙界おうきょうで遊ぶ約束を果たすことだ。

いつか気ままに大空で戯れたいと、

風がくるのをひたすら待つのを、

どうか嫌わないうてほしい。

心の内くうが空になったなら、

鶴に乗った仙客ふえが笙を吹きつつ迎えにきてくれるのだ。

((1) 柏はくはヒノキのような常緑樹を指し、日本語の柏かしわとは異なる。(2) 途中にある「此生独何幸、風纜欣初泊」(此この生せい 独ひとり何なんの 幸さいわいか、風纜ふうらん 初はじめ 泊はくするを欣よろこぶ)の句は、えい 穎州に来てからの蘇軾の思いを率直に表現したものだろう。都でつまらない攻撃にさらされ疲弊した心も、おうようしゅう 欧陽脩ゆかりの地に来て四君子と親しくすることでいささか安らぎを得られるようになったのだろう。(3) 終わりのある鶴に乗った仙人のイメージは、『後の赤壁の賦』(第6章327ページ)でも見ている)。

■独酌試藥玉滑盞有懷諸君子明日望夜月庭佳景不可失作詩招之

上の詩と同じ日の作品。詩題は「藥を飲むときに用いる盃（玉滑盞）で藥（酒？）を独りで飲んでいて、諸君子のことを懐い、明日は満月であるから月光のもと庭の佳景を失ってしまってはならない、という内容の詩を作って招いた」。

鉛を鎔かし白い石と煮て、
あたかも玉であるとして人を欺き、
削って磨いて酒杯を作り、
定州産の陶器に見せかける。
盃の中心は浅くて狭いけれど、
酒を満たすと鏡の面が広々とみなぎる。
この玉滑盞で佳き客人の長寿を祝いたいと思う。
手に取って辞退するなど許さないつもりだ。
かくありたいと思うのは漢代の于定国——
ひとたび飲むと数石を尽したけれど、
穏やかに落ち着いたままで、
公務もまことに公正にこなしたという。

玉滑盞の酒を無駄にしない客人は誰と誰であろうか。

趙令時君は皇族の子孫にして、風流をわきまえ、

詩酒においてしばしばすぐれたことをする。

趙令時君よ、陳師道君、ちん し どう 歐陽斐君、おうよう ひ 歐陽弁君、おうよう べん を詰問してほしい、

私の病氣見舞いにくるのが遅すぎるではないかと。

子供らに命じて月のもとの亭あずまやを掃除させ、

病から脱して良き時を迎えようと思う。

■歐陽季黙以油煙墨二丸見餉各長寸許戲作小詩

詩題は「おうよう べん 歐陽弁（字は季黙）からあざな き もく 油煙墨（ゆ えん ぼく 松の油煙の煤で作った墨）が二つ贈られてきた。それぞれ一寸ばかりである。戯れに小さな詩を作った」。上に見た詩で蘇軾に招かれた人々が10月の満月の夜に集まることは何らかの事情で実現しなかったようだ（月光のもとで応酬し合った詩が残っていない）。この詩にある油煙墨と次の詩にある魚は、蘇軾の誘いに応じられなかった詫びとして欧陽弁が贈ったのかもしれない。

書齋の窓についた灯火の煤を拾い集め、

仏堂の帳とばりについた香の煙の塵を掃き集める。

そうした労苦を千日も重ねて、この一寸の墨は造られたであろう。

私のような愚か者が畏れるのは、

何事もないままに老死し、草や木のように朽ち果てること。

実際にしていることはというと、

東の山の松をすっかり伐り取ってそれを墨に換え、
南の山の竹をすっかり伐り取ってそれに字で書き、
それでも足りないくらいだ。

墨は堅く、人ははなはだ脆い、
だから一寸ばかりの小ささであっても嘆くには及ばない。

書物に注解を書き込むにはこれで十分で、

かんだい どうほうさく
漢代の東方朔の真似をして、

三千枚もの公文書をお上に提出しようなどと考えなければよいのだ。

■明日復以大魚為饋重二十斤且求詩故復戲之

「上の詩の翌日、おうようべん 欧陽弁から今度は大きな魚が贈られ、重さが二十斤もあった。詩を求められたので、また戯れに作った」という題。

かん 漢の朝廷で九尺の人といえはどうほうさく 東方朔、

老いた私は少しも似ない。

東方朔は十二歳の冬にひたすら勉強に励んだのを自慢していた、
あの一寸ばかりの墨では、ひと冬の勉強にも足りないだろう。

おうよう 欧陽君もやはり墨が小さかったのを気にしていたのか、

恥を雪ごうと、この魚を贈ってくれた。

尾まで鱗がきらきらと輝いている。

しかしながら、

私は鯨にまたがって大海を自在に行こうとする男である、

このくらいではほんの小魚というほかはない。

■和趙景貺栽檜

趙令峙（字は景貺）が檜を植えて詩に詠んだので、それに和した。

汝陰（じょいん えい）には老いた檜が（ひのき）たくさんあって、

蒼い雲が群がるようなありさまをあちこちに見る。

隣り町の丹砂井（たん さ せい）には、枯れても蘇った檜があったといい、

近くの山では、一万年を経た大樹が青い牛に変じたという。

穎州の靈壇観（れいだん かん）にもやはり再生の檜があり、

左巻きにねじれた魁偉な姿をしている。

皇室の子孫の趙君（ちやう いしん）は古を尊ぶ心があり、

書室に清らかな香りを導き入れようと、

四本の檜の若木を植えた。

檜こそは凡庸な木々の群れに墮ちることがなく、

堂々の松柏（しょうはく）（針葉樹）の姿を具え、

なおかつ靈妙な薬草（かおり）の薫を含んでいる。

初めて植えられたときには鶴のように細く立っているだけであるが、

地下では竜のような根が張り廻らされてゆくのである。

しかし、根にうじゃうじゃと白蟻が巣くこともあり、

葉にごちゃごちゃと秋の虫がたかって網目のようにしてしまうこともある。

だから、植えた当初は細かく面倒を見てやらないといけない。

かくて皮が三寸の厚さにもなれば、

狐や鼠に害されることもないのである。

■与趙陳同過歐陽叔弼新治小齋戲作

しくん し ちょうれい じ ちん し どう おうよう ひ おうよう べん
四君子（趙令時、陳師道、歐陽棐、歐陽弁）とのなごやかな交流が続く。

歐陽棐が新たにこぢんまりとした書齋を作り、蘇軾は趙令時、陳師道とともに訪ね、この戯れの詩を詠んだ。

こう こ
江湖（都を離れた田舎）にあって、故郷は遥かに遠い。

わが家は風雨によって傾いてしまっているであろう。

東に出てからすでに三十年、

恥ずかしいことに、

一束の書物にも安住の場を与えてやることができない。

常に旅人として仮の宿りを渡り歩き、

ちつぽけな住まいすら持ったことがない。

だから、貴君がこの部屋を作ったのを羨まずにはいられない。

余裕をもって膝くらいなら容れられるし、

床を叩くと琴がかたがた揺れるし、

筆を動かすと窓に隙間ができて明るくなる。

昨日の夜の夢で、

竜神が雲を作ってくれて、夜明けに渠^{みぞ}を埋めるほどに雪が積もると見た。

夢から目覚めたところで、

ことごとく叩く音がし、誰が呼んでいるのだろうかと思ったら、

貴君^{ちやう}が趙君^{ちん}、陳君と私を招くというのであった。

かくてここに来てみたのだが、

添丁^{てんてい}(息子)は酒を買いに走り、

通徳^{つうとく}(女中)は野菜を摘みに畑に出ていて、

主孟^{しゅもう}(奥方)は我等に食べさせようと立派な魚を料理していて、

皆が何やらあたふたしている。

ともあれ、酔えば、もはや我が家がどうかこうかなどは忘れ去り、

此の身には竹の蓆^{むしろ}さえあれば十分と思えるのである。

((1) 中ほどに、雪の積もる夢を見たところのは、例によってまた不思議な夢のエピソードで、以下の幾つかの作品が関連するので、簡単に経緯をまとめておく。このところ

穎州^{えいしゅう}では長らく日照りが続いていた。雨乞いは州知事の大切な仕事で、穎州^{ちやうりゆうこう}に張 竜公

という竜神を祀った祠があって霊驗があるというので、蘇軾は雨を祈る文章を書いて、

陳師道^{ちん し どう}と息子の蘇迨^{そ たい}と自分の代理としてその祠に遣わし、雨を降らせてくれるよう願

った。それが 10 月 26 日である。その翌日、祠に祭られている「竜の骨」とされているものを西湖のほとりに持ってきて、仮の祠（行祠）で蘇軾は人々とともに雨を祈った。すると少しばかり空模様が変わった。蘇軾が雪の積もる夢を見たのは、その日の夜のことであった。翌日、趙令時、陳師道とともに欧陽棐の書齋を訪ね、上の詩を詠んだ。そして、夜に帰ってくるときには星がきらきらと輝いていたのだが、まだ枕についてそれほど経たないうちに雨が軒を鳴らす音がした。さらに、11 月 1 日に竜神の行祠でまた祈ると、小雪が舞った。その後でいつもの 5 人が次に見る聚星堂に集まって、竜神の威徳に皆で感嘆し合った。(2) 上の詩の終わりのあたりで、「添丁」「通徳」「主孟」とあるのは、それぞれに故事を踏まえて、息子、女中、奥方と直接的に言わずに風雅の趣を出したもの。いちいち説明を加えるのは、読む方も面倒であるだろう)

■聚星堂雪

穎州は欧陽脩の最後の隠棲地であるとともに、欧陽脩は三十代の終わりに知事としても一度来ていた。そのときに、綺羅星の如き賢人が集うという意味の聚星堂を造り、友人としばしばそこで酒宴を催した。その聚星堂において蘇軾はこの詩を詠んだ。序文がある。

元祐六年十一月一日、雨を竜神に禱ったところ、小雪が降ったので、客人と聚星堂に集まって酒宴を開いた。たちまち欧陽文忠公(欧陽脩)がこの知事であったときに雪の中で作った詩を思い出した。文忠公は体物の語(特定のものを形容する

常套句)を用いることを禁じて、難しい制約のもとで特にすぐれた意匠を出して詩を賦すということを客人と取り決めた。それから四十余年、それと同じことをする者はいない。私は文忠公の老いた門下生であり、文忠公の後を継いでここに来たのであるから、先生とはとても肩を並べられるような者ではないのだけれど、賓客のすばらしさはかつてとほとんど負けることはないし、文忠公の二子もまたたまたまこの地におられることであるから、かの前例に倣っておのおの一篇の詩を賦すこととした。

(1) 欧陽脩おうようしゅうが禁じた「たいぶつ体物の語」とは具体的には、玉、月、梨、梅、練、絮、白、舞、鵝、鶴、銀といった雪を詩に詠むときによく使われる語である。(2) ついでながら、しゅうせいどう欧陽脩としゅうせん し聚星堂に集まった客人のなかには、りゅうはん劉攽(第3章80ページなど)やしょうせん し焦千之(第9章60ページ)など蘇軾とも交流のあった者がいた)

この詩は、昔はよく知られた作品であったという。詩を詠む人は必ず参考にすべき価値があるとされたのだろう。しかし、我々にとっては興味を誘うような内容は特になく、昔の人でも、奇妙なことしてみせただけだと低く評価する向きもある。ここでは「たいぶつ体物の語」を使っていないことが明らかとなるよう原詩を掲げ、小川環樹注『蘇軾下』(1962年)にある読み下し文をそのまま写しておく。

窓前暗響鳴枯葉、(窓前 暗に響いて 枯葉を鳴らす)

竜公試手行初雪。(竜公 手を試みて 初雪を進行)

映空先集疑有無、(空に映じて 先ず集れるは 有無を疑い)

作態斜飛正愁絶。^{たい な なな ど まさ しゆうぜつ}(態を作して 斜めに飛べば 正に愁絶す)

衆賓起舞風竹乱。^{しゆうひん た ま ふうちく みだ}(衆賓 起って舞えば 風竹は乱れ)

老守先醉霜松折。^{ろうしゆ ま よ そうしゆう お}(老守 先ず酔うて 霜松の折るるがごとし)

恨無翠袖点横斜。^{うら すいしゆう おうしゃ てん な}(恨むらへは 翠袖の横斜に点する無きことを)

只有微燈照明滅。^{た びとう てら めいめつ あ}(只だ 微燈の照して明滅する有るのみ)

归来尚喜更鼓永。^{きらい な よるこ こうこ なが}(归来 尚お喜ぶ 更鼓の永きを)

晨起不待鈴索掣。^{しん き れいさく ひ ま ず}(晨起して 鈴索の掣くを待たぬ)

未嫌長夜作衣稜。^{いま いと ちやうや いりよう な}(未だ嫌わず 長夜の衣稜を作せることを)

卻怕初陽生眼纈。^{かえ おそ しやう がんけつ しやう}(卻って怕す 初陽の眼纈を生ずることを)

欲浮大白追余賞。^{たいはく つか よしゆう お ほつ}(大白を浮べて 余賞を追わんと欲すれば)

幸有回飊驚落屑。^{さいわ かいひやう らくせつ おどろ あ}(幸いに 回飊の落屑を驚かす有り)

模糊檜頂独多時。^{かいちやう も こ ひと た じ}(檜頂に模糊たるは 独り多時なり)

歷乱瓦溝裁一瞥。^{が こう れきらん わず いちべつ}(瓦溝に歴乱たるは 裁かに一瞥のみ)

汝南先賢有故事。^{じょなん せんけん こ じ あ}(汝南の先賢 故事有り)

醉翁詩話誰統説。^{すいおう し わ たれ ぞくせつ}(醉翁の詩話 誰か統説せん)

當時号令君聴取。^{とう じ ごうれい きみ ちやうしゆ}(当時の号令を 君 聴取せよ)

白戦不許持寸鉄。^{はくせん すんてつ じ ちゆう ず}(「白戦するに寸鉄を持するを許さず」)

(要するに、蘇軾の超絶的な語彙力をもって、雪を直接的に形容する語を一切使わずに雪の種々相を詠んでみせたものである。確かに自ら詩を作る人にとって参考にすべき価値があるのだろう。そうしたことを除くと、我々が何らかのメッセージを読みとれる

のは最後の4句だけで、その部分の現代語訳を付記しておく)

えい
 潁州にかつて賢人が集まったのは、
 いまや立派な先例として顧みられているのだが、
すい おう おうようしゅう
 醉翁(欧陽脩)の詩論を継ぐ者はない。

人々よ、聴くがよい、
 かのときの醉翁の号令を。
 「どんな小さな武器さえも持たずに、
 素手で戦うのだぞ」

(この号令は、正岡子規が月並み俳句を否定したのと同じココロであろうか)

■昭霊侯廟碑

竜神が雨を降らせてくれたので、蘇軾は竜神を讃える碑を建て、この文章を刻んだ。

しょうれい こうなん ようちようこう いみな ろ し
 昭霊侯南陽張公の諱は路斯である。

ずい 張公は隋朝の初めにえい 潁州のえいじょう 潁上県仁社村に生まれ、十六歳で科擧の明経科に合格し、どう 唐朝のけいりゅう 景竜年間にせんじょう 宣城県の知事となって、優れた能力があると賞賛された。妻はせき 石氏で、九人の息子がいた。

張公は宣城県知事を罷めて帰郷すると、いつもしょう し だい 焦氏台の北で釣りをしていた。あ

る日、ふと顧みると、釣りをしているところに立派な宮殿樓閣が建っていた。張公は中に入ってみて、しばしそこに留まった。それからというものは、張公は夜になると家を出て朝に帰ってくるようになり、帰ってくるときには体が冷たく濡れているのだった。妻が驚いて尋ねると、張公は言った。

「わしは竜である。夢の人の鄭祥遠もまた竜である。やつとわしはいまこの地を争っていて、明日、戦うことになっている。九人の息子の力を借りたいと思っている。赤い絹をまとっているのがわして、青い絹をまとっているのが鄭だ」

翌日、九人の息子は弓矢で青い方を射ち、命中した。鄭は怒って去り、張公はそれを逐った。竜が通り過ぎたところが溪谷となり、淮河にまで達した。青い竜は合淝の西山に入って死んだ。山には竜の開けた穴が生じていた。

九子の息子も皆が竜になり、妻の石氏は閩洲に葬られた。

張公の兄は馬歩使者になり、子孫は潁水の各所に住み、それぞれの墓が皆存在している。

以上のことは唐代の庶民である趙耕が文章に記し、淮河と潁水の間の父老が語り継ぎ、欧陽文忠公(欧陽脩)の『集古録』にも記述がある。

唐の景竜年間より潁州の人々は焦氏台に祠を作って張公を祀ってきた。唐の乾寧年間に、知事の王敬堯が始めてその廟を大きくした。宋の乾徳年間に蔡州がひどい日照りになったときに、知事の司超が張公の靈威を聞き、その祠を蔡州に築いたところ雨が降った。翰林学士承旨の陶穀がそのことを記録した。これより淮河の南の蔡州、許州、陳州、汝州の人々は皆が張公の祠に祈るようになった。

景徳年間(けいとく)に諫議大夫張秉(かんぎたいふちやうへい)は詔を奉じて潁水のほとりに新たに祠を建てた。さらに、
熙寧年間(きねい)に司封郎中(しほうろうちゆう)の張徽(ちやうき)が爵号を与えるよう朝廷に請い、張公(ちやうこう)は昭靈侯(しやうれいこう)に、
石氏(じゆうし)は柔応夫人(じゆうおうふじん)に封じられた。

廟には五つの穴があり、しばしば変異を見せ、雲を出して雨を降らせる。ある人が
器を穴に投げ入れたところ、池が存在していた。そして近年その池から竜の骨を得
た者があった。金の音(かね)がして玉(ぎよく)のような質感で、普通の重さではない。いま骨は廟
の中に所蔵されている。

元祐六年(げんゆう)の秋は日照りがひどく、州知事である竜図閣学士左朝奉郎(りゆうとかくし さちやうほうろう)の蘇軾(そ)はそ
の骨を西湖(せいこ)のほとりの仮の祠に迎え、人々とともに雨を禱(いの)った。それに応じること音
が響くかのようにであったので、ますますその廟を盛んにし、碑を建てて銘文を刻むこ
とにした。

((1) この後に韻文の銘が続くが、上に記されていること以上の内容はないので省略する。
(2) これで見ると、蘇軾は神の靈威を間違いなく信じていたのだろう。一方で、ほ
ぼ同じ時期に、八丈溝の開削はすべきではないという文章を書いて朝廷に提出してい
て、そちらではすこぶる合理的な判断を下している。民衆のために誠実に神に祈るのな
ら神がそれに応じてくれるというのは、水が高いところから低いところに流れるのと
同程度に理に適ったことであると、蘇軾は考えていたのだろう)

■木蘭花令

歐陽脩(おうようしゆう)が 40 年余り前に潁州知事(えい)であったときに西湖(せいこ)で詠んだ詞に次韻

した。欧陽脩のもとの詞は、真夏に催された送別の宴で舞う女性を讃えつつ、別れの情を詠んだもの。蘇軾のこの詞は、秋の終わりにしみじみと欧陽脩を追慕するものである。

霜余已失長淮闊。(霜の季節を経て(冬の渇水期)、長い淮河は広さを失っています)

空聽潺潺清潁咽。(清らかな潁水がざらざらと流れる音もあまり聞こえてきません)

佳人猶唱醉翁詞、(女性たちはいまなお醉翁(欧陽脩)の詞を歌っています)

四十三年入電抹。(四十三年は一瞬の稲光のようなもの)

草頭秋露流珠滑。(草の上の露が珠となって流れます)

三五盈盈還二八。(まるまるとした十五日の月、そして今日は十六日)

与余同是識翁人、(私と同じように醉翁を知っているのは誰なのでしょう)

惟有西湖波底月。(ただ西湖の波の底に見える月だけなのです)

■徐問真從欧陽公游

これまた欧陽脩を慕いつつ、「異人」を好む蘇軾らしさの出た文章。

道人の徐問真は自ら濰州の人であると言う。酒を嗜んでほしいままに狂い、葱や鮮魚を生のまま啖らう。指をもって針とし、土をもって薬とし、病を治して神のような験がある。

おうようぶんちゆうこう おうようしゅう せい

欧陽文忠公(欧陽脩)が青州知事であったとき、徐問真は公に従って遊び、しばらく過ぎた後に辞去した。

公が引退したと聞いて徐問真^{せい}は潁州に来了。公は徐問真を屋敷に住まわせ、息子二人に世話をさせた。公は以前から足を病んでいて、病状が少し悪くなったのを、やわらげることができずにいた。徐問真は、氣血^{かきと}を踵から頭の頂に汲引するよう教えた。公がその言を用いると、病はすぐに治った。

ある日、徐問真は突然出て行くことを強く求めた。公は引き留めたが、徐問真は「私には罪があります。私はこれより公卿^{こうけい}と遊ぶのです。もはや留まることはありません」と言って聞かなかった。公は人を付けて徐問真を送らせたところ、身の丈八尺ばかり、鉄の冠を頭に戴せた人が道に待っていた。徐問真は町を出ると、村の子供を雇って薬筒を持たせた。数里ほど行くと、子供はもう帰りたいと言った。徐問真は髪の中から棗^{なつめ}くらの大きさの瓢^{ひきご}を取り出し、掌の中で何度もひっくり返してから、子供の手の内に酒を注いだ。手にいっぱいになること二度、子供にそれを飲ませた。よい酒であった。これより徐問真がどこに行ったのかはわからない。その子供は後に頭がおかしくなり、その後どうなったのかやはりわからない。

私蘇軾はかつて潁州で公に会い、以上のことを具に聞いた。その後、私は黄州^{こう}に流されたときに、黄岡県知事の周孝孫^{しゅうこうそん}が俄かにふくらはぎを重く患った。私が徐問真の方法を授けると、七日で癒えた。

げんゆう おうよう ひ おうようべん

元祐六年十一月二日、私は欧陽棐、欧陽弁と夜にこのことを語り合った。はなはだ怪異なことであるので、あまり書くに気にはなれなかったのだが、徐問真はまこと

に異人なのであろう。

(気血を汲引するとは、実際にどのようなことをするのだろうか)

■欧陽叔弼見訪誦陶淵明事嘆其絶識叔弼既去感慨不已而賦此詩

詩題は「おうよう ひ あざな しゆくひつ 欧陽棐 (字は叔弼) が来てとうえんめい 陶淵明のことを語った。その卓絶した見識に私はしきりに感嘆した。欧陽棐が去ってからも感慨がおさまらず、この詩を賦した」。

とうえんめい
陶淵明が県令の職を求めたのは、

もともと食べるに困っていたからだ。

郡から役人が視察に来るから正装して出迎えるようにと、

陶淵明は言われると、

少しばかり腰を屈めたところで別段恥辱でも何でもないのに、

身を翻して『き きょらい 帰去来の辞』を賦して帰郷してしまった。

そのときに独り困窮するであろうことをおも念わなかったわけではないだろう。

五斗の米が大切であるからと、

口と腹を養うために腰を折るのをよしとはしなかったのだった。

とうだい げんさい
唐代の元載は宰相となって莫大な禄をもらいながら、

それだけでは欲心を満たすことができなかった。

こしょう 胡椒などというものはいくら多くても一銖か一両もあれば十分であるのに、

元載はなんと八百斛も蓄えていた、

いったい何に使うつもりだったのか。

そればかりか、宝玉を使って鳥を撃つようなばかばかしい行為をしたために、

結局その身を殺すこととなった(元載は自尽を命じられた)。

過去の事例を悔やんでも仕方がない。

いままさに自分の姿を照らして見つめなければならないのだ。

(陶淵明について語り合えば、^{こう}黄州の東の^{おか}坡で『^{き きょらい}帰去来の辞』を改作した詞を歌い、つづ
畑を耕していたころ(第6章264ページ)から遠く離れたところに来てしまったと、蘇軾
は苦い思いを抱かずにはいられなかったであろう)

■喜劉景文至

^{こう}杭州で親しくした人物に^{りゅう き そん}劉季孫(字は^{あざな}景文)(第9章14ページ以下)がいた。蘇軾は劉季孫を朝廷に推薦し、その結果、劉季孫は^{しつ}隰州知事に任命された。劉季孫が隰州に赴任する途中で^{しん}潁州に立ち寄ったので、蘇軾は喜び、この詩を詠んだ。

明け方に、子供らがかわるがわる、私を呼んだ。

髯の^{りゅう}劉君がもう町の南の隅にまで来ているというではないか。

短い手紙を見るなら、まことに髯の君の手だ。

身を起こし、手紙に眼を押し付け、本当かどうかを確かめる。

今の人は古の人のような事はしなくなったのだが、

今の世にも古の男のような人物がいる。

私はその男が来ると聞いてもう舞い踊るばかり、

体の不調もなんのその、飛び起きたのである。

長江から淮河のあたりは長らくの日照りで、

ひどい土埃が立っていた。

今朝は静かに雨が降り、

髪や髯を洗ってくれるような心地よさである。

貴君と会って手を握りあえば、もうそれだけで十分だ。

とはいえ、遙か千里の道を来たというのに、

一度笑い合うだけというの間が抜けているだろう。

私がかねてから楽しむ場所といえば呉会ごかいの地そ(蘇州から越州えつのあたり)、

老いて死ぬのも、葬られるところも杭州こうか蘇州でありたいと思っている。

ところが、長江を渡って私が北に来てもう二百日になり、

あちらの土地の娘さんたちは、私がここで冷落しているので、

寂しい思いをしていることだろう。

(杭州せいこ)の西湖に新たに作った堤も、錢塘せんとうの古い井戸も、

それぞれ恙つつがなくしているであろうか。

參寥泉さんりょうせんも六一泉ろくいちせんもきっと私のことを念おもっているだろう。

別れてから貴君が新たに作った詩は、

巧みにあちらの風光を写しているであろうから、
つまりは、貴君は袖の中に西湖を持ってきてくれているのだ。

(1) 蘇軾はよほど劉季孫りゅう き ぞんが気に入っていたのだろう、心の弾みが伝わってくる軽妙な詩である。(2) そしてよほど杭州こうのあたりが気に入っていたのだろう、そちらで死んで葬られたいとまで言っている。(3) 末の句の「袖中有錢塘湖」(袖中に錢塘湖有り)しゅう ちゅう せん とう こ あはすこぶる洒脱である)

■禱雨竜公既応劉景文有詩次韻

蘇軾が竜神に祈ったところ雨が降ったということを劉季孫りゅう き ぞん (字は景文あざな けいぶん)
に話すと、劉季孫が詩に詠んだのでそれに次韻した。

(詩中に詠まれている事柄は、先に見た「昭靈侯廟しょうれいこうびょうの碑」(本章96ページ)を参照)

張公ちやうこうはその晩年になって竜になったのか、
それとも、もともと竜だったのが人間世界に來たのか。
昔むかし、風と雲が会った瞬間に池の底に穴が開き、
張公は消え去ってしまった。

何事も誠実に努めれば実を結ぶであろうと、
張公の祠の前に一同の者が並び、
笛を吹いて舞を献上し、酒樽を並べて供えた。

張公は夫人かんしゅう ひの関洲妃のもとにいたのだが、

遠く焦氏台にまで出向いてくれて、

瓶を傾けて雨を降らせ、麦に積もった埃を洗い流してくれた。

張公は早魃を鎮めた功績を自慢することもなく、

雲に乗ってたちまち消え去った。

ああ、私と竜神とは心の用い方は同じなのではなからうか。

劉知事は胆烈をもって歴史に名高い太史慈のように、

その英気は東の地に冠たるものがあるから、

竜があたかも自身の友人であるかのように詩に歌った。

あちらの世界に帰った竜神も、

劉知事ならばと、笑って許してくれていることだろう。

■劉景文家蔵楽天身心問答三首戯書一絶其後

詩題は「劉季孫（字は景文）は、白楽天の『身心問答三首』の詩稿を所蔵している。戯れにその後ろに一絶句を記す」。陶淵明に、形、影、神の三者が問答をするという詩があることは第9章146ページで見ているが、それに触発されて白居易（白楽天）は心と身が問答し合う詩を作ったのである。

陶淵明は形も神もつまりは我（主観的な存在）であると言い、

白楽天は身も心もつまりは物（客観的な存在）であると言ったのであろう。

月の光を受けるなら、身と心と影の三人がそこにあり、
 はたまたいつかは幾千、幾万の仏になることやら。

(ベースにあるのが難解な哲学問答であるので、これはかなりの「ずっぱ訳」である。
 それでも、蘇軾の思考法を読み取ることはできるであろう。蘇軾は、二項対立的な議論
 には限界があると考えていて、この詩でも三から無限への飛躍を志向している)

■西湖戯作

えい 穎州の西湖にせい こ 船を浮かべて戯れに詠んだ詩。

昔からいうではないか、
よ 佳き一人の士は千金し じんをもってしても得がたいものだ。
 私には、なんとちん 陳君、ちやう 趙君、さらには二人のおうよう 欧陽君がいる。
さん かん かの山簡は鞭を挙げて、
 「私にはただ一人、この将軍がいる」
 と、言ったのだが、
 その言や、大いに笑うべしである。

(いつもの四君子人を讀えたというだけの詩。さんかん 山簡は晋の時代しんの、蘇軾も尊敬する人物
 で、かいきやう 葛強という将軍に絶大な信頼を置いていた。その故事をわざとまぜっかえしたの
 である)

■送欧陽季默赴闕

四君子（趙令時、陳師道、欧陽棐、欧陽弁）との楽しい日々も永続するものではなく、欧陽弁（字は季默）が都に行くことになり、この送別の詩を作った。

晋の時代に王述は息子の王坦之を愛して、

いつまでも膝の上に乗せて可愛がったのだが、

欧陽先生の父としての愛はそれ以上であった。

王坦之は江東にただこの人ありと讃えられるまでになり、

貴君（欧陽棐）はきっとそれに勝るのである。

父上の膝の上におられた貴君もいまや髯が白くなり、

貴君の姿に、私の眼はかの父上を見る。

潁州で貴君と遊ぶことわずかに三カ月、

私が来るのが遅すぎて、しかも貴君が去るのが早すぎるのだ。

霜を帯びた冬の風の激しさに、

木はすっかり葉を失い、

潁水の流れは澄んで浅くなり、

鷺は飛び立って行く。

酒を泉のように注ぐのを辞退しないでほしい、

もうすでに貴君の舟が新渡寺から離れてしまうような心持ちになっているのだ。

見れば、兄上は別れを惜しんで手を執り、

りゅう き ぞん

劉季孫君はいましむすばらしい詩を歌い出そうとしている。

貴君に酒蔵を管理するような仕事を与えるのは、

足弱の駄馬の後ろに天下の名馬を従わせるようなものであるのだが、

それは言うに足りないことだ。

さあ、行くがよい。

人の賢愚は遇不遇とは関係なのだ。

しん と じ えい

(新渡寺は潁州の町の外にあって、よく送別の場になったところであるらしい)

■用前韻作雪詩留景文

別れが続く。上の詩に詠み込まれていた劉季孫りゅう き ぞん（字は景文あざな けいぶん）も潁州えいを去ることになり、先の「聚星堂しゅうせいどうの雪」の詩（本章 93 ページ）の韻を用いて、劉季孫に留まるよう勧める詩を作った。

雪といえば……

こう

ばんしょうれい

ちうばい

杭州の万松嶺で、千の蠟梅の花が黄色になると、

貴君は毎年、雪を踏みつつ、酒を載せて見に行っていた。

貴君が去ってから後は来る人もなくなり、

花の心は断ち切られてしまっていることだろう。

雪といえば……

私は夜の書齋に座って雪の句を搜していた。

両手は亀の甲羅のようにひび割れ、

髯は凍って折れそうであった。

雪は無情の存在、

だから私を嘲弄する気はないだろうが、

簾を通して部屋に入り込んで燈を消してしまった。

雪はあれに似ているとかこれに似ているとか、

子供ように大騒ぎをして句をひねり出したところで、

大海原で鯨をびっくりさせるような詩ができるわけがない。

明け方になって、大空に天の川が流れるのを見たら、

私のちっぽけな詩などは実につまらない染物のようであった。

朝になると、二人の欧陽君、趙君、陳君がもう外に来ていたので、

急いで中庭の雪の上に木屑しいを鋪たのだった。

雪といえば……

人との交わりは、雪に耐える柏はくのように堅固でありたいもの。

それでも聚散離合は、風に吹かれる花を見るようなもの。

晴れた光に当たれば雪は融け、

あたりは一尺の泥となり、

雪はどこへと帰って行くのか。

貴君は馬に鉄の蹄を付けて泥を踏んで行くようなことをしないで、

泥がすっかり乾いて道がよくなってから、
ゆるゆると出て行けばよいのではないのかい。

■和劉景文見贈

りゅう き そん あざな けいぶん
劉季孫（字は景文）は蘇軾が引き留めるのに応じて出発を遅らせたのかどうかわからないが、2人の応酬の詩はなお2首が伝わっていて、そのうち1首を訳す。

ちんとう そうそう そんけん
三国時代の陳登は曹操も孫権も愚か者だと見下し、

天に聳え立つばかりの豪気は老いても衰えなかった。

貴君も陳登に負けるものではないが、

かん かんしん
漢の時代の韓信が、

はんかい
「わしも樊噲ごときと同列になってしまった」

と、苦笑したように、

しかるべき路を得ずにいる。

それでも、詩を作るなら、

けんあん
かの黄金時代の建安の初めのころの詩の趣がある。

雪が廬を白く埋めるなかで、私が独り臥せていたところ、

貴君が風塵に顔を黒くして来てくれた。

貴君をさらに留めようとするのは、

十日の間酒を飲み続けようというのではない、

世に失われた書物の話を聞かせてもらいたいのだ。

(人名が幾つか挙げられているが、説明がなくても全体の大意は十分に掴めるであろう)

■次前韻送劉景文

いよいよ別れの時がきて、先に見た劉季孫りゅう き せん (字は景文あざな けいぶん) の訪問を喜ぶ詩
(本章 102 ページ) に次韻して送別の詩を作った。次韻の名手である蘇軾の
面目躍如で、再会の喜びと別れの悲しさを同じ韻字を用いて流麗に歌い
上げた。

白い雲は天にあるもの——

呼べば来てくれるというものではない。

明るい月の光もまた同じ——

庭の片隅にいつまでも留まってくれるというものではない。

だから、不思議に思う——

貴君が西に向かって八百里の旅の途中でありながら、

何事もないかのように、ここで十日もの間、静かに座っていてくれたことを。

路傍で出会う人々は、

貴君が誰であるかを知らないままに、

千人の中にあっても凜凜^{りんりん}として抜きん出る佇まいから察して、
もっぱら「尚書様^{しょうしやう}」と呼ぶという。

貴君が本当は骨の髄まで詩と酒を愛し、
酔い潰れて美女に介抱されたいと思っているなどとは知らないのだ。
一篇の詩を賦すなら、

人に向かって己の内をそのまま写し出すので、

貴君の髯も髪も真っ白になったことは、

四海の内に自ずと知れわたっている。

私のところには、いま二人の欧陽君^{おうよう}もいれば、趙君^{ちやう}も陳君^{ちん}もいて、
まさか貴君までもがわざわざ立ち寄ってくれるとは思ってもいなかった。

しかも、三回も左遷の憂き目にあった柳君^{りゅう}までもが加わって、

何ももてなすもののない私と、

ただ心を熱くして語り合ってきたのである。

酒は薄いし肴はうまくないし、化粧映えのする美女もないけれど、

潁水^{えいすい}の清く美しい流れたけはある。

ひとたび風雨が寂しく吹き過ぎた後では、

月明かりのもとで吾が影とだけ向き合う私のことを、

果たして誰が思ってくれるのだろうか。

いつしか私は帰郷する船に乗って長江^{ちやうこう}を遡り、

甘棠湖^{かんとうこ}の水を汲んで春の酒に変え、

貴君と飲みかわしたいと思っている。

(1) 蘇軾自身の注で、「一頭の馬と、二人の従者を連れるだけの劉季孫りゅうきそんを旅館の人々は『尚書様』と呼んだ」とある。とりあえず「社長さん」と呼んでおけば客を喜ばすことができるのと同じようなことであろうが、劉季孫は実際に威風堂々としていたのだろう。(2) 蘇軾自身の注で、「潁州には歐陽棐えい、歐陽弁おうようひ、趙令時ちやうれいじ、陳師道ちんしどうがいて、さらに劉季孫も来た。そして数日もしないうちに柳戒之りゅうかいしも立ち寄ってくれた。賓客の盛んなこと近頃にないものであった。しかし、すぐに歐陽棐も劉季孫も柳戒之も去ってしまった」とある(先に送別の詩を見た歐陽弁は柳戒之が来る前に発ったのだろうか)。原詩では、柳戒之のことを「三黜さんちゆつの柳りゅう」(三回左遷された柳君)と表現しているのは、三度黜しろぞけられた柳下惠りゅうかへい(陶淵明も敬慕した古代に賢人)の故事になぞらえたもの。柳戒之のことは詳しくはわからないが、不遇であったのだろう。(3) 最後の部分は、劉季孫は第9章181ページで見たように引退後の住まいを九江きゅうこうに用意していたので、蘇軾も引退する際には、九江に程近い甘棠湖かんとうこにともに船を浮かべようというのである)

■以屏山贈歐陽叔弼

歐陽弁おうようべん(字は季默あざな きもく)に続いて歐陽棐おうようひ(字は叔弼あざな しゆくひつ)も都に行くことになり、蘇軾はこの詩を添えて屏山を贈った。屏山とは山の形をした石で、硯屏として用いる。硯屏は硯の脇に置いて、墨に埃が入るのを防ぐとともに、見て楽しむものである。

貴君は天より清らかな骨を与えられ、
 生まれながらに世俗と異なっている。
 道を学んで新たに得るところがありながらも、
 貧のためにいささかまた出仕することとなった。
 世間の紅い塵の中に身を置きながらも、
 いつも青い霞のもとに立つ志(脱俗の心)を保っている。
 この屏山びょうざんを貴君に贈るので、
 官位の飾り物などは近づけないようにしてくれたまえ。
 ふと目をやるなら、
 千山せんが紫翠しすいの間にあるありさまが見え、
 本当に睡ねむるのではなくて、安らかな眠りの内へと入って行けて、
 夢に鶴と化し、松の高く聳える寺へと飛んで行くことであらう。

(蘇軾こうは杭州を去るに当たって石を贈られている(第9章206ページ)。その石をここで贈ったというわけではないだろうけれど、蘇軾はしばしば石を贈答し合っている。また、第3章118ページで、欧陽脩おうようしゅうが所蔵する石屏せきびょうを詩に詠んでいた。その石屏も用途としては同じであったのだろうか)

■新渡寺席上次趙景貺陳履常韻送欧陽叔弼比來諸君唱和叔弼但袖手傍睨而已臨別忽出一篇頗有淵明風致坐皆驚嘆

詩題は「潁州えいしんとじの新渡寺で、趙令時ちやうれいじ、陳師道ちんしどうが欧陽棐おうようひ（字は叔弼）を送る

詩を詠んだ。欧陽棐はこれまで他の人々が詩を唱和してもいつも手を袖に入れて傍観しているだけであつたが、別れに臨んで忽然と一篇の詩を出した。それは陶淵明の^{とうえんめい}趣^{おもむき}があるもので、一座の者が驚嘆した」。蘇軾がいくら勧めても欧陽兄弟が詩を詠まなかつたことは前に見ている。

牛を捌^{さば}く名人はもはや牛全体を見ることなく、
真に美しい女性は顔半分を化粧するだけでもよい。
やたらに包丁を取り換えるのは腕の鈍い料理人、
おやみと人に笑みを売るのは悍^{たけだけ}しく醜い女である。
ふだんは矢を数えることしかやらせてもらえなかつた魏舒^{ぎじょ}は、
実は鼻の先に付いたごみを射落とす腕前の持ち主であつた。
詩文に何の用があるかという、
道を究める途中にある宿のようなものだ。
多くを言いすぎるとしばしば窮地に陥り、
微かな言葉が的^{てき}中して困難を排することもある。
貴君の詩はまさに、明け方に^{きやきや}蓼^{れう}蓼^{れう}と吹き出す清々しい風。
どうしてこれまで長く隠していたのか。
ただ綺やかであるだけの語を嫌^{きら}ったからなのだろう。
だとすれば、
かの賭博の大先生が「一発当てれば百万銭だ」と絶叫したのと同じように、

私が大風呂敷の詩をかなりたてるのを、

貴君は隣りの家にて聞いて、

さぞやこれまでの長い間、

おろ癪かさを笑いつつため息をついていたのであろう。

いま太平の御代の朝廷は多士濟々で、

ひとかどの人物は皆、立派な冠をかぶっている。

貴君もこれからは、遙か遠く隔たった天の川で遊ぶ人となり、

私はなおこえいすい潁水で独り釣りをするだけの日々を送るのだ。

たとえ魚を得ても食べる気にはもうならないだろう。

昔話ではないけれど、

魚の腹中から手紙を得て初めて愁いをとくことができるであらう。

そこには清く円やかな句があって、

銅丸を弓で飛ばすように、我が心の急所を撃ち抜くのだ。

たとえ愁いが凍り付いてしまっても、

たちまち笑いととも春がきてそれは融けるであらう。

もし百篇の詩を私に寄せてくれるなら、

日々に吟唱すること三年にして真の儒者になれるであらう。

■醉翁亭記書後跋

おうようしゅう えい 歐陽脩はじょう潁州知事になる前、39 歳ときにすいおうてい滁州に流され、「醉翁亭の記」

を書き（第6章343ページ）、石に刻んだ。それから50年近くが経って、石を刻み直したいとの地元の要望を受けて蘇軾が筆を執り、「醉翁亭の記」を書いた。その跋文。

欧陽脩先生は慶暦八年三月己未に「醉翁亭の記」を亭のほどりの石に刻んだ。

しかし、字画がはなはだ浅くて、遠く後の世に伝わらないことを恐れ、滁州の人々
は大きな字で刻み直したいと長らく思っていた。

元祐六年、私が穎州に来たときのこと、劉季孫が高郵から滁州に立ち寄った。滁州知事の王詔は、滁州の人々の思いをもって私に書いてもらえないだろうかとおうしと劉季孫に頼んだ。私は欧陽先生の門下生として辞退するわけにはいかず、これを記した。

十一月乙未

（劉季孫が滁州と穎州を繋ぐ伝令役となったのである）

■小飲西湖懷欧陽叔弼兄弟贈趙景旼陳履常

詩題は「西湖で少しばかり飲み、欧陽棐、欧陽弁の兄弟を懷い、趙令時
（字は景旼）と陳師道（字は履常）に贈った」。欧陽兄弟が去ってから蘇軾は寂しい思いをしていたのだろう。

歳の暮れともなると、

眼に触れるものは自ずとせわしなくなる。

私一人だけが閑^{ひま}にしている、

ゆるゆると觴^{さかずき}を傾け、

酔って日暮れ^{せいこ}の西湖を歩く。

北側の岸边はどこまでも長く、

若い者やら老いた者やらがそこらに座っている。

私は意^{こころ}に任せて川も岡も越えて行く。

しばらく前からすでに薺^{なずな}や麦が青くなっていて、

近頃では嬉しいことに榆や柳の芽が黄ばんできている。

あたり一面で春の気が益^{おうおう}益として動き出そうとしているのだ。

激^{れんれん}激として立つさざ波とともに夜が訪れると、

水と天が一つになった中に鷗や鷺がじっと静まり、

月の光が露とともに下って松や檜がほのかな香りを立てる。

こうした景色を眺めるうちに夜は深まり、

人を懐^{おも}う寂しさがじんわり募ってくる。

私とて相手をしてくれる者が一人もないわけではないけれど、

しきりと欧陽^{おうよう}兄弟のことが念^{おも}われてならない。

私の意^{こころ}はまさしく山の鹿、

欧陽兄弟の才はまさしく美しい宝玉である。

出会いは再びあるとは限らない、

その歓びは忘れてはならないものであるのだ。

(1) 久しぶりに自分のことを鹿であると歌っている。(2) 終わりの句は「此会不可再、此歡不可忘」(此の会 再びはす可からず、此の歡 忘る可からず) とある。「此の会」「此の歡」とは、いま西湖でのことを歌っているかのようなのであるが、実は「四君子」が揃っていたときのことを指しているのだろう)

■ 蠟梅一首贈趙景貺

ろうばい
蠟梅の詩を詠んで ちょうれい じ あざな けいきょう
に贈った。「陳師道に贈る」と記す本もある。なお蠟梅の名称は、蘇軾や黄庭堅が詩に詠んで定まったという。

たぐみ ヨーグルト
天の工は 酥を点々と散らして梅の花を作った。

ろうばい
蠟梅なるものは、老いた禅僧の家に生じたのが初めてである。

蜜蜂は、花から採取して黄色い蠟(蜂蜜)を作る、

その黄色い蠟を取って花にしたのがこれである。

天の工の縦横の変化は誰も知り尽くすことができない。

私ができるのは、せいぜい子供の遊びのようなちっぽけな詩を作ること。

見るがよい、

せい こ ばんしやうれい
西湖の万松嶺の上に千の黄色が重なるありさまを。

しべ しん
蕊も芯もまことに奇絶である。

私は酔いのなかで、
 いつの間にやら千の山を超え、
 闇に蠟梅の香りを聞き、
 そこではっと酔いから醒めた。
 夢から帰り、再び夢に花を尋ねなおすと、
 花の仙から良い句を求められた。
 このような風流は本物の詩人に属することであるから、
 あとは貴君に任せたいと思う。
 貴君が呉^こに行き、私が越^{えつ}に行くようになったら、
 笑って西湖を指さして、そっくりそれを貴君に引き継がせるであろう。

((1) 杭州^{こう}の万松嶺^{ばんしょうれい}に蠟梅^{ろうばい}が咲くことは本章 108 ページで見ている。(2) 杭州^{こう}の風光
 を愛^{ちやうれい}でることを趙令時^{ちやうれい じ}に引き継がせようというのだから、よほど気に入っていたのだ
 ろう)

■送王竦朝散赴闕

王竦^{おうしやう}（詩題にある「朝散^{ちやうさん}」は名目上の官職の名）が上京するのを見送った詩。
 蘇軾自身の注によると、かつて伯父の蘇渙^{そ かん}が衡州知事であったときに王
 竦のために送別の詩を詠んだことがあるという。

我が家の衡山公^{こうざん こう}（蘇渙^{そ かん}）は清廉の士で、

人に知られるのを畏れた。

良いとか悪いとか口から出すことがなく、

黙ったまま、何事も先を見通していた。

両手に余る人々のなかから特に貴君を抜擢して、

名馬の姿を具えていると詩に詠んだ。

ところがどうしたことか、

それから三十年が経って、

なおも貴君は窮苦の詞を作っている。

立派な人は^{みだ}妄りに^{ことば}語を吐かないという。

私はいまだにできていないけれど、

これは疑いようのないことである。

ここ^{えいすい}清らかな潁水のほとりで、

我が伯父のかつての詩を読むと、

涙がこぼれてならない。

貴君は私より一年上なだけであるのに、

十年も衰えたかのようではないか。

同じ時代を生き抜いて来た人はいま何人残っているのか。

髯が白くなったくらいことは怨むべきではないだろう。

さあ、雪や霜のような純白の節義を永く保とうと、

松を指さして、誓おうではないか。

■閻立本職貢図

とうだい 唐代の画の名手、えんりつほん 閻立本（第2章2ページなど）が描いた「しよくこうず 職貢図」（唐の太
そう 宗のもとに諸国から貢納に来た人々を描いた図）を模写したものを見て、この詩
 を詠んだ。

えんりつほん（閻立本の作とされる「しよくこうず 職貢図」が、現在、台湾の故宫博物館にある。蘇軾が見たの
 はそれを模写したものであったのだろうか）

じやうがん 貞観の頃の皇帝の徳は、
 大海があらゆる河川を呑み込むかのように、
 万邦から人々を来朝させた。
 海も山も横切り、波も滝も超えて来た人々は、
 その話すありさまを聞けば卑しく乱暴であり、
 その服飾を見れば奇妙に多種多様であった。
 珍奇な鳥獣やら怪異な物産やらを争って牽いてきて、
 王と称する人でもざんばら髪で、幌もない車に乗っていた。
えんりつほん 閻立本の遺墨の粉本（模写）を明るい窓辺で開き、
 私はいなり声を上げ、立ったまま心の落ち着きを失ってしまった。
 太宗に向かって、
 天下を取るよりもが治める方が難しいと、ぎ ちやう 魏徴が言ったとき、

それは青臭い書生の議論であると、封徳彝^{ほうとく い}は言い放った。

まことに残念なのは、

封徳彝はいつでもいるが、魏徴はそうではないことだ。

(1) 唐の太宗^{とう たいそう}の頃の隆盛を、蘇軾は必ずしも礼賛するものではなかったようだ。諸外国に対して軍事的に優位に立つには、それ相応の代償を払わなければならないというのを現実の政治において見ているからであろう。(2) 魏徴^{ぎ ちょう}は皇帝を強く諫めるのを、封徳彝^{ほうとく い}は皇帝の意を迎えるのを常とした。両者がいるから太宗治政下の隆盛があったので、蘇軾が「心の落ち着きを失った」理由は明らかであろう)

■次韻王滁州見寄

滁州知事の王詔^{じょ おうしょう}から詩が送られてきたのでそれに次韻した。王詔^{おうしょう}に依頼されて欧陽脩^{おうようしゅう}の「醉翁亭の記」^{すいおうてい}を書いたことは本章 117 ページで見ている。

この人^{ほうとく い}(王詔)は何に似るのか。

春の雨だろうか。

農夫は春の雨の恵みに歌って舞い、

旅行く人は春の雨によって道がぬかるむのを怨む。

見るがよい、王禹偁^{おう いう しょう}と欧陽脩^{おうようしゅう}を。

ともに思うように進むことのできない一生で、

がやがやとうるさい批判に遭い続けた。

二人が^{じゅう}滁州に流されたときはまだ白髪もなく、

朝廷では飛ぶような速さで筆を執っていたのだった。

二人は滁州の人々に詩を吟詠することを教え、

今に至っても、肥えた馬に乗って遊ぶだけの者を嘲ける気風が伝わっている。

貴君は代々高位高官を輩出する家に生まれたのだが、

貴君だけは溪山に来て坐して^{うそぶ}嘯っている。

浮ついた利などは、笑って、鶏の一本の小骨のように見なし、

清らかな名声こそが、熊の^{てのひら}掌のような極上の御馳走と見ているのである。

立派な人物は自重し、やたらに己が売れたりしないのを貴ぶ。

まさにそのようであった王禹偁と欧陽脩は、

いまや山のように永遠の存在となっているではないか。

その後滁州知事となった人(王詔)もさらなる風流人物で、

先人に倣って詩のために瘦せようとしている。

私は宮廷にいることに倦み、出ることをねんごろに求め、

^{ろくいる こ じ}六一居士(欧陽脩)の遺蹤を到るところで^{いしやう}尋ねている。

貴君を^{たよ}憑りに^{ちやうやさん}瑯邪山(^{さいおうてい}醉翁亭のある山)を訪ねたいと思う、

貴君であるなら、私の来遊に難色を示したりしないだろう。

((1) 王禹偁については5章268ページ、第6章75ページなどで見ている。(2) 王

^{しょう}詔はこの文章にあるように名家の出身で、科挙によらずに官職に就き、批判を受けて

じょ
滁州に左遷されたようだ。滁州はなぜか左遷の地とされていた。後に、蘇軾とのこのとき交流が問題視されて、王韶は朝廷を追われる)

■趙景貺以詩求東齋榜銘昨日聞都下寄酒來戲和其韻求分一壺作潤筆也

詩題は、「趙令時（字は景貺）が、家の東側にある書齋の銘を書いてほしいと、詩で依頼してきた。昨日、都から趙令時のもとに酒が贈られてきたと聞いたので、潤筆料として酒一壺を分けてくれるのならと、戯れにもとの詩に和した」。

皇族の子孫の貴君は天から下った麒麟きりんであろうか。

ひとみ
眸子は、奥深くに清らかな光を湛え、

財布はからっぽで、学殖はますます豊か、

家はおんぼろで、人としてはますます傑出する。

私は老いて書く字は奔放さを増し、

筆を降ろそうとすると、座中の人があわてて止める。

東の書齋の銘を書いてほしいのなら、

せいこ
西湖の雪に向き合って一杯飲ましてもらってからだ。

そちらにはたくさんの酒があると聞いているのに、

少しもこちらによこさないものだから、

用意していた硯の水がからからに乾いて、

石がもう裂けてしまいそうだ。

言っておくが、

かの淳于髡^{じゅん う こん}は十斗を飲んでようやく満足したというけれど、

私はそこまでの大酒飲みではない。

((1) 趙令時^{ちやうれい じ}は余程心を許せる相手であったのだろう、楽しい詩である。(2) 詩の最初^{き りん}にある麒麟は我々が動物園で見るキリンではなく、想像上の神聖な動物である。ここで趙令時を麒麟に譬えていることが伏線となって、後に見る文章が書かれることになる)

■題張安道詩後

蘇軾のもとに訃報が届いた。12月2日、大恩人の張方平^{ちやうほう へい あざな あんどう}(字は安道)が南京^{なんけい おうてん ふ}応天府で亡くなったのだった。それを悲しみ、張方平が11年前に詠んだ詩を記して、この短文を書いた。

因嗟萍梗才名客、(ああ、浮草のような、この才能ある人よ)

自嘆匏瓜老病身。(役立たずの、この老病の身を嘆(ば)かりだ)

一榻從茲還倚壁、(壁によりそって椅子に座ったまま)

不知重掃待何人。(いったい誰と話をしたらよいのか)

元豊三年、弟の蘇轍^{げん ぼう いん}は筠州^{ちやうほう へい}に流された。張方平は蘇轍との別れに臨んで、この詩を口に唱えつつ涙を流した。張方平はかつて人の前で涙を流すことはなかった。

げん ほう

なん けい おう てん ふ

元祐六年十二月、張方平は南京応天府で亡くなった。まさに亡くなろうとするとき
に、後の事を問うと、ただ息を吐きながら我が兄弟のことを言われた。

せん ふく ぜん いん

この月の十一日、哀しみを薦福禅院に挙げ、この詩を書いて院中に留めた。

ちやう ほう へい

こう

いん

(1) 張方平の詩は、蘇軾が黄州に、蘇轍が筠州に流された時期のもの。それより前に蘇軾が湖州で逮捕されてからは、蘇軾の家族は張方平のもとに預けられた。蘇軾の処分が決まると、蘇軾は息子とともに黄州に向かい、蘇轍が陳州に行つて兄に会い(第6章7ページ)、その後すぐに張方平のもとに戻つて蘇軾の家族を連れて筠州に向かった。兄弟にとって最大の危難のときであつた。(2) この短文と同じ時期に、蘇軾は祭文を書いて張方平の霊に捧げている。張方平の祭文は後に二度記している)

■張文定公墓誌銘

げん ほう

ちやう ほう へい そう じやう けん えい あん きやう じん こう り

この翌年元祐7年8月9日、張方平は宋城県永安郷仁孝里に埋葬され、その子の張恕の依頼に応じて蘇軾は墓誌銘を記した。

ちやう じょ

(蘇軾は当代随一の名文家であつたが、依頼を受けて執筆した墓誌銘はそれほど多くない。いまに伝わる墓誌銘は13編で、大半が個人的な関係で書いたもので、政界で活躍した人物としては、張方平、范鎮(第9章38ページ)、滕甫(第9章152ページ)の3篇があるだけで、それぞれ元祐7年、元祐4年、元祐7年の作で、同じころに集中している。墓誌銘に準ずるものとして神道碑があり、司馬光(第8章64ページ)、趙抃(第7章80ページ)、富弼(第8章109ページ)、趙概の4篇がある。なお、滕甫の墓誌銘と趙概の神道碑は張方平の依頼で代筆したものである)

ふ ひつ

ちやう がい

ちやう べん

仁宗皇帝じんそうは在位期間の四十二年間に、天下の豪傑を搜し集め、その数は多数にのぼった。それらの人々を自分の身体の脇に扱い、敬ってその言説を用い、太平の世を築いた。その上、重責を長く任せられる者は三世の子孫、百年の用に役立たせるために留め置き、朝廷はいまに至るもそうした人々を頼りこうしとしている。孔子は「天下は大きく、ただ堯ぎょう(古代の聖天子)だけが治めることができた」と言ったが、仁宗皇帝はまさに堯のような人であった。天下には必ず立派な士しがいるのであって、仁宗の世に特別に多かったのは、仁宗の偉大さの表れである。

漢かんの時代に賈誼かぎは、陰悪な人が多く徳が衰えたことを嘆き、吉祥を知らせる鳳鳥が天から下ってくることがなく、泥の世に大きな船が浮かべられないことを知って、己が世に受け入れられない時代に生きていることを傷んだ。このことについて私はかつて、天下は大きな器であって、万人の力を合わせ持つような人でなければ、その器を支え挙げることはできないと論じた。仁宗皇帝の偉大さをもってしなければ、万人の豪傑を我がもとに容れることはできず、天下を治めることもできなかったのである。

仁宗皇帝は即位からわずか八年で、制科せい か(科举以外の特別試験)で士を採用することを始め、一回目に富弼ふ ひつを得て、二回目に公ちやうほうへい(張方平)を得たのだった。

公ちやうの姓は張氏、諱いみなは方平、字ほうへいは安道あざなである。先祖は宋州の人で、後に揚州に移った。高祖ちやうかつは張克、唐朝どうの末に亳州知事はくとなった。曾祖父ちやうぶんは張文熙、亳州軍事推官そになり、蘇氏ちやうきやうを娶った。祖父は張嶠たいそう、科举に及第し、太宗皇帝の前に召され

たことがあり、鄆州知事となり、劉氏を娶った。父は張堯卿、生まれてから寡黙で、俗世を離れたいとの思いがあったが、父の命によって勉めて娶った。父が亡くなると、一室の内に居て、家人の顔を見ないこと十七年に及んだ。嵇氏を娶った。公は十三歳で応天府の学校に入り、群を抜いて穎悟であった。家が貧しかったために書物がなく、人から借りて『史記』『漢書』『後漢書』を読み、十日ほどで返し、「私はこれらを 詳 にしました」と言った。公は、書物というものは、一度見たならば再び読むことはなかった。また、文章を書くときに草稿を作ることがなかった。宋綬、蔡齊はこれを見て、「天下の奇材である」と言った。范諷等が特別な才能の持ち主であるとして特に朝廷に推薦した。

景祐元年に校書郎を授けられ、昆山県の知事となった。このときに蘇州知事であった蔣堂が公の著した『芻蕘論』五十篇を朝廷に差し出して、「賢良方正能直言極諫」に公を推薦し、(制科の試験を受けて)優等となり、著作佐郎に遷って、睦州の副知事となった。

……(以下、政界における事績が詳細に記される)……

公は、自身が老いてお上に報いることができないことを知って、政事についてますます切に論じた。特に兵事や裁判について反復して深く論じた。公は「老臣はまもなく死にます。地下において先帝にまみえたときに、御報告できるようにしなければならぬのです」と言い、陛下は感動された。

公は老をもって退くことを再三願い、……元祐六年十二月二日に薨じた。享年八十五であった。……公は晩年は樂全居士と号し、『樂全集』四十卷、『玉堂集』二

十卷、『ちゅうじん そうがくしょ註仁宗樂書』一卷がある。しん そう神宗皇帝はかつて親しく「卿の文章は典雅にして、かんぜん煥然として三代の風がある。これを規範として加えるべきものはなく、漢代の名文家も及ぶものではない」と記した。

交わるところの者はんちゅうえんに范仲淹、ご いく呉育、そう き宋祁の三人がいて、皆が公を敬い、「動かざること山の如しとは張方平である」と言った。

私軾の父と交遊があつて、古今の治乱をおよび歴史上の人物について論じ合い、はからずして意見が一致した。軾と弟の轍はその門下から出たのである。

私軾はかつて公の文を次のように論じた。

さんごく三国時代のこうゆう孔融は志が大きく議論は高遠であつた。当時の世において著しい功績が現れることはなかったのだが、それでも英偉豪傑の気は一時代の手本となり、せいけん孔融がちりょ盛憲やちりょ郗慮の人物を論じた文章は激しく高ぶる大丈夫の風儀があつた。

同じ時代しよかつりようの諸葛亮は文章をもって名をあらわ顕したのではなかったが、万物の理に通じて事を成就させるありさまと、理論と實際を深く知り抜いた洞察力は自ずから言葉となって現れ出た。諸葛亮が書いた『出師の表』は簡明でありながら意を尽し、率直であつても放縱にはならず、実に偉大な言論文で、太古の『伊訓』、『説命』に並ぶ名文で、しん秦やかん漢以降の君主の歡心を得ようとして仕えた者が全く及ぶところのものではなかった。

私が常々残念でならないとしているのは、孔融と諸葛亮の文章を完全な形で読めないことだ。

現代の楽全先生はほとんどこの二人に近いのではないだろうか。

嗚呼、士として天下の重みを自らのこととして任ずる者がいなくなってすでに久しい。議論が不得手なのではない。政事や文学について機敏に応じないわけでも、該博な知識を持っていないわけでもない。大きな事に臨んだときにも、根本を忘れず、己の日ごろの言説を失ってしまうことのない者が少ないのだ。つまりいまの士は器量が小さいのである。

楽全先生はまだ普通の庶民であったときから、我が身を成長させて国家の仕事を補おうとの望みがあった。若くて出仕し、老いて帰隱するに至るまで、言葉を使って時の流れに乗じたり、人に媚びたりすることは決してなく、君主に対するときにも、よく考えて後に発言した。評判は常に一定で、利害に左右されることがなく、まことに孔子がいうところの「道をもって君に仕える大臣」である。孔子から時代が遠く離れ、道が曖昧となり、志のある士、あるいは仁を具えた人であっても、少しでも低い地位に置かれると、高く用いられることばかりを望んでしまうのだが、楽全先生だけは一人邁進する気概に溢れ、公明正大な言論を行ってきた。これもまたまことに孔子のいうところの「用いられるのなら道を行い、用いられないのなら世間から隠れて道を楽しむ」というものである。上に対しては、君主と合致することを求めはしなかったのも、貴ばれつつも用いられず、用いられても十分に力を発揮できなかった。下に対しても、士大夫と合致することを求めなかったのも、楽全先生のことを悦ぶ人は少なく、悦ばない人が多かった。しかし、究極的に天下の偉大な人を挙げるとな

ると、必ず楽全先生が第一であるとされているのだ。

世は軾の言はよく公を知るものであるとした。

公が諫官であったときに、劉夔^{りゅうき}、王質^{おうしつ}を自分の後任として推薦すると、二人はその日のうちに拔擢された。貝州で兵士が反乱を起したときに、皇帝は公を出陣させようとしたが、公は自分の代わり^{めいこう}に明鎬を推薦し、明鎬は即座に將軍となり、貝州は平定された。

熙寧年間^{きねい}に軾は陳州^{ちん}で公に会った。その前に、宰相の曾公亮^{そうこうりょう}は軾に「私は張公の知遇を受け、私がいまこの地位にあるのは張公の恩によるものです」と言っていた。そのことについて軾が公に問うと、公はしばし悵然^{ちやうぜん}として言った。「私は密かに曾公亮を推薦したのです。それは誰も知らないはずです。まさか仁宗皇帝がお話されたのであろうか」。

軾はこれらのことから、公は世間からは必ずしも理解されないことがあったけれども、皇帝はこれほどまでに信頼していたのだと知ったのである。

公は本性として道^{みち}と合し、仏教と老子の妙所を得ていた。亡くなられた日も普段通りに凜然^{りんぜん}と過ごされ、北窓に星が隕^おち、薨じられた。赤い気が寝台から昇り、家の人々は驚いて見上げた。

元祐七年八月九日、宋城県永安郷仁孝里^{そうじゅうけんえいあんきやうじんこうり}に葬^{ちやうじよ}られた。その子の張恕^{ちやうじよ}が王鞏^{おうきやう}の手紙を通じて私に墓誌銘を求めた。

……(以下、銘文が続く)

(1) 幾人もの人名が挙げられているのは、いずれも当時の著名人である。(2) 蘇軾の

父の蘇洵^{そ じゆん}は、都から遠く離れた眉州^びに住む無名人であったが、それまでに書き溜めていたものを、成都^{せい と}に來た張方平^{ちやうほうへい}に見せたことがきっかけで、都にもその名が知られるようになった(第1章61ページ)。張方平は蘇軾父子にとって大恩人なのである。(3) 蘇軾が張方平の文章について論じたものは、全文を第8章180ページで見ている。蘇軾は常に張方平を激賞している。しかし、世間の評判は必ずしもそれほど高いものではなく、後世の評価も、張方平を敬ったとここに記されている范仲淹^{はんちゆうえん}、吳育^{ご いく}、宋祁^{そう き}の3人と比べてより高いとされることは残念ながらない)

■書孟德伝後

弟の蘇轍^{もうとく}が孟德という人物の伝記を書き、その後ろに兄がこの文章を書き添えた。執筆の時期ははっきりとは知られていない。最も遅くてこの年、早ければ十数年前ではなかろうかと推測されている。わずかではあるが張方平^{ちやうほうへい}と関わるところがあるので、ここで読んでおきたい。

(蘇軾の文を見る前に、弟が書いた孟德^{もうとく}の伝記を読んでおこう。蘇轍が書いた人物伝は3篇あり、そのうち『丐者趙生伝^{かいしやちやうせいでん}』は第6章424ページで見えていて、さらにもう1篇を次の章で見ることになる)

蘇轍^{もうとくでん}：『孟德伝』

孟德^{もうとく}は神勇軍団の退役兵である。若いときから山林を好んでいた。しかし、兵士になったために、本来の志とは違ってしまった。

嘉祐年間(仁宗皇帝の時代の終わりごろ)に秦州(西北の国境地帯)の守備に就いた。秦州に

は名山が多い。孟徳はここで妻を離縁し、子供を人に与えた上で、華山の麓へと逃げた。

着ていた衣を、一本の刀および十枚の餅と交換し、それらを携えて山に入った。

そのとき、孟徳はこのように思った。

「自分は皇帝陛下の兵士でありながら逃げてここに来てしまった。擒えられれば死が待っている。食べるものがなくなれば死が待っている。虎や狼や毒蛇に触れても死ぬ。この三つのどの死に遭っても、自分は悔やまないぞ」

ひたすら山の奥深くへと行き、食べていた餅がなくなったので、草の根や木の実を取って食べた。一日に十回も吐いたり、下痢をしたり、腹が膨れ上がった、あらゆる病気になり、十回愈えたりするうちに、数カ月もするとどれも五穀のように安らかに食べられるようになった。こうして山に入って二年の間、飢えることはなかった。

また、猛獣にもたびたび遭ったのだが、死ぬことはなかった。

孟徳はこのように言った。

「およそ猛獣の類は人の気配を察知します。まだ百歩以上の距離があるときに、伏せて叫びます。その声は山や谷を震わせます。あつしは死んでも構わないと思っていたので、動揺したことは一度もありません。猛獣は遭うとすぐに躍り上がり、搏とうとするかのように突進してきて、十数歩のところで止まり、坐わりにみます。それから逡巡し出し、耳を垂れて行っています。このようなことを試してみると、いつも全く同じになります」

後に孟徳は商州に至ったが、そこが商州であることを知らなかった。孟徳は巡視の者に執えられ、これで自分は死ぬと思った。

商州知事の宋孝孫そうこうそんは孟徳に言った。

「そなたを見るに悪人とは思えない。むしろ道を得た者みちのようである」

孟徳つひさは具にこれまでのことを話した。そこで宋孝孫は、孟徳を自首した者として秦州に送監した。

そのとき秦州知事であったのは張方平ちやうほうへいであった。張方平は孟徳を病人として扱い、兵籍から除いて一般の民にした。

かくして、いまに至るも孟徳はもろもろの山の中を行き来している。ほかに特に目立った才能はない。

孟徳は道を得た者というべきであろう。世間の君子といわれる人々はいずれも自負するところのものがあって、慕われない、畏れられないとの思いがある。慕われない、畏れられないとの思いが胸の中にこもこもあって、まだそれが行動には出ていなくても、顔にはその気配が現れている。人はそれを見て知ってしまう。そのために、弱い立場にある場合には侮られ、強い立場にある場合には笑われてしまう。結局、世の中で特にこれといったことのない者となってしまうのだ。

孟徳は自負するものがなく、浩然こうぜんの気(存在の根源的エネルギー)が自然と体を超えて外へと発散されて行くので、自分ではそれが見えていなくても、物には見えるのである。これを推し進めて行くなれば、天地に並ぶような存在にもなるのであって、猛獣など何ら言うに足りないのだ。

(実際に張方平ちやうほうへいは嘉祐年間の終わりに秦州知事であったことがある。孟徳は脱走兵もうとくであるから本来は重罪人として処罰しなければならないところを、特に寛大に扱ったの

だろう。蘇轍は孟徳のことを張方平から聞いてこの文章を書いたのであろうから、孟徳の人物像は、張方平の眼を通して見たものといってもよいだろう。張方平は上の墓誌銘にあったように仏教や道教に造詣が深く、従って孟徳のような「異人」が気に入ったの（^{いじん}）だろう）

弟（蘇轍）が孟徳のことを書いて送ってきた。私は読んで、これを異（^{めづらしい}）と思った。

考えてみるに、虎は己（^{おの}）を懼（^{こわ}）らないものを畏（^{おそ}）れるということは、信（^{ことわり}）ずべき理（^{ことわり}）なのではなからうか。しかし、世の中に、虎（^{こわ}）を懼（^{こわ}）らないものはいないので、この理（^{ことわり}）が成り立つかどうか確かめようがない。

私はかつてこのようなことを聞いた。

（蜀）忠州、万州、雲安県には虎がたくさんいる。ある婦人が昼間、二人の小児を砂の上に置き、川で衣を洗っていた。そこに、虎が山から駆け出て来た。婦人はあわてて水に潜って虎を避けた。二人の小児は砂の上で何事もなく遊んでいた。虎はしばらくじっと見ていたのだが、首を伸ばして子供らに触れた。たぶん懼（^{こわ}）らせようとしたのだろう。子供らは知恵がないから一向に怪しまなかった。虎はついに立ち去ってしまった。

思うに、虎が人を食うときには、まず初めにその威力で圧倒するのであろう。しかし、懼（^{こわ}）らない人（^{こわ}）には、威力をもってしても施すすべがないだろう。

あるいは、「虎は酔った人間は食べない。必ず坐って見守り、醒めるのを待つ」という者もいる。これは醒めるのを待つのではなく、懼（^{こわ}）るのを待つのではなからうか。

ある人が夜になって外から帰ってくると、門のところに^{うずくま}蹲っているものがいた。豚か犬であろうと思って、杖でこれを撃った。すると、すぐにそれは逃げ去った。山の下の月の明るいところに行っただのを見ると、それは虎であった。これはその人が虎に勝っていたわけではなく、その人の気が虎を呑んでしまったのであろう。

人が子供のように、あるいは酔っ払いのように^{こわが}懼ることがなく、またはそれと気づかないでいるときには、虎はそれを畏れるのである。これは怪しむに足りない話だ。

そこでこのことを弟の文章の後に書いて、弟の説を補強しておきたい。

(蘇轍と蘇軾は微妙に論点が異なる。いずれにしても、虎と遭遇したらどうすべきかのノウハウに興味があるのではなく、人としていかに振る舞うべきかという哲学を汲み出そうとしている)

■次韻趙景旼春思且懷吳越山水

^{ちょうれい い}趙令時 ^{あざな}(字は景旼) ^{けいきやう}が「春の思ひ」と題する詩を作ったので、それに次韻し、^{ごえつ}吳越の山水への^{おも}懐いも含めてこの詩を作った。

歲月の来ることは窮まりがない、

老いた我が眼は何を見ても静かなまま……

老いた我が身は繋がれた馬のよう……

ところが、春の風が吹くと、

^{こころ}意はまだ動いていないのに、

もう走り出そうとしてしまう。

春の風によって(杭州の)西湖はたちまち氷が砕け、
鳥が舞い降り、魚が鏡の面を動かす。

我等は、町中の埋もれた水路を浚い、水門を開き、
泥にこびりついていた舟を起す。

官の仕事はいつ終わることもないのだが、
諸君等よ、できれば楽しんでやってもらいたい。

私がこのように呉越こえつを思うようになったのは偶然のこと、
しかしてそれは遠い昔から定まっていたのではなからうか。

飄然ひょうぜんと繋げられない舟となって、

この尽きることのない興に乗じて行こうではないか。

ここ(潁州)は醉翁すいおう(欧陽脩)がかつて遊び楽しんだところ、

醉翁の愛でた草木全てに敬意を示すべきである。

明日の朝には、徑みちに散り敷く黄葉を掃除して、

潁水えいすいの北の渚で遊ぼうではないか。

たとえ臍から溢れ出るまでに酒を飲んだとしても、

猥らに歌って騒がず、静かに遺徳を偲ぶとしよう。

(1) 蘇軾自身の注で、「酒は香泉(酒の名であろう)が一壺あるが、楽全先生(張方平)の喪に服し、音楽を楽しむことはしない」とある。(2) 終わりの部分は意味を成さないという評語もあり、いつもの「ずっぱ訳」である)

■趙徳麟字説

趙令時ちやうれい じはこのころに字を景貺あざな けいきやうから徳麟とくりんに改めた。それについて蘇軾がこの文章を記した。

宋そうが天下を治めて百余年、天子が天の工たくみを分け与えて民衆を治める仕事には、天子とは疏遠で身分の低い者を用い、皇帝の親族を優遇することはなかった。そのために皇室の者は、たとえ賢人であっても、高い地位に就いて名が知られるようになることはなかった。

神宗皇帝しん そうはこのことを初めて残念に思い、皇室の英才とともに天下を治めたいと考え、官吏登用の方法を拡大した。そのことによって、育成され切磋琢磨する者が皇室においても多くなるのを期待したのだった。しかし、これを行うこと二十年、文武の器量のある者はまだわずかししか現れていない。

元祐六年げん ゆう、私が朝廷を出て汝南じょなん（潁州）知事になると、越王えつ おう（趙從誨）の孫、華か原公げん こう（趙世開）の子の簽書趙令時君せん しやちやうれい じと交遊することとなった。その人となりは博學にして文章に秀で、真面目であって芯が強く、信念をもって道を行い、機敏まつしんに政をこなすことを知っている。趙令時君こそは真の良材であり、貴さを具えた器であって、必ずその名が天下に鳴り響くであろうと考えた。皇室の出であるというだけの人物ではないのである。

昔、漢の武帝が雍祠五時かん ぶてい いう し ご じにお出ましになったときに、白麟はくりんが帝に献じられ、『白麟

の歌』が作られた。^{し ぼ せん はん こ}司馬遷、^{けだ}班固の史書には「一角獣を獲た」とあり、「蓋し麟だと言う」とある。「蓋し」の言は疑わしいということであろう。獣にして一角であるとはもとより麟である。なのに二人は何を疑ったのか。武帝の時代に、瑞祥であるところの麟が出現するようなことがあるのかと疑ったのである。漢の時代にはかの^{きやうあん}汲黯がいたのだが、武帝は汲黯を用いることができなかった。それなのに白^{せきがん}麟や赤雁の吉祥が武帝の世に現れたりするものなのか。二人は一角獣が麟かどうかを疑ったのではなく、そもそもおかしいことだと疑ったのである。

先帝(神宗皇帝)が皇室の賢者を用いる法を立て、いま主上が己を虚しくして天下から人を求めて漏らすまいとし、しかも瑞祥があっても敢えて喧伝しようとししないのなら、まことに麟を獲るべき状況となったということであろう。麟はもとより捕獲されることを望まない。不幸にして徳が形に出てしまうのが、麟の病で、それがために捕えられてしまうのだ。

いま趙令時君の学問は妙所に至り、己に淡泊であってその徳を守り、福貴などは浮き雲のように見ている。しかし、その文章、議論は趙令時君の名を載せて天下に馳せ伝わろうとしている。これは麟の病である。逃れようとしても逃れられないのである。

敬って趙令時君の字を^{あざな とくりん}徳麟とし、それについての説をここに述べた。

(これを見ると、蘇軾が改名を勧めたのだらう)

■洞庭春色

どうていしゆんしよく

「洞庭春色」という名の酒を詠んだ詩。短い序文がある。

あんていぐん おう ちようせいじゆん こうかん かき どうていしゆんしよく
(皇族の)安定郡王(趙世準)が黄柑で酒を醸し、「洞庭春色」と名付けた。色、香、
ちようれい じ
味の三つとも絶妙である。安定郡王はそれを甥の趙令時に贈った。趙令時がそれ
を私に飲ませてくれたので、この詩を作った。酔って筆に任せたもので、なかなか
ふらふらずる
に沓 拖とした風気があろうか。

ちようれい じ

(趙令時から書齋の銘を書いてほしいと依頼されたときに、都から贈られてきた酒を
分けてくれるならと応じたのだが (本章125 ページ)、その酒がこの「洞庭春色」だっ
たのだろう)

たい こ どうてい こうかん
この前の年に、太湖で「洞庭の秋」という黄柑を食べた。

香る霧が手にさっと降りかかった。

どうてい
今年はこの「洞庭の春」である。

ぎよく
玉のような色は酒とは思えない。

あんていぐん おう どうていしゆんしよく
賢王(安定郡王)は飲みながら「洞庭春色」の文字をしたため、

こう だ
酔うほどに筆は蛟蛇の走る勢いを増したのだった。

ちようれい じ
すでに酔って貴君(趙令時)を思って醒め、

遠くその酒を送ってこれ、

ひいては私のもとにもやってきた。

かめ

瓶を開けば香りが座上に浮び、

さかづき

盞から盛り上がって、光が窓を照らす。

これほどの香りであるから、

かの仙人^{ら こうえん}の羅公遠に嗅がせないように注意しないと、

台無しにされてしまうかもしれない。

「洞庭春色」の名前の通りであることを味わうべきで、

一升、一斗とたくさんほしがってよいようなものではない。

ちようしこう

「釣詩釣」(詩を釣りあげる釣)とか「掃愁帚」(愁いを掃きはらう帚)とか、

そうしゆうそう

ほうき

世に名高い酒の名に匹敵するのだ。

貴君も知っているように、

葡萄酒というものはどうにもいただけない、

こうてい

黄帝(伝説の帝王)の妃の嫫母のように真っ黒である。

ぼぼ

貴君の「滄海の杯」(海のように巨大な杯)で、

えんかい

我が大言を吐く口に「洞庭春色」を注ぎ込んでくれたまえ。

((1) 詩の途中にある仙人の羅公遠^{ら こうえん}については、蘇軾自身の注で、唐の玄宗皇帝が蜜柑を食べようとすると、千個余りあるもののどれもが一房欠けていた。蜜柑を運んだ使者に問うと、途中である道士が蜜柑の臭いを嗅いだと言った。きっと羅公遠が悪戯をしたのだ。)(2) 蘇軾は同じ時期に「洞庭春色賦^{どうていしゆんしよくふ}」という作品も作っている)

■送路都曹

み きゅう
路紉と そうという官員を見送った詩。題にある「都曹」は地方官の職名。序文がある。

かいがいこう ちようぜい しよく ろくそうさんぐん
乖崖公(張詠)が蜀にいたときに、ある録曹参軍の任にある者が老病によって事をし損なった。公はこの者を叱り、「いつまで引退せずにいるのか」と責めた。その翌日、録曹参軍は辞去することを求め、留別の詩を残した。その中にこの句があった。

秋光都似宦情薄、(秋の光——それは官職に繋ぎ止める情と同じ薄く)

山色不如帰意濃。(山の色——それは帰ろうとする意の濃さに及ばない)

乖崖公は驚き、録曹参軍に謝った。

「私の過ちである。同僚に詩を詠む者がいるのを知らずにいた」

よって、この者を留め、さらによい地位に就けるよう推薦した。

私は幼いとき、このことを父老が語るのを聞いた。残念なことにその姓名を問わなかった。

ろ と そう
いま路都曹はちょっとした失敗を理由に致仕することを求めてきた。私はこの詩を誦して引き留めようとした。しかし、聞かなかった。

こころ ちようれい じ ちん し どう
私は昔の人の意を採って詩を作って見送った。合わせて、趙令時と陳師道も一篇ずつ賦した。

(1) 本章 43 ページですで見たとように、張詠ちようえいは宋の初期に蜀を統治する上で大きな功績があった人物。その逸事が、蘇軾の祖父の世代の人々の間の語り草になっていた

のであろう。(2) この序文から、蘇隼が洲のトップとして、自分を支えてくれる人々に細やかな心配りをしていたことが偲ばれるであろう)

積雪がまだ桃や李^{すもも}を苦しめているときに、
春の心はどこから形をつくっていこうとするのだろうか。
淮河^{わい}の光^がが山の色をいよいよ春に変えようとしているときに、
なぜか真^ま先に帰郷^{きこ}の意を強くさせてしまう人がここにいる。
私もまた官遊^うに倦む者、
君恩によってこの愚か者は繋ぎ留められている。
私は老いて退いた後の備えに、
節操^ろの堅い人士^{きゆう}(路^ろ糾^{きゆう})を留め置こうと思うのだが、
役人はわずかの税の支払いを求めて、
鉛の臼で挽くような酷い目に遭わせようとしている。
貴君の心は——
露のようにはかないいまの身の上をもって、
いつかは大禄を得られることもあろうかと待つのは難しい、
成人してから百回も戦に出て、
郷里の人々は、きっと封賞が与えられると期待した。
いまに至っても、
白髪頭をかきつつ、夕べの烽が上がるのを見守る門番の身でいるとは、

誰も思いもしなかった。

貴君の意志はもう決まっていて、

私がいくら引き留めても聞いてくれるものではなく、

残念ながら、

かの垂崖公かいがけこうが胸の滞りを一洗して、二人の気持ちを通じ合ったのとは、

同じようにはならない。

私の田けいけいは荊溪じょうのほとりぎこう(常州の宜興県)にあり、

祭りの供え物にも事欠くようなところであるが、

いまおも懷うのは、

そこへと通じる江南こうなんの路を貴君がたどって、

林の下でまた会うことである。

(詩の中で、路ろ 紆きゆう について、①税金の酷い取り立てを受けている、②若いときに戦場で活躍した、③現在しがたい門番をしている、と詠んでいるが、それがそのまま事実であるとは限らないだろう。①何かの失敗について厳しく追及されていて、②若いときから苦勞を続けてたきのだが、③いまもって低い地位にある、ということのを詩として若干潤色して表現したのであろう)

■二鮮于君以詩文見寄作詩為謝

「二人の鮮せん于君うが詩文を寄せたので、その謝札に作った」という詩。「二人の鮮せん于君う しん」とは鮮于侁あざな (字は子駿し しゅん) の子で、鮮于侁には4人の息子が

いてそのうちどの2人であるかはわからないという。鮮于侁は朝廷の要職を務め、4年前に亡くなっている。鮮于侁の名は第6章120ページで見ていて、蘇軾はかつて手紙に「鮮于侁君はもとより私の畏友ですが、その御子息もなかなかの人」と記していた。

おも げんゆう
懐うに元祐の初めには、

宝玉のような方々が朝廷に大勢おられた。

このとき、南隆なんりゅうの老師せん うしん(鮮于侁)は使いを奉じたままでまた還っていなかった。

う そう し ば こう
迂叟(司馬光)が私に向かって言われた。

せい せい
「青州、齊州では困難な凶作の年が続いています。

この人は天界の星でいえば徳星に当たる人、

この方角に派遣するのにぴったりの人物です」

かくて(鮮于侁は地方に置かれたまま)朝廷に召されるのが遅れたのだった。

天命というものはまことに底意地が悪い、

ある朝、老いたる名馬は倒れ、

皇帝の厩は寂しくもからっぽになってしまった。

今に至るも清い夜の夢に見て、

名残の涙に枕が濡れるのである。

ここに喜び聞くのは、

御子息が成人になれてからは、

こうし びんそん がんかい
孔子の高弟の閔損、顔回を師として、

天の川のような遙かに高い議論をし、

ぎよく
玉の環のような清らかな音の詩を詠むということ。

その詩から遙かに知ったのは、

三日間の雪によって、

そちらの^{すうざん}松山(鮮于侁の故郷の山)が美しく埋もれたこと。

誰もが思うのは、

この優れた桂の木々(鮮于侁の息子たち)が、

このまま雑草に覆われてしまうことはないように。

旧くゆかりのある者(蘇軾)はいま^{えいすい}潁水の下流にあって、

そちらへ届けと、詩を流れに投じるものである。

((1) 蘇軾自身の注で、^{しばこう}司馬光が特に^{せんうしん}鮮于侁を^{せい}青州、^{せい}齊州に派遣したことを記している。

((2) 鮮于侁は亡くなった後、故郷の^{えいしやう}潁昌府に葬られ、息子たちはその地に留まっていたようだ。潁州から見て潁昌府は上流にあるので、流れに任せただけでは詩を投じても届かないのだが、水によって繋がっていると言いたかったのだろう)

■題欧陽公送張著作詩後

おうようしゆう ちやう
欧陽脩が張著作との送別の際に詠んだ詩を蘇軾が書き、その後ろにこの短文を添えた。欧陽脩の詩の全体は伝わらず、張著作(著作は官名)の名はわかっていない。

詩の中に歳月は記されていないが、「厭京已弄春」(都ではすでに春を^{もてあそ}弄んでいるのを厭^{いと})という語があるので、これはきっと、(欧陽脩が三十歳のとき)洛陽から都に還ってまだ久しくないころ、夷陵県^{いりよう}に行く前のことである。

元祐六年、東坡居士は汝南^{げんゆう どうぼ こじ じょなん えい}(潁州)の東閣でこの詩を観た。

(1) 蘇軾^{おうようしゅう}はすでに欧陽脩の詩文集を編み(本章23ページ)、潁州^{えい}にきてからもその遺稿を詳しく読んでいたのだろう。(2) 蘇軾は24歳のときに、夷陵^{いりよう}で欧陽脩にゆかりの建物を訪ねたことを第1章29ページで見ている)

■生日蒙劉景文以古画松鶴為寿且貺嘉篇次韻為謝

蘇軾の誕生日は12月19日。その日に合わせて劉季孫^{りゆう き せん あざな けいぶん}(字は景文)から松と鶴を描いた古い画が贈られてきた。詩が添えてあったので、それに次韻^{えい}して謝礼とした。潁州^{じょう}を発った劉季孫(本章111ページ)はすでに任地に着いていたのだろう。

一室に籠っていたのでは、

千里の広さに遊ぶ趣はないであろうから、

松によって、心に積もった塵を洗い、

鶴からは、遠く^{こころ}ゆく意を起こすのがよからう——

それで、貴君は松と鶴の画を贈ってくれたのか。

この世に生まれて長く生きていて、
死者の名簿から自分の名が除外されているのではないかと思いかねない。
書物に記された神仙の言葉を、
私は妙薬として大切にしている。
貴君のすばらしい心配りによって、
奥深い谷へと逸れる想い^{のが}が誘われる。
松は、暑さ寒さに左右されることがなく、
鶴は、前に行くも後ろに行くも自由である。
松は、立派な建物を構えたいとか、
鶴は、宮殿に巢を掛けたいとか、
そのようなことは望まない。
貴君との別れの言葉を思い起こしては、
数日間寂しく過ごすということを繰り返している。
貴君の詩は味わい豊かな御馳走であり、
貴君の字は瘦せて人を愕^{おどろ}かせるものがある。
高く飄々とした姿が眼の前にちらついて、
あれは昨日の夢であったかと思われる。
貴君はいま腰を屈めて人に合わせなければならない立場にある。
しかし、志は凡庸な役人連中と同じではない。
こうしたことは会って語るまでもない。

我等は同じ、不朽のものに身を託そうとしているのである。

漢の時代の揚雄ようゆうにしても汲黯きふあんにしても不遇の時期が長かった。

私はもはや王喬おうきやうや赤松子せきしようしのような仙人の後を追うことしか考えないのだが、

貴君は、漢代の大將軍の衛青えいせいや霍去病かくきよへいなどさほどでもないとする人物である。

(終わりのところでは、漢の時代の人々の名を挙げて劉季孫りゅうきそんのことを励ましている。

劉季孫の祖父は軍事において大きな功績のあった人なので、やはり軍職で大きな働きをすることを期待しているのである)

■乞賜度牒糶斛斗準備賑濟淮浙流民状

蘇軾こうが杭州知事として最後まで深く憂慮していたのは、気象災害が食糧難を引き起こし、多数の流民が発生することであった(第9章128ページ)。

残念ながら、災害は現実のものとなり(本章6ページ)、さらには長江ちやうこうと淮河わいにはさまれた地域でも災厄が生じたことがここに記されている。

元祐六年十二月二十五日、竜図閣学士左朝奉郎知潁州蘇軾りやう と かくがくし さちやうほうろう ち えいが書状をもって申し上げます。

臣わたしが近頃、潁州の城市(町)から出ましたところ、赤ん坊を抱えた流民らしき者に出会いました。問うと皆が「寿州じゅう(潁州より南の淮河に臨む地)から来ました」と言います。

それで、城門を守る者に尋ねると、このような者を時折見ると申します。淮西提刑わいせいいていけい司しが食糧を与えてはならないとの高札を立てたために、淮河を越えて北に來たと

のことであります。そこで南方から来た役人に問うと、今年の秋は廬州、濠州、寿州はどこも飢饉に陥り、いまや農民は榆の皮を煮たり、糠粃(米や小麦の糠)に馬齒莧すべりひゆを混ぜて煮たりしたものを食べているとのことであります。さらに寿州では盜賊が次第に勢いを増し、安豊県木場鎮では役人の家を打ち壊したり、霍丘県善郷鎮きやうでは科挙の地方試験に合格した者の家を打ち壊したり、六安県故鎮でも打ちわしをしたりしております。賊徒は十余人から二三十人ともいい、騎馬が巧みな者もいて、武器を具えております。どこも被害は数千貫にもなり、全ての損害が役所に届けられるわけではなくて、まだ報告されていないものもありましょう。

一方で、潁州の境界あたりでも、尹遇、陳興子、鄭饒、李松等数人の悪い賊がいて、いずれも手慣れの悪者で、各所をさまよいつつ、勝手な名号を立て、互いに呼応して結集して役人と争っております。近頃、破って捕縛いたしましたが、深く恐れますのは淮南の群盜わいなんがおさまらずに潁州へと流入し、それだけならたとえ大きな害にはならなくとも、飢えた民衆がそれになびくことで、徒党を組む者が増え、かつての王冲、管三のようなことになったら、もはや捕獲するのが難しくなってしまうでしょう。

臣は、淮河の南では秋から今に至るまで、雨雪が不足し、麦が熟すか熟さないか予断を許さない状況となっているということも聞いています。もし麦が熟さなかったときには、必ず大飢饉となりましょう。(長江の南の)浙西、江東はすでに不作の地が多く、勢い流民が必ず北へとやってまいりましょう。潁州はその対処に苦しまねばなりません。流民が潁州にきて、もしもそれを救うことができなければ、道に屍が横

たわり、盗賊が各所に起るのは必然の勢いであります。

よって、事に先んじて対応を乞うものであります。もしも何事もなくすむならば、臣は過大なことを申し上げた罪を避けるものではありません。隠して何も申し上げず、何の準備もないままに想定外のことに至る方が罪が大きいのであります。臣は日夜に対応を考え、少しもゆるがせにはいたしません。謹んで以下の数条を申し上げます。……(以下、具体策を述べる)……

臣が杭州にありました日に、自身で州県の役人を監督しましたが、皆が災害について言うのを憚っておりました。今年の蘇州、湖州の水害のごときは極めてひどい状況に至りましたが、朝廷の一員である賈易等はそれでもなお本当かどうかを調べる必要があるとして人を派遣しました。また、蘇州を襲った水がまだ城門から引かないうちに、知事の黄履はすでに秋蒔きの麦の収穫が期待できるような報告を中央にしました。実態を覆い隠すようなことが習慣として行われているのであります。伏して聖慈によって臣の言を試しに採用されますことを望むものであります。

((1) これで見ても明らかなように、被害の拡大を防ぐために迅速な救済策が必要であるとする蘇軾の姿勢は一貫している。(2) 終わりに名が挙げられた賈易は蘇軾の政敵であり(本章 35 ページ)、黄履とは杭州から都に移動する際に若干の交流があったようだ(本章 9 ページ))

■次韻陳履常雪中

上に見た文書を朝廷に差し出したのは 12 月 25 日。その後、穎州は連日

の大雪となり、蘇軾は流民をいかにして救うかに心を砕いた。四君子の一人、趙令時に『侯鯖録』という随筆があつて、蘇軾に関する記事が多数収められていて、この年も終わろうとするある日のことが次のように記録されている。

元祐六年、汝陰(穎州)ではしばらく雪が続いた。ある日、夜が明ける前のこと、東坡より手紙がきて、話し合いたいことがあるからと呼ばれた。行くと東坡はこのように言った。

「私はこの夜、眠れずに、穎州の飢えている人々についてずっと考えていました。官の蔵から百余石を放出し、餅(小麦を固めて焼いたもの)を作って救済しようかと思っています。妻が言うには『あなたさまが過日陳州を通ったときに傳欽之様に会われましたが、傳欽之様は陳州の民を救済するのに趙令時様の功績が大きかったとおっしゃっていたではありませんか。趙令時様をお呼びになって民を賑わす方法をお尋ねなさればよいのではありませんでしょうか』と。それで貴君に来てもらったのです」

私は笑ってうなずき、

「私にはすでに考えていることがあります。いま民衆が困っているのは、食と火の二つです。義倉(非常食の備蓄庫)には数千石の穀物が積んであり、すぐに配って民衆を救うことができます。また、作院(官庁の備品庫)には数万束の炭が、酒務(官営の酒造所)には数十万束の薪があり、これを原価のままで売れば民衆を救うことができます」

東坡は言った。

「私の思うことはこれでできる」

そして穀物と燃料を放出することを朝廷に奏上し、上台寺で配った。
じょうだい じ

ちん り じょう
 陳履常教授はこれを聞いて詩を詠んだ。

掠地衝風敵万人、(地をかすめて幾万もの人に風が吹きつけ)

蔽天密雪幾微塵。(天をおおって雪が降りきる)

漫山塞壑疑無地、(山も谷も埋めて)

投隙穿帷巧致身。(隙間を通り抜けて人も埋めてしまう)

映積読書今已老、(雪の光に書物を読んだ人もいまは老い)

閉門高臥不縁貧。(貧乏も気にせず門を閉ざして悠然としている)

遙知更上湖辺寺、(遠く湖のあたりの寺では)

一笑潜回万宝春。(もう春が帰ってきているようだ)

東坡がこれに次韻した。

可憐擾擾雪中人、(気の毒なのは、がくやうやう擾擾と雪の中で騒がしくする人たち)

饑飽終同寓一塵。(飢える身も、満腹する身も、一つの塵に寄せるようなもの)

老檜作花真強項、(老いた檜が雪を花のように付けているのはまことに強くて頼もしく)

凍鶯儲肉巧謀身。(凍える鶯が肉を蓄えているのはその身のための巧みなはかりごと謀である)

忍寒吟詠君堪笑、(笑ってしまうのは、寒さを忍びつつ貴君がわざわざ詩を詠んだこと)

得暖歎呼我未貧。(暖をとって飲んでいられるのだから、私はまだ貧乏ではない)

坐聽屐声知有路、(下駄の音が聞こえてきたのは、雪の中にも路があるのだろう)

擁裘来看玉梅春。(貴君が厚着をして梅の春を見に来たのだ)

私もまた次韻した。

坎壈中年坐愛人、(民衆を愛する人は)

老来貂鼎視埃塵。(老いて^{かまど}竈に塵が積もっている)

鉄霜帶面惟憂国、(顔を凍らせても国を憂い)

機穽当前不為身。(自身のために計ることはない)

発廩已康諸県命、(倉を開いて多数の命をつなぎ)

蠲逋一洗幾年貧。(民衆の貧苦を洗い流す)

归来又掃寬民奏、(さらに民のためになることを奏上し)

不愧毫端爾許春。(春の訪れにも恥じることはないようにする)

(最後の^{ちょうれいじ}趙令時の詩には切迫した事態に対処しようとする緊張感があるが、^{ちんりじょう}陳履常と蘇軾の詩は、流民の救済を終えてゆったりと春を迎えたということを悠長に歌っているかのようで、やや首をかしげてしまう)

■次韻趙德麟雪中惜梅且餉柑酒三首

げんゆう

元祐7 (1092) 年、蘇軾 57 歳。

ちょうれいじ

あざな

とくりん

趙令時(字は^{あざな}德麟)から、「雪の中の梅を惜しむ」という詩と、^{かんしゅ}柑酒(先

に見た「^{どうていしゅんしよく}洞庭春色」であろう) が贈られてきたので、次韻した。3 首のうち
2 首を訳す。

其の一

千の花々は、梅の脇役として出てくるのをよしとしなかったので、
荒っぽいことに、
雪でもって梅の花を^{くだ}摧き尽くしてしまおうとした。
寝床で、秋の嵐のような雨だれの音を聞いたのは、
散った花びらを、春の風が掃除しようとしていたのだった。

其の二

梅の花が咲くと、
仙界の宮殿の扉に千の花が映えるありさまを思い起こさせる。
人間世界に、まずこの花だけが咲いたときに、
雲は桃や李の方を先に立たせたいと思ってしまった。
それで、梅を散らして、
千の林に花を咲かせるようひどく迫ったのだった。

■和陳伝道雪中観燈

^{ちん し どう}陳師道の兄の^{ちん し ちゅう}陳師仲 (字は^{あざな}伝道) が^{えい}穎州に来て、1 月 15 日の^{じょうげん}上元の節

に雪の中で燈籠見物をして詩を詠み、蘇軾がそれに和した。

自分には新年の楽しみも特にないと、門を閉じ、
香を焚いて、一人の病んだ僧のように籠っていた。
貴君との別れの酒を傾けるのはまだまだ早すぎる。

しばしここで、愁いを晴らしてくれる燈籠をともに見ようではないか。

しんてい 新亭の近くではえい 潁水の魚がよく釣れるし、

せいこ 西湖の雪が消えるころには、華やかに飾った船が昇ってくる。

楽しい日々がこれからというときに、
酒を酌み交わす相手がいないのでは困るのだ。
ふだんは、貴君の弟もまずまずの詩を詠むので、
それでよしとしてはいるのだが。

■減字木蘭花

この詞は、ちょうれいじ 趙令時のこうせいろうく 隨筆『侯鯖録』に以下のような文章とともに記されている。

げんゆう 元祐七年正月、とうぼ 東坡先生はじょいん えい 汝陰(潁州)にいた。庁舎の前に梅の花が大きく開き、晴れ

上がって月の光が鮮やかであった。

おう 先生の王夫人が言った。

「春の月の色は秋の月の色よりも勝りましょう。秋の月は人を寂くさせますが、春の月は人を和やかに悦ちやうとくりんばせます。趙徳麟様や皆さまを呼んで、花の下でお飲みになってはいかがでしょうか」

先生は大いに喜んで言った。

「君が詩を詠むとは知らなかった。いまの『春月色勝如秋月色、秋月令人惨悽、春月令人和悦』(春の月の色は秋の月の色に勝り、秋の月は人さんせいを惨悽たらしめ、春の月は人わを和悦えつさせる)などは、まことに詩家の語ではないか」

それで私たちが呼ばれて飲むことになった。

先生は『減字木蘭花』の音律を用いて、王夫人の語をもとに詞を詠んだ。

春庭月午。(春の庭の真上に月)

搖蕩香醪光欲舞。(ゆらゆらと酒のように香り、光は舞い出すかのよう)

歩転回廊。(回廊を歩み行くと)

半落梅花婉婉香。(梅の花が落ちかかって婉婉しどやかに香ります)

輕雲薄霧。(軽やかな雲、薄い霧)

総是少年行樂処。(すべてが若い人の遊びによろしいのです)

不似秋光。(秋の光とは違います)

只与離人照断腸。(それでも、故郷を離れて悲しみに沈む者も照らしてくれるのです)

(先の年末の記事とともに、蘇軾おうじゅんの妻の王閏の肉声の貴重な記録である)

■ 閔世堂詩贈任仲微

閔世堂^{えつせいどう}を詩に詠み、任大防^{にんだいぼう}（字は仲微^{あざな ちゅう び}）に贈った。閔世堂^{さい しんそく}は蔡州新息県にある建物で、かつて蔡州知事であった任伋^{にんきゆう あざな し ちゅう}（字は師中）が建てたもの。任伋^{しょうにん}は「小任」と呼ばれた郷里の先輩で、蘇軾はたびたびその事績を詩に詠んでいる（第6章177ページなど）。任大防は任伋の息子である。任伋が蔡州知事であったときに、引退後の住まいを新息県に定めていたことは第6章17ページで見えて、任伋が遠く離れた遂州^{すい}で亡くなった後、家族は新息県に住んでいた。詩中に見るように、任大防は父の汚名を雪ごと努めていて、新息県から潁州^{えい}は比較的近いことから、蘇軾に助力を願いに訪ねてきたのだろう。

任公^{にん こう}（任伋^{にんきゆう}）が西南の地^{すい}（遂州）に出たとき、
任公の考えがたまたま用いられなかったただと慰めた者がいた。
もし任公の謀^{はかりごと}が全て採用されていたならば、
戦で功績を挙げること何もなかったのだ（無事平穩に治まったという意味）。
亡くなられてから十年が経ち、
正邪はとっくに明白になっているのに、
かえって不届き者がいまものさばっているのは、
天^{こころ}の意とは実に測り難いものがある。

貴君は父君の賢をそのまま継がれ、
 百回罰を受けようとも父君の無実を晴らそうと訴え続けている。
 私的な仇を報いようというのではなく、
 禍は必ず福に転じるものと信じているのである。
 貴君はいまは父君の旧徳によって食べ繫いでいるものの、
 高い才能があるのだから、
 いずれ門の狭さに困るほどに家が栄えるに違いない。
 父君の罪が晴れた暁には、
 父君の恩顧を受けた千人もの人々が訪れて、
 黄泉^{よみ}の世界の父君に報告することになるだろう。
 貴君の家の庭^{ひのき}には檜があり、
 世の変転^{えつせいどう}を閲して(関世堂の由来がここに詠み込まれている)、
 父君のころから変わらずに聳え立っている。
 千年の後にも井戸とともに残り続け、
 ここがかの任公の住まいであったことを示し続けるであろう。

(任^{にんきゆう}公^{すい}が遂州で不幸な亡くなり方をしたことは第6章177ページで見ている。「不届
 き者」とは、詩中で名指しはしていないが、程^{てい}之才^{しさい}、つまり蘇軾^{にんきゆう}の姉の夫である。任公
 が程之才の告発であらぬ罪をかぶせられ、無実を明らかにできないままに亡くなった
 のである。蘇軾は程之才の弟の程^{てい}之元^{しげん}等とはすでに和解しているが(第8章37ページ)、
 程之才は蘇軾にとって二重三重に許しがたい人物なのである。なお、訳詩では「不届き

者」としたが、原詩では「封徳彝^{ほうとく い}」という歴史上の人名で代用している。封徳彝^{ほうとく い}は隋朝^{ずい}でも唐朝でも高い地位にあった人物で、蘇軾は佞人の代表者として捉えているようだ
(本章 122 ページ)

■新渡寺送任仲微

上の詩に見た任大防^{にんだいぼう}（字は仲微^{あぎな ちゅう び}）が帰るのを、潁州^{えい しん ど じ}の新渡寺で見送った
ときの詩。

春の日差しは雪を落とし、

野から昇る春の気配は、雲となって空へと立ち昇る。

私は清らかな潁水^{えい}の下流にいて、

まさにこの地で指揮を執った古代の英雄を今に見ている気がしている。

ここは昔から、集まっては別れる場所、

貴君ともやはり別れを言わなければならない。

私は官遊に倦みながらも留まるところがなく、

痩せた農地を耕すことができずにいる。

貴君はこれより独り旅して、

古ぼけた寺の、鶏が騒がしく鳴く中に宿を取るのだらう。

貴君のために私は暁に角笛を吹こうと思う。

目覚めのときに、遥かなところから聞こえてくるであらう。

(終わりの部分は、助力を約束するという意味であるのだろう)

■送運判朱朝奉入蜀

朱京(字は世昌)という官員が蜀(しよく)に赴くのを見送る詩。朱京の詳しいことはわからないようだ。詩題に「七首」と記したものもあり、確かに韻を6回換えているので、7首に分かれていると見ることもできる。最初の3首は、朱京になりかわって蜀に到着した後のことを想像して歌い(実は自身の蜀への憧憬を歌っている)、4首目は蘇軾の日頃の思いを、5首目以下は朱京との楽しいおしゃべりを詠んでいる。

青城山(蜀にある山)にふんわりかかるあの雲は、

私にくっついて西北へと飛びきたものだ。

峨眉山(がびさん)の上にきらきらと輝くあの月は、

私を照らして光が消えることがない。

○

私が塵の舞う世間にいたときに、

白い雲は私に帰ってくるよう呼んでくれていた。

私が江や湖をさまよっていたときに、

明るい月は私の衣を潤してくれたのだ。

○

しょうく

蜀の山は天の一方を支え、

月はいま私のかたわらにある。

私は山の中にいるべき者、

だから、山とも月とも隔たるところがない。

○

私は夢の中でいつも蜀への路を尋ね、

黙って駅亭を幾つ過ぎたかを数えている。

かりょうこう

嘉陵江(蜀の川)の川音を耳に聞き、

枕に波しぶきがかかるのを感じるのだ。

○

貴君を見送るのに、私には何もない。

蜀の川の清らかな水——

それを貴君の馬に存分に飲ませよう。

竹の林の中の路——

そこで我が故郷の老人たちが貴君を出迎えるだろう。

○

私は蜀の人々にこのように言っておこう——

朝廷からの新しい使者が来たからといって、

驚いて逃げたりする必要はもとよりない、

何しろ私の友人なのだから。

訴え事があれば、家の者に接するように聴いてくれて、
 どうしたらよいのか細やかに教えてくれるであろう、と。

○

もしも山の中で私の友人に逢って、
 私がいづ帰るのかと問われたなら、
 このように言ってほしい——
 我が足腰はいまも軽やかで、
 川の石を踏んでびよんびよん歩ける、と。

■病中夜読朱博士詩

病の中で^{しゅぼつ}朱勃（字は^{あざな}遜之^{そんし}）の詩を読んでの感想を詩にした。朱勃の名は
 本章 67 ページで見ている。

眼を病んで——
 燈火の光は乱れ、
 細かな文字は塵や沙を数えるかのよう、
 空中にちらほら花が咲く。
 貴君の詩は秋の露のようで、
 眼の病に^{きよ}咲く花を淨く流してくれる。
 古くゆかしい言葉には、絶妙に託されたものが多くあり、

それは心に識れるのであって、これ見よがしに同調すべきものではない。

巧みな笑いは頬を緩ませ、

哀しい音は心を^{ばち}撻過で叩かれるかのようだ。

貴君の詩は^{そうこう}曾坑(茶の名産地)のひと掬いの春だろうか、

千の家の人々を満足させることができるのだ。

しかしながら、どこやらの貴公子どもには、酔っぱらった眼しかないので、

真の茶の価値などわかりはしない。

これこそは、高く聳えた岩山の上から、

わずか一寸ばかりを摘んできた茶の芽なのだ。

やたらに封を切って出してはならない。

^よ嘉さがわからぬ者はただの出がらしにしてしまっただけなのだ。

(詩とは何か、蘇軾の見方がさらりと示されている。途中にある「古くゆかしい……」の原文は「古語多妙寄、可識不可誇」(^こ古語 ^{みよう}妙寄 ^{おほ}多く、^し識る可くして ^{ほこ}誇る可からず)で、「古くゆかしい言葉の用い方は、言外に託すのが絶妙なところがたくさんにあり、それは独りで心に了解するものであって、わかったからといって、声高に朗誦して人に誇るべきではないのだ」ということを言っている。この訳詩などは、まさにそれだとは正反対であるというよりないであろう。そして、優れた詩を茶に譬えていることからしても、この訳詩は薄い砂糖水のように全くもってたわけたものでしかないのである)

■趙德麟餞飲湖上舟中対月

1月28日、蘇軾^{しよう}は揚州知事に任命された。穎州^{えい}に来てまだ半年にならないのに早くも異動となったのは、蘇軾を快く思わない人々の力が働いたからであるのだろう。実際に、より遠い^{うん}鄆州が任地として最初に指定され、その後に揚州に変更になったという経緯があり、朝廷内で駆け引きがあったのだろう。かくて蘇軾^{おうようしゆう}は欧陽脩ゆかりの土地から慌ただしく去らねばならなくなり、趙令時^{ちやうれい じ あざな とくりん}（字は德麟）ともこれが別れであると西湖に船を浮かべ、この詩を詠んだ。

老いた知事殿^{こころ}(蘇軾)は春を惜しむ意が深く、
 この地の主人^{ちやうれい じ}(趙令時)は客人を引き留めようとする情が強い。
 公務の間のこの閑かな^{のど}日月に、
 湖の上でこの好き^よ清明節を迎えた。
 新火^{しん か}をもってわかれた茶はまろやかで、
 温かな風^{あんず}に杏の粥の香りが立ち上がる。
 酒闌^{たけなわ}のとき、
 杏の紅い色は暗がりへと潜み、
 日が落ちて堤の縁が平らに浮かび上がる。
 清らかな夜に燈はつけないまま、
 岸辺を切り開くばかりの勢いで舟を進める。

それでも主人の被り物が落ちないのは、

酔いが足りないからなのか。

細い月がまだ西空に横たわっている。

(1) 火を使った食事を取らない寒食^{かんしょく}の行事が終わって最初につける火を新火^{しんか}という。
「杏^{あんず}の粥^{しゆく}」と訳した原文は「粥^{しゆく}餠^{しゆく}」で、新火^{しんか}で大麦の粥^{しゆく}をたき、杏^{あんず}の仁^{しん}の粉^{こな}を溶いた
飴^{あめ}をかけて食べる習慣があった。杏^{あんず}の仁^{しん}は薬効があるが苦みがあるために甘くして食
べるよう工夫され、現在では杏仁豆腐^{あんじんどうふ}として広く親しまれている。「杏^{あんず}の紅い色」は、
「杏^{あんず}の粥^{しゆく}」の色というよりは、折しも杏^{あんず}の花が咲いていたのだらう。寒食^{かんしょく}の2日後が春
真^{せい}つ盛^{めい}りの清明^{せいめい}節である。思えば、ちょうど1年前の寒食^{かんしょく}に蘇軾^{そうしつ}は杭州^{こう}を発ったのだ
った。(2) 最後の句に月が横たわると詠んでいるので、それが実景であるのなら、2月
の初旬にこの詩を詠んだことになる)

■和趙德麟送陳伝道

陳師道^{ちん し どう}の兄^{あに}の陳師仲^{ちん し ちゅう}（字^{あざな}は伝道^{でんどう}）が潁州^{えい}に来ていたことは本章 157 ペー
ジで見ているが、陳師仲^{ちん し ちゅう}も同じときに潁州^{えい}を去ることになり、趙令時^{ちようれい じ}（字^{あざな}
は徳麟^{とくりん}）が送別の詩を詠み、蘇軾^{そうしつ}がそれに次韻した。

二人^{ちん}の陳君^{ちん し ちゅう}（陳師仲^{ちん し ちゅう}と陳師道^{ちん し どう}）は妙士、

二人^{おうよう}の欧陽君^{おうよう けい}（欧陽棐^{おうよう へい}と欧陽弁^{おうよう べん}）は徳人、

皇族^{ちようれい じ}の子孫^し（趙令時^{ちようれい じ}）は竜の子、

いずれも雲の上を走る名馬と世に讃えられる人々である。

この五君は私とともに遊び、

胸の内にあるものを傾けて、怪珍すぐれた詩句を写し出してきた。

俗物どもは人の意を損なうことをするのだが、

五君との遊びは実に清醇せいじゆんであった。

しかし、聚散はどうしてもあり、

佳よい夢の後には、むなしい欠伸あくびが待っているのだ。

私の舟ふねは淮河わいを下って行き、

玉ぎよくのような沙を川波が洗うであろう。

貴君は暁の月を踏んで行き、

銀のような光がまばらな木々から注ぐであろう。

別れて後にも詩を寄せるから、

淮南わいなん（揚州）の春を貴君の脳裏に刻み込むがよい。

■潮州韓文公廟碑

蘇軾えいが潁州ちやうを発つ前に、潮州知事の王滌おうできから使者が来て、韓文公廟かんぶんこうびやうに立てる碑に刻む文章の執筆を依頼された。韓文公廟とは唐代の韓愈とうを祭つた廟で、韓愈は都から遠く離れた潮州に左遷され、その地に大きな足跡を残したことを記念したものである。韓愈は何度か記してきたように、衰退期にあった儒学おうようしゅうを再興した偉大な先人として欧陽脩が大々的に顕彰した

人物である。

（この作品は蘇軾が持てるエネルギーを全て注ぎ込んだ雄編として名高い。特に最後の詩は超人的な語彙力の結集であって、「壯大美とは、かかる詩のために用意されたことばであろうか」（山本和義『蘇軾』（1973年））と評されるほどである。そうであるだけに、蘇軾のファンをもしも自認するのなら、この作品は（正直なところさっぱりわからないけれども）とにかくにも恐れ入って畏み、「これはすごいのだ」としたり顔でうなずいてみせるしかないのである。しかし、蘇軾はあり余る力で壮麗極まりない空中樓閣を築き上げたとの感もなくはなく、以下のいつもに増してひどい「ずっぱ訳」を読んで、夢でおならを踏んづけたようなことを書いていると感じられたならば、どうか権威ある注釈書に当たって本当のところを確認していただきたい）

一介の庶民でありながらも百世の師となる――

ただのひと言が天下の規範になる――

天地の生成変化に参加し、天下の盛衰の運行に関わるときに、このようなことがおこる。

そのようなことをする人が生まれ出るには何らかの理由があり、そのような人は逝ってからも何かしら為し続けるものがある。

だから周代の賢臣である呂侯りょこうや申侯しんこうは五嶽ごがくより降り、亡くなって星につらなつたと伝えられるのである。昔から伝わることはいかに不可思議であっても否定すべきではない。

もうし
孟子はこのように言った。

こうぜん き
「私は吾が浩然の氣をよく養う」

浩然の氣は、ちっぽけな体の中に宿るものでありながらも、天地の間に満ちてゆくようになる。いきなりこの浩然の氣に出会えると、王の位も侯爵の位もその貴さを失い、
しん そ かん ちょうりよう ちんぺい
晋や楚のような大国もその富の価値を失い、漢の張良や陳平の智も意味を失い、
もうふん かいく ちょうぎ そしん
古代の孟賁や夏育の勇も氣勢を失い、戦国時代の張儀や蘇秦の弁舌も力を失ってしまう。

これは何によってそうなるのか。浩然の氣は、形あるものに寄り添って存立するものではなく、力を頼りにして進行するものではなく、生まれるのを待って存在するようになるものではなく、死に随って亡ぶものでもない。だから、天にあるなら星となり、地にあるなら河や山になり、暗いところにあるなら鬼神となり、明るいところにあるなら人となるのである。これは不変の理^{ことわり}であって、怪しむところは一切ない。

ごかん みち ほろ ぶん すた
後漢の時代以降は、道(真理に基づく政治)は喪び、文(正しい学問)は弊れ、異端が
どう じゅうがん かいげん ほうげんれい と じょかい どうすう そうけい
こもこも起こった。唐の貞観、開元の盛時を経て、房玄霊、杜如晦、姚崇、宋璟と
いった名臣が出て道と文を救うことはできなかった。

かんぶんこう かん け
ここに独り韓文公(韓愈)が下々から身を起し、談笑しながら指揮をとると、天下はたちまち靡いて公に従い、正しいところに再び帰ったのだった。それから今に至ると三百年である。

韓文公は、八つの王朝の時代の衰微から文の興隆を起し、天下の惑溺から道を救い出し、人主の怒りを犯しても忠を貫き、三軍を指揮する將軍よりも勇敢であっ

た。韓文公こそはまさしく、天地の生成変化に参加し、天下の盛衰の運行に関わり、浩然の氣とともに独り永遠に存在する人なのである。

かつて私は天と人の相違を論じたことがある。人はやろうとすれば何もできないことはないのだが、天は決して偽^{にせもの}を受け容れない。智によって王や身分の高い者を欺くことはできても、魚を欺くことはできない。力で天下を得ることはできても、庶民の心を得ることはできない。

ところが、韓文公の精誠^{こうさん}(真実の真心)は衡山を隠していた雲を開くことができたけれども、憲宗皇帝^{けんそう}の惑いを覚ますことはできなかった。鰐魚^{わに}の乱暴を馴らすことはできたけれども、皇甫鏞^{こうほうきやう}や李逢吉^{りほうきつ}の謗りを打ち消すことはできなかった。南の涯の地の民に信じられて百世にわたって廟に供物を受けているのだけれども、その身を一日も朝廷において安らかに保つことはできなかった。韓文公ができたのは、天に受け容れられることであって、(偽^{にせもの}に満ちた)人に受け容れられることではなかったのである。

最初^{ちようし}、潮州の人々は学問について知らずにいた。韓文公は科挙の受験資格がある趙徳^{ちやうとく}に命じて人々を指導させた。それから潮州の士^しは学問と行為において篤く努めるようになり、庶民もまたそれを見習うようになった。それが現在まで続いていて、潮州は治めやすい土地柄であるといわれている。まことに孔子が言う「君子が道を学ぶなら人民を愛するようになり、庶民が道を学ぶなら統治しやすくなる」この言葉の通りである。

潮州の人々が韓文公に仕えるありさまは、飲食をするごとに必ず公に供え物をし、

水害や旱害、疫病などの災害があって願うところがあるときには必ず廟に祈るのである。

韓文公の廟はかつては知事の庁舎の後ろにあって、民衆は簡単には出入りできなかった。前の知事は朝廷に願って新しい廟を作ろうとしたものの、実現できないままであった。^{げん ゆう}元祐五^{ちゅうさんろく}年^{おうでき}(1090)年、朝散郎の王滌君が州知事になると、士を養い民を治める姿勢はもっぱら韓文公を師と仰いだ。民は喜んでその徳に服すようになったので、王滌君は次のように布告した。「韓文公の廟を新しくしたいと願う者がいるなら許可を与える」。すると民は喜んで賛同し、町の南方七里の地に場所を選び、一年で新たな廟が完成した。

ある人がこのようなことを言った。

「韓文公は都を去ること一万里の彼方の潮州に流され、一年もしないで都に帰還した。亡くなってからも世にあることを公が認知できるのなら、潮州を特別に恋しく思うようなことはきっとないはずだ」

私はそれに対してこう答える。

「そうではない。韓文公の精神が天下にあるのは、水が地中にあるのと同じで、どこであろうとも遍く存在しているのだ。潮州の人々は特にこのことを深く信じ、この上なく公のことを思っているのである。人々は韓文公の精神が^{くんこうせいそう}煮蒿悽愴として立ち昇るのをまざまざと見ているように感じているのである。井戸を掘って水を得たときに、『水はここだけにあるのだ』と言うのは、全く理屈に合わない。それと同じで、韓文公の精神は潮州だけにあるのではないのだ」

元豊元(1084)年、(神宗皇帝は)詔をもって公を昌黎伯に封じた。それによって廟の額に「昌黎伯韓文公之廟」と記された。潮州の人々はこうした由来を石に刻む文章を私に依頼してきた。よって、詩を作ってこれを送り、それでもって公を祀るものである。その詩にいう。

公昔騎竜白雲郷。(公は昔は竜に乗って天界で遊び)

手扶雲漢分天章。(銀河を手にとって文章の真髄とした)

天孫為織雲錦裳。(天帝の孫の織り姫が雲の衣を織り)

飄然乗風来帝旁。(それを着て公は天帝のもとを訪れた)

下与濁世掃秕糠。(公は地に下って濁った世を掃おうと)

西遊咸池略扶桑。(西の涯から東の涯にまで至り)

草木衣被昭回光。(草も木もその光を受けたのだった)

追逐李杜参翱翔。(公は李白と杜甫を追って自由に飛翔し)

汗流籍湜走且僵。(弟子の張籍や皇甫湜は汗を流して師を追ったが倒れてしまい)

滅没倒影不能望。(公は消え去り、倒れた者は望み見ることができなかった)

作書詆仏譏君王。(公は文書を作って仏教を誇り、皇帝を諷めた)

要觀南海窺衡湘。(公は(流されて)南方に衡山、湘江を見に行き)

歷舜九嶷弔英皇。((古代の聖天子の)舜とその妃を弔うこととなった)

祝融先驅海若蔵。(そのとき海の神の祝融が先導し、海若が波を静めた)

約束蛟鰐如驅羊。((南に至った公は)蛟鰐を縛って羊のように驅った)

鈞天無人帝悲傷。(天帝は天下の中央に人がいなくなったのを悲しみ)

謳吟下招遣巫陽。(高らかに歌い、巫女を遣わして公を招き寄せた)

犧牲鷄卜羞我觴。((天界に帰った公のために)牛や鷄を供え、^{さかずき}觴と)

於餐荔丹与蕉黄。(赤い^{れいし}荔枝と黄色い^{バナナ}蕉を捧げた)

公不少留我涕滂。(地上に少しも留まらなかった公のために私は涙を流す)

翩然被髮下大荒。(どうか公よ、翩然と髪を振り乱して大地に下りたまえ)

(以上の文章と詩が踏まえている故事来歴の説明は(多すぎるし訳者の力に余るので)加えない。一点だけ、^{こうぜん き}「浩然の氣」について記しておきたい。「浩然の氣」とは何か、我々にとつていくらかわかりやすく解釈すると、「宇宙の根源的法則から発出される善のエネルギー」ということができるのかもしれない。上の文章には、「浩然の氣」が^{かん ゆ}韓愈という人物を通して^{とう}唐の時代に大きな作用を及ぼし、儒学を中心とする文化のルネッサンスが興り、蘇軾の時代もその影響下にあるという蘇軾の歴史認識が記されている。そのような偉大な韓愈でありながらも左遷の憂き目に遭わなければならなかったことと、蘇軾自身がいま困難な状況に置かれていることを重ね合わせて考えるとところから、蘇軾の創作意欲に火が付き、異様なまでの力を籠めて、^{えい}穎州から^{よう}揚州に向かう船の中でこの作品を作り上げたのである)

■上巳日與二子追過遊塗山荊山記所見

^{えい}穎州を發った蘇軾の^{えいすい}船は、^{わい が}穎水を下って淮河に入り、そのまま流れに乗って^{じゅ}寿州を経て^{ごう}濠州に入った。詩題は、「^{じょう し}上巳の日(三月三日)、^そ息子の蘇

迨^{たい}、蘇過^{そ か}とともに塗山^{と ざん}、荊山^{けいざん}に遊び、見たところのものを記す」。塗山と荊山はともに濠州にあり、両者は三里ほど離れているという。

（この詩には蘇軾自身の注が数多く付記されている。最初の注に「昔杭州^{こう}に赴く途中でここを通過し、それから二十二年になる」とある。それは杭州^{こう}副知事として赴任すること、で、濠州^{ごう}で詠んだ詩を第3章128ページで見ている。その他の注は、さながら名所案内記のようで、詩はそれらを豊富な語彙力を駆使して巧みに詠み込んだものである。その巧みさを味わうには多大の労力を必要とするので、ここではごく上っ面をなぞるだけにしておきたい）

この人生は最後にはいったいどこに帰るのか。

私は車をめぐらせて、天下の半ばをすでに行き来したようだ。

古^{いにしえ}の聖人^うの禹は、洪水を治めるためにまさに天下を巡った。

もしも禹がいなかったらば、人々の暮らしはそもそもなかったのである。

塗山^{と ざん}には禹を祀った廟がある。

ここで娶ったという妻の像が廟に置かれ、

呱呱^{こ こ}と鳴き声を上げたその子^{けい}の啓も祀られ、

禹の父である鯀^{こん}や、禹とともに治水に奔走した柏翳^{はくえい}の廟もある。

この地の人々は殊勝なことに、

禹の誕生日とされる六月六日に、数万人が集まっていまも祭礼を行っている。

塗山と照らし合うようにして荊山^{けいざん}がならび、

下を流れる川は乱しようもなく清らかである。

荊山にはかの下和べん か ぎょくが玉あなの原石を掘りあてた坑がいまもある。

下和は哀れにも横暴な王によって足切りの刑に処せられたのだが、

原石はついには磨かれて美しさを発したのだった。

荊山の下の木とうの梢のあたりに唐の時代に湧き出した泉があり、

いまも亀の形をした石から茶に絶好の水が得られる。

こうした古いことを、

我が息子どもが根掘り葉掘り尋ねるので、

同行する土地の秘書官殿は苦笑しつつ汗を拭き拭き答えてくれる。

帰るときには、もう蝙蝠が飛びかい、

遠くたいまつの炬の火が、あそこに岸辺があるとわからせてくれているのだった。

(蘇軾そ まいには3人の息子がいて、長男の蘇邁は地方官として各地を巡っていて次男と三男が父と一緒にだった)

■次韻和晁無咎学士相迎

蘇門四学士そ もん し がく しの一人、晁補之ちやう ほ し（字は無咎あざな）はこのとき揚州副知事で、蘇軾そ かいが赴任してくるのを待っていた。これは蘇軾を迎える詩を晁補之が送ってきたので、旅の途中で次韻したもの。

(この作品は次韻詩の通弊としてごたごたしてまとまりに欠ける。晁補之ちやう ほ しとはその父の代からの付き合いであることが詠み込まれているのが注目点であろう)

私は若かった日々に、

しんじょう ちやうたんゆう
新城県の晁端友知事と知り合った——

知事は門を閉ざし、

自ら掃き清めて外に出ることがなかった。

胸の内に、天が語るかのような言葉を宿し、

大軍を退け、城をも破る勢いがあった。

その子^{ちやう ほ し}(晁補之)のためには錐の先ほどの土地も残さなかった。

子は虹を吐き出すばかりの勢いで、

寒さも飢えも全く苦にすることがない。

いまは遠回りをしていて大いに用いられるには至っていないけれども、

節操を曲げるのは家訓として戒められているので、

衆人を避けて、いつしか大いに飛躍するのを待っている。

よう
揚州においてたまたま私とともに歳月を過ごすことになった。

私はといえば、

先ごろ千仞の巖の上にあるという仙界の泉^{きやう ち}、仇池を夢に見たので、

青い霞^{とばり}の帳を開いてそこに行こうと思っている。

そうでなくても私は西南(蜀の方角)に帰路を定めているのだから、

私に付き合ってよいものかどうか、

すぐに家に帰って細君と相談されるのがよいだろう。

老いた私には酒を飲む相手をしてくれる者はなく、

独り芍薬はくだに向かって白墮はくた(名酒)を傾けるしかない。

揚州へいざんどうといえば、平山堂すいおう おうようしゅう おもにくるたびに私は酔翁(欧陽脩)を憶うのだが、

ずっと後になって、貴君は揚州にくるたびに私のことを思うようになったりするだろうか。

路傍の子供らが、私を見ると何だかにやにやして、

「あれもこれも、でんぐり返って、みんなおしまい」

と、一斉に歌う。

こんな知事であっても、

賢く風流心のある貴君ききがいてくれるのなら、

杜牧とぼくが「十里の春風たまに珠すだれの簾が巻き上げられる」と歌った、

かの揚州の風光を満喫できるであろう。

(最初にある晁端友ちやうたんゆう しんじょうが新城県の知事であったことは第4章100ページで、後半にある平山堂へいざんどうは第7章93ページなどで、最後にある杜牧とぼくの句は本章12ページでそれぞれ見ている)

■淮上早発

船は濠州ごうを出て、淮河わいの流れに乗って泗州しから楚州そへと至った。その途中で早朝に出発した折に詠んだ詩。

淡い月が傾きつつ雲にかかる、

つ^{つのぶえ}のぶえ
暁を告げる角笛が悲しげに鳴る。

わずかな風が吹き始め、

あ^{あお}お
水に碧い鱗模様が現れ出る。

我が人生はこのように定まっているのか——

こう^{こうこ}こ
江湖において老いてゆくのだと……

黙って数えると、

わ^{わい}い^が
淮河を行き来することをこれで十回目である。

(詳しい考証によると、蘇軾^{そ いく}が淮河^{わい が}を通過するのは正確には 11 回目であるという)

■淮陰侯廟碑

そ^そ わ^{わい}い^{いん}
楚州(淮陰)は悲劇の英雄、韓^{かん}信^{しん}の故郷である。韓^{かん}信^{しん}は漢^{かん}の^{こう}高^そ祖^{りゅうほう}(劉邦)
を助けて天下統一の事業を進める上で大きな働きをしたのにもかかわら
ず、事業の完成が近づくと、その卓越した能力が警戒され、殺されてしま
った。楚州には韓信を祀る廟があり、蘇軾^{そ いく}は土地の人に頼まれてこの碑文
を記した。

竜に神通力が具わっているとされるのは、よく変化しよく屈伸するからである。夏に
は天を飛んでその靈妙な姿を現し、冬には泥の中に蟠^{わたかま}って害するものを避ける。

しん
秦の始皇帝が人民を厳しく網で囲い、残虐な刑罰を用いて害毒を全土に流したと
きに、民間にあった武器は狩り集められ、豪俊の者は殺された。将軍^{かんしん}(韓信)は汚

辱^{かたじけなく}の内に身を置き、世を避けて、その姿を隠した。しかし、志は鵲^{かきさぎ}が飛び立ち、豹が変貌して、故国を再興するところにあつたので、洗濯婆さんが恵んでくれた食べ物を甘んじて受け取ったのだった。將軍は胸に王霸の計略を抱き、英雄の壮図を蓄え、志は天地四方を合わせるところにあつて、氣概^{おどろ}は万人を蓋^{おほ}うものがあつたので、恥を忍んで小役人の股の下をぐったのだった。

ここに山の神は秦が亡びる前兆を示し、將軍はたまたま英主^{りゅうほう}(劉邦)と知己となり、世にない奇策^{しよくかん}を述べた。蜀漢^{かん}の地に決起し、たちまち関輔を席卷し、戦えば必ず勝ち、攻めれば必ず克ち、強敵^その楚を防ぎ、暴虐な秦を滅^せぼし、齊^{せい}の七十城を平定^{ちやう}し、趙の二十万の軍勢を破った。大丈夫の功名をこのように立てる前に、食を乞い恥辱を受けることなど、言うに足りないことだったのである。

ところが、まだ秦が完全には亡びておらず、漢がまだ完全には天下を統一する前に、將軍は草木とともに朽ち、鹿とともに死んでしまった。竜となって雲に飛び、一兵卒から立って侯王になったのに、どうしてその地位を保てなかったのか。

ああ、古の英偉^{いりこしえ}の士で機会に遇わなかったために、名が埋もれ、心に適うところなく終わった者は数えきれないのだ。

……(以下、銘文が続く)……

(先に見た韓愈^{かんゆ}の碑(本章168ページ)ほどの力みは感じられないにしても、ここに託した蘇軾^{そし}の思いは十分に伝わってくるであろう)

■次韻徐仲車

じょせき あぎな ちゅうしや

徐積（字は仲車）から贈られた詩に次韻した。蘇軾自身の注によると、徐積は耳が聞こえなかったという。「古^{いにしえ}の独行^{どっこう}の人」と評され、母を養いつつ苦学し、結婚することもなく40歳に至り、村人達の助力を得て上京し、治平^{じへい}4（1067）年に科挙に合格した（このことから蘇軾より10歳ほど上だと推測される）。官職に就く前に母が亡くなり、その後は仕えることがなかった。いかにも蘇軾好みの「異人^{いじん}」である。

ろくな衣服もないし、ろくな食べ物もない。

詩はますます好^よい。

あたかも凍てついた松に、

春の鳥が囀るかのようだ。

蒼い蠅が群がるのは遠くの鶏の声に似るとか、

人はそれに惑わされもする。

公（徐積^{じょせき}）は世上の誰よりもずっと早くから目覚めている。

この八年の間に、私は密州^{みつ}、杭州^{こう}、揚州^{よう}を行き来し、

そのたびに公に会ってきた。

公の眼に映るのは、

月はいつでも白く空にあり、

水はいつでも自ずと流れていて、

人間どもがけら螻やがやがや蟻やらのように擾擾やっても、
 公の耳には届かない。
 人が叫び声を挙げて牛を闘わせる大騒ぎをしているのを、
 ただ笑って眺めているのである。

■次韻林子中春日新堤書事見寄

蘇軾は3月26日に揚州ように着任した。揚州は、隋ずいの煬帝ようだいが大運河を完成させて以降、長江ちやうかう以南の地の産物を北中国に送る中継基地として栄え、とりわけ煬帝自身が揚州の風光を愛して、富を結集して大都市として発展させた。煬帝は揚州の魅力に惑溺し、国家の乱れに目を背けて揚州での逸楽に耽ったために、反逆者によって揚州において殺され、隋朝は滅んだ。唐代の著名な詩人である杜牧とぼくが若いときに揚州において放蕩三昧をして浮き名を流したことからも、揚州はとにかく妖しく人を誘う蠱惑の都市とのイメージがあった。知事となった蘇軾が早速何をしたのかということが、趙邦基ちやうほうきの随筆『墨莊漫録』ぼくそうまんろくに記されているのでそれをまず見ておこう。

(趙邦基ちやうほうきは蘇軾より数十年後れて生まれ、官界において活躍した記録はないが、士大夫しだいふの一員として当時の名のある人々と交流し、その見聞を『墨莊漫録』ぼくそうまんろくに書き残した。趙邦基は話を盛る人ではなく、史料的价值は高いとされている)

らくよう 洛陽の牡丹は天下にその名が聞こえている。花の盛りのときに、知事は万花会を開き、花
とばりで屏風や帳を飾って宴会をするところを囲み、竹筒に水を貯えて花を挿してそれを梁や棟
 や柱の全てに掛けて飾りつける。目に見るところのものは全て花なのである。

よう 揚州は芍薬の産地で、その特に美しいものは姚黄や魏紫(牡丹の品種であろう)に引けをとら
さいけいない。蔡京が揚州知事になると、洛陽をまねて万花会を開いた。その後、それが毎年の
 習慣となって、町の人々の負担となっていた。

げんゆう どうば 元祐七年、東坡が揚州知事として赴任すると、ちょうど芍薬の花の時期で、役人が旧例
 通りに万花会の開催を提議した。しかし、公は取りやめさせた。人々は歌い舞うほどにそれ
 を喜んだ。

おうきよう 公は王鞏に手紙を書き、「花会について過去の記録を調べると、千本万本の花を用いて
 いた。それを集めるに当たって役人やその縁者が悪さをして、揚州の民にとって大きな害を
 なしていた。これを止めたので、殺風景になったとはいえ、無駄な事業をなくすことができた
 のである」と記した。

公が政事を為すときには、いつもこのようにして民に恵みを施したのだった。揚州の民はい
 まもこのことを讃えている。

(ここに名を挙げられている蔡京は、王安石のもとで改革派の一員として活躍し、首都
かいほう開封府の知事にまでなったのだが、しんそう神宗皇帝が亡くなってしばこう司馬光が旧法をいきなり復
 活させると、その無茶な施策を蔡京は真っ先に実行してみせて、改革派から保守派への
 転身を図った。しかし、さすがにその節度のない振る舞いは輿論を買って都の外に出さ
 れ、その後、揚州知事となって、ここにある花会を挙行了したのである。なお、蘇軾は杭

州知事時代に蔡京の父と交流があったことを第4章21ページで見ている)

芍薬の花会を廃止して「殺風景」にしたことについて蘇軾自身も詩に詠んでいる。これは蘇軾の後に杭州知事となった林希（字は子中）（本章8ページ）から送られてきた詩に次韻したもの。林希の詩には蘇軾が築いた西湖の新堤の春景色が詠まれていた。

私は浮き雲、

都にほんのちょっと立ち寄っただけ、

立派げな朝廷の衣服を着たのはたった一晚だった。

翰林院の玉堂で筆を揮った手で、

月のもと、淮河に舟を漕いだ。

羨むのは、

湖のほとりの貴君の書斎の窓に、

碧く波の光が揺れること。

笑ってしまうのは、

ちょうど花の時期であるのに、

飴は出番がなくて塵が積もっていること（一緒に花の宴を開く友＝蘇軾がいない）。

貴君に報せるのは、

ここ何年もなかった揚州の殺風景、

川に雨が夢のように降り注ぐ時期でありながら、
春を知らずにいるのである。

（この詩の終わりには、蘇軾自身の注が付されている。「林希からの詩に芍薬の春を歌う句があった。揚州では近年はおおむね芍薬の花会を举行し、十万本ばかりの花を使用していた。小役人やその縁者が悪さをして民衆が非常に苦しんでいた。それでこの会を止めた」。官の仕事にかこつけて、役人と土地の有力者が結託して不当な利益を挙げることを蘇軾は非常に嫌った。その逆を行ったのが蔡京で、蔡京は後に復権すると、そのときの皇帝（徽宗）の趣味に迎合して都の庭園を飾る奇石などを大々的に集めた。それを実行したのが蔡京の推挙した朱勔らで、都に珍奇なものを運ぶ事業（花石綱）において、役人と悪徳商人が悪さの限りを尽くした。民衆は非常に苦しみ、その結果、ついには花石綱を一つの標的とする民衆の大反乱が勃発して、宋朝の寿命を縮めたのだった）

■以楽害民

揚州の万花会について蘇軾自身も短い文章を残している。

揚州の芍薬は天下第一である。蔡延慶が揚州知事であったときに、初めて万花会を行い、十万余りの枝を用いた。もろもろの庭園を害しただけでなく、吏人（下級役人）がこれにかこつけて悪さをし、民衆はひどく困らされた。

私は揚州に至ると、民衆に苦しんでいるところを問い、真っ先に万花会を止めた。万花会のもと洛陽で古くから行われているもので、それに倣ったのである。しかし、

ちょっとした楽しみのために民衆を苦しめ害っているのである。思うに、洛陽の万花会もきっと民衆を害っているであろうから、止めるべきである。

銭惟演せん い えんが洛陽の知事であったときに、初めて馬を走らせて花を皇帝に献上することを行った。識者はそれは宮妾が主君の愛を得ようと媚びる類の行為であるとして卑しんだ。

また、蔡襄さいじょうは初めて小団茶しょうだんちゃを皇帝に献上して送り届ける仕組みを作った。富弼ふ ひつは「蔡襄にしてこのようなことをするのか」と嘆いた。

(1) 詳しい考証によって、蔡延慶さいえんけいが蘇軾そうしつより前に揚州知事になったことはなく、先に見た『墨庄漫録ぼくそうまんろく』に記されているのが正しくて、揚州の万花会を始めたのは蔡京であるとする。(2) 銭惟演せん い えんは五代十国時代の呉越国ごえつこくの最後の王の息子で、洛陽知事であったときに、梅堯臣ばいぎょうしん、欧陽脩おうようしゅう、富弼ふ ひつといった次代の担い手のパトロンとなった。過去に宋に敵対した国の王の子孫という難しい立場から、皇帝の歡心を買うことに腐心しなければならぬという事情があったのだろう。(3) 蔡襄さいじょうは、近世の書家として第一であると蘇軾がしている人物である(第6章148ページ)

趙令時ちやうれいじの隨筆『侯鯖録こうせいりく』(本章153ページなど)に、このころにあったとする楽しいエピソードが記録されているのでここで見ておこう。

東坡とうばが維陽いよう(揚州)にいたときに、酒宴を設けた。集まった客人十余人はいずれも当時の名士であった。そこに米黻べいふつもいた。

酒半ばにして、米黻はいきなり立ち上がり、

「私にはいささか先生に申し上げたいことがあります。世間の人は皆、この馱^{フーテン}は 顛^べだと言
っております。このことについて、先生にはっきりと問い質したく思います」

と、言った。

東坡は、

「私も皆に賛成するよ」

と、言ったので、一同が笑った。

米馱^{べいふつ}にしばしば奇矯な振る舞いがあることは第9章1 ページなどでも見ている。この
とき米馱^{べいふつ}は首都の管轄内である雍丘^{ようきゅう}県の知事であったから、わざわざ訪ねてきたのだ
ろうか)

■書醉翁操後

沈遵^{ちんじゆん}という琴の名手が、欧陽脩^{おうようしゅう}（醉翁^{すいおう}）がかつて遊んだ滁州^{じょ}の瑯琊^{ろうや}を訪
ね、その風光を琴の音に写して「醉翁操^{すいおうそう}」という曲を作り、後に欧陽脩が
それに合わせて詞を書いたという顛末については第6章342 ページで見
ている。蘇軾^{そし}は、この欧陽脩の詞を書いて沈遵^{ちんじゆん}の子の沈濟^{ちんさい}に贈り、この短
文を添えた。沈濟^{ちんさい}は仏門に入り、法真^{ほうしん}禪師として秀州^{しゅう}にある本覺寺^{ほんかくじ}にい
た。

二種の水を同じ器に入れると、うまく合わないことがある。二人が琴と一緒に演奏
すると、うまく呼応しないことがある。沈遵^{ちんじゆん}は手にまかせて琴を弾き、泉の音とびたり

と合わさった。そして、欧陽脩おうようしゅうは筆にまかせて詞を作り、琴とびたりと合わさった。これはきつと真しんを同じくするからである。

本覚寺ほんがくじの法真ほうしん禪師は沈遵の子である。それで欧陽脩の詞を書いて贈る。静かに部屋に坐して、御自分で琴を弾いていただきたい。仏教に通じる師は、琴たけに工であって、詩も得手であるから、謀らずしてその三者の境界がないところに至るであろう。師よ、そのようになることを願っている。

元祐げんゆう七年四月二十四日。

■記子由言修身

弟が語った不思議な話を記録した文章。

弟がこのような話をした。

ある人が死に、そして生き返った。その人はあちらの世界で役人に尋ねた。

「どのように身を修めたなら、罪を免れることができるのでしょうか」

冥官めいかんはこのように言った。

「君は一冊の暦を手元に置いて、昼間にしたことを、夜になったら必ずこれに記すのだ。そして、そこに書かなかったことは言ってはならないし、してもいけないことを作って書いてもいけない。何もなければ静かに座っているのだ。このようにすれば一日があたかも二日のようになる。この方法で今日を過ごし、ずっと同じようにするなら、七十年生きたときには百四十歳になったことになる。人間世界において寿命を延

ばす薬としてこれより優れたものはない。悪いことは何もないし、薬代は全くかからない。この方法は人々の修得できるはずのものであるのだが、湯を使ってうまく飲み下すことができないのである」

げん ゆう

元祐七年四月二十五日。

（この一文は、何を言っているのかははっきりとは掴めなかったので、とりあえず日本語に置き換えただけである。きちんと日記を書けば、一日を二度たどることができて、身の振る舞いを顧みることもできるということなのだろう）

■陳伯修察院赴闕

ちん し しゃく あざな はくしゅう

陳師錫（字は伯修）が都に赴くのを見送った詩。蘇軾が陳師錫の学識と人柄を高く評価して特に朝廷に推薦したことから、察院（さつ いん かん さつぎょ し 監察御史）の一員として採用されたのだった。

しん そう

神宗皇帝はまことに天より下られた英主で、

筆を手になれば天の川が流れるばかりのありさま、

いにしへ

古の学問を重んじられ、

かん ぶ てい

漢の武帝が作った「秋風に辞」などはものの数にも入らなかった。

竜が飛び虎が走る勢いの前にあっては、

おじな

狸が豹に化けてみせたところでどうすることもできなかった。

私が窮したのは何かの定めによるものであって、

書いたものはきちんと評価してくださっていた。

貴君が試験を受けたときには、

お誉めの言葉を発せられ、

そのことはその日のうちに万人の口に伝えられ、

貴君と同宿していた人々は驚き倒れたのだった。

まさかそれから二十年もの間、

貴君が遅々として道を進まずにいるとは、

誰も思うはずのないことであった。

貴君が時世に対して呈する苦言は、

強い薬と同じく、目がまわるような作用があるために、

後になってようやく効力があると知れるのである。

世間における屈伸は手を裏返すようにすくに入れ替わるもの、

ところが、貴君だけはどういうわけか屈し続けた。

いまや皇居の四方の門がかりりと開かれた、

さあ、このときにこそ急ぎ行くがよい。

■送張嘉父長官

上の詩とともに、蘇軾がいかにも後輩思いであったかが知れる作品。張大

享きやう（字は嘉父）あざながどこかの知事として赴任するのを見送った詩。蘇軾は

7年前に、科挙に合格したばかりの張大享に会って詩を与えていた（第7

章 214 ページ)。

昔、都で貴君と知りあったのは、
駿馬が初めて車に繋がれたときであった(科挙に合格したことをいう)。
再び会ったのは江湖(田舎)においてで、
鷹匠の腕から飛び立った鷹さなからの勢いがあった。
いまは三度目、
貴君は常に前進して少しも留まることがない。
大木となるしるしはすでに明らかで、
立派な器は棚に置かれたままではいることはないのだ。
貴君は小さな官職に就いていた、
民衆は神に仕えるように貴君に従い、
よい包丁は、鶏だろうが牛だろうがみごとに捌いた。
そこより帰り来た貴君を私はますます敬い、
汎用性のある器はさらに広く用いられるようになるのである。
人生百年の旅を始めたばかりの貴君に対し、
私にはもう終わりの時期が迫っている。
それでも苦い言葉を貴君に寄せることだけはしておきたい、
「白髪頭になっても高い節義を貫くのだ」

■ 軾在潁州与趙德麟同治西湖未成改揚州三月十六日湖成德麟有詩見懷次韻

詩題は「私は潁州において趙令時（字は徳麟）とともに西湖の改修工事に着手し、完成しないうちに揚州に異動となった。工事は三月十六日に完了し、趙令時が詩を送ってきた。思うところを次韻の詩に記す」。

大きな山よりも大きなものはいくらでもある、

毛筋の先よりも小さなものはいくらでもある。

大きいとか小さいとか、所詮は比較の問題で、

大宇宙だって一粒の塵の中に納まってしまうのだ。

杭州の西湖と潁州の西湖をちまちま競わせたところで意味はない。

私は、杭州で湖の水域を広げ、長い堤（いわゆる蘇堤）を造った。

士女はその上で風景と美を争うようになり、

天の川（蘇堤）に架けられた六つの橋によって、北山と南屏山は初めてつながった。

二十五万丈の生い茂った水草を刈り取ったことで、

湖を覆っていた雲はすっかり取り払われた。

その後で私は潁水の西湖に来て、秋の風光に遊んだ。

竜神を祀った宮が水に面していても、

杭州の西湖には到底及ばぬほどに埋もれていた。

貴君に月の世界の斧を貸し、改修を任せた。

おうようしゅう

よう

欧陽脩は、かつて揚州から穎州に移ったときに、

「揚州の二十四橋の月を、穎州の十頃けいの西湖と取り換えた」

と、詩に歌った。

逆に穎州から揚州に来た私は、

早く再び西湖の風に吹かれないものだと思っている。

こちら揚州では雷塘らいどうも水が乾いてしまって農地となり、

かつて舟遊びに興じた風流人かんざしの釵かんざしが土から出てくるありさまだ。

貴君は、来年は揚州の古跡を訪ねたいと考えているようなので、

そのときには、冬の夜に悲しく鳴く虫となっている私を連れ出してほしい。

(蘇軾自身の注で、趙令時ちやうれい じのもとのの詩には、杭州こうの西湖せい こと穎州えいの西湖と雌雄を競うようなことと、来年には揚州に任地換えになることを希望していることが詠まれているとあり、この詩はそのことを踏まえている)

■次韻趙德麟西湖新成見懷絕句

上の詩と同じく、穎州えい せい この西湖の改修を終えた趙令時ちやうれい じ（字は德麟あざな とくりん）が詠んだ絶句に次韻した。

貴君から頂戴した「洞庭春色」の酒を飲み、

酔い心地のまま仙人に化し、

鶴にまたがって揚州ように来てしまってから、

いまさらながら独り茫然としている。

そちらにはなお貴君^{ちん し どう}と陳師道君がいるのだから、

同じ舟に私が乗るのを、

誰も邪魔立てできないはずであるのだが……

■再次韻趙德麟新開西湖

前に見た潁州^{えい し こ}の西湖^{せう し こ}の改修工事を終えた趙令時^{ちやうれい じ}（字は德麟^{あざな とくりん}）の詩にもう一度次韻した。

知事殿(蘇軾)は山のために困られることはなかったけれど、

水との相性はよろしくないのか、

泥水のなかを飢えた民が逃れてきたのを見て、

この凶年から治水によって民衆を救い出し、

「甕がからっぽだ」と嘆くのを免れさせようとしたのだった。

潁州^{えい し こ}の西湖は小さいとはいえ、

元来、この水は清らかで美しく変化するのであるから、

杭州^{こう かい}の西湖と同じく西施^{せい し いにしえ}(古の美女)にたとえてもよいはずである。

黄河^{こう がい}の工事に行くことになっていた万人を、

朝廷に願って州内に留めて飢民救済事業を行い、

その余力をもって西湖を浚い、

三つの水門しょう ひを作わって焦わい陂がから淮河わい がまでの水の流ながれをよよくした。

十年の間、塵にまみれて憔悴せうすいしていた西施しも、

きれいな水によって、涙の痕あとがすっかり洗あらわれた。

王孫おうそん(皇族の子孫である趙令時ちようれいじを指す)にはもとより仙人の素質そしつが具そなわり、

本来もとよりは明光宮めいこうきゅう(仙界と通じる宮殿)に宿衛しゆくゑいすべき人であるのだが、

ひとたび地方に去いって役人とななってからは、

雲に覆おほわれた朦朧もうろうの月のように、

世間からはそれと知しられぬ身とななっている。

氷雪に耐たえるその顔かおを西湖の水に映うつし、

いたずらに白髪はくはつを増ふやしてばかりいるのではなく、

必ずや大きな事業じぎやうを為なして民を富ふまし、

さらには天帝てんていのために竜りゆうの棲すまむ池いを開ひらくでああらう。

とにかくにも西湖の改修かいしゆが完了わんりゆうしたいま、

貴君ききんは皇帝てんていのもとへと帰かへって行いくに違ちがいない。

その兆しやうしは我が灯火とうかにすですでに現あられているのである。

(最後の句は、灯火にたまった蠟ろうの形かたちから吉凶きうきんを知しるといいう、非常にポピュラーでああつた占うらないの方法はうほうを引ひいている)

■到官病倦未嘗会客毛正仲惠茶乃以端午小集石塔戲作一詩為謝

詩題は、よう「揚州に着任してから病気がちで、客人と会うことがなかった。

毛漸（字は正仲）が茶を贈ってくれたので、端午の節句に石塔寺で小さな集まりをもった。戯れに一首の詩を作って毛漸への謝礼とした」。このとき毛漸は揚州にいたわけではなく、別の地から茶を贈ったようだ。石塔寺は揚州の有名な寺（第7章201ページ）。

私の生きざまは取るに足りない。

腹を満たしてやりさえすれば、

あれやこれやの思いは消えてしまうのだ。

何のことはない、

一丈四方のちっぽけな住まいを設けて、

一寸の厚さもない舌をどうにかして養おうと、

あたふたしているだけなのである。

ここのところは病み衰えて、

昼を過ぎて物を食べるとたちまち噎せてしまう。

そんな私がどういう誤りによるものなのか、

揚州知事になったのだが、

恥ずかしいことに、厨房にはいつもに物が不足し、

米を炊くにも薪がろくにない。

だから、お上から大事なお仕事を授かって、

あれこれ気苦労するだけの元気さもないのである。

そこに貴君は、

赤く封印をした紫玉珎^{しぎよくけつ}(茶の名)をわざわざ贈ってくださった。

貴君のことを思い、

端午の節句に際して、御馳走や歌舞に代わる楽しみを持つことにした。

いま、寺の窓には午後の日が麗らかに当たり、

蜀井^{しよくせい}(石塔寺にある井戸)からは氷雪のような水が汲み出されてきたところだ。

集まった客人は皆がひとかどの人物で、みごとな手さばきで茶器を扱い、

金の釵^{かんざし}の女性が湯の番をしてくれて、秘訣通りの加減をちゃんと心得ている。

かくてこの一日を、色、香、味の三絶が揃った茶を飲んで過ごすのである。

貴君にお報せしたいのは、

軽々しく雑に飲んで、

せっかくの授かり物を虚しくするようなことはなかったということだ。

(このときの茶会には副知事の晁補之^{ちやうほし}も参加して、蘇軾のこの詩に次韻している)

■賀立皇后表

哲宗皇帝は17歳になり、皇后となる女性が定められ、5月16日、立後の式典が行われた。蘇軾はそのことを祝う文章を記して朝廷に提出した。皇后になったのは、代々宋朝に仕えてきた名家の孟在^{もうざい}の娘で、16歳で宮中に入り、高太皇太后によって特に選り出されたのだった。孟氏はこのとき20歳であつた。

(1) 哲宗皇帝は9歳で即位してから、政治の実権は高太皇太后のもとにあり、皇后選りも太皇太后の意思によって決められ、皇帝は完全に太皇太后のコントロールのもとに置かれていた。青年を上から強く押さえ付けると、その反発が大きくなるであろう。

(2) 立后を祝う蘇軾のこの文章は、類型に従って厳かな言葉を並べたもので、内容的に特に興味を引くところはない。それでも蘇軾ならではのところがあるとの評がある。残念ながら訳者にはこの種の文章を読解する力がなく、おぼろげにわかるようなところを繋いでここに訳出する)

臣^{わたし}は申し上げます。伏して制書^{せいしよ}を見ますに、今月十六日、皇后をお立てになる礼がありましたとのこと。……臣^{わたし}が聞きますに、三代(古代の理想の時代)の興隆も皆内助^{なの}があつてことであります。……民^{たみ}の恃むところのものはただ邦^{くに}が永く栄えることであります。恭しく思いますに、皇帝陛下は自ずから誠^{せい}にして明^{めい}であり、……すでに大慶を受け、ますます仁の至りを広められ、天下の隅々までも、夫婦にして愁嘆しなければならぬ者はいないのであります。上は天の造化と一致し、日月と等しい光明を放っておられます。無窮の恵みを受けて、民と楽しみを同じくするであります。

(内容の乏しいこの祝文を、まともに訳せもしないのに取り上げたのは、皇后となった孟氏^{もう}が後に数奇の運命をたどり、数百年後のジャンヌ・ダルクにも匹敵する活躍をして、あたかも「無窮の恵み」をもたらしたことについて、蘇軾とは直接関わりのないことではあるけれども、ここに略述しておきたいと思ったからである。高太皇太后はことのほ

か孟氏が気に入ったようで、皇帝に向かつては、「賢い内助（妻）を得ることは、非常に大事なことなのです」と言い、また孟氏を見て、「この子はまことに賢淑であるけれど、惜しいことに福が薄いようだ。しかし、国家にもしものことがあったときには、必ずこの子がどうにかしてくれるだろう」と言って嘆息したという。孟氏が皇后になって1年余りで太皇太后は亡くなり、上からの重しがなくなった哲宗皇帝はあからさまに別の女性を寵愛するようになり、孟氏はあらぬ罪をかぶせられて皇后の位を廃され、道士にさせられた。哲宗が長生きをしたなら、孟氏はそのまま宮中の道観で人知れず一生を終えたのだろうが、哲宗はわずか24歳で亡くなり、孟氏はその後名誉を回復し、皇后となったときの元号である元祐^{げんゆう}にちなんで元祐皇后と呼ばれるようになった。しかし、徽宗皇帝^{きそう}によって再び廃され、またしても道士にさせられた。このような変転は新法党と旧法党の政権争いと連動していて、旧法党の政権下で皇后に定められた孟氏は新法党政権下では阻害されたのだった。孟氏が皇城内の道教の寺院にひっそりと暮らしていたときに火事が起こり、孟氏は歩いて（つまり自力で）実家に避難し、そのままそこに留まった。1126年、孟氏が55歳のとき、宋の都は、北から攻め込んできた金軍^{きん}の猛攻を受けて陥落し、都にいた皇族は全て北に連れ去られてしまった。孟氏だけは難を逃れ、金軍が去った後に皇后として復位し、都にいる唯一の皇族として宋朝の継続性を保持するシンボルとされ、都の外にいてやはり難を逃れた皇弟の趙構^{ちようこう}に自ら詔書を記して送り、皇帝として定めた。かくして、宋朝はかろうじて皇位の継承を行うことができた。当時、民衆の反乱が相次ぎ、速やかな皇位継承がなければ国は求心力を完全に失ってしまうところであった。新皇帝（高宗）のもと、宋朝は金軍と戦ったのだが、圧倒的

な軍事力の前に国土の大半を失いかげ、孟氏は宋朝の精神的支柱として各地を転々としつつ人心を鼓舞し続けた。こうして宋朝はかろうじて南中国を確保することに成功した。しかし、宋朝の権力基盤は不安定で、自軍のクーデターによって高宗が無理やり退位させられる事件が起こった。そのとき、孟氏の指揮によってクーデターを短期間で鎮王することに成功した。まさに高太皇太后の言葉通りに国家の危難を救い、宋代の皇后の中で最も大きな活躍したのであるが、元来は真まじやかな性格で、権力を弄ぶようなことは一切なく、「民と楽しみをともにする」ことを喜んだのだった)

■論積欠六事並乞検会応詔四事一処行下状

よう揚州に赴任してすぐにばん か かい万花会を中止したのは確かに民衆のためになることであった。それくらいのことなら知事の一声で容易に実行できたのだが、蘇軾はこう杭州知事として都の外に出て以来、国家にとっても民衆にとっても遥かに大きな事象について、災害対策の他にも幾つかの問題を朝廷に指摘してきていた。これは揚州に来て1カ月余りのときに朝廷に提出した意見書。

(残念ながら、訳者は当時の社会制度に疎く、蘇軾が提起する政治課題を十分に理解するだけの力がない。ここで取り上げる文章は『唐宋八大家文集』に収録されていて日本語の注釈書もあり、なおかつ非常に重要な問題であることから、まことにおぼつかない訳文でありながらもここに掲げることにする。ここで蘇軾が提示しているのは「積欠」せきけんの問題である。「積欠」とは、国に支払うべき税などの滞納分が積み重なったもので、

それがとりわけこの時点で問題視されたのには次のような事情がある。王安石が始めた改革において、自営農や中小の商人を守るために、国が低い金利で資金を貸し付けて、税とともに利息分も含めて回収する制度が作られた。それは、高利の民間資金を借りて破綻してしまう自営農や中小の商人が相次いだことを受けて、大地主や大商人を抑制して大多数の民衆を救済し、なおかつ国の財政収入を増加させるという一石二鳥を狙った、非常に優れた仕組みであった。王安石が発案したときに、保守派（多くは大地主や大商人の利益代表者）はこれに強く反対したのだが、新制度が運用されると、改革派の目論見通りに国の財政状況は一気に改善された。ただし、国が貸し付けた資金や利息の返済が滞った場合にどのようにして回収するのかということについて十分な配慮がなされていなかった。返済は税の徴収時に上乘せすれば国としては簡便であるのだが、一旦滞ったりすると、そこに旧中国の官僚制度にもとから具わっていた欠陥がからんで、民衆をひどく苦しめることになった。旧中国の官僚は大きく官人（科挙の合格者を中心とする高級官僚）と吏人（主に地域ごとに採用された下級官僚）に分けられ、官人には国から俸禄が支給されたが、吏人には定まった給与がなく、各種手数料を収入源としていた。国家による貸し付けや税の徴収はなかなか煩瑣な仕事であるから、吏人にとっておいしい稼ぎの場となった。例えば、必要としていない者にも無理やり貸し付け、それによって吏人は手数料を得て、国は利息分の収入が増えるという、「一石二鳥」の妙手がしばしば採られた。こうしたことが様々にあって、「賁欠」の重荷を背負わされた人が大量に発生してしまったのである。保守派が政権を握ると全ての新法が廃止され、国が資金を貸し付けるということはなくなったのだが、「賁欠」はそのまま残った。この問題を

解決する抜本的方策としては、負債の支払いを猶予するか免除するしかないのは明らかで、朝廷はそうした指令をしばしば発した。しかし、それは実効性を伴わず、多くの人は「責欠」に苦しまされ続けた。蘇軾は杭州知事になるとすぐに「責欠」について具体的に六つの問題点を朝廷に指摘し、早く対策を取るよう提議した。しかし、朝廷は民衆の苦しみを他所に、何も対応しなかった。蘇軾は新たに四つの問題点を具体的に詳細に指摘して、先の六つの問題点とともに早急に対応するよう朝廷に迫った。それがこの文章である。表題に「六事」と「四事」とあるのがそのことである。訳したのは、「六事」と「四事」の具体的記述の前に置かれた総論部分である)

元祐七年五月十六日、竜図閣学士左奉^{りゅうと}郎知揚州蘇軾^{かくがくし}、書状をもって奏上^{さうほうちようちようしゅう}いたします。

臣^{わたし}が聞きますに、孔子^{こうし}はこうに言っています。

「善^よき人が民を七年間教えるなら、民を兵役につかせることもできる」

民がすでに富み、そして教え導^いくなら、その後には兵役につかせてよい(十分な教化が及んだなら、民衆は戦場に行くような苦役にも甘んじて耐えるようになるという意味)といっているのですが、古の「善^いき人」とは、聖人に及ばないこと非常に遠い人々のことであります。

いま二聖(皇帝と太皇太后)が臨御され、ここに八年となり、仁孝慈儉は至れり尽くせりといつてよいものがあります。しかしながら、官の財貨、米穀の蓄えは日に日に苦しくなり、農民は日に日に貧しくなり、商売はさびれ、水害と干害が相次いでいます。

上に聖人の資質がありながら、「善き人」ができるとされた効果が出ていないので
わたし
す。臣は竊かにこれを痛むものであります。

わたし
臣は行く先々で土地の老人や知識のある士人を訪問し、こうしたことになっている理由を探ってまいりました。人々は皆このように申しております。

「今では民は寛やか ゆる 政 まつりごと のおかげをこうむり、他に疾苦するものはないのですが、ただ積欠 せきけん によって圧迫されております。それは千鈞の重みを背負って歩むようなもので、倒れてしまわなければ幸いでありまして、ひとまず腹を満たすことのほかには、顔を上げ腕をふるって何かをするということができずにあります」

土地の豪族として富んでいた家で、昔は肩を並べる者がいないと評判であった家でさえも、(新法の一つである) し えきほう 市易法ために破綻して、十に一つか二しか残っていないありさまとなっています。その他の庶民にはおおむね積欠があります。

監督官庁は地方の知事を督促し、知事は吏卒(下級役人)を督促し、かくて民衆の家には負債の督促状が毎日のように届き、その身には毎日のように鞭 むち が加えられ、たとえ古来有名な富豪であってもたちまち襁褓家住まいに陥ってしまうのであります。宋朝が始まってから、負債免除の赦令が出されるときには、必ず次のように布告されてきました。

「官に納めるべきものに不足があっても、官を欺いたり盗みを働いたりしたことがない者、また、以上のことがあっても、本人並びに連帯する関係者に家業のない者は免除する」

宋朝の始まりから官物に損失が生じ、悪事を為した民が免除されることの弊害を

知らなかったわけではありません。ただ、民がすでに欠乏して、生きるすべもないのに、いくら鞭で打ったところで何も得るものがなく、中途半端に緩めるなら吏卒が間で悪さをし、逆に、取り立てをひたすら厳しくするなら民は盗賊に流れ込んでしまうので、それで一律に免除したのであります。天下はその方策に喜んで服し、水害や旱魃があっても民は反乱の勃発を心配することがなくすんだのであります。これは名目上の正しさを捨てて実利を取ったというべきものであります。

二聖が臨御されてから、過去の負債を免除することを常に先務としてまいりました。陛下が即位されたときの赦令や、天を祀る儀式の際に毎回出された赦令があり、さらに事に従って政を寛く^{ゆる}厚くすることを指揮されてきました。いま督促をしないでよいとされているのは全体の六割から七割にも及び、それは聖恩によって民に与えられたものなのであります。しかし、官吏は刻薄にも、聖意とは異なって、法文を都合よく運用し、巧みに偽りを為して、免除する対象には当たらないとしてしまっています。監督官庁は督促することが業務であると心得、知事は監督官庁から迫られるままに動き、民衆は吏卒の為すがままとなっております。監督官庁が県ごとに千の家を督促するなら、県の吏卒はその業務によって日銭が稼げると喜びます。もし免除するとなると、吏卒は得るものがなくてがっかりしてしまいます。財産のある家で、吏卒に賄賂を渡して法の運用を曲げてもらうようにしてもらわない限りは、誰も免除の恩を受けることができないのです。積欠のある人々は皆が寒さや飢えに迫られ、賄賂など渡すことができません。かくて貧困が極まってもはや何も取り立てられなくなると、県の吏卒は積欠のない者を新たな標的にして、あるときは私的に他人のも

のを抵当にしているとか、不当な売買を行っているとか、何かしら事を作り上げて取り立てを行うのです。こうしたことが蔓延して甲から乙に、乙から丙に及んで、極まるところなく広がって行くのであります。かくて人々は督促の期限ごとに空の身で役所に出向くことになり、数回の期限を経てもせいぜい百銭とか二百銭を納めるのが関の山で、これを「破限」といっています。官の得られるものはごくわずかしがなく、しかし、吏卒は日に日に銭を得ているのです。こうして苦しんでいる民のことを俗に「けんしよ しよくゆう こ県胥の食邑戸」(県の下級官吏の領地の民)と呼んでいます。

ああ、聖人が上にありながら、民は陛下のせき し赤子となることができずに、皆悪い吏人の「食邑戸」となってしまうのです。ここにはいったいどのような道理があるのでしょうか。

商人の販売は通例として現金では清算されていません。現金であるなら利息がありません。今年は去年売った物の分を清算し、来年は今年売った分を清算します。かくて利息の計算が行われて、商人は利を得るのです。いま富んだ家が最初に破産し、中程度の民に積欠があるなら、誰が商品を買ったりするでしょうか。商売は自然に行われなくなってしまいます。これが国の酒税が日に日に減り、町に商店がなくなってしまう理由なのです。

各地で毎年のように水害や干害があることは上下ともに知るところであります。しかし、てんうん し転運司(運輸財政担当の部署)は運用する資金の不足を心配し、敢えて税収のあるものを手放そうとはしません。たとえ免除をするとの文言があっても、その実態は違っています。あからさまに取り立てるよう文書で指示することなくとも、転運司が怒

りの顔を見せるなら、官吏はその意味するところを悟って、上の者の意に反するようなことはしません。県はとにもかくにも税金の取り立てに走ることにになり、しかし、結局のところ、徴収できるのはわずかしがなく、それは初めから免除したのと比べて何ら変わるところがないのです。官においては益するところがなく、民においては急き立てられ、鞭打たれる苦しみがあるのです。

近頃の詔旨で、積欠は十回に分割して通計五年で納めるようにとの御指示が出されました。聖恩の隆厚はこれ以上のものではありません。しかし、担当部署は、特に指定した者は十回に分割するが、その他の者はいままで通り一回で取り立てるとしています。たとえ全てを十回に分割するように定めたとしても、吏卒は必ず利を求めて一括して取ろうとします。民衆が全てを完納し終わらない限りは、いつまでも騒ぎが続くのであって、たとえ百回に分割したところで、一回で取るのと変わるところがないのです。

臣は近頃、杭州知事となり、また潁州知事となって、今は揚州知事です。自身で両浙、京西、淮南の三路の民を見てまいりましたが、皆が積欠によって圧迫され、日ごとに窮迫し、半分以上が死ぬばかりの状況にあります。それでも税の未納者の名簿に載せられたままで、税収は欠乏して官は大赤字に陥り、農業も商業もいずれも病み、公私ともに苦しんでおります。このことから推量するに、天下はどこも同じようになっているのでありましょう。

臣は潁州から揚州に移る際に、濠州、寿州、楚州、泗州などを通りましたところ、どこも麦や麻が成長して雲のように土地を覆っていました。臣はいつも吏卒を退け、

親しく村落へと入り、父老を訪ねて問うたのでありますが、皆が憂い顔でこのように申しておりました。

「豊年は凶年に及びません。天災に襲われても、我等は食べる物には不足しますが、衣食を我慢するなら、なお生きて行くことができます。豊年には、積欠の取り立てが厳しく、役人が家に押しかけてきて、棒で打たれたり首かせをつけられたりします。我らは死んでしまいたいくらいになりますが、それもできません」

言い終わるととともに涙を流し、臣もまた不覚にも泣いてしまいました。

また行く先々の町にはたくさんの流民がいました。官吏は皆こう言っていました。

「夏の麦が成熟すると、積欠の督促があります。それで流民は郷里に帰ろうとしないのです」

臣はこれを聞いて孔子の言葉を思い出しました。

「苛政は虎よりも猛なり」(酷い政治は虎よりも猛猛である)

かつて私はその言葉をまことであるとは思っていませんでした。いまの状況を見ますに、ほとんどそうであると言ってよいでしょう。水害、干害は虎よりも百倍も多く人を殺します。しかし、人はいま水害、干害よりも積欠の催促を畏れているのです。

臣が竊かに推測しますに、州ごとに積欠の催促をする吏卒は五百人はいるでありましょう。天下全体には、つまりいつでも二十万頭以上の虎が民衆の間にいるということになるのです。これで民はどうして安らかに暮らせるのでしょうか。朝廷の仁政がこれでどうして実現できるのでしょうか。

臣は揚州に着任してから、本州の積欠を専ら調査してまいりました。免除せよとの

通達がすでに朝廷から出ていながら、本州において官吏がそれを行っていない事例がありましたので、臣はすぐに免除を徹底するよう指示しました。そして、実際には免除すべき状況にあって、まだそれが明文化されていない事例については、本州において仮に免除するように指令を出して、督促を止めて、朝廷の指示を仰ぐのを待つようにしました。実情において免除すべきであっても、法令に照らして差し違えがある事例については、臣はまだ督促を止めておりません。それぞれの事態に応じて朝廷の御指示を仰ぐものであります。

……(以下、具体的に「六事」「四事」を記述する)

(蘇軾はさらに 1 カ月後に朝廷の早急の決断を促す文書を提出し、ようやく蘇軾が具体的に問題を提起した 兩 浙路、京西路、淮南路を対象に積欠の免除を指示する旨の詔が発せられた)

■減字木蘭花

旧暦の五月は夏の盛り、そのときこの詞を詠んだ。短い序文がある。

五月二十四日、晁補之の随齋に集まった。主人は、泉の水を汲んで大きな鉢に入れ、そこに白い芙蓉の花を浮かべた。座中がひんやりとし、暑さを厭う気持ちがすっかり消え去った。

(ここで芙蓉とあるのは蓮の花のことだという。揚州副知事の 晁補之が、なかなか粋な趣向で蘇軾を書齋に迎えたのである)

回風落景。(風が回って夕日が揺れます)

散乱東牆疏竹影。(東の垣根でまばらな竹の影が乱れます)

満座清微。(たちまち一座がすがすがしく変わります)

入袖寒泉不湿衣。(冷たい水が袖から入ってきて、でも衣は湿りません)

夢回酒醒。(夢がめぐって酒から醒めます)

百尺飛瀾鳴碧井。^{あお}(碧い井戸が鳴り、水が百尺の高さへと飛び上がります)

雪灑水麾。^こ(雪がそそぎ、氷が降ります)

散落佳人白玉肌。^よ^{ぎょく}(それは佳き人の玉のような白い肌(蓮の花)に散り落ちるのです)

(最後は詞らしく、ちょっと色っぽく詠んでみせた。晁補之^{ちやうほし}のもてなしに対する小粋な謝礼というわけである)

■乞賻贈劉季孫状

かつて杭州^{こう}で親しくし、隰州^{しつ}知事となって赴任する途中で潁州^{えい}に立ち寄って旧交を温め合った劉季孫^{りゅうきそん} (字は景文^{あざな けいぶん}) (本章 148 ページなど) が、この頃に任地先で亡くなった。それから 5 カ月ほど後に、蘇軾は、遺族^ゐへ賻贈^{ぞう} (喪に服している家族への贈り物) を賜うよう朝廷に願い出た。順序が前後するがその文書を見ておこう。

元祐七年十月某日、竜図閣学士左朝奉郎守兵部尚書の蘇軾は書面をもって申し上げます。

臣は竊かに聞きますに、仁宗皇帝の御代に(西夏国の)趙元昊が寇をなし、延州が危急に陥りましたときに、環慶将官の劉平だけが一軍を率いて救援に向かいま
した。しかし、衆寡敵せず、しかも悪い大臣どもが救済策をとらなかったために、劉
平はついに敵に捕らわれ、賊を罵りつつ、何も食わずに死んだのでした。

劉平は死後、詔をもって侍中の官位と屋敷を賜り、その子慶孫、貽孫、宜孫、昌孫、孝孫、保孫、季孫の七人が官職を授かりました。劉平の子はいずれも優れた才能がありながら、顕著な働きをする前に短命をもって終わり、賜った屋敷は主を変えてしまい、家族は狼狽いたしました。ただ劉季孫だけは文思副使(武官の名称)にまでなり、六十歳に至りました。志 篤く学問を好み、広く歴史に通じ、詩が巧みで立派な文章を書き、利を軽んじて義を重んじ、軍政に練達して忠義勇烈の至りでありますことから、識者は劉平とそっくりであると申ししておりました。本性として異書、古文、石刻を好み、仕官してから四十余年、賜るところの禄を尽く蔵書に費やしてきました。

近頃、劉季孫は朝廷によって隰州知事に拔擢されましたが、今年五月、官所において死去しました。家にはわずかな米の貯えもなく、妻子は寒餓に苦しみ、故郷への旅の困難を嘆いております。今は晋州に身を寄せていて、劉季孫の棺は行き場を失っております。

臣は劉季孫とはかねてからの知り合いであります、これだけの才気を具えた者

が、死んで半年も経たないうちにかくも妻子が流落してしまっていることを哀しむものであります。また、その父劉平が忠義をもって死んだことが語り継がれていながら、その四十年の後に子孫が落ちぶれて官職に就く者もない状況になってしまったことを哀しむものでもあります。これは朝廷^{こてい}の意であるのでしょうか。

今の執政や高官には劉季孫のことを知っている者が大勢います。もしお尋ねいただけますなら必ずその実情がおわかりになりましょう。臣が望みますのは、朝廷が特別な詔^{ふ ぎょう}をもって賻贈を与え、妻子を朝夕の饑寒の憂いから救い出してくださることとあります。また、忠義をもって死んだ者の子孫に歳月を経ても朝廷より恩愛を賜りますことは、忠義を勧める道となりましょう。劉季孫の子の劉璣^{りゅうきん}は三班借職^{さんはんしゃくしやく}(武官の最低の位)にあつて現在都におります。早くに御指示を賜りますようお願いいたします。謹んで申し上げ、敕旨をお待ちするものであります。

■双石

蘇軾はなかなかの石好きであつて、揚州^{ようしゅう}において二つの石を得て、この詩を詠んだ。序文がある。

揚州^{ようしゅう}に至って二つの石^{いし}を獲た。一つは緑色で、岡や山が巡るような形状で、穴があつて背に達している。もう一つは真っ白で、鏡にしてもよいくらいである。

これらを鉢の水に漬して机の脇に置くと、いつも思い出すのは、潁州^{えいしゅう}にいたときに見た夢。ある人が、とある官舎に住むよう私に言った。そこに掲げてある額に「仇池^{がく きゅうち}」

と記してあった。覚めてから杜甫の詩を口ずさんだ。「万古 仇池の穴、潜かに通じ
る小有天」。

このことを戯れに詩に詠み、同僚の笑いに供しようと思う。

(仇池を夢に見たことは本章 177 ページでも触れている。仇池には仙界 (小有天)
に通じる穴があるという)

夢においては、それが確かなことであるとして見ている、

夢から覚めると、それは何もない。

水を汲んで鉢に注いで石を漬す、

自分でも笑ってしまうくらいにかいがかいしく世話をする。

白い石に見るのは、

太白山の峰が玉のように輝きつつ横たわる姿、

緑の石に見るのは、

峨眉山の手前で鳥の通う道も絶えてしまうありさま。

秋の風は霧を生み、雲を湧き立たせ、

暁の日は草や木を包み込む。

一点の穴から、からりと広がる空間、

それはどこなのか。

老人(蘇軾)は夢ではなくまことに仇池に住もうと思っている。

(この仇池の石はこの後、何度か登場する)

■和飲酒二十首

「詩に和す」とは、唐の中頃までは、同じ主題で詩を詠むことを意味し、必ずしも韻を揃えるものではなかった。次第に、より難易度を高めて技量を競い合うのを楽しみとするようになったのだろう、和すとは次韻とほぼ同じ意味になった。次韻は知的遊戯性の高い行為で、恐らくは古今第一の次韻の達人といってよい蘇軾の実例を数多く見てわかるように、同じ韻字を同じ位置でそのまま使用するという制約を克服するためには、数々の故事を繋ぎ合わせるといった技法を駆使することになり、仲間同士でその巧みに感心し合うのは楽しいのかもしれないが、作品としてはまとまりに欠けたあまり面白味のないものになってしまいがちである。次韻詩というジャンルには特段の文学的可能性はないと見るべきであろうが、さすがに達人は違い、ここにおいて空前絶後の豊穡な作品群を生み出すのであった。これがその最初の作品である。

陶淵明とうえんめいに「飲酒二十首」という連作があり、蘇軾はその全てに和した、すなわち次韻した。これまでも、蘇軾が陶淵明の作品に触発されて詠んだ詩や詞を見ているが、陶淵明とうえんめいへの傾倒が昂じてついに次韻するに至ったのである。蘇軾は、自ら白居易はくきょいと似ているとしばしば言い、杜甫とふや韓愈かんゆの詩にも深い思いを寄せてはいても、陶淵明は別格であった。この「飲酒二十首」を手始めに陶淵明の作品の数多くに和して行くことになる。陶淵明

の詩は平易な言葉で静かに深い内容を歌い上げるのが特色で、蘇軾はそれをそっくりそのまま生かして次韻し、数百年といった時空を超えた達人同士の魂の共鳴ともいえるような唯一無二の奇跡の作品群「和陶詩」が生まれるのだった。そのことがよくわかるように、2人の詩を交互に掲げることにする。

とうえんめい

(陶淵明の詩については、おもに松枝茂夫・和田武司訳注『陶淵明全集』上下、岩波文庫(1990年)に依拠して訳文を作成した)

序文とうえんめい(陶淵明)

私は閑居の身で、しかもこのごろは夜を長く感じるようになった。たまたまよい酒があるのなら、飲まずにいる夜はない。我が景を顧みながら飲み尽すと、たちまち酔い心地になる。酔ったの後は、いつも数句を記して自分の楽しみとしている。紙や墨をたくさん使うけれど、できた詩句に順序立ったものはない。ともあれ、よく知る人に書いてもらったので、笑いの種にでもしていただきたい。

序文(蘇軾)

私が酒を飲む量は至って少ない。それでも、いつも杯を手にするのを楽しみとし、しばしばぐったり頽然と居眠りをしてしまう。人はそれを見て酔いつぶれたと思うのだが、私の心の中ははっきり了然している。だから、この状態は、酔っているとも、醒めているとも、どちらとも言い切れないのである。

私は揚州^{よう}にいて酒を飲むときには、正午になるとやめにして、客人には帰ってもらい、衣服をゆるめ、足を投げ出し、その後の一日を過ごす。酔っての飲みというのは十分ではないのだろうが、あり余る心地よさがある。

ここに私は陶淵明の『飲酒二十首』に和してみた。酔っているとも醒めているとも言切れない境地をぼんやりとでもよいから詠んでみたいと思ったのだ。

これを弟と晁補之^{ちやうほし}に示す。

(このとき晁補之^{ちやうほし}は揚州副知事として蘇軾のすぐ近く^{よう}にいて、弟は都で副宰相の任にあった)

其一(陶淵明)

衰榮無定在、(衰えと栄えは、それぞれが定まったところにあるのではない)

彼此更共之。(それとこれとが交互にしかもともに存在しているのである)

邵生瓜田中、(漢代^{かんたい}の邵平^{しょうへい}が瓜畑にいたときと)

寧似東陵時。(かつて秦代に東陵侯として高い地位^{しんだい}にあったときとは似ても似つかなかった^{とうりやうこう})

寒暑有代謝、(寒さと暑さは交替するものである)

人道每如茲。(人の道もいつもそれと同じである)

達人解其会、(達人はそこに道理があることを理解しているので)

逝將不復疑。(疑うようなことはしなくなる)

忽与一樽酒、(たまたまひと樽の酒があるときには)

日夕飲相持。(夕方になると飲んで酒とともにいる)

((1) 高い地位を棄てて瓜を作る農民になった邵平しょうへい (あるいは召平しょうへい) の故事は、第6章15ページ以来何度か見ている。(2) 其の一は「飲酒」という題の連作の序曲のような趣があり、蘇軾が和した次の作品も同様である)

其一(蘇軾)

我不如陶生、(私は陶淵明先生に及ばない)
 世事纏綿之。(世の中のあれやこれやにまどわりつかれている)
 云何得一適、(己に適したことが一つでも得られたならば)
 亦有如生時。(生まれたときのようになるであらうか)
 寸田無荊棘、(我が一寸の田(心を指す)に雑草がないのなら)
 佳处正在茲。よ(佳きところとは、まさにそこに存在するのである)
 縱心与事往、(心を自由にさせて成り行きのままに往ゆくなら)
 所遇無復疑。(何に遇おうともそれを疑うことはない)
 偶得酒中趣、(たまたま酒の中で興味が得られるかもしれないので)
 空杯亦常持。(いつでも空の杯を持っているとよい)

其二(陶淵明)

積善云有報、(善を積むとその報いがある、という)
 夷叔在西山。いりしえ はく い しゅうせい せいざん(しかし、古の伯夷と叔齊は義を守って西山に隠れ、餓死してしまった)
 善惡苟不応、(善にも悪にもそれぞれ相応の報いがあるかもしれないのなら)

何事空立言。(どうして空しい言葉を作ったのだろうか)

九十行帶索、(古の啓栄期は繩を帶の代わりにする貧乏で、九十歳を過ぎからも)

飢寒況当年。(飢えも寒さも平気であったのだから、若ければなおさらであった)

不頼固窮節、(つまり、大事なものは貧窮にあっても節義を守る「固窮の節」であって)

百世当誰伝。(それによらなければ百世の後にも名が伝わったりしないのだ)

(「貧は士の常なり」と言っ^{けいせい き}て九十過ぎまで何の憂いもなく生きたという啓栄期は陶淵^{とうえん}

明^{めい}が好む人物であり、^{こきゆう}「固窮^{せつ}の節」は『論語』にある「君子は固^{ろん}より窮^ごす」に基^{もと}づき、^{きゆう}

陶淵明がよく使うキーワードである)

其二(蘇軾)

二豪詆醉客、(昔、酒自慢の風流人を叱りにきた二人の豪傑がいた)

氣湧胸中山。(その氣概は胸の内に山が湧くかのようであった)

濯然忽冰积、(それとて、氷がぼたぼた解けるように言い負かすには)

亦復在一言。(次の一言がありさえすればよいのだ)

嗇氣實其腹、(心を虚しくするなら腹は満ちて)

云当享長年。(長生きができるのだ)

少飲得径醉、(少し飲むだけでたちまち酔う)

此秘君勿伝。(これこそが心を虚しくする秘訣で、人には教えたくないものだ)

(陶淵明の「飲酒二十首」は必ずしも酒がテーマではなく、其の二には酒が出てこない。

蘇軾は酒の主題を発展させている)

其三(陶淵明)

道喪向千載、(道^{みち}(正しい道理の実践)が喪^{うしな}われて千年になり)

人人惜其情。(人々は真実^{こころ}の情を出さないようになった)

有酒不肯飲、(酒があっても取^とりて飲^のまなかったりするの)

但顧世間名。(ただ世間で己の名がどのように取り沙汰されるかを気にしているからなのだ)

所以貴我身、(我が名を貴ぶ理由も)

豈不在一生。(せいぜい己の一生の間のものでしかない)

一生復能幾、(一生とはどれほどなのか)

倏如流電驚。(稲妻があつと驚かすくらいに長さしかない)

鼎鼎百年内、(百年とて鼎鼎^{じわじわ}と止まらずに過ぎて行く)

持此欲何成。(情^{こころ}を出さずにいたままで何ができるというのか)

其三(蘇軾)

道喪士失己、(道^{みち}が喪^{うしな}われて士^{ひと}は己を失った)

出語輒不情。(語^{ことば}を出してもそれは真^{こころ}の情ではない)

江左風流人、(風流を自認した南朝の人々は)

醉中亦求名。(酔っているときにもよい名の立つのを求めている)

淵明独清真、(陶淵明だけは独^{まこと}り清らかな真を貫き)

談笑得此生。(酔って談笑する間に己の生を確かに得たのだった)

身如受風竹、(その身は風を受ける竹のようであって)

掩冉衆葉驚。(たぐさんの葉がざわざわと驚きつつも、竹はしなやかに風を受け流す)

俯仰各有態、^{ふぎょう}(俯仰する一瞬の間に万物はおのおのの姿を見せる)

得酒詩自成。(酒を得れば、そこに自ずと詩がてきあがるのである)

(6 句目にある「得此生」(此の生を得た)は、後に見る陶淵明の其の七に出てくる)

其四(陶淵明)

栖栖失群鳥、^{おたおた}(群れから離れてしまった鳥は栖栖として)

日暮猶獨飛。(日が暮れてからもなお独り飛んでいる)

徘徊無定止、(止まるのはここだと定めるところがないままに、あちこちをさまよい)

夜夜声軫悲。(夜な夜な、その声は悲しさをましてゆく)

厲響思清遠、(激しいその響きは、清らかな遠いところを思っていて)

去来何依依。^{うじうじ}(行き来するありさまは何とも依依としている)

因值孤生松、(鳥は一本の松と出会って)

飲翮遙来歸。(遙かなここに翼をおさめて帰り来ることができた)

勁風無榮木、(強い風に、葉の繁る木はもはやほかになく)

此蔭独不衰。(ただ松の蔭だけが衰えずにある)

托身已得所、(身を託すところをすでに得たからには)

千載不相違。(千年経っても離れることはないのだ)

其四(蘇軾)

蠢蠕食葉虫、(もそもそとうごめいて葉を食らう虫は)

仰空慕高飛。(空を仰ぎ見て、高く飛びたいと焦がれている)

一朝伝両翅、(ある朝、二枚の翅が^{はね}はえて飛び立つ)

乃得粘網悲。(すぐに、蜘蛛の巣に粘り付いてしまうのを悲しまなければならなくなる)

唧唧厭巢雀、(同じ巣で唧唧^{チュウチュウ}と鳴いていた雀のうちで)

沮沢疑可依。(身を委ねるには水辺がよいかと思ったものがいた)

赴水生兩殻、(水に赴くと二つの貝殻が生じた(雀が蛤になるという伝説))

遭閉何時歸。(こうなってしまうと、閉じ込められたところからはたしていつ出られるのか)

二虫竟誰是、(虫と雀と、どちらがよいともいえないだろう)

一笑百念衰。(ひとたび笑ったなら、百の願いごともしぼんでしまうだろう)

幸此未化間、(幸いにも、我等は^かほかのものには化してはいないのだから)

有酒君莫違。(酒があるなら、君も飲んだらよいだろう)

(其の四において、帰隱を果たした陶淵明とまだできずにいる蘇軾の違いがはっきり出ているといえるだろう)

其五(陶淵明)

結廬在人境、(私が構える庵は人が集まる^{いかり}ところにある)

而無車馬喧。(それでも、訪問客の車や馬に騒がしくされることはない)

問君何能爾、(君は問うだろうな、どうしてそのようなことになるのか、と)

心遠地自偏。(心が遠くにあるのなら、ここがそのまま僻遠の地になるのである)

採菊東籬下、(東の垣根のもとで菊を採っていて)

悠然見南山。(ふいに南の山(廬山)が目に入ってくる)

山氣日夕佳、(山の気は一日の夕べのころがもっとも佳い)

飛鳥相与還。(飛ぶ鳥はその山へと一緒に帰ってゆく)

此中有真意、(このなかに真の意があるのだ)

欲弁已忘言。(それを弁じようとしたけれど、言を忘れてしまった)

(この詩について、蘇軾の優れた鑑賞があるので、見ておきたい。

「淵明の『飲酒の詩』の後に題す」

採菊東籬下、(菊を採る 東籬の下)

悠然見南山。(悠然と南山を見る)

菊を採っていて山を見る、ここに境(状況)と意が一致する。それがこの句の妙所である。

最近の俗な本はどれも「望南山」(南山を望む)となっている。これではこの一篇の神氣(インスピレーション)はすべて消え去ってしまう。古の人は深く微かなところまで意を用いたのであって、俗な連中が短絡的に自分の気分で妄りに改めてしまうのは、最も笑うべきことである。

「望む」では意識して山を眺めたことになる。それでは、不意に山が目に入ってきて、その瞬間に、言葉では言い表せない何かを得たという、この詩の最も要となる部分が台

無しになってしまうというのである。ついでながら、7 句目にある「山^{さん}氣^き」は、「山のたたずまい」とか「山の気配」とか訳するのが普通のようなのだが、訳者は何となく違和感を覚える。そのように訳すと、山と陶淵明が漸^しれ^じ離^りれ^れの存在となってしまうのではなかろうか。珍解釈として、ここの「氣^き」は中国哲学の重要な概念である「氣^き」（物質の本源）を指すと考えてみたい。山の「氣^き」は夕方に充実した状態となり、鳥は自ずとそこへと帰って行き、陶淵明も自ずとそこに目を向けて言葉にできない何かを得たということなのではないだろうか。南山はほかならぬ廬^ろ山^{ざん}であって、廬^ろ山^{ざん}は「氣^き」に満ち満ちた靈山である。陶淵明は鳥と違って体ごと山に引かれて行きはしないけれど、心は山の「氣^き」の中に包接されているのである)

其五(蘇軾)

小舟真一葉、(小さな舟は、まことに一枚の葉である)

下有暗浪喧。(下で見えない波が騒いている)

夜棹醉中発、(夜、酔って棹を移して出発した)

不知枕幾偏。(枕が偏っていたのにも気付かずにいたのだ(夢であることを暗示))

天明問前路、(明け方に、この先^{みち}の路を問うと)

已度千重山。(すでに千も山を通り過ぎていたのだった)

嗟我亦何為、(ああ、私は何をしているのか)

此道常往還。(この道は常に行き来しているところではないのか)

未来寧早計、(まだ来ないことを考えるのに早すぎるということもないだろう)

既往復何言。(すでに過ぎ去ったことは何かを言っても仕方がない)

とうえんめい まこと こころ
(陶淵明が「真の意」を得たのに対して、蘇軾は迷いのうちにあったということであ
ろ ざん
ろう。陶淵明は帰るべき廬山を目の前に見ていて(あるいはすでにその内側にあって)、
蘇軾はこの先の路をなお問わねばならないのだ)

其六(陶淵明)

行止千万端、(行くところ、止まるところ、人の行為は千にも万にも分かれる)

誰知非与是。(どれが正しく、どれが正しくないのか、誰にわかるというのか)

是非苟相形、(正しいとか、正しくないとか、比べて決めつけてしまつて)

雷同共誉毀。(皆が雷同して、褒めたり、けなしたりしている)

三季多此事、((古代の理想の時代の)三代が終わってから後は、このようなことばかりだ)

達士似不爾。たつ し(ただ達士(道に通じた人)だけがそうではないようだ)

咄咄俗中愚、けったくをわらい(俗世間の愚か者どもは、咄 咄 ので)

且当従黄綺。か こうこう きり き しょうざん(とにもかくにも夏黄公と綺里季(商山に隠棲した人)を見習うのがよいようだ)

かんだい しょうざん
(漢代の 商山に4人の非常に有名な隠者がいた。ここでそのうちの2人の名を挙げて
いるのは、たまたま隠者の代表者として出したまでのこと)

其六(蘇軾)

百年六十化、(百年といわれる人生を、六十(蘇軾の年齢)であの世に行くとして)

念念竟非是。おも おも よかった(念い念えば、結局は 是 とはいえない)

是身如虚空、(この身は虚空のようなもの)

誰受誉与毀。(誉められもしなければ、けなされもしないはずなのだ)

得酒未举杯、(酒を得て、まだ杯を挙げないうちから)

喪我固忘爾。(我を喪^{うしな}ってしまうなら、もとよりなんじ(酒)のことも忘れてしまう)

倒牀自甘寢、(牀^{べど}に倒れ込んで、そのまま寝てしまえばよい)

不拭管与綺。(夜具はむしろでも毛織物でも、どうだってよいのだ)

其七(陶淵明)

秋菊有佳色、(秋の菊が佳^よい顔をしている)

裊露掇其英。(露にぬれたその花びらをつもう)

泛此忘憂物、(憂いを忘れるというこの物(酒)に浮かべ)

遠我遺世情。(世間などはうっちゃってしまおうとの気持ちをますますふかめよう)

一觴雖独進、(一つの杯で、独りでやるのだが)

杯尽壺自傾。(杯を飲みほし、いつしか壺を傾けても出なくなる)

日入群動息、(日が沈みゆくと、もろもろの動きが止み)

歸鳥趨林鳴。(鳥はねぐらの林に帰って鳴いている)

嘯傲東軒下、(私は東の軒下で嘯^{ひょう}とも傲^{わあ}とも声を出す)

聊復得此生。(そのとき、自分はここに生きているとの実感を感じるのである)

(最後に置かれた「得此生」(此^この生^{せい}を得た^え)の意味するところは、広くかつ深いのだろう)

其七(蘇軾)

頃者大雪年、(このごろは大雪の年に当たったのか)

海波翻玉英。(海の波のように玉英が^{ゆき}翻る)

有士常痛飲、(ここに一人の士がいて、いつも痛飲している)

饑寒見真情。(飢えと寒さに迫られたときにこそ、真の情が^{こころ}現れる)

牀頭有敗榼、(枕元に壊れた酒樽がある)

孤坐時一傾。(独りで座って時にちよいと傾ける)

未能平体粟、((寒さによる)体の粟立ちをすっかりなおせるものではないけれど)

且復澆腸鳴。(腸^{はらわた}へと注ぎ込めば、何やら鳴る)

脱衣裹凍酒、(衣をとって凍った酒を包んで温めつつ)

每醉念此生。(酔いい心地になるたびに、この生^{せい}について^{おも}念うのである)

其八(陶淵明)

青鬆在東園、(東の庭に青い松がある)

衆草没其姿。(草が茂っているときは、その姿が見えない)

凝霜殄異類、(霜が凍り付いてほかの草がすっかりおれてしまうと)

卓然見高枝。(卓然と、高い枝まで松は^{すっきり}現れ出る)

連林人不覺、(松が林に連なっているときには、人は何とも思わない)

独樹衆乃奇。(独立した樹であると、人は初めて奇と^{すごい}感じる)

提壺撫寒柯、(酒壺を手^ににさげて、そのひんやりした枝^ににひっかけてみたり)

遠望時復為。(遠^く離れて、眺め直したりする)

吾生夢幻間、(吾^が人生は夢か幻のようなもの)

何事^{たづな}繼塵羈。(どうして、塵にまみれて、羈^{たづな}につなかれようとしたのだろうか)

其八(蘇軾)

我坐華堂上、(私は立派な建物の中に座^{って}いても)

不改麋鹿姿。(本来の鹿の姿を改^めることができない)

時來蜀岡頭、(時々、蜀岡^{しよくこう}のあたり^にきては)

喜見霜松枝。(霜を帯びた松の枝を見上げるのを喜^びとしている)

心知百尺底、(地下百尺の松の根^{には})

已結千歲奇。(千年を経て生^じるすぐれたきのこ^がすでに付^いているのだろう)

煌煌凌霄花、(しかし、煌煌^{あかあか}と凌霄花^{のうぜんかずら}が)

纏繞復何為。(松^にからみついて何事^かをしようとしている)

拳觴酌其根、(觴^{さかずき}を挙^げげて松の根^にそそぐ)

無事莫相羈。(よからぬこと^{なく}、自由であれ)

(1) これまでに時折見てきたように、自らを鹿に譬^{たと}えている。(2) 蜀岡^{しよくこう}は揚州^{よう}郊外^{こうがい}の丘である。(3) 凌霄花^{のうぜんかずら}はここでは松を締め付けてしまう悪役である)

其九(陶淵明)

清晨聞叩門、(すがすがしい朝、門を叩くのが聞こえた)

倒裳往自開。(あわてて衣をさかさまにひっかけて、門を開いた)

問子為誰与、(「どなたでしたか」と尋ねると)

田父有好懷。(気のよい農家のおじさんで)

壺漿遠見候、(壺に酒を入れて、遠くから様子を見にきてくれたのだ)

疑我与時乖。(私が時世に背を向けているのをいぶかしく思っ

縑縷茅檐下、(「茅葺屋根の下でのおんぼろ縑縷の日々は)

未足為高樓。(高尚なお暮らしとはいえますまい)

一世皆尚同、(世間は、みんなが同じようにするのが結構であるとしておるのです)

願君汨其泥。(あなたも、世俗の泥をかぶるのがよいのではありませんかな)

深感父老言、(先輩のお言葉に深く感じ入ります)

稟氣寡所諧。(それでも、私のもって生まれた性質で、うまく合わせるのが不得手なのです)

紆轡誠可学、(たづなを取り直して、進路を曲げるよう努めるべきなのではないでしょうか)

違己詎非迷。(自身をいつわるのは、迷いというものなのではないでしょうか)

且共飲此飲、(まあ、それはそれとして、これを飲んで楽しみましょう)

吾駕不可回。(私の車は方向転換がきかないのです)

其九(蘇軾)

芙蓉在秋水、(蓮は秋の水の内にその身を置いて)

時節自闔開。(時節がくれば自ずと花を開く)

清風亦何意、(すがすがしい風は、何を思ったのか)

入我芝蘭懷。^{しらん}(芝蘭(香草)を内に抱く我が^{ふところ}懷へと入ってきた)

一随采折去、(花(蓮と芝蘭)はひとたび折り取られてしまったならば)

永与江湖乖。^{こうこ}(永久に江湖(自然)とは縁が切れてしまう)

断糸不復統、(断った茎をつなげることはできないし)

斗水何足棲。(わずか一斗の瓶の水では生きることできない)

不如玉井蓮、(仙界の蓮が)

結根天池泥。(天上の池の泥に根を結んでいるのにはとても及ばないのである)

感此每自慰、(このことに感じて、自分で納得するのは)

吾事幸不諧。(世間とうまく合わせられないのは、実は悪いことではなかったのだ)

醉中有歸路、(酔えば、そこには(江湖への)帰り路がある)

了了初不迷。^{ありあり}(了了として初めから迷うことはないのだ)

乘流且復逝、(流れに乗って進んで、さらにまた進めばよい)

抵曲吾当回。(もしも曲がりに当たったなら、私は回るのである)

(ここに^{とうえんめい}陶淵明と蘇軾の違いを見てとることができる。陶淵明は我が道を定めれば
真つすぐに進み、蘇軾は柔軟に回りながら進むのを我が道であるとしている)

其十(陶淵明)

在昔曾遠遊、(もう昔のことだ)

直至東海隅。^{とうかい}(遠く旅して、東海の地のすみまで行った)

道路迥且長、(道のりは遙かに長く)

風波阻中塗。(途中で、風と波とによって阻まれもした)

此行誰使然、(このときの行動は、誰かに指示されたというよりは)

似為飢所驅。(飢えに駆り立てられたようなものであった)

傾身嘗一飽、(しかし、全力を挙げて、とにかく食う分を稼ぐのだったら)

少許便有余。(わすかなものなのだから、むしろ余るくらいだろう)

恐此非名計、(旅するのはよい算段ではなかったと気づき)

息駕歸間居。(この閑居に帰ったのだった)

(これは^{とうえんめい}陶淵明が35歳のときに、ある軍事行動に参加したことを回顧したものである
という)

其十(蘇軾)

籃輿兀醉守、(籃輿^{かご}のうえの知事^{へべれけ}殿は兀に酔っておられる)

路転古城隅。(古い町の隅まできて路は曲がる)

酒力如過雨、(酒の力は通り雨のようなもの)

清風消半途。(すずしい風が吹いてくると、まだ途中なのになににさめてしまう)

前山正可数、(前には山々——くっきりと見えている)

後騎且勿驅。(後ろには警護の者——急いでこなくてよいぞ)

我縁在東南、(知事^{えにし}殿との深い縁は東南にある)

往寄白髮余。(白髪の残りの人生を寄せるのはそこなのだ)

遙知万松嶺、(遙かに想うのは、万松嶺の下)

下有三畝居。(三畝の我が住まいがそこにある)

(これは揚州郊外に出て、遠く東南に思いを寄せるという詩。万松嶺は杭州にある)

其十一(陶淵明)

顔生稱為仁、(孔子の弟子の)顔回は仁を實踐していると称えられ)

榮公言有道。(榮啓期は道を会得したといわれた)

屢空不獲年、(顔回は得るものがないままに若くして死んだ)

長飢至於老。(榮啓期はいつも飢えていて、そのまま老人になった)

雖留身後名、(二人は亡くなった後に、その名を残したけれども)

一生亦枯槁。(その一生は枯れてしなびたものであった)

死去何所知、(死んでからのことは知りようがない)

称心固為好。(生きている間に、心にかなう生き方をするのがもとよりよいのだ)

客養千金軀、(千金の価値があるという身体に、我等は客人として宿り)

臨化消其宝。(死人に化すときに、その宝を消し去る)

裸葬何必惡、(ならば、裸で葬られたところで、悪くはないのだ)

人当解意表。(表面的な意味しかない、人はわかるべきだ)

(1) 陶淵明は時に唯物論的なものの見方を提示する。この詩では、死んでから名を残しても意味がない、屍などは裸のまま葬っても構わないと、中国の伝統的な価値観をひっくり返すようなことを歌っている。(2) 榮啓期はすでにこの連作の其の二で見ている

其十一(蘇軾)

民勞吏無德、(民衆が疲労しているのは、吏に徳がないとき)^{やくにん}

歳美天有道。(歳が美なのは、天に道がある(自然の運行が正しく行われている)とき)^{としのみのり} ^{ゆたか}

暑雨避麦秋、(天に道があるなら——夏の雨は、麦は稔るのを避けて降り)

温風送蠶老。(暖かい風は、蚕の成長を促すように吹く)

三咽初有聞、(吏に徳がないなら——民が三回咽び泣いて初めてお上に聞こえ)^{やくにん}

一溉未濡槁。(水を注ごうとしても、乾いた土を潤すことができない)

詔書寛積欠、(積欠を寛くせよとの証書が降され)^{せきけん} ^{ゆる}

父老顔色好。(人々の顔色がにわかによくなり)

再拜賀吾君、(再拝して、吾等の知事殿に賀意を表す)

獲此不貪宝。(これを貪らずして得た我が宝である)

頽然笑阮籍、(世間を白眼視してばかりいた阮籍を笑いながら)^{げん せき}

醉幾書謝表。(喜びに酔いつつ、皇帝への謝礼の文書を記すのである)

((1) この詩は知事としての責務を果たしたことを歌っている。蘇軾が問題を指摘した積欠(本章200ページ)について、皇帝は当該地域での取り立てを猶予するとの詔を出した。「貪らずして得た宝」とは、役人が往々にして民衆から搾取して財産を築いたことへの皮肉である。(2) 阮籍は、蘇軾が尊敬する人物ではある(第1章58ページなど)が、ここでは、民衆のためには何もしなかったことを笑うのである)

其十二(陶淵明)

長公曾一仕、(前漢^{ちやうし}の張摯はかつて一度は官職に就いた)

壯節忽失時。(これからというときに時流に合わなくて失脚した)

杜門不復出、(もはや門を閉ざして出ることはなく)

終身与世辞。(終生、世間とは決別したのだった)

仲理帰大沢、(後漢^{やうりん}の楊倫は仕えたものの、沼沢地に引っ込んで弟子を指導し)

高風始在茲。(それで初めて気高い学風が確かなものとなったのだった)

一往便当已、(ひとたび進んだとしても、きっぱりと止めるのがよく)

何為復狐疑。(ぐずぐずしてはならないのだ)

去去当奚道、(さっと去ってからはいずれの道をとるのか)

世俗久相欺。(世俗には欺かれると決まっているのだから)

擺落悠悠談、(遠く惑わせるような議論を払い落して)

請従余所之。(自分が行こうとするところへと行けばよいのだ)

^{とうえんめい}

(陶淵明はここでも信念の堅さを歌っている。それに対して、蘇軾は全く違うテーマで和している)

其十二(蘇軾)

我夢入小学、(私は夢で、寺子屋へと入って行った)

自謂総角時。(自分は総角^{しょうかく}だと思い込んで)

不謂有白髮、(白髪の老人であるのをすっかり忘れ)

猶誦論語辭。ろんご ことば(論語の辞をこどもたちと声高く読み上げた)

人間本兒戲、(人間界のことは、所詮このような子供の戯れなのだ)

顛倒略似茲。あべこべ(だいたい夢に似て、顛倒のことばかりだ)

惟有醉時真、まこと(ただ酔っているときにだけが真であって)

空洞了無疑。(空洞の精神こそが疑いようのないものなのだ)

墜車終無傷、(酔っ払いが車から落ちても決して傷つかない)

莊叟不吾欺。そうし(莊子が言ったのは、まさにその通りなのである)

呼兒具紙筆、(そこで、息子を呼んで紙と筆を具えさせ)

醉語輒録之。(酔ってしゃべったことをそのまま書かせておくことにした)

((1) 蘇軾が郷里の寺子屋(原文は「小学」)に入ったのは8歳のときであった。(2)

この詩は次韻の詩とは思えないくらいに、自然の流れで詠まれている。とうえんめい陶淵明の詩に和すことになんて手馴れてきたということなのかもしれない)

其十三(陶淵明)

有客常同止、(ここに一士と一夫、いつも同じところにいる)

取捨邈異境。(取るものと捨てるものの境目は、二人でひどく異なっている)

一士常独醉、(一士はいつも独りで酔っている)

一夫終年醒。(一夫はいつも醒めている)

醒醉還相笑、(醒めた者と酔った者は、相手をあざ笑っている)

發言各不領。(言葉を発しても、それぞれ理解しない)

規規一何愚、^{がらがら}(醒めて規規の方はなんとも愚かであり)

兀傲差若穎。^{ばっばらばあ}(酔って兀傲の方はいさかましであるようだ)

寄言酣中客、(すっかりできあがってしまった人に言いたいことがある)

日没燭当秉。(日が暮れたら、明かりをつけて、まだこれからさ)

其十三(蘇軾)

醉中雖可樂、(酔いの中では楽しむべきであるけれど)

猶是生滅境。(それとて、生成消滅の境界から逃れられるわけではない)

云何得此身、(どのようにしたら、この身を、酔ってもいなければ)

不醉亦不醒。(醒めてもいないというところに置けるのだろうか)

癡如景升牛、(私の愚かさは、食らうのは千頭分、働きは一頭分以下というわけ牛に同じ)

莫保尻与領。(やはり、尻と頭はばらばらにされてしまうのだ)

點如東郭▲、(あの連中のずる賢さは、悪さを尽した例の兎のようであるが)

束縛作毛穎。(やはり、捕まって毛をむりり取られて筆にされてしまのがオチなのだ)

乃知嵇叔夜、(知恵のある人はさすがに違っていて)

非坐虎文炳。(いかなる動物にも似るまいと、虎柄の數物に座るのも避けたのだった)

(▲は爰+兎という字)

(この詩は、蘇軾のいつもの次韻の詩の癖で、故事を駆使して含蓄たっぷりの、要するに何が言いたいのか凡人にはさっぱりわからないという作品。牛、兎、虎という動物づくしとなっているのがミソのようだ。理解不能なので、雑な「ずっぱ訳」でお茶を濁す

しかない)

其十四(陶淵明)

故人賞我趣、(ふるくからの知^{ありよう}合いが私の趣がよいとして)

挈壺相与至。(酒壺をひっさげてそろってやってきた)

班荆坐松下、(松の下に草を敷いて座り)

数斟已復醉。(酒をちよいと酌み出すと、もう酔ってしまう)

父老雜雜言、(老人連中のおしゃべりはとりとめもなく)

觴酌失行次。(飲む作法やら順番やらもてたらめた)

不覺知有我、(もはやわからない——自分がここにあることさえも)

安知物為貴。(ましてわかりようがない——世間が何を貴いとしているかなどは)

悠悠迷所留、(悠悠^{ちよこまか}やっている者は、どこで留まったらよいのか迷っているだけのこと)

酒中有深味。(深い味わいはほかならぬ酒の中にあるのだ)

其十四(蘇軾)

我家小馮君、(我が弟ながら、漢代^{かんだい}のさる賢人になぞらえてもよいであろう)

天性頗純至。(天与の性質はすこぶる純粹である)

清坐不飲酒、(静かに座って、酒を飲まない)

而能容我醉。(兄が酔うのにははなはだ寛容である)

歸休要相依、(故郷に歸って休むのは兄弟一緒であるのがよいにしても)

謝病当以次。(病を理由に退くのは、やはり順序として兄が先であるべきだろう)

豈知山林士、(山林に隠れるような士は)^{ひと}

骯髒乃爾貴。(そもそも^{ごっつい}骯髒のが貴ばれるというのは、弟もよく知っているはずだ)

乞身當念早、(身の自由を乞うのは早い方がよいと心得るべきで)

過是恐少味。(しかるべき時を過ぎてしまうと、味わいが少なくなってしまうのである)

其十五(陶淵明)

貧居乏人工、(貧しい住まいには人の工が^{たぐみ}ほとんど加えられていない)

灌木荒余宅。(それで木々によっておおわれてしまっている)

班班有翔鳥、(飛ぶ^{ありあり}鳥の姿は班班と見え)

寂寂無行跡。(人の足跡は^{ひっそり}寂寂として何もない)

宇宙一何悠、(宇宙は何とも遙かな存在であるのに)

人生少至百。(人生はわずかに百年、それさえもまれである)

歲月相催逼、(歲月にいつも急き立てられ)

鬢邊早已白。(髪の毛は早々と白くなる)

若不委窮達、(窮^{きゆう}か達^{たつ}か、なるがままでよいとしないのなら)

素抱深可惜。(もとから抱いている志を、深く残念からなければならなくなるだろう)

其十五(蘇軾)

去郷三十年、(郷里を去って三十年)

風雨荒旧宅。(旧い家は風雨によって荒れてしまったろう)

惟存一束書、(ただ一束の書物だけを持って)

寄食無定跡。(あちこちで食い扶持を得てきた)

毎用愧淵明、(いつもいつも陶淵明^{とうえんめい}に対して恥じてきたのは)

尚取禾三百。(身の程知らずにも俸給を得ていることだ)

頎然六男子、(我等兄弟二人には、背の高い六人の息子がいて)

粗可伝清白。(清く正しくあるべきとすることだけは、ほぼ伝えられている)

於吾豈不多、(私にはそれで十分であって)

何事復嘆息。(嘆息するようなことは何もないのである)

其十六(陶淵明)

少年罕人事、(若いころは人と関わる事がまれで)

遊好在六經。^{りくけい}(六經(儒学の古典)を読むのを楽しみとしていた)

行行向不惑、(いつしか四十歳となるところにまできたというのに)

淹留遂無成。(ぐずぐずと留まって、何も成就したものはない)

竟抱固窮節、^{こきゆう せつ}(ついには「固窮の節」を抱いて)

飢寒飽所更。(飢えや寒さをたっぷり経験するありさまとなった)

敝廬交悲風、(あばら家に悲しい風が吹き過ぎて行き)

荒草没前庭。(前の庭は繁る草に埋もれてしまっている)

披褐守長夜、(粗末な衣類を着て長い夜をじっと過ごしている)

晨鶏不肯鳴。(夜明けを告げる鶏はなかなか鳴いてくれない)

孟公不在茲、もうこう ごかん りゅうきょう(かの孟公(後漢の劉龔)は貧乏な人の本当の才能を理解していた)

終以翳吾情。(そのような具眼の士がここにいるということが、私の心をずっと曇らせている)

(1) この詩で、とうえんめい陶淵明は四十(不惑)になろうとしていると詠んでいる。そのころは、陶淵明は深い悩みの内にあつたのだ。「飲酒」の連作はいろいろな時期に詠んだ詩を再構成したものであるとされている。(2) 「こきゅう せつ固窮の節」はすでに其の二で見ている)

其十六(蘇軾)

嘒嘒六男子、がやがや(六人の男の子が嘒嘒と)

絃誦各一經。(それぞれに經典を音読している)

復生五丈夫、(この六人が五人ずつ男子を生んだなら)

戢戢丁欲成。あとからあとから(戢戢 成人になってゆくことだろう)

歸田了門戶、(我等が歸郷しても、我が門戸はかくも盛んであるのだから)

与国充踐更。(国のために兵役に就く者を出してゆけるであろう)

普兒初学語、ふじ そまい(普兒(蘇邁の子の幼名)は言葉を学び始めたばかり)

玉骨開天庭。(額の広いところはなかなかよい顔つきである)

淮老如鶴雛、わいらう(淮老(同じく蘇邁の子)は鶴の雛のように)

破殻已長鳴。(殻を破って力強く鳴いたところである)

举酒属千里、(酒を取って、千里の彼方の者(弟と蘇邁)に向かって挙げるとしよう)

一飲愧凡情。(この飲びがいさか平凡すぎるのを恥じらいつつも)

(蘇軾の其の十四から十六は家族をテーマにした連作である)

其十七(陶淵明)

幽蘭生前庭、(前の庭に^{ひそやか}幽な蘭が生まれた)

含薰待清風。(内に薫りを含んで、すがすがしい風が吹くのを待っている)

清風脱然至、(すがすがしい風が^{さっ}脱然と吹いてくると)

見別蕭艾中。(蕭艾^{さっそう}の中から、花を開いてその姿を見せる)

行行失故路、(進み行くうちにもとの路を失うことがあっても)

任道或能通。(道(自然の成り行き)に任せるなら、あるいは通じるであろう)

覚悟当念遷、(覚め悟って^{かえ}遷ることを^{おも}念うべきである)

鳥尽廢良弓。(良い弓も鳥を獲り尽したなら^す廢てられてしまうのだ)

(前半の蘭の譬えと後半とのつながりがしっくりこない。蘭が風を受けて薫りを発するように、時がきたならば帰るのがよいということなのだろうか。それとも、たとえひとたび花開いても、必要がなくなった弓のように捨てられてしまうということなのだろうか)

其十七(蘇軾)

淮海雖故楚、(淮海^{わいはい}(揚州)は^こ古の楚の土地である)

無復輕揚風。(輕薄といわれた風俗はいまやなく)

齋廚聖賢雜、(官舎の厨房には聖人(実は清酒のこと)も賢人(実は濁り酒)もごまんという)

無事時一中。(何事もないときは、知事殿はたっぴりそのお相手をする)

誰言大道遠、(大道(正しい政道)は遠くにあると誰が言うのか)

正頼三杯通。(たった三杯でそこに通じるではないか)

使君不夕坐、(知事殿は夕方にはもう役所に座っていないから)

衙門散刀弓。(警護の者も刀や弓を放り投げてしまう)

(蘇軾のこの詩は軽い戯れである。蘇軾は時折この種の単純な悪ふざけをするのだが、

とうえんめい

陶淵明の作品にはほとんど見られない)

其十八(陶淵明)

子雲性嗜酒、かんだい ようゆう(漢代の揚雄は生まれながらの酒好き)

家貧無由得。(家が貧しく、酒を得ることができなかった)

時頼好事人、(時にうまい具合に、もの好きな人が)

載醪祛所惑。(疑問を解決するために、濁り酒を車に載せてやってくることがあった)

觴来為之尽、さかずき(揚雄は、觴をさされれば飲みほし)

是諮無不塞。(来た人は、問えばすっかり答えてもらえる)

有時不肯言、(しかし、決してものを言わないときもあったという)

豈不在伐国。(それはきっと、よその国を攻めることであったのだろう)

仁者用其心、(仁を規範とする人は、慎重に心を用いるので)

何嘗失踴黙。(沈黙すべきところを間違えるようなことはない)

其十八(蘇軾)

何人築東台、(^{よう}揚州に^{どうだい}東台を築いたのは誰だったのか)

一郡坐可得。(座ったまま一郡全体を見渡すことができる)

亭亭古浮図、(^{たかだか}亭亭と古い仏塔が)

独立表衆惑。(独り抜きに出て立っているのは、衆人の惑いを象徴するものである)

蕪城閱興廢、(^{ぶじょう}蕪城(揚州)はこれまで世の興廢を見てきた)

雷塘幾開塞。(雷塘の堤は幾度も開かれたり塞がれたりしてきた)

明年起華堂、(来年あたりは立派な建物を作って)

置酒弔亡国。(そこに酒を置いて、これまでに亡んだ国を弔おうてはいいか)

無令竹西路、(^{ちくせい}かの竹西の路が^{みち}いまのように)

歌吹久寂黙。(かつての賑やかさを失ったままではないようにしたいものだ)

(其の十七に続いて、蘇軾は揚州について歌っている。責欠などの諸問題が解決して、民が賑わうことを望むという意味合いの詩なのだろう)

其十九(陶淵明)

疇昔苦長飢、(先ごろは長く飢えに苦しみ)

投耒去学仕。(鋤を投げ捨てて村を出て、お上に仕えたのだった)

将養不得節、(生活のためではあっても、我が気性には合わないことであった)

凍餒固纏己。(凍えたり飢えたりすることは、どうせもとより己にまどわりついているのだ)

是時向立年、(このときは三十歳になろうとしていて)

志意多所恥。おも(志し意うことと異なつて、恥じるところが多かつた)

遂尽介然分、(とうとう突つ張つた己の本分のままにしようと)

扠衣歸田里。(衣を扠つて郷里の田園に歸つたのだつた)

冉冉星氣流、きらきら(冉冉と星の氣が流れ)

亭亭復一紀。ゆるゆる(亭亭と十二年が過ぎ去つた)

世路廓悠悠、(世間の路は遙かに広がっている)

楊朱所以止。いひこえ ようしゅ(古の楊朱は、だから立ち止まって泣いたのだつた)

雖無揮金事、かんだい そこう そじゅ(漢代の疏広と疏受のように郷里の人々にふるまう金はない)

濁酒聊可恃。(せめてこの濁り酒があることを頼みとするのである)

((1) ここで陶淵明は とうえんめい 29 歳のときの最初の仕官について歌っている。その後、35 歳のとき(其の十にそのことが歌われている)と、そして 41 歳のときに仕官し、最終的に 42 歳で帰郷した。(2) 漢代の疏広と疏受が早々と退隱して大いに散財したことは、蘇軾も好んで引く故事である(第5章2ページなど))。

其十九(蘇軾)

晁子天麒麟、ちやうほし きりん(晁補之君は天から下つた麒麟であつて)

結交及未仕。(私と交わりを結んだのはまだ仕官する前であつた)

高才固難及、(高い才能はもとより私の及ぶところではない)

雅志或類己。(風雅の志はあるいは私と似ているのかもしれない)

各懷伯業能、さ そうそう えんはくぎやう おも(我等は魏の曹操が讃えた袁伯業の才能を懐い)

共有丘明恥。こうし（孔子の恥じることを自分も恥じたいと言った左丘明^{さきゅうめい}と意思を同じくしようとしている）

歌呼時就君、（時に歌って貴君を呼んで）

指我醉鄉里。（我が酔郷の里へ行こうと指さす）

呉公門下客、かんだい ごこう（漢代の呉公の門下に集まった客人の中から）

賈誼独見紀。かぎ（賈誼だけが特に推薦された（晁補之を推挙したいとの意味））

請作鵬鳥賦、（貴君も、賈誼のみみずく『鵬鳥の賦』のように己の思いを述べるがよいだろう）

我亦得坎止。（私もまたそれによって止まるところを知ることができるだろう）

行樂当及時、（ともあれ、行樂の時期は逃してはならないのだ）

緑髪不可恃。（黒髪も当てにならないのだから）

（ここでは副知事ちやうほしの晁補之について歌っている）

其二十（陶淵明）

羲農去我久、（我等は、太古の伏羲、神農の時代から遙かに離れてしまい）

拳世少復真。まこと（世の中において、真の姿に戻ろうとすることはほとんどなくなった）

汲汲魯中叟、ろ こうし（魯の国のご老人（孔子のこと）だけが汲汲と^{せっせっ}）

弥縫使其淳。（つくろって淳朴な世に返そうとした）

鳳鳥雖不至、（太平の世に出現するという鳳^{おおとり}は飛んでこなかったものの）

礼樂暫得新。れいがく（礼樂はしばらく新しくなったのだった）

洙泗輟微響、（しかし、そのささやかな響きさえも聞こえなくなり）

漂流逮狂秦。しん（時代は漂流して、狂暴な秦の世に至った）

詩書復何罪、(詩書には何の罪もないのに)

一朝成灰塵。(たちまち燃やされて灰塵になってしまった)

区区諸老翁、(区区した漢代の老先生たちは)

為事誠殷勤。(学問をまことに御丁寧に行ったのだったが)

如何絶世下、(それとて、こうした末世においてはどうにもならず)

六籍無一親。(六経に親しむ人はまるでいなくなってしまったのだった)

終日馳車走、(年から年中、車を走らせて世に出る糸口を得ようとする者ばかりがいて)

不見所問津。(真に立ち返るための津の場所を問う者は絶えて見ないのである)

若復不快飲、(となると、さっさと飲むしかなくて)

空負頭上巾。(濁り酒を漉すためにかぶっている頭巾を使わない手はないのだ)

但恨多謬誤、(残念ながら、ここまで並べてきたのは多くは誤りであろう)

君当恕醉人。(酔っ払いの世迷い言として、どうかお許しあれ)

((1) 前半には、理想の時代は太古にあって、孔子がそこに戻そうと学問を復興させた

ものの秦の乱れに至り、漢代に儒学を顧みる動きはあったが大きな力にはならなかった

たという歴史認識が歌われている。蘇軾もその認識を共有して、(陶淵明よりずっと後に)

韓愈が現れてようやく正しい道に立ち返る気運が生まれたと、繰り返し述べている。(2)

最後の2句はこの連作全体の結びという位置づけであろう)

其二十(蘇軾)

蓋公偶談道、(蓋公が老荘の道を論じたとき)

斉相独適真。^{せい}（^{そうさん}齊の大臣であった曹参だけがその真の意味を理解した）

頽然不事事、^{ぐんにゃり}（曹参は頽然として仕事はせずに）

客至先飲醇。（客人がくるととにかく酒を飲んだのだった）

当時劉項罷、^{りゅうこう こうう}（このときは劉邦と項羽の争いが終わったばかりで）

四海創痍新。（天下の傷跡がまだ生々しかった）

三杯洗戦国、（曹参は、いわば三杯で戦国の乱れを洗い流し）

一斗銷強秦。^{しん}（一斗で強敵の秦を消し去ったのである）

寂寥千載後、（それから千年の間は寂しいことに人がなく）

陽公嗣前塵。^{どう ようじょう}（唐の時代に陽城がいて曹参を受け継いだのだった）

醉臥客懷中、^{ふどころ}（酔って客人の懷の中で眠り）

言笑徒多勤。（話したり笑ったりするのは面倒だと、酔いつぶれるのをよしとした）

我時閱旧史、（私は昔の歴史書を見て）

独与三人親。（この三人を特別に親しく感じていた）

未暇餐脱粟、（だから私はこれまで、粗食に甘んじて）

苦心学平津。^{わたしば}（津の場所を問う学問に苦心する、ということをしてこなかった）

草書亦何用、（草書というものも、さて何の用いところがあるのか）

醉墨淋衣巾。（酔いに任せて書いて、衣を汚すだけではないか）

一揮三十幅、（一気に三十枚だろうが書き上げて）

持去聴坐人。（そこに座っている人に勝手に持ち去らせよう）

（(1) 陶淵明が真面目に儒学の伝統について歌っているので、蘇軾は敢えて飲酒礼賛の

戯れの作を最後に置いたのだらう。蓋公こうこうと曹参そうさんの話は第5章124ページで見ている。

唐代とうだいの陽城ようじょうはいつも酔っ払っていて、それを諫めようとする者がいると、酔いつぶして何も言えなくした。歴史書を読んで、この3人だけを慕わしく思ったというのはもちろん戯れの言である。(2) 最後の4句で草書について歌っているは、草書を代表として蘇軾の芸術活動全体について述べたものであるのだらう。(3) 全体として、陶淵明の詩には独特の凄みのようなものがあるのに対して、蘇軾の詩は次韻の制約にまだひきずられて生硬がところがあり、どこことなく物足りなさがある。和すことを重ねてゆくにつれ、蘇軾固有の深みを増してゆくのを、次章以降に見ることになる)

■次韻范淳父送秦少章

蘇門四学士そもんし がくしの一人である秦觀しんかんの弟の秦觀しんてき あざな (字は少章) は、杭州で蘇軾のもとでしばらく勉強に励み (第9章1ページ)、その甲斐があったのか、科挙に合格し、地方官として仁和県じんわに赴任することになった。その途中で揚州に立ち寄り、都を出たときに范祖禹はん そう あざな じゅん ほ (字は淳父) が詠んだ送別の詩を蘇軾に示した。これはそれに次韻したもの。

(范祖禹はん そうは、司馬光し ぼ こうが編集した歴史の大著『資治通鑑』の唐代の部分を担当した歴史家で、政治的には保守派が三派に分かれて争うなかで、どの派にも属さずに中立を貫いた。その字あざなは本来は淳じゅんの一字であるのだが、発音のしやすさから淳父と呼びならわしていたようで、醇甫じゅん ほと記すこともある)

私には江海との深い縁がある、

世間の網もそれをどうこうできるものではない。

風に乗って降りかかってくる俗な塵は、

すでに淮河の波で洗い終わった。

十年の間、このあたりの地において、

今年は初めて麦が豊かに実るのを見た。

揚州では訴訟事が少ないのを喜び、

船や車が数多く行き交うのはさほど気にならない。

秦観君が立ち寄ってくれて、賦した詩を見ると、

古の趣があって、賢人として推挙したいとの思いが起る。

句法は黃庭堅君に習い、

秦観君と張耒君とともに磨き合ってきたのだ。

私はもう長らく人々から離れ、

退居して講学に努める老いの日々を送ろうと思っている。

後進に名士が数多くいるのを朝廷に薦めたく思うのだが、

私はもはやその任にないことを悲しく歌うのである。

范祖禹殿こそはまことに立派な人で、

独り立派に後進を集めることに勤めておられ、

瘦せた馬のなかから名馬を見出し、

枯れた桐のなかから琴になる良材を取り出している。

近ごろ聞いたのは、

范祖禹^{りち}殿は李薦君を家に泊まらせているとのこと、

それは病んだ鶴に一本の枝を貸すような行為である。

秦觀君に与えた送別の詩では、懇ろに私のことまでも説かれ、

そのすばらしいお言葉によって、行き悩む私は慰められる。

西^{かこく}の夏国の軍勢はすでに退却し、

平穩^{のろし}を知らせる烽火が都にまで連なっている。

政^{まつりごと}は公等にお任せしておけば安心であるから、

私はもはや潜沱^{せんたせいと}(成都を流れる川)に身を寄せるつもりだ。

(自身の近況を歌ったり、秦觀^{しんてき}を褒めたり、范祖禹^{はんそう}に挨拶したりと、内容が多岐にわたってまとまりが悪い。それでも、このころの蘇軾の心情は伝わってくるであろう)

■聞林夫当徒靈隱寺寓居戲作靈隱前一首

詩題は、「唐垌^{とうけい あざな りん ふ}（字は林夫）が靈隱寺^{れいいんじ}の寓居に移ろうとしていると聞き、戯れに『靈隱の前』と題する一首を作った」。唐垌^{とうけい}は古くからの友人で（第7章111ページなど）、靈隱寺^{こう せい こ}は杭州の西湖の西にあって、唐代^{とうだい}からしばしば詩に詠まれる有名な寺で、隣が天竺寺^{てんじくじ}である（第9章169ページ）。

靈隱寺^{れいいんじ}の前、天竺寺^{てんじくじ}の後ろを、

二つの春の川が流れ、その先に靈鷲寺^{れいじゅうじ}がある。

その水がどこから来るのかは知らないが、

波を跳らせ、奔る雷のようにして谷へと赴く。

川は、無情のものなのか、有意のものなのか、それはわからない。

しかしながら、ぐるぐる巡って必ず冷泉亭の下へと向かって行く。

私が銭塘(杭州)にいたのは六百日、

山に行くのは間遠で、そこに席を温めることはなかった。

いま貴君は靈隠寺に居を定め、

葛の衣、草の履、僧の食事、

全てを寺の定めに従おうとしている。

もしも百日の間、冷泉亭の主になれるのなら、

たとえ二十年の間、宰相として法令に署名できるとしも物の数ではないのだ。

(唐垌は冷泉亭に身を寄せようとしていたのだろう)

■次韻蘇伯固遊蜀岡送李孝博奉使嶺表

杭州でともに仕事をした一人、蘇堅（字は伯固）は蘇軾が杭州を去るに当たって別れを惜しんでしばらく同行したことを本章 1 ページで見ている。蘇堅は何か所要のついででもあったのか、揚州に来てしばし旧交を温めたようだ。詩題は、「蘇堅が蜀岡（揚州にある）に遊んで、李孝博が嶺表に赴任するのを見送る詩を詠んだので、それに次韻する」。李孝博（字は叔升）は各地の地方官を歴任してきた人で、今回は嶺表（いまの広東省の

あたり。嶺とは五嶺山脈のことで、それより南は当時としては刃境の地として認識されていた。韓愈が左遷された潮州（本章168ページも嶺表である）に行くことになった。李孝博と蘇軾はこれまで交流は特になかったようだ。

いまの季節――

稲がまさに伸びつつあるとき、まだ鶴を隠すほどではない、
 木の葉は十分に成長し、その翳で蝉が鳴くようになった、
 青い水が麻を浸しつつ渠を流れ、
 松を焼く煙が白い扉の前に立ち上る、
 紅い頬の娘さんが外を見ながら笑いさざめき、
 白髪頭の老人が酔っぱらってそくらで寝ている、
 どの家からも機を織る杼の音が鳴り、
 どの樹にも梨や棗といった実がつくようになった、
 村には、牛を売って刀を買うような者は一人もいない（皆が実直に農事に勤めている）。
 役所を見ると、
 鶴に跨って飛ぶ仙人を気取る知事殿（蘇軾）がいる。
 ここに、李孝博君は遙かな嶺の南の民情を見る使いとして行こうとしている。
 もとは宰相を輩出した山東の一族より出た賢人である。
 長江を渡ってからは、かの孫権（三国時代の英雄）にゆかりの石を見るだろうし、
 嶺を登ってからは、いくら飲んでも満足しないという貪泉の水を酌むであろう。

いま蘇堅君とともに歩みつつ南を望むと、

遠く山のみとりが連なっている。

そうだ、梅の花が落ちるころになったら、

北に帰る雁とともにすくにもどってくるがよい、

そうすればちょうど春の酒が熟しているし、

山桜が赤く然えるように咲くのと一緒に眺められるであろう。

(蘇軾は蜀岡には同行していないようだが、詩はあたかもそこにいるかのように詠んでいる。前半では揚州近郊の田園風景を美化して描写している)

■朱暉非張林均輸説

蘇軾は『後漢書』を読んで、この一文を記した。大半は『後漢書』からの抜粋で、最後に蘇軾の感想が添えてある。この時期に特にこのように記した意味は自ずと明らかであろう。

後漢の肅宗皇帝のとき、穀物の値が貴く、国家の経費が不足した。尚書省の張林が、(銭の流通を止め)絹の布で租税を徴取し、官で塩を煮て専売とし、しばらく均輸の策(前漢の武帝のときの経済政策)を行うよう提案した。ただ朱暉(字は文季)だけが反対し、その提案は取り下げとなった。

後にまた同じ提案がなされ、皇帝がそれをよしとしたので、実施された。朱暉だけがまた以下のように申し上げた。

「王者の制度として、天子は物資のあるなしを言わず、諸侯は物資の多寡を言わず、お上から禄を得ている家は百姓ひゃくせい(一般人民)とは利を争わないとされています。今の均輸の法は国が行う商売にほかなりません。塩の利益が官に帰すなら、下の者は苦しみ怨みます。絹の布で租税を徴取するなら、間で吏人が悪賢く盗みを働きます。みな賢明な天子の為すべきことではないのです」

皇帝は張林が言うことの方がもっともであると考えていたので、これを見て怒りを発し、激しく尚書省の面々を責めた。朱暉等は皆自分で己を獄に繋いだ。三日して、皇帝は詔書をもって獄より出した。その詔に、

「国家は反対意見を聞くのを楽しむ。老人(朱暉)に罪はない。先の詔書に過ちがあっただけのことだ。それなのに、何故に自ら獄に繋いだのだ」

朱暉だけは病が重いと称した(皇帝に詫げることをしなかった)ので、尚書省の長官以下は恐れおののき朱暉にこのように言った。

「いま譴責を受けているのだ。それなのに病を称していたのでは、受ける禍は小さわざわいくはないのだぞ」

朱暉は言った。

「私は八十歳、恩を蒙って国家の機密に携わることを得て、死をもってそれに報いようとしているだけです。もし心に不可であると知っていながら、陛下の御意向に雷同するのは、臣下の義に背きます。いまはもう耳も聞こえず目も見えなくなっています。伏して死の御命令を待つだけです」

それから口を閉ざしてついに何も言わなかった。尚書省としてはどうしてよいかわ

からず、朱暉を弾劾することにした。皇帝の心はやや解けてそのことは沙汰やみとなった。

それから数日して、皇帝は役人を派遣して朱暉の様子を尋ね、御典医が病氣を見舞い、太官が食物を賜わった。朱暉は起き上がって礼を述べた。

元祐七年七月二十一日、私はたまたま『後漢書』の朱文季伝を読み、感嘆してやむことがなかった。肅宗は「長者」であつたと称えられる皇帝で、詔書にはすでに罪を免除して朱暉を赦すとしてあつたのに、尚書省の面々は どうしてそれほどまでに恐れたのだろうか。朱暉はこのとき強く立って、高い地位など物の数ではないとしていた。尚書省の面々はまさに笑うべきである。「禍は小さくはない」とは何を心配したのか。皇帝に悦ばれなくて、そのために後にまた進用されなくなることを莫大な禍であるとしたのだろうか。悲しいではないか。

■送晁美叔發運右司年兄赴闕

蘇軾と同じ年の科挙で合格した友、いわゆる「同年」、に晁端彦（字は美叔）がいた（第5章61ページ、第5章122ページ）。これは、晁端彦が都に行く途中で揚州に立ち寄った折の送別の詩。詩題に「年兄」とあるのは、「同年」の間柄の年長の者。この詩は科挙に合格したときのことを回顧して詠んでいる。

かのとき二十歳の私は一人の友人もなく、

天下にはただ弟がいるだけだった。

そこに貴君が来られて門を叩き、

何か求めるところがあるかのようなようだった。

貴君は鶴のように背が高く、

鶴のように清らかで整った姿をしていた。

おうようしゅう
「欧陽脩先生がお尋ねするようおっしゃったのです。

先生は現代の韓愈かんゆのようなお方、

こうし もうし
孔子、孟子の教えを継いでおられます。

貴君は必ず世に名を顕す人であるから、

私も貴君に従って他から抜きん出るようにしたらよろしかろうと、

先生がおっしゃったのです」

酒は醒め、夢は断たれて、四十年、

鶴は、病むこともなく、骨格がますますしっかりとしているのだが、

私は、この羞はずべき老いた顔になってしまった。

すいおう
酔翁(欧陽脩)の門弟は天下にばらばらになり、

その幾人がまだ白髪頭を載せているのだろうか。

おうぎし
かの王羲之は若いときに、

同じく評判の高かった王述おうじつを軽んじて、

「あの者は朝廷の高官になるだけのこと、

私^{かいけい}は会稽に隠棲するであらう」

と言った。

私はまことに生きるのに拙く、

過分の優遇に遭ってまさに王述のように高位に昇ってしまった。

貴君が会稽^{えっ}(越州)を求めているのはまことによい考えである。

無数の谷から川が流れ出る風光を見ることになるだろう。

(越州^{えっ}は風雅を解する人には憧れの地の一つだったようで、蘇軾も赴任を希望したことがあった (第9章4ページ))

■石塔寺

揚州^{よう}の石塔寺^{せきとうじ} (本章 196 ページ) で詠んだ詩。短い序文がある。

世^{おうはん}には王播の「飯後^{はんご}の鐘」の詩^{よう}というものが伝えられている。それは揚州^{よう}の石塔寺^{せきとうじ}で詠まれたという。世間は王播に同情して「飯後の鐘」を伝承してきた。戯れにこの詩を作る。

苦学^{おうはん}する王播は、

飢えて目がくらんで、東も西もわからなくなるほどだった。

腹の虫が、詩でも吟じるかのように、朝も夜も鳴り続けた。

灯火を見てそこに寺があると知って、粥を恵んでもらった。

それから王播は、食事を告げる鐘が鳴ると、寺を訪れるようになった。

寺の僧はそれを嫌い、ある日、食事が終わってから鐘を鳴らした。

寺の僧は、かの韓信かんしんを救った洗濯婆さんほどには情け深くなかったので、王播は冷たく追い返されてしまった。

このくらいのことは、笑ってすませればよいだけであるのに、

王播は、二十年後に朝廷の高官として揚州ように来ると、

昔のことを思い出して石塔寺をそる詩を作った。

寺ではいろいろな若い者を養っていて、

つまらない者を寺に入れてしまうと、

益がないばかりか、憂いを残すことになる。

つまるところ、飯後の鐘を鳴らしたのは、

王播の人間性を見抜いた具眼の士であったのだ。

(この詩にあるように、王播は若い頃おうはんに苦学し、科挙に合格して官員になった。始めは真面目に職務に勤めたのだが、一度左遷を味わうとたちまち変身し、徹底して上に諂い、人民から絞り取る、上からみて「使いやすい有能な官僚」となり、ついには宰相の地位にまで昇った。そのような人物であったから、飯を与えずに追い出した僧を、蘇軾は褒めたのである。なお、韓信かんしんを救った洗濯婆さんのことは本章 179 ページで見ている)

■王文玉挽詞

王琦おう き あざな ぶんぎよく（字は文玉）の死を悼んだ詩。王琦については、池州ちの知事であっ

たということのほかは伝えられることが少なく、蘇軾とどのような関りがあったのかわからないという。

貴君は、唐代の鄭虔のように何ら虚飾がないとの評判、

誰一人として貴君に及ぶ者はいなかった。

月を刻む斧、雲を刻む斤でもって、己の精神を彫琢し続けていた。

貴君は、晋代の皇甫謐と同じく病に伏すことが多く、

漢代の揚雄と同じく三朝に仕えながら昇進することがなかった。

蘭は奥ゆかしい香りを漂わせるはずのものであるのに、

長く草のままでいたのだった。

葉は涙に濡れて乾くときがない。

ただ喜ばしいのは、

ご子息のうちに魏代の曹植のような人がいて、

その文章が波瀾に富んでいることである。

（昔の著名人を並べて、不遇に終わった王琦を慰めているのだが、故事の列挙はさほど心に響かない。何らかの義理でひねり出した詩であるのだろうか）

■送芝上人遊廬山

芝上人（曇秀道人）が廬山に行くのを見送った詩。

この二年の間に三つの州(杭州、^{こう}穎州、^{えい}揚州)を経めぐった。

老いて行くのを惜しむものではないが、

^{ぐるぐる}团团と^ひ碾き臼をまわす牛のように、

一步また一步と同じ足跡を踏んでばかりいる。

だから、世間の外に出ている人が、

魚や鳥と同じように遊んでいる心持ちはわからない。

^し芝上人は雲間の月のように、^{あかあか}時折、炯炯と光を現し、

このところ三度会っているのだが、

いつも心に適うところがあるようだ。

芝上人はいまま^{ろざん}さに廬山に向かうところ、

広範な見通しのもと、いよいよ密に道へと近づいて行くのである。

私の人生は寄せるだけのもの、

出处進退をあらかじめ知ることはできない。

^{こうなん}江南には千の峰、万の峰がある、

この後、そのどこに上人の居所を訪ねたらよいのだろうか。

((1) ^し芝上人とは三度会っていると詠んでいるが、これ以前の二回がいつどこなのかは不明であるという。これより後に、再会、再々会している。(2) 芝上人とは、^{ちょうほし}晁補之とともに同じ舟に乗って^{さんこう}山光寺に行つて、上人が詠んだ詩に蘇軾が次韻しているが、ここでは省略する)

■送程德林赴真州

蘇軾と「同年」の仲間に程筠（字は徳林）がいて、かつて黄州から都に向かう道の途中で会っていたことを第7章26ページで見ている。その程筠が真州に赴任する途中で揚州に立ち寄ったので、この送別の詩を詠んだ。揚州は交通の要衝であるだけに、頻繁にいろいろな人の訪問を受ける。

貴君は元豊年間に県知事になったとき、

役人が(新法による)実績の向上を貪って農民を苦しめているのを見て、
その実態を朝廷に申し上げようとした。

しかし、その手蔓がなかったので、

当時の諫臣に手紙を出し、どうにかして正しい情報を通じさせようとした。

元豊の天子(神宗皇帝)はそれを知って表情を改めたのだった。

私はそのとき馬にまたがって長江の東西を行き来し(黄州流謫のころに当たる)、
旅宿で聞いたたびに、貴君が指摘した通りのことがあった。

老いた人は、貴君が誠実な官員であることを愛し、

若い人は、貴君が思いやりのあることを敬っていた。

その後、天子(哲宗)の御聡明な目は四方に達し、

あらゆる名馬(優秀な人材)は朝廷に集められたのだった。

貴君は都の近くの県知事を勤めて古の人のようであると讃えられ、

その政の評判は直ちに宮中に伝えられたのである。

天子の厩は海のように広くて無数の竜馬を養えるので、
貴君の御子息がその一員に選ばれたところで依怙臆服されたことにはならない。
それにしても、^{しん}真州知事の職は貴君を煩わせるまでもないと思うのだが……。

(1) 新法の実施状況に問題があるとの^{ていじん}程筠の意見書を取り上げたのは^{けんじゅし}憲受之である
と蘇軾自身の注記がある。皇帝自らが推進する改革にすこぶる実効性があると、地方官
が偽って報告することが横行していたなかで、程筠の報告は^{しんそう}神宗皇帝を驚かせたので
あった。(2) 程筠の子が^{せい か}制科の試験を受けてよい成績であったとやはり蘇軾自身の注記
がある。(3) 最後は程筠のような人物がいつまでも地方の知事あるのはもったいないと
いう意味)

■書六合麻紙

^{よう}揚州の近郊で作っている紙について記した短文。各地で特産物を生み出
そうする動きが盛んであったと窺い知ることができるであろう。

^{せい と かん か けい}成都の浣花溪の水は普通の水よりも清く滑らかである。麻や楮をその水に浸して
^{せん し}箋紙を作ると、真っ白ですばらしい仕上がりになる。数十里の範囲の外は製造に
適さない。まことに水の力によるのだ。

^{よう}揚州に^{しよくこう}蜀岡があり、岡の上に^{だいめいじ}大明寺の井戸がある。水の味を知る者は、蜀の水
と似ているという。

^{ろくこう}蜀岡の西に六合県がある。あちこちから水が湧き出し、^{たにがわ}合わせて大きな溪川にな

る。溪川の左右で人々は紙を造っている。その紙は蜀産のものとは比べてそれほど劣るものではない。ここ十年で生産量がますます増え、ますます精巧になっている。さらに数十年もしたら蜀産の紙と区別がつかなくなるであろう。

(1) 成都の浣花溪せいと かん かけいは杜甫と ほが一時期住んでいた場所として有名である。(2) 蜀岡しよくこうの名は本章 249 ページで見ている)

■谷林堂詩

上に記されているように蜀岡しよくこうのかたわらに大明寺だいめい じがあり、その寺の中に谷林堂こくりんどうがあった。そこで詠んだ詩。

深い谷を下って行くと、
奥ゆかしい気配がし、高く枝ぶりのよい林がある。

ここに美しい堂ができてあがったばかり、
秋風が吹き始めたいま初めてそこを訪れる。

待っていたかのように雨が通り過ぎるのは、
私を楽しませようとしているのだろうか。

竹はいなせな若者――

苦難に負けない気概を見せて、すでに節が太くなっている。

槐えんじゅは老いた無頼漢――、

花を風に吹かせて、渠みぞを填めてしまおうとしている。

山の鴉は争うように叫び合い、
 溪の蝉はそれぞれ静かに鳴いている。
 生きる^{おもい}労苦の外へと懷を寄せ、
 ほのかな夢の後のような心持ちで、
 この句を得た。
 昔も今もつまるところは同じである。
 だから、これがいつの詩であるのか、
 歳月を記す必要はない。

(この詩は、新しい堂が完成した記念にと所望されて詠んだのかもしれない。冒頭に、
 谷と林を詠んでいることから、「谷林堂」と命名されたという説もある。恐らくは逆で、
 堂の文字をサービスで詠み込んだのだろう)

■跋李氏述先記

8月22日、都では蘇軾を召還することが決定された。その知らせが届く
 までに何日かかったかはわからないが、蘇軾は6日後に、李氏の先祖の
 働きを記録した文章を読んで、この跋文を記している。

^{とうば こじ}
 東坡居士が記す。

賊が百倍の人数で我等に向かってきていて、我等には防具も武器も城壁もないと
 したら、互いに助け合う父と子であっても、守り通すことはできないだろう。

李君は、鋤や鋤や棒切れしかないのに、人々を率いて賊を拒んだ。人々が頼れるだけの才略を持っていて、人々が違背しないだけの徳を具えているのでなければ、このようなことはできるはずもない。

私は、李君の普段の振る舞いかがどうであったのかを知ることができないのを残念に思う。非常に立派な人でなければこのようなことはあり得ない。

平和な世において、巡り合わせの幸いによって功名を成す士はたくさんいるだろう。しかし、危乱の世においては、豪傑の士であっても埋もれてしまって後世に伝えられないことは非常に多いのである。悲しいではないか。

元祐七年八月二十六日、書く。

(蘇軾自身は戦場に立ったことがなく、蘇軾の肖像画は畑を耕す姿が最も似つかわしいとして描かれることが多い。戦いの場で奮闘したにもかかわらず、そのことが十分に報いられていない者に対して深く心を寄せる姿勢は、退役軍人の郭輪を詠んだ詩(第1章1ページ)以来一貫している)

■生査子

8月の終わらないし9月の初めに蘇軾は揚州を発った。その直前に、蘇堅(本章249ページ)は逆に南へと出発し、別れるに際してこの詞を贈った。

三度別君来、(あなたと別れるのはこれで三度目)

此別真遲暮。(いまのこの別れは本当に老年に及んでからのもの)

白尽老髭須、(あなたは髭を真っ白にして)

明日淮南去。(明日は淮南わいなんへと去って行くのです)

酒罷月随人、(酒が終わると、人は月とともに行ってしまい)

淚湿花如霧。(涙が露のように花を湿らせます)

後夜逐君還、(またの夜にはあなたを追って)

夢繞湖辺路。(夢は湖辺の道を巡ることでしょう)

■書贈張臨溪

都への旅の途中で出会った張堂ちょうどうのためにこの短文を記した。

吾が友の張希元ちょうきげんとは科挙に合格した頃に知り合い、優れた才能があって、功名をもって世にその名を顯すべき人物であった。しかし、不幸にして早くに亡くなってしまった。それは運命というものなのだろうか。

元祐七年九月二日、溪に臨む道を行くと、その子の張堂ちょうどうに会った。この地を治める官員となっていて、民事について問うと、家風が凜然として伝わっていて、張希元りんぜんはいまも亡くなっていないかのようなのである。

勉めよ、勉めよ。枳棘とげあるきの間にいつまでもいるものではきつないであろう。

とうばこじ
東坡居士書く。

■予少年頗知種松手植数万株皆中梁柱矣都梁山中見杜輿秀才求学其法戲贈二首

これも旅の途中での詩。題は「私は少年のころに、松を種^うえることをかなり深く知った。種えた松は数万株で、どれも梁や柱に使えるまでに育った。都^と梁^{りやう}山^{ざん}で杜輿^と秀才^よに会ったところ、その方法を学びたいと言ったので、戯れに二首を贈った」。

其の一

泥のなかを歩み、露に宿って、
草や棘^{いばら}の間から苗を育てる。
十年の間、春の雨に養われ、ようやく竜の髯ほどになる。
いま都のすぐ近くに住む都会人の貴君から、
この東坡居士^{とうば こじ}が松を種^うえる方法を問われるとは……

其の二

貴君は雪を掃って松ぼっくりを拾うがよい。
私が荒れ地を開いて育てた松の根元には、
すでに茯苓^{ふくりやう}が生えるまでになっている。
貴君がもしも楊^{やなぎ}の挿し木を問うたならば、
来年にはもう花を咲かせるまでになるであらう、

しかし、楊は絮は飛ばし、それが水に落ちるだけのことなのだ。

(科挙を目指している杜輿がどうして松の植え方を尋ねたのか。蘇軾の心をとらえようとすいささか小賢しい計略であるのかも知れないと、少しばかり疑ったのだろうか、じっくり勉強に励んで、茯苓(ぶくりよう 霊妙な薬効のある茸)を生やすまでに己を成長させよと、戒めの言葉を贈っている)

■行宿泗間見徐州張天驥次旧韻

船が宿州から泗州へと進む途中で、蘇軾は思いもよらぬ人物の訪問を受けた。詩題にある「徐州の張天驥」とは、すなわち放鶴亭主人の張山人である(第5章310ページなど)。張天驥はやはり自由人であるのだろう、かつて杭州に訪ねて来たし、またここに会ったのである。この詩は、徐州に帰る張天驥を杭州において見送ったときの詩(第9章71ページ)に次韻したもの。

私は、二年の間に三度、船で淮河を通過した。

ここにまた、馬を駆って天下を自在に行くような貴君と会った。

何事もないのなら、ゆっくり酒を飲むのもよいだろう。

詩文を著わすのは、己の愁いの窮まりなさを見つめるためである。

孤独の松が早くから偃せるのは、

もともと病があるからではない。

飛ぶのに倦んだ鳥が還るのは、

ただ休みたいからではない。

私はきっとこれからもこの川を幾度となく往来し、

貴君ともまた会うだろうと思うのだが、

頭はすでにかくも真っ白になってしまっている。

(この詩のそれぞれの句が、蘇軾もしくは張天驥にとってどのような意味合いを持つものであるのか、訳者には十分な推測ができないままに訳したのだが、これまでに張天驥に詠み与えた幾つかの詩とは違って、暗く沈んだ印象がある)

■祭張文定公

9月9日、蘇軾は南京応天府に到着し、すぐに亡き張方平ちやうほうへいの家を訪ね、位牌にこの祭文を供え、遺族に墓誌銘(本章127ページ)の草稿を見せた。祭文は一句四文字、三句一組の形式で作られ、その美しさがわかるよう原文を示し、内容としては格別新味はないので、大意だけを後ろに掲げる。

我游門下、三十八年、如俯仰中。

十五年間、六過南都、而五見公。

升堂入室、問道学礼、靡求不供。

有契于心、如水傾海、如橐鼓風。

風水之合、豈特無異、將初無同。

孰云此来、慟哭不聞、高堂莫空。

斂不拊棺、葬不執紼、我愧於胸。

公知我深、我豈不知、公之所従。

生不求人、没不求天、自与天通。

天不吾欺、寿考之余、報施亦豊。

一子四孫、鸞鵠在庭、以華其終。

自我先子、逮今三世、為好無窮。

以我此心、与此一觴、達於幽宮。

尚饗。

(大意:私は張方平先生の門下生として三十八年を過ごし、それはほんの一瞬で
 あった。南京応天府を六回訪れ、先生と五回会った。学問について尋ねれば必
 ず答えがあり、水が海へと流れるように私は先生に傾倒し、師弟が合致することは
 最初から変わりがなかった。ここに来て私が慟哭しても先生の声は聞こえず、部屋
 は空である。先生は私を深く知っていたのであるから、私が先生のことを
 知らないでいてよいはずがない。先生は生きていて人に求めるものではなく、亡くな
 って天に求めるものではなく、自ずから天に通じるお方である。いま御子息が一人、男
 の孫が四人いて、いずれも賢人である。我が父より今に至るまで三代にわたって
 先生の家とはよしみを結び、それは永遠に続いてゆくであろう)

■在彭城日與定國為九日黃樓之會今復以是日相遇於宋凡十五年憂樂出處

有不可勝言者而定国学道有得百念灰冷而顔益壯顧予衰病心形俱瘁感之作詩

南京^{なんけい}応天府^{おうてん ふ}には張^{ちやう}方平^{ほうへい}の娘婿^{おうきよう}である王鞏^{あぎな}（字^{てい}は定国^{こく}）がいた。長い詩題は次の通り。「私は^{ほうじやう}彭城^{じよ}（徐州）にいたときに王鞏^{おうきよう}とともに^{こうろう}黄樓^{ろう}において重陽^{ちやうやう}の会をもった。いままた九月九日に^{そう}宋（南京^{なんけい}応天府）で王鞏^{おうきよう}に会った。およそ十五年の間の憂楽や出処は言葉にしがたいものがある。王鞏^{みち}は道を学んで得るところがあり、雑念がすっかり静まって、顔はますます若々しい。私は衰え病み、心も体もぼろぼろである。感じたことを詩に詠む」。

（徐州^{じよ}の黄樓^{こうろう}で重陽^{ちやうやう}の節句に詠んだ詩は第5章 291 ページで見ている）

九月九日といえば――

昔から伝わるのは菊^{きく}の盞^{しん}に朱萸^{しゆ}の囊^{ふろ}、

そもその始まりは^{へいちやうほう}費長房^{ほう}の教えに由来するのだが、

我等としては、

漢^{かん}の武帝^{ぶてい}がこの日^{ふんすい}に汾水^{ふんすい}に船を浮かべて遊樂したのに倣おうと、

十五年前に^{こうろう}黄樓^{ろう}で宴を張ったのだった。

徐州^{じよ}には、やはりこの日^{りやうゆう}に劉裕^{りやうゆう}が感慨^げにふけた戯馬台^{ぎばだい}があった。

いずれにしても歳月は流れ去り、

いま宝玉のような貴君に会って、

いよいよ自分が老いたを感じずにはいられない。

貴君は永遠不変の大河のように、千首もの詩を賦しているので、

黄樓の第二篇もたちまち賦し出すことであろう。

(この詩は重陽の節句に関連する故事をやたらと並べ、長い詩題に相應するだけの内容がない。蘇軾もそれを感じたのだろう、同じ日に次の詩も詠んでいる)

■九日次定国韻

九月九日に王鞏おうきやうの詩に次韻したとあるが、王鞏の詩が、上の蘇軾の誘いに応じて詠んだ「第二篇」であったのか、別の詩であったのはわからない。

朝あさに生えて夜には消える菌きのこには晦みも朔ついでちない、

夏の蟬は春や秋のあることを信じない、

南柯なん か こく国で波瀾の一生を過ごしたと見たのも、

寝返りをするまでの我が夢のこと、

仙人から吾等を見れば、

蜂や蟻がうじゃうじゃ何事かをしているのと異なるところがない、

蝸牛かたつむりの角の上で争った蛮ばん氏しやくと触氏にだって、

それぞれ国家の憂いがなかったわけではない——

かくて私は、去、来、今きょ らい こん(過去、現在、未来)を大観して、

そのいずれかに我が一念を留めるものではないのだが、

走りまわってついに何も得るところがなく、

ただ限りない羞^{はじ}を引き起こしてきただけだった。

王君^{おう}は誤って俗世間^{わた}を涉らねばならなくなり、

しばしば献策をしながらついに酬^むられないまま、

やむをえず黄金を行楽に費やし、

愁いの窮まるところを清らかな詩に出している。

かくて四十年を一瞬のうちに過ごして、

人生とは寄る辺なく浮かぶものだと知ったのである。

礼服を着て立派な車に乗って道を行く高官も、

かつてはそこらで遊ぶ子供であったし、

大邸宅を建てた大臣も、

ひょっとしたら貴君の家の馬飼いであったのだ。

町の行商人のなかにも、

第一級の人がいるだろうし、

ぼろぼろの着物のなかに、

輝く一寸の珠^{たま}(高潔な心)を保っている人もいる。

私は、旅を志したことはないのに、

たちまち天下をほぼ巡ることとなって、

たまたま貴君と出会ったのは、

人が謀ったのではなく天が与えてくれたものである。

笑うべきは、

私は酔った夢のうちにあって、
 衣冠を身に着けて猿踊りをしているだけなのである。
 名馬も病めば力が尽きてしまい、
 名優も技が行き詰まれば老いさらばえるだけ。
 山には、白雲の湧く石があり、
 田には、耕すべき土がある。
 きっとどこにでも無何郷があり、
 貴君とともに逍遙する遊びができるであろう。
 そうした遊びから帰ってきてみると、
 ここに都があったのは確かであっても、
 ただ累累と墓があるだけとなっていることだろう。

(大都市が栄華を極めれば、その近くに墓がたくさん作られ、都市が衰亡した後に、虚しく墓ばかりが残るという光景は、長い中国の歴史において数限りなく繰り返されてきた。この詩の終わりはいずれ宋の都もそのようになると歌っている。この詩も含めて、揚州を発ってからの幾つかの詩は重苦しい雰囲気漂わせている。それは、都に行きたくない蘇軾の気持ちの表れであるのだろう。都に行けば「限りない羞を引き起こす」(原詩は「無窮の羞を起こす」とわかっていて、それでも官に仕える身としては朝廷の指令に従わないわけにはいかない。「無何郷での逍遙」は夢想でしかないのだ)

■召還至都門先寄子由

都に入る直前に、蘇軾はこの詩を弟に寄せた。

老いたこの身は疲れ倦^うんだ馬、
川の堤はどこまでもどこまでも長く、
黄^{にれ}なる榆、緑^{えんじゆ}なる槐の影を踏み続ける。
野の鶏が月に叫んだのはまだ夜中のうち、
ほんの束の間の旅の夢に、
僕は家^{かえ}に還っていた……
帰ってからの田舎暮らしは、
もはや歳月の流れを感じない。
夢から覚めるなら、
田舎暮らしは無限の歳月の彼方……
溝^{うも}に填れて野垂れ死にをするまでの間は、
なお朝廷の要請に従って行かねばならない。
君が朝廷において重要案件について奏し終わった後で、
皇帝は詔をもって僕の出迎えに出ることを許してくださったという。
君は一目散に車を飛ばし、
もう橋のあたりに着いていることだろう。
きっと皇帝からの賜りものである酒や茶を携えているだろうけれど、

遠くから来た僕には君に贈るものはない。

ただ、今年は揚よう州、潁えい州のあたりは豊作であったと、話したいと思っている。

(1) この詩の始まりは、大運河沿いの街道を歩いていて都に向かっているかのように描写しているが、それはあくまでも心象風景で、実際には船に乗っていたのだろう。(2)

杭こう州を出てから 1 年半の間に、都、潁えい州、揚よう州、そしてまた都と、落ち着く間もなく転々としてきた。都に着くと、恐らく長くいることはないと思ったのであろう、馴染み

興こう国こく寺じの浴よく室しつ院いんの東堂 (本章 21 ページ) にしばしの身を寄せた)

■次韻定国見寄

蘇軾は 9 月中旬に都に着き、すぐに、南なん京けい応おう天てん府ふにいる王おう鞏きよう (字は定あざな国ていこく) から詩が届いたので、次韻して返した。

朝廷に還れば夢の中にいるかのよう。

二つの城門まはは眩きんゆい金碧ぺき。

鴛鴦えんおうの列(朝廷に向かう官僚の行列を表す常套の美辞)にまた身を入れ、

山の鹿である我が足跡を強いてそこに寄せる。

こうした無理やりの暮らしてあるから、

冬の日短いはずなのに、

もやもやもたもたとしてなかなか夕方にならない。

黙って坐り、時を告げる太鼓が幾つ打ったかをただ数えているのである。

こうが

黄河は夜になると逆流して、昼間に東流した分を取り戻すという話があるが、

私も自ずとそのような次第である。

貴君は私のためにいろいろ考えていてくれていて、

その志にはいつか報いたいものだと思う。

人は病むと、我知らず最も懐かしく思う土地の歌を吟じるという。

ならば、私は何を吟じるのか。

それはきつと越^{えつ}の歌なのだ。

(最後の句には、蘇軾自身の注で、このとき越州^{えつ}に転出することを朝廷に願い出ていると記している。つまり、都に着いてすぐにどうにかして出ようと動いていたのだ。なお、越州はこのころの蘇軾にとって憧憬の地になっている (本章 255 ページ))

■次韻蔣穎叔錢穆父從駕景靈宮二首

10 月、都の景靈宮^{けいれいきゆう}で皇帝が祭事を行い、それに携わった蔣之奇^{しょうしき} (字は穎叔^{えいしゆく})、錢勰^{せんきよう} (字の穆父^{あづなぼくふ}) が詩に詠んだので、やはり祭事に関係した蘇軾が次韻した。蔣之奇も錢勰もかねてからの知り合いで、それぞれ第 7 章 64 ページ、第 9 章 27 ページなどで見ている。2 首のうち 1 首を訳す。

(都に来れば、朝廷に居並ぶ人々と詩を贈答し合うことになるし、朝廷の行事を重々しく詩に詠むことを期待されもする。我々にとっては面白味のない詩ではあっても、意志に反して都に身を置き、浮世の義理に縛られながらも少しは創造性を発揮しようと努めて作ったのだろうから、敬意を表して辛抱して読んで行きたいと思う。とはいえ、全

部を読むのはさすがに苦痛ではある……)

其の一

都に帰り来たのは病んだ鶴のようなこの身、

けいれいきやう

景靈宮の門より入ると、

松の枝よりしたり落ちる露(皇帝の恩の象徴)をかつても踏んだことを思い出す。

半分白くなった髪が襟まで垂れるのをいまさら取じらいはしない。

貴君等が戯れに言うには、

せいこ

西湖の風月も都の繁華なることには及ぶまいと。

なるほど、お上のお車から立ち昇る紅い塵には心惹かれる香りがある。

雨が晴れ上がり、

都の九百の道には豊年の気配が満ち、

日が麗らかに照り注ぎ、

いまこの宮に天地の神々が集まっている。

お上が民のために尽くされている御心はこれにて知れるのだが、

私はまことに不才、この祭事に何らのお手伝いもできていない。

■憶江南寄純如五首

こうなん

じゆんじよ

江南の風光を思つて純如に寄せた詩。純如は僧であるのだろうが、詳し

いことはわからないという。

其の一

楚水(そ すい こう きんりょう ちようこう)のあたりの長江を指すのだろう)と別れて十年、

その先の蜀(しよく)の山々の千の重なりは、望んでも見えない。

私はついには儵父(いなかおやじ)になるつもりでいる——

貴君から、そのように呉(ご じよう)の土地を得た常州(ちようこう)あたりを指すのだろう)の人々に言ってしまう。

其の二

江南(こうなん)の蓮の実は目にも嬉しい、

江南の蜜柑はそれによって暮らしが立てられる。

三呉(さんご)の地(ち こう)(広く杭州周辺)のよさを挙げるとしたら、

千里の道をいそいそと帰らせる魚の旨さだけではないのだ。

其の三

江南の人々はあたかも画の中に住み、

江南に旅する人々はあたかも月の中で遊ぶ。

まだそこに住むべき家を建ててはいないけれど、

かならず一艘の舟に乗って行くであろう。

其の四

生計の算段は、干上がった池で互いに泡をかけあう魚ほどもなく、

ただ一人悠然と清らかな風に吹かれたと思っている。

かの^{はんらい}范蠡は政界を退いた後で実業家として大成功した、

かの^{りょうこう}梁鴻は放浪の旅に出るときに妻子も引き連れた、

どちらにしても笑ってしまう。

其の五

^{じゃくろい}弱累(息子のこと)は俗世間に置く始末をつけ、

いま我が身を僧侶の住まい^{よくしつゐん}(浴室院)に置いている。

とはいえ、秋風に吹かれながらも、

さっさと都を去る決断ができずにいるのだ。

■軾近以月石硯屏献子功中書公復以涵星硯献純父侍講子功有詩純父未也
復以月石風林屏贈之謹和子功詩並求純父数句

石好きの蘇軾ならではの詩。詩題は次の通り。「私は近ごろ、^{ほんひやくろく} 范百禄 (字
は子功) に『月石』の硯屏を差し上げ、また^{はんそ} 范祖禹 (字は純父) に『涵
^{せい}星』の硯を差し上げた。それに応じて^{げんひやく} 范百禄は詩を詠んでくれたが、^{はんそ} 范祖禹からはまだ応答がない。そこで、さらに『月石風林』の硯屏を贈って、
范百禄の詩に和した詩を添え、^{げんひやく} 范祖禹に数句を求めた」。硯屏は硯の傍ら
に置く飾りの石。「月石」「涵星」「月石風林」と名付けた硯屏や硯を、朝

廷の高官である范祖禹と范百禄に贈ったのである。范祖禹の名はすでに
本章 246 ページで見えていて、范百禄はその一世代上の親族である。

紫の潭(「涵星」の硯)から玄い雲(墨)が湧いて、

この潭の中の星(硯の模様)を翳す。

すると潭の上に月が現れ出るのは、

紫翠の硯屏(「月石」の硯屏)が逆さまに映っているのである。

我は老いても書物を見るのをやめ、

黙って坐って、昏く花の散る晴(病んだ眼)をいたわり、

時々ふっと眼を開いて、この雲と月を見る、

すると、自ずと瞳が明らかになるのを覚えるのである。

この世界はひとつぶの泡の影のようなもの、

どちらが大きいかい小さいか、真か偽を論評するまでもないことは、

前々から知っている。

だから、笑ってしまうのは、

かの欧陽脩、蘇舜欽、梅堯臣が「月石」をそれぞれ詩に詠んで、

雪と羽のどちらが真に白いかとの争いをおこしたことだ。

そこで、お二人の范殿が何を言われるだろうかと、

ことさらに珠玉のようなこの硯屏と硯を分けて、

それぞれにお贈りして窓辺に置いていただくことにした。

だいほん はんひゃくろく

大范殿(范百禄)はたちまち長い詩を作られ、

その語は月から飛び出してきたかのように、人を驚かせるものである。

はん そ う

小范殿(范祖禹)もそれを継いで、

星を消し去る鶏のいみなきのような声をぜひ挙げていただきたい。

私の手元には、

もう一つ、月の下に風林の横たわる石(「月石風林」の硯屏)があるので、

急いで小范殿のもとに送って、「涵星」の泓を護らせようと思う。

と ほ

杜甫の詩ではないけれど、

山の木をことごとく傾かせるような勢いのある一句を、

どうか願いた。

■次韻范純父涵星硯月石風林屏詩

上の詩で見たように、「涵星」の硯に加えて「月石風林」の硯屏までも贈られた范祖禹(字は純父)は、さすがに沈黙しているわけにはいかないと詩を詠んで送ってきた。すると、間髪を入れずに蘇軾がそれに次韻して返した。范祖禹としては、次韻の名手と付き合うのはなかなか大変だと思ったことだろう。

日が揺れ動きつつ西の窓を傾き下り、

月が靈妙な星々の間に宿ったときに、

その影が蘇子(蘇軾)の硯と硯屏へと落ちてきたのが、

「涵星」と「月石風林」である。

天の工もこの私もことさらに事を行うのを嫌うのに、

そのどちらかがうっかりとこの形を作ってしまったのだろうか。

私はこのほど家財をかついで都に出て来て、

貴君とともに朝廷に並んで、

太平の奇瑞を観るに至ったのだが、

私はせいぜいのところ大臣の馬の轡を取るような者であって、

人々を楽しませる道化役でしかないので、

衣冠を宮殿の門に掛け、水に舟を浮かべて、

南の涯に帰ろうと思っている。

この二つのものを先生にお贈りするの、

硯は沐浴するに足るだけの深さがなく、

硯屏は酔いを醒ますために座るだけの大きさが無いけれど、

この優れたものを朝廷に留めたいと思うからだ。

たとえ硯に水を涸らせることがあっても、

硯屏の光は曇らせないようにしていただきたい。

皇帝に差し出す文書は、私が連署するのを待つことなく、

貴君独りで雷のようなお怒りにも触れる覚悟で書かれるであろう。

私が風に鳴る林の下で酔って眠っているときに、

貴君は漁火ならぬ硯屏の青い光を受けて、

せっせと文章を記すのである。

この詩を貴君に寄せて、私は独り嘆息する。

このようなことを聴いてくれる者は他には誰もいないのだ。

(この詩は、古くはなかなか高く評価されていた作品である。蘇軾の次韻詩の特徴として、いつものように故事を多用して曲折に富んだ深い含蓄のある作となっている。しかし、その意味するところを十分に汲み取るのにはかなりの労力を必要とするので、大意がわかる程度にごく軽く訳した。(2)「南の涯」(原文は「南溟」)に帰るとは、越州に出るのを希望していることをいう)

■次韻錢穆父會飲

蘇軾と飲んだことを詠んだ錢勰(字の穆父)の詩に次韻した。同じく次韻の詩でも、上の詩と違ってこちらは平明である。越州に出る希望を詠んでいるところは同じである。

世の常として、

官員としての印である冠を、初めて塵を払ってかぶるときには、

早くにこうならなかったのを恨み、

冠を掛けて官職から退くときには、

はなはだ遅くなってしまったことに苦しむ。

私は、朝廷に出るときには、早くに起きて衣服を整え、
仮寝をしつつ時が来るのを待ち、
家を出てからは、都の街角ごとに、伏して今日に為すべきことを考える。
我が送別の宴は、まだ都の門の外で開かれないので、
あご
頤を支えて遠くの山を虚しく眺めつつ、
こうかい
江海に逝き去って、この鹿の本性を安んじたいと想い見ている。
つまるところ、退隱するところが得られさえすればよいのであって、
どこであるかを選ぶ暇はない。
貴君とは幾度も会い、幾度も別れてきた。
酒を得て、それが濃いか薄いかは問題でない。
貴君の議論は木を削るような手練の早技、
私の飲み方はへば碁のようにぐずぐずしている。
ろくな仕事ができている私が官職にあるのは、
造物者のおかしな依怙臆負というものであらう。
貴君は賢才をもって、
民の間に錢や穀物が流れ馳せるようにと働いてきたので、
人々は貴君が再び赴任してくるのを待っている。
高官たちは安逸に過ごしているのに、
民の苦しみは常に続いている。
私は新たな任地としてもし会稽^{かいけい}(越州)^{えつ}を得られたなら、

少しも躊躇しない。

（(1)「へぼ碁」と訳したところには、蘇軾自身の次のような注記がある。「世間にこのようにいわれている。『詩を詠むのは碁を打つよりましだ。碁を打つのは酒を飲むよりましだ』。これは飲酒を大いに戒める言葉である。私は碁も酒もともに得意ではない」。

(2) 11月中旬に国の大事な祭事があり、やはり錢^{せんきょう}勰が詠んだ詩に次韻したり、朝廷に並ぶ者の一人として威風堂々の詩を詠んだりしているが、我々の興味を引くものではないので省略する)

■次韻王仲至喜雪御筵

雪は豊年の兆しで、12月の初めごろに雪が降り、それを皇帝が朝廷の高官を引き連れて見に出たのを王^{おうきんしん}欽臣（字は仲至^{あざなちゆうし}）が詩を詠み、蘇軾が次韻した。

眠りから醒めて、砂の上に月の光が注ぐようなありさまを見た、
人々が喜び合う熱気によって、空に飛ぶ花は融けてしまい、
一日に一万八千里を走る馬を集めて陛下がお出ましになる前に、
宝玉が残るのは御門の上ばかりとなった。

私は皇城に帰ってきたものの、たまたま身を寄せているだけ、
金を借りてでも酒を買って江南^{こうなん}の風光を愛でたいと、
そのようなことばかりを憶^{おも}っている。

お上より仕事を仰せつかることは多くはないのだが、
それでも緊張のあまりあたかも酔ったような気分になってしまう。
この白髪頭の老人の身を無理やり起こして、
君恩を拝してお祝いを申し上げるのである。

(1) この詩では、^{おうようしゅう}歐陽脩が禁じた^{たいぶつ}「体物の話」(本章 93 ページ)である飛花、月光、玉といった雪を表現する常套語を使っている。(2) ここに登場した^{おうきんしん}王欽臣と、先に名の挙がっていた^{せんきよう}錢鏐^{しょうしき}、^{しやうしき}蔣之奇と^{げんゆう}蘇軾おはしばしば詩を詠み合い、当時「元祐の四友」と称せられたという。しかしながら、かつて^{えい}潁州で四賢人を相手に詠んだ詩に比べると、かなり興趣に欠けるといわざるをえない)

■頃年楊康功使高麗還奏乞立海神廟於板橋僕嫌其地湫隘移書使遷之文登因古廟而新之楊竟不從不知定国何從見此書作詩称道不已僕不復記其云何也次韻答之

長い詩題はおよそ次の通り。^{げんぼう}「元豊六 (1083) 年、^{ようけいりやく}楊景略^{あざな こうこう} (字は康功) が^{こうらいこく}高麗国に使者として行き、帰って来ると、朝廷に願って、(航海を無事に終えられた謝礼に) ^{かいじん}海神の^{みつ}廟を^{はんきやうちん}密州の板橋鎮に建てた。私はその地が狭いのを嫌って、^{とう}登州の^{ぶん と}文登県に移すよう楊景略に手紙で提案した。しかし、楊景略はそれには従わなかった。私は手紙に何を書いたのか忘れてしまったのだが、^{おうきよう}王鞏^{ていこく} (字は定国) がどこからかその手紙を見つけてきて、詩を作って大いに称えたので、それに次韻して答えた」。蘇軾は元豊 8 年に短

い期間だけ登州知事として赴任している（第7章222ページ）ので、楊景略への手紙はそのところに書いたものであるのだろう。

かん ゆ
韓愈は仙人のような人で、

遊び戯れるようにして詩文を作り、

談笑する間に偉 きわめてすぐれたことば 奇語を出し、

南海の神を踊らせるほどであった。

先 こうらい こくの高麗国への使者殿は、

ほとんど海の怪物に吞まれそうになりながらも帰国でき、

海の神を祀る祠 はんきょうちんを板橋鎮に築いて、

商人が集まって参詣できるようにした。

私はそれを、蜃気楼を下に臨む登州の場所に遷したらよかろうと考え、

手紙を書いて送ったのだが、従ってくれなかった。

使者殿は肝っ玉の太い人ではなかったのだからそれも仕方ないのだが、

おうきょう
王翬君はどうしたことか、

空の雲となって消えてしまったこの提案をまた繋ぎ止めようと、

詩を作って褒めたたえてくれた。

舟から剣を川に落としてしまって、

あわててふなべりに傷を刻んで、その下を捜そうとするようなものだ。

私はもう囊 ふくろの口をしばってしまったのだよ。

^{しんだい}（清代の文人、^{き いん}紀昀はこの詩に対して、「これは何ら国家の大事に係る問題ではない。それなのに、争うために争い、褒めるために褒めているのだ。^{そうだい}宋代の人々は概ねこのようなこととしていて、これで党派争いが起こらないはずがない」と論評しているという。^{おうきよう}蘇軾は王^{ふうろ}鞏をたしなめて、「^{かいつのう}囊の口をしばった」（原文は「括囊」）と言っているのだが、その一方で楊景^{ようけいりやく}略を「肝^{らいらく}っ玉が太くない」（原文は「磊落の人にあらず」）とけなしている。蘇軾自身が巻き込まれた旧法党と新法党の争いは、結局のところ北宋を滅ぼしてしまう大きな要因となったので、後代の人々は党派争いに明け暮れた宋代の士大夫に対してかなり批判的であった。党派争い自体は、蘇軾も厳に慎まなければならないと再三主張しているのも、旧中国においては、結局のところ、自由で闊達な議論が發展するのは極めて困難であったのだ）

■沐浴啓聖僧舎与趙德麟邂逅

^{えい}穎州で親しくした^{ちょうれい じ}趙令時（字は^{あざな とくりん}徳麟）（本章 139 ページなど）は蘇軾の推薦によって都に呼ばれた。2 人は^{けいせい いん}啓聖院の僧舎で会い、ともに沐浴してこの詩を詠んだ。

皇帝に奏上するのも、故郷に帰るのも、

^{まこと}真にあることではないのだろう。

^{えい}穎州の^{せい こ}西湖で貴君としたこともすでに過去。

^{いにしえ}古の賢人の^{き し}季子のような貴君が都に帰ってきたのは実に喜ばしい。

沐浴したばかりの老子^{らうし}は人であるように見えなかったというが、

この私はいま貴君の眼にはどのように映っているのだろうか。

酒は酔う^{ほかほか}ほどには飲まず、体は休休と暖かい。

睡り^{ねむ}は禪に入るかのようで、息息^{すうすう}と呼吸は穏やかである。

笑ってしまうのは、

塵まみれの労苦の中にあってもたった一つだけの念^{おも}いがある――

来年の春はきっと越州^{えつ}の谷川に舟を浮かべるのだ、

貴君も一緒に……

((1) この詩の初句と第二句は原文では「南山北闕両非真、東潁西湖跡已陳」と、「東西南北」を巧みに織り込んだ対句になっている。(2) 蘇軾はひたすら越州^{えつ}に移ることを望み、次の詩でも同じように詠んでいる)

■余旧在錢塘伯固開西湖今方請越戲謂伯固可復来開鏡湖伯固有詩因次韻

杭州^{こう}で一緒に仕事をした蘇堅^{そけん}（字は伯固^{あざな はくこ}）もまた蘇軾の推薦によって都
に來ていた（蘇堅は一度南に行って（本章263ページ）から上京したのでろう）。詩題
は、「私はかつて錢塘（杭州）にいたときに蘇堅とともに西湖を浚渫した。
いま越州^{せんとう}に移ることを願っていて、一緒に向こうで鏡湖^{せいこ}を広げようと戯
れに蘇堅に言ったところ、詩を作ってきたので次韻した」。鏡湖は越州の
名所である。

私の本分は江湖^{こうこ}においてこの生を送ることにあると、
もとより定まっていた。

会稽^{かいけい}(越州^{えつ})に行くからにはまた貴君がいなくてはならない。

鏡湖^{きやうこ}を周囲八百里に広げて、

しかも貴君が詩を詠むなら、

鏡湖の名はますます天下に高まることだろう。

(鏡湖^{きやうこ}は周囲三百十里とされているので、それを八百里に広げようというのであるから、まさに嘘八百である)

■僕所蔵仇池石希代之宝也王晋卿以小詩借觀意在於奪僕不敢不借然以此
詩先之

石好きは蘇軾一人ではなかった。この詩の題は、「私が所蔵する仇池^{きゆうち}の石
は希代^{おうしん}の宝である。王詵^{あざな}（字は晋卿^{しんけい}）が詩でもってこれを観^みたいと言っ
てきた。その意^{こころ}は私からこの石を奪おうというものである。それでも貸
さないわけにはいかないのので、先にこの詩を送った」。「仇池の石」とは揚
州^{よう}にいたときに得た石（本章 211 ページ）である。王詵^{おうしん}（本章 28 ページなど）
には若い頃からパトロン的存在として世話になっているので、望まれれ
ば断れないのだろう。

この海の石^{きゆうち}(仇池^しの石)は珠宮^{しゅきゆう}(嶺南^{れいなん}の地)から来たものだ。

その秀れた色はかの蛾緑(値千金といわれた貝の色)のようだ。

一尺一寸の間にも、高くなり低くなり、岡や山が延々と続き、

華山(天下の名峰)の二つの絶頂が向き合い、

三茅山(天下の奇勝)の空洞が開いている。

始めはかの仇池が化したものかと疑い、

次には瀛洲(海中の仙山)が蹙まったものかと思った。

有難くも嶺南に使者として行った人(程之元)が、

揚州知事(蘇軾)に土産として贈ってくれたものである。

これを得てからは喜んで寝られないほどであるのだが、

貴君との交際を踏みにじるわけにはいかないので、

高麗の盆に文登の玉石を敷いた上に載せてお届けしよう。

夜明けに先んじてかすかな光を放ち、

夏を圧倒する冷気を発するであろう。

この老人の生は寄せるようなもの、

ただ茅舎(引退後の住まい)をまだ得ていないので、

幸いにも一人の力でも運べるようなこの石だけは、

千里の道もいつも一緒にいるのである。

風流の貴公子(王詵)は、

かつて武当谷に流されていた(蘇軾に連座して罪を得たことをいう)のだから、

山は見飽きるほど見てきたはずであるのに、

どうしてこの石を奪おうと思われたのか。

貴君も知っての通り、

(昔、小国^{ちやう}の趙^{しん}が大国の秦から、十五の町との交換で宝玉を求められたときに)

趙^{りん そうじょ}の藺相如は、宝玉を渡さなければかえってこちらの弱みを見せることになるから、むしろ交換を承諾して秦の不誠実なところを天下に明らかにした方がよいと言った。

私も同じ考えであるので、

貴君にこれをお渡しするのである。

ただ決して他に人には見せないようにしていただきたい。

もしもそうしたならば、石はきつとすばやく抜け道を通して帰ってくるであろう。

((1) 蘇軾自身の注で、「私が揚州^{よう}にいたときに、程之元^{てい し げん あざな とくじゅ} (字は徳濡^{れいなん}) が嶺南での役目を終えて帰ってきたときに、この石を贈ってくれた」と記している。程之元は姉の夫の弟である (第8章87ページなど)。(2) やはり蘇軾自身の注で、王誥^{おうしん}に石を貸すときに、「高麗^{こうらいこく}国からもたらされた大きな銅盆に石を載せ、下に登州文登県^{とう ぶん と}で得た玉^{ぎよく}のように砕かれた海の石を敷いた」と記している。登州で得た石については第9章28ページで見ている。(3) 最後は有名な藺相如^{りんそうじょ}の故事を用いて、小国が非道な大国に正義をもって立ち向かう覚悟で石を貸すのだと、わざと大げさに述べたのである。藺相如は宝玉を携^{しん}えて秦国に乗り込み、秦王の前で一芝居を打つと、抜け道を使って宝玉はさっさと本国に戻したのだった)

■王晋卿示詩欲奪海石錢穆父王仲至蒋穎叔皆次韻穆至二公以為不可許独

穎叔不然今日穎叔見訪親睹此石之妙遂悔前語軾以謂晋卿豈可終閉不予者
若能以韓幹二散馬易之者蓋可許也復次前韻

上の詩の続き。^{おうしん きゅうち}「王詵は仇池の石を奪おうとの意志を詩で示した。私の詩
に^{せんきょう おうきんしん しやうしき}錢勰、王欽臣、蔣之奇が次韻し、^{かんかん}錢勰と王欽臣は王詵に与えることを
不可としたが、蔣之奇だけは違った。今日、蔣之奇が来てその石のすばら
しさを直接見て、前言を悔いた。しかし、王詵はあきらめてくれるような
人ではないので、^{かうだい}韓幹が描いた二頭の馬の画と交換してくれるのならよ
しとしようと思いつき、そのことを前の詩に次韻して詠んだ」。上の詩を
王詵に送ってからも、蘇軾はしばらく石を手元に留め、友人を引き込んで
騒動をわざと大きくして楽しんだのだった。韓幹は唐代の著名な画工で、
その馬の画を王詵が所蔵していることは第5章 158 ページで見ている。
いわば国宝級の名画との交換なら石を与えようと、蘇軾はこの詩で提案
したのである。

^{しば そうじょ}かの司馬相如は故郷の山を想わぬものではなかったが、

千里の遠い道を帰るまでもなく、

絶世の美女といわれた細君の眉(眉の曲線美は山に譬えられる)を見るなら、

もう心に十分な満足を得たのであった。

^{りはく}李白は華麗な詩句を吐くので腹に錦繡を蓄えているといわれたが、

私ときたら腹の中にあるのは藜^{あかざ}や莧^{ひや}くらいのもので、

部屋は空っぽで、ただ仇池の石だけがあるのだ。

私は病み衰えて、とにかく山に帰りたいとの一心で、

この仇池の石を見つ^{びんざん}つ岷山(蜀の山)へと川を遡る思いを味わっているのだ。

貴君が貪らないことを宝として守ってくれるのなら、

私はこの瑕^{きず}なき玉^{ぎよく}のような宝を全うすることができる。

友人の二人は詩をもって貴君を戒めてくれて、

その妙語は実に感心するものがある。

一人だけは異論を唱えているが、

三人の占うところとしては、多数である二人に従うべきであろう。

貴君の家には無数の画があって、

天馬が追いかけ合うものもあった。

風にたてがみをなびかせて原野を走るかと思えて、

たちまち尾が溪谷を揺り動かしているというありさま。

もしもその画と換えるのを許してくれるのなら、

まさに私の望むところである。

今朝、^{しやう}蔣君がやってきて、

石のために送別の詩を高らかに吟じてくれたのだが、

なぜか気が変わって、

この石は留めておくがよいと私に勧めてくれた、

「ひとたび別れたならば、帰ってくるのがあっても、

ずっとずっと先になるだろうから」と。

(この「仇池きゅうちの石」の騒動きやうどうがどうなったかという、蘇軾そしは同じ韻でもう1首詠んでいる。その題は、「私は石と画を交換かんかんしたいと思ったが、王詵おうしんは承知せんきしなかった。錢勰せんきやうは王詵が二つとも取ってしまえばよいと言いい、蔣之奇しょうしきは画は焚き石は碎くずいてしまえと言いった。私は前の韻を用いて、二人の言い分をなだめる詩を詠んだ。外野はわざと無茶なことを言いって、面白く盛り上げようとしたのだろう。それに対する蘇軾の詩は、故事のてんこ盛りでぐうとも言わせまいとするもので、訳すのは面倒極まりないものである。要するに、一切なかったことにしようと提言するものであった)

■程徳孺恵海中柏石兼辱佳篇輒復和謝

これも石の詩。「仇池きゅうちの石」は蘇軾そしが揚州ようしゅうにいたときに、嶺南れいなんから帰かえってきた程之元ていしげん（字は徳孺あざな とくじゆ）がもたらしたものだいった（本章211ページ、291ページ）。程之元もいまは都みやこにいて、詩を添そえて、また別の石、「柏石はくせき」を贈くってくれたので、謝礼にそれに和なして返かえした。「柏石」も南の海で得たもので、その名から察するに樹木のような形状けいざうをしているのだろう。

嶺南れいなんの嵐にもまれ、熱風の毒氣どくきにさらされながらも、

貴君はまことに血色よく帰かえってこられた。

あちらで貪泉たんせんの水をぐくぐ飲んで、

あたかも昔の仙人の後を継つぎごうとしたのであろう。

車を連ねて靈藥を宮中に献上するようなことも、

網を沈めてごっそり珊瑚を取るようなことも、

もちろんするような人ではなく、

ゆ れい
庾嶺を超えて南にいた三年の間に、

そうけいしゅう
曹溪宗(禪の一派)の教えの一滴を汲み取ったという。

それで、貴君は私を迎えると、

はくせき
庭に置いた二つの柏石を指さすだけなのだ。

老いに臨んだ私に、

ほう こ
方壺(海中の仙山)を知れと、言いたいのであろう。

((1) 南の地^{たんせん}に貪泉があることは本章 251 ページで見ている。(2) 曹溪宗^{そうけいしゅう}に言及したのは、程之元^{てい し げん}は嶺南^{れいなん}にいる間に禅僧と親しくしていたからである。「柏石」^{はくせき}を指さしたとあるのは、ある禅僧が無言で庭の柏の樹を指さすだけであったという故事を用いたものである)

■和叔盍画馬次韻

かんかん
韓幹の馬の画を巻き込んだ騷動^{ちようしゆくおう}はおさまったが、これは趙叔盍という人が描いた馬の画を詠んだ詩に次韻したもの。趙叔盍は皇族の子孫で、馬を描くのを得意とした。

天を駆ける馬は徳と力を兼ね備え、

尋常の馬の カテゴリー 埒の外にあって、
 竜や麒麟の中に置くべきである。
 そのような名馬であっても、
 天がことさらに顕彰することはないので、
 この画を描いたのであろう。
 ろくでもない馬が、官の厩舎で飽きるほど餌を与えられていて、
 名馬が現れたところで、それらが一洗されてしまうことはない。
 平凡な馬も十回走れば、
 名馬が一度に行く先に至ることができる。
 何も風に乗じるのを望まずともよいのではないか。

(この画には何らかの不満が託されていると見えたのだろう。それが「ろくでもない馬が……」ということなのだが、詩の後半では「平凡な馬も……」と、不満を鎮めるようなことを言っている)

■次丹元姚先生韻

ようたんげん 姚丹元の詩に次韻した。姚丹元は道士で、本名は王繹、都の財産家の子で、
おうぎ 放浪癖があつて家を出て道士となった。2首のうち1首を訳す。

其の一

ふせい 人が浮生にあるのはどれほどの間なのか、

せいぜいところ、釜で羹^{スープ}が沸きあがるまでのこと。

わずかに上を向いて下を向く間であるのに、

どうしてあれやこれやと情^{こころ}を難しく使わないといけなのか。

自ら愛おしく思うのは、

自分にはこれより他に腸^{はらわた}がなく、たまたまここに生きていられることだ。

人はみな去るべき旅人である。

その中にも亡びることのない何かが存在しているのだろう。

ただ残念なことに、

宿縁の重さ、あるいは世俗^{しゅう き}の習気^{しゅう き}(煩惱からくる習性^{くろ})に昏まされてしまっている。

ほのかに聞いたのは、

古^{いにしえ}の仙人^{ばい しん}の梅子真のような人が城門の近くに住んでいるとのこと。

肩を叩いて親しげに語り合うようなことはできないとしても、

ただ一目見るだけでよいと思ったのだが、

訪ねて行けば、きつと垣根を越えて走って逃げてしまうであろうから、

先に誰かの紹介を得られないものかと、うまい方便を案じていたのだった。

(1) 詩の終わりに、姚丹元^{ようたんげん}に会う「うまい方便を案じていた」とあるが、仲立ちをししたのは王鞏^{おうきよう}であった。事実としては、蘇軾が姚丹元に会いたがっていたわけではなくて、王鞏の紹介があったので会ってみたということであろう。(2) これに続く第二首では、様々な故事を引いて、道術は、人を惑わすような表面的なところではなく、奥深いところを学ぶべきだという趣旨のことを歌っているらしいとおぼろげながらに知れる

だけで、訳者には齒が立たないので省略する。(3) これより20年ほど後のこと、徽宗^{きそう}皇帝は道士^{りんれい}の林靈素に心酔し、数々のおかしなことが起こった。姚丹元^{ようたんげん}は口を極めて林靈素を批判したために嫌わ、密かに毒を盛られて殺されてしまった)

■与米元章二十八首之十一

これは、画の名手にして奇行の多い米黻^{べいふつ}（字は元章^{あざなげんしやう}）に宛てた手紙。このころ雍丘^{ようきゆう}県知事であった米黻^{べいふつ}が揚州^{よう}に蘇軾^{そし}を訪ねたことは本章187ページで見ているが、この手紙には興味深いことが書かれている。

先に揚州^{よう}におりましたときにお手紙を頂戴しましたが、何かと時間がなく、すぐに御返事しないままでありましたところ、人が来て、またお手紙を頂戴することとなりました。お氣にかけてくださることの厚さに感じ、かつ御健勝でありますことを審らかにし、我が心が慰められ、感謝に堪えません。

夢得君^{ぼうとく}が来られて、貴君の新たな政事は文句のつけようがないと申し上げます。はなはだ結構なことであります。

万万自重されますように。

（ここにある夢得君^{ぼうとく}とは誰なのか。このすぐ後に米黻^{べいふつ}に宛てた手紙に「馬髯^{ばぜん}」（髯の馬君）、そして「馬夢得^{ばぼうとく}」の記述があることから、かの馬正卿^{ばせいけい}（字は夢得^{あざな}）であることがわかる。かつて黄州^{こう}において農地を獲得するのに奔走した馬正卿（第6章152ページ）は、その後は蘇軾^{そし}に詩文に登場することがなかったのだが、いつの頃か郷里^{きゆうり}の雍丘^{ようきゆう}県

に帰っていたのだった（馬正卿^きは杞（＝雍丘）の人であると蘇軾自身が記している（第6章 162 ページ）。馬正卿は恐らく米黻の代理人として都にきて、蘇軾との再会を果たしたのだらう）。

■次韻秦少遊王仲至元日立春三首

げんゆう

元祐8（1093）年、蘇軾 58 歳。

この年は元日が立春に当たり、秦觀^{しんかん}（字は少遊^{あざな しょうゆう}）と王欽臣^{おうきんしん}（字は仲至^{ちゅう し}）が詩を詠んだのでそれに次韻した。3 首のうち 2 首を訳す。

其の一

てんこう

天公（造物者）は二度の面倒を省きたかったのか、

新年と立春を同時に催した。

ただいささか真心を示して、

梅の花の伴^{つれ}にと、山かげに雪を降らせてくれた。

其の二

きう
元日は己卯、

弟にとって日の廻りがよく、何ともめでたい。

願うのは、弟に過失もなく、また功績もないことを。

来年の春には私は江湖^{こうこ}のほとりにいて、

夢に皇城を見て、こちらに首を回らせることであろう。^{こうべ}

■次韻王晋卿奉詔押高麗宴射

正月の宮中での行事を詠んだ詩。^{こうらいこく}高麗国からの使者は吉例として、正月三日に皇帝の前で矢を射るパフォーマンスをし、皇帝主催の宴会が催された。^{おうしん あざな しんけい}王詵（字は晋卿）は先々代の皇帝の娘婿という高貴の身分であることから、その行事に参加し、皇帝に命じられてその場で詩を詠んだ。蘇軾（宴には参加していない）は後でその詩に次韻した。

皇居の北苑に、役目の者の呼び声が響くと、

^{こうらいこく}高麗国の使者が現れ出る。

使者はすぐに高雅な香りがする（^{おうしん}王詵の存在）のに気づく。

高麗国の使者とともに射る我が方の武臣は、

三本の矢で一国を降伏させるほどの腕前であるから、

使者は敢えて射るべきかをためらう。

陛下のお言葉によって、貴君は金の盃を賜り、

酔って帰れば、颯爽としたその姿を人々は争って見ようとする。

貴君の錦の囊にはたくさんの名句がおさまっているのだが、

そこらの人々にまでやたらと与えない方がよいだろう。

（この詩は、華麗な語句をちりばめていかににも目出度く歌い、^{おうしん}王詵を讃えたもの。およ

その意味を取って訳した)

■上元侍飲楼上三首呈同列

これも宮中での行事を詠んだ詩。1月15日の上元節^{じょうげんせつ}の前後は、都は無数の燈籠によって照らされる。1月14日夜、皇帝は宣徳楼^{せんとくろう}に登って燈籠を見物し、近臣に酒を賜った。これには蘇軾も参加して詩を詠み、同輩に示した。

其の一

淡い月とまばらな星が宮殿^{めぐ}を繞り、
厳かな風が高貴な香りを伝える。
臣下の者が通明殿^{つうめいでん}の前に一列に並ぶと、
紅い雲に包まれて陛下がお出ましになる。

其の二

淡い雪は消えたばかり、野はまだ耕される前、
農民は薪を売って酒を買い、
この太平の賑わいを見物にくる。
陛下は勤儉にして思慮深くあられるので、
自然と豊年となって、人々の笑い声に満ちるのである。

其の三

この老病を身で、
 皇城から退く万馬の群れを縫って進んで行くと、
 都の街路から人々が散って、
 月明かりだけが残っている。
 家に帰りつくと、
 消えかけた燈籠が一つだけあって、
 妻にいただきものの^{こうかん}黄柑を渡す。

(最後は、蘇軾自身の注記で、「楼上で侍飲すると、高貴な方々が近臣に^{こうかん}黄柑を配ってくれる。これを^{でんかん}伝柑といい、携えて帰ってよいことになっている」と記している。蘇軾は他ならぬ^{おうしん}王誥からこの伝柑を受け取り、謝礼の詩を作っている。王誥は蘇軾の友人ではあっても、公的な場においてはやはり皇族側の高貴な人々の一員なのである)

■送蔣穎叔帥熙河

^{そう}宋の大きな弱点は軍事面で、^{りょうこく}隣国の遼国、^{かこく}夏国との関係は基本的に受け身の姿勢に終始し、常に緊張を強いられた。遼国とはかつて^{ふひつ}富弼がかろうじて武力衝突を回避して以来(第8章 109 ページ)、^{さいへい}多額の歳幣と引き換えにほぼ安定した状態を保持してきたが、西の夏国とはたびたび戦火を交えた。その最前線である^き熙州に^{しょうしき}蔣之奇(字は穎叔)が^{あざな}知事として^{えいしゆく}赴任す

ることになり、この送別の詩を作った。短い序文がある。

しょう し き りんとう き 蔣之奇が臨洮(熙州)に赴任することになり、せんきやう おうきんしん はなむけ 私と錢勰、王欽臣が 饒にそれぞれ
詩を賦した。「今我来思」の四文字を韻とし、速やかに帰るとの意味をそこに籠めた。
私は「我」の字を得た。

我が軍団は西方に出たまま留まっている。

軍事の論議に私の出番はない。

深く敵地に入る計画がまるでないのなら、

兜の緒は緩めておいてもよく、

私でも間に合うのだろうけれど……。

しょうめいでん 承明殿において貴君は用いられ、

勅旨の文字は五色の火よりも輝いた。

これまで貴君は何度も自薦してきていたのだが、

都に留められて希望を果せずにいた。

貴君はいつも兵を論じることを喜び、

ついに老いに臨んで辺境の関の鍵を預けられたのだ。

貴君は談笑する間に新しい詩を作り、

僚友はその気炎に降参してしまう。

しょう し き いずれ私は將軍(蔣之奇)の帰還を喜ぶ いにしえ 古の詩を歌うであろうが、

いまは送別に欠かせない柳の枝に目をやらなければならない。

戦地では敵の首を上げるのをよしとするものだが、

それで得られるものは実はごくわずかなのだ。

昔、魯仲連ろちゅうれんはたった一通の手紙で城を下したという。

人を殺さなければ、

そのことが大きな功德となって、きっと貴君の身に返ってくるはずだ。

(1) 蘇軾は勇ましいことを歌わずに、「陰功在不殺」(陰功いんこうは不殺ふさつに在る)と言って、戦闘を避けて平和裏に物事を解決することを推奨している(2) 魯仲連ろちゅうれんの名は本章 82 ページで見ている)

■次韻穎叔觀燈

蔣之奇しょうしき(字は穎叔あざな えいしゆく)が上元の燈籠じょうげんを見て詠んだ詩に次韻した。内容的には上と同じく送別の詩である。

西域の知事となった貴君は禅僧のような人、

仏の教えを無限に広げる「無尽燈」を到るところで灯してゆくのだ。

貴君が一万騎を従えて行進すると、

異国の人々は挙ってその勇ましさを見ようとするだろう。

貴君は遊びに出るだけで降伏を促す。

かくてもはや防御する必要もなくなって、

異国の連中は入貢するようになるだろう。

凱旋して皇帝より宴を賜り、

有難さに耐えられないほどのお褒めの言葉に預かるであろう。

(燈籠見物から連想して、あたかも行楽に出るかのように 蔣之奇^{しょうしき}を見送った。さらに
2 首の送別の詩があるが、特に面白みがないので訳は省略する)

■送襄陽從事李友諒歸錢塘

襄陽^{じょうよう}で官職に就いていた李友諒^{りゆうりょう}が故郷^{せんとく}の錢塘^{こう} (杭州) に帰るのを見送った詩。

私は杭州^{こう}にあること積算して五年、

もともと杭州の人であったと思うほどになった。

故郷に帰ったところでもはやそこに家はなく、

西湖^{せいこ}において、貴君の隣りに住みたいものである。

良い田を買うのも難しくはないだろうし、

誰と親しくたらよいかと迷うほどによい人々がたくさんいる。

髯^{ちよう}の張君は世俗から超然と抜きんでた人であるし、

老いた潜君^{せん}もまた世^{たい}に類希^{まい}な好人物である。

そこに、氷のように清冽で、詩文も振る舞いも清淳な貴君^{せいれつ}が加わるのである。

その三人のいるところに私も帰って遊ぶなら、

そこでこの身を終えてこそ満足できるだろう。

私が作った西湖の堤はそのままだにあり、

ぼ れい
姥嶺を超える道が新たに開かれようとしている。

そうした杭州を見ようと、

私は夢で貴君の後を追って行くのだ、

我が衣へと花びらの落ちくる道をたどって……。

(「髯の張君」は張弼ちょう ひつ あざな へいどう (字は秉道) (第9章176ページ)、「老いた潜君」は參寥せん さんりょう どう (道潜せん) (第9章208ページなど) のことである。この詩の蘇軾の願いが叶って、三度目の杭州の日々を過ごせることを、訳者も千年を隔てて切望するのだが……)

■次韻呉伝正枯木歌

呉安詩ご あん し あざな でんせい (字は伝正) の「枯れた木の歌」に次韻した。呉安詩のもとの詩は、李公麟り こうりん りゅうみん こ じ (号は竜眠居士) (第8章103ページなど) が描いた画に添えたものである。

てん こう
天公(造物者)こそは非常に優れた水墨画を描く――

痩せた竹、枯れた松、そこに傾き行く月がかかる、

かくて夢から覚めた人は、

窓にまばらな影が毎夜映るのを見て驚くのである。

何かが生成され、変化し、壊れるのも、

天公が一度指を弾く間のこと。

もとより天公は特定の物にかかずらうことはない。

画師は昔から俗士ではなく、

絶妙な画想は詩とともに出てくるといわれている。

確かに竜眠居士(李公麟)^{りゅうみん こ じ り こうりん}はもとは詩人で、

竜に雷を鳴らさせるほどの勢いのある詩を作る。

貴君は絵筆を持つ人ではないけれど、

自然の美を見抜く詩眼を具えている。

竜眠居士の胸の中には千頭の馬があり、

その肉だけでなく、骨も描く腕前であるから、

それに見合うには杜甫^{と ほ}のような立派な詩を詠まなければならない。

貴君に倣って私もちびた筆をひねりまわそうと思うのだが、

いま東南^{えっ こう}(越州や杭州)の山水がさかんに私を呼んでいて、

心の内の珠^{たま}にはかの地の万象がしきりに映り出される。

いま手元にある詩画などは全て友人に与えてしまって、

何も持たずに、天公の描くかの地の画を見に行こうと思う。

(呉安詩^{ごあんし}のもとの詩は伝わらないが、枯れた木を歌いつつ馬にも語が及んでいたのだ

ろう。それで蘇軾^{と ほ}は杜甫を持ち出したのである。杜甫が韓幹^{かんかん}の描く馬の画を詩に詠んだ

ことは第8章137ページで見えていて、そこで蘇軾^{り こうりん}は韓幹と李公麟を比較している)

■送黄師是赴兩浙憲

こうしよく あざな し し りようせつどう
 黄寔（字は師是）が兩浙道の刑獄を司る官職に就くのを見送った詩。黄寔の名は第7章179ページで見ているが、蘇轍と親しくし、姻戚関係を結んだという。

世にこのような士^{ひと}は久しうなかった、

私は晩年に至ってこの人を得た。

かの黄憲^{こうけん}の子孫でなければ、黄霸^{こうは}の門下生であろう。

ところが、白髪頭になるまで下級役人のまま、

緑衣^{りよくい}（小間使い）さえもこれはおかしなことだという。

哀しいことに、

呉越^{ごえつ}の人々は、このところ、

洪水によって江や湖に呑み込まれてしまう目に遭っていて、

お上が倉と財布をすっかりはたいても、

民衆の腹を満たすには至っていない。

近頃聞いたところでは、

支流においては、水底にあった村がようやく現れ出てきているという。

望むのは、

豆の葉しか食べられずに餓死してしまった人々の魂を、

貴君が慈愛をもって慰めてくれることだ。

民に恵みをもたらす政治を見たならば、

誰よりも獄吏を畏れていた人々も、

その考えを改めるであろう。

我が願いの通りに、会稽(越州)に行くときまでには、

鏡湖も水が引いて盆のように小さくなっているだろう。

そして、貴君のお蔭で民衆の瘡痕はすっかり癒えているのだ。

(1) 黄憲は後漢の、黄覇は前漢の賢人で、同姓の2人引いて黄憲を賞賛したのであ

る。(2)「緑衣さえもおかしなことだという」(原文は「緑衣有公言」(緑衣 公言有り

(緑衣が正しいことを言う))の句には次のような伝承がある。人々はこの句の意味がわか

らなかったで、蘇軾に尋ねたところ、「うちの王朝雲は黄憲君を見るたびに、その官

位が上がらないのを不思議がっています」と答えたという。王朝雲(第7章55ページ)

が蘇軾の愛する女性で、聡明であることは当時の人々によく知られていた。(3)先に鏡

湖を周囲八百里に広げるといい(本章289ページ)、ここでは盆の大きさに縮めるといっ

ていて、なかなか楽しい)

■文与可画賛

かつての親友文同(字は与可)(第8章76ページなど)の画に書き添えた賛。

友人の文同が没してすでに十四年。その遺墨を呂陶の家で見た。嗟嘆の余り、

すくくこの賛を記した。

竹寒而秀、(竹は寒く、高く秀で)

木瘦而寿、(木は瘦せて、長く生き)

石醜而文、(石は醜く、美しい)

是為三益之友。(竹、木、石は有益な三人の友である)

粲乎其可接、(その輝きは接^つべきであって)

邀乎其不可圉。(庭に迎え入れるものではない)

我懷斯人、(私はこの人^{ぶんどう}(文同)を思う)

嗚呼。(ああ)

其可復觀也。(もう観ることができないのだ)

げん ゆう どう ば こ じ
元祐七年二月四日、東坡居士書く。

(^{りょとう せいと}呂陶は^{はんと}成都の出身で、いわゆる「^{しよくとう}蜀党」の一員と見られていた人物である (第8章 222 ページ))

■送范中濟經略侍郎分韻賦詩以元戎十乘以先啓行為韻軾得先字且贈以魚枕杯四馬箠一

詩題は、「^{はん し き あざな ちゆうさい}范子奇 (字は中濟) の送別の詩。『元戎十乘以先啓行』の八字を分けて韻とし、私には『先』の字が当たった。^{ぎょちん}魚枕 (貝の一種) の杯四つ、^{ば すい}馬箠一本を贈った」。范子奇は、国境地帯で民事・軍事に臨機応変に対処

する経略侍郎^{けいりやく じ ろう}の任をもって慶州^{けい}に赴任した。慶州は夏国^{かい こく}と対峙する戦略上重要な拠点である。

夏国の梁氏^{か こく りょう}と李氏^りが、長く禍^{わざわい}を楽しむかのように、
自ら身を焚^たくようなことをしているのは、
天の定めなのだろうか。

穴の中で二匹の鼠が闘ったところで、
勝ちも負けも偶然の結果でしかない。

謀^{はかりごと}は最初が肝心で、百慮を必要とし、
最後の始末を善くすれば万全である。

朝廷は代々將軍を生み出してきた家から人を選んだ、
范氏^{はん}はまことに多くの賢人を輩出してきたのだ。

貴君はかの地に仁の風を吹かせ、
見渡す限り麦の穂が揺れる緑の浪を起こすであらう。

その一方で、号令を響かせれば鳥も驚き、
弓の弦を鳴らすだけで、空から落ちてくることだろう。

私はいま日の光が遮られて当たらないのに苦しみ、
剣を売って農地に帰ろうと思っている。

私の家は天の片隅にあり、
去り行く路は都の西端から始まる。

貴君に贈るのは荊州産の魚枕の杯、
 それに蜀州産の馬鞭を添えよう。
 ここで一酔したならば起って行くがよい、
 誰かに功名を先取りされてしまわないように。

(1) 最初の部分は、夏国の内部で、王族の李氏と外戚の梁氏との内輪揉めが絶えないことを言っている。(2) 范子奇の家は5代にわたって功績があったという

■晁説之考牧図後

晁説之（字は以道）が描いた「考牧図」の後ろに書き添えた詩。晁説之は、蘇門四学士の晁補之の弟。「考牧図」は古代の名君とされる周の宣王が牧場を復活させた故事を描いた画。

私は田舎に育ち、
 ただ羊と牛だけを知っていた。
 川べりの平らな道で、
 のんびり牛の背に乗っていると、
 まるで百斛の大舟の上にいるような気分であった。
 その舟は船頭がいなくても進み、
 勝手に岸辺が後ろに移って行くのだった。
 私は伏せて書物を読み、

牛はそんなことにはお構いなしだ。
牛の前には百匹の羊がいて、
私が鞭を打つ音を、
一軍を指揮する陣太鼓のように聴いていた。
鞭はやたらと打つのではなく、
後れるものがあるのを見つけたときに使う。
沢辺の草は短いものだけを食べさせ、
成長した草は牛や羊にはよろしくない。
山の中に入ってあちこち谷を越え、
上り下りによって筋骨を強くする。
広い林の下を、
蓑を煙らせ、笠を雨に濡らして進んで行ったのだが、
それも今は昔、
老いては画の中にだけ見る光景である。
世間のことは馬耳東風と聞き流していながらも、
残念に思うのは、
たくさんの牛を飼う翁にならなかったことだ。

■呂与叔学士挽詞

りょだいりん あざな よしゆく
呂大臨（字は与叔）の死を悼んだ挽詞。呂大臨は、宰相を務めた呂大防（第
りょだいぼう

8章194ページ)の弟。

議論は国の大計に^{あた}中り、

行為は人の基本に中り、

関西^{かんせい}(長安^{ちやうあん}周辺)出身の人物のなかでもとくに清英^{せいえい}と目されていた。

漢^{かん}の黄憲^{こうけん}のような学識豊かな人と終日語り合いたい、

唐^{とう}の元徳秀^{げんとくしゅう}のような行いの正しい人と過ごしたいと、

私は思っていたのが、それも空しいことになってしまった。

貴君には三人の立派な友人がいた、

いまや誰もいなくなつて、活発な議論はどこからも聞かれない。

功名はただ貴君の二人の兄のもとに残ることとなった。

私は老いて、時を憂いて嘆くことが多い、

いまのこの涙はどこから溢れ出るのか、

それはいうまでもない。

(保守派の党派争いが紛糾するのを解ける人物がいるとしたら呂大臨^{りょだいりん}であると、蘇軾は期待を寄せていたという)

■乞校正陸贄奏議上進札子

唐^{とう}の中頃に、皇帝に向かって様々な意見を具申した陸贄^{りくし}という人物がいた(本章27ページにもその名があった)。これは、陸贄の意見書(奏議)を集

めた書物に校訂を加えて皇帝に差し出すことを記した文章。

(文章の冒頭に、都での蘇軾の肩書が記されている。「侍読」^{じどく}とは皇帝の教育係、「礼部尚書」^{れいぶ}は礼部の長官で、宰相、副宰相に継ぐ大臣クラスのポストである)

元祐八年五月七日、端明殿学士兼翰林侍読学士左朝奉郎守礼部尚書蘇軾と、
呂希哲、呉安詩、豐稷、趙彦若、范祖禹、顧臨が書面をもって申し上げます。

臣等は能力がないながらも陛下に書物を御進講する役目についておるのでありますが、陛下は聖明天縱であられ、学問は日々に進歩しておられます。臣等の才能には限りがあり、しかし学問の道は窮まるところがありません。心の内に申し上げたいことがありますも、言葉として言い表すことができず、恥ずかしさのあまりどうしたらよいのかわからずにあります。

竊かに謂いますに、臣下の者が忠言をいたすのは、譬えてみれば医者薬を用いるのに似ておきましょう。薬は医者の手から進めるものではありませんが、その処方の多くは古の人々から伝えられてきたものです。もしも世間に効力のある処方箋があるのなら、必ずしも医者の手からでなくてもよいのです。

伏して思いますに、唐代の宰相の陸贄は、才能はもとより国王を佐けるのに足り、学問は皇帝の師匠になるに足る人物で、議論は深く、分析は鋭く、言葉は道徳から離れることはありませんでした。智は漢の名臣張良のようで、文章はそれを超え、弁は漢の名賢賈誼のようで、施策はより綿密でありました。上に対しては君主の心の誤りを正し、下に対しては天下の人々の思うところに通じていました。古の三代の

時代からこの人しかいないといわれるような人物であったのです。

ただ不幸にして、国家に奉仕するに時代の巡り合わせが遇わなくて、時の徳宗^{とくそう}皇帝は苛刻な政治を行える者こそが能力が高いとしていました。そのかたわらで陸贄は厚い忠心をもって皇帝を諫めたのでした。徳宗は疑いをもって臣下を操ろうとする人で、一方で陸贄は真心をもって当たることを勧めたのでした。徳宗は兵を用いることを好み、陸贄は戦争をしないことを先としました。徳宗は財を上^{あつ}に聚めることを好み、陸贄は財を民に配ることを急務としました。さらに陸贄は、人を用いてその意見を聴く方法、辺境の地を治めて將軍を制御する方法、己を戒めて人心を収める方法、己の過ちを改めて天の道に應じる方法、小人^{しょうじん}を去って民の患いを除く方法、賞をむやみに与えるのではなくて功績が上がるのを待つ方法に至るまでを進言し、このようなことは数えきれないほどでありました。まさに、口に苦い薬を進め、身体^{はり}の急所に鍼^{はり}を打つようなことをしたのでした。もし徳宗がその言の全てを用いたなら、貞観^{じょうがん}の治(唐の最もよく治まった時代)を再現することもできたであらう。

臣等^{せいかく}は西閣(皇帝に進講する場所)から退くごとに、このように語り合うのであります。「陛下の御聖明をもってすれば、必ずや陸贄の議論をお喜びにならう。聖人と賢臣がともに契り合うようなことが、まさに時を同じくする君主と臣下の間で実現することでしょう」。

昔、漢の時代に馮唐^{かんと}が、廉頗^{ふとう}や李牧^{れんぼ}について述べると、文帝^{ぶんてい}はその二人がいまいれ^まばと太息して政^{まつりごと}に励み、やはり漢の時代に魏相^{ぎしょう}が、晁錯^{ちやうさく}、董仲舒^{どうちゅうじょ}について述べると、孝宣帝^{こうせんてい}はそれを踏まえて国勢を立て直しました。もし陛下が御自身で師

とすべき人物を得ようとなさるなら、近世では陸贄に優る者はいないのであります。

りくけい
六経、三史、諸子百家の種々の古典はいずれも観るべきところがないわけではなく、治世の参考にするに十分なところがあります。ただし、聖人の言葉は深遠で理解するのが容易でないところがあり、一方で後世の末学は枝葉に分かれすぎてしまっています。譬えていえば、聖人の言葉は山のように高く、海のように深く、一度や二度ではその意味を推して了解するのが難しいのです。

陸贄の議論は巻を開けば一目了然です。古今の精英が^{あつ}聚められていて、実に治乱の要諦を見せる鏡であります。臣等はその奏議を集め、きちんと校正を加えて、御覧に入れようと考えております。望むのは、陛下がこれを座右に置かれて、陸贄を目の前に見るようにして、反覆熟読されることであります。陸贄と語り合うようにされたならば、必ず聖性の高明が御身の内より発せられて、歳月を待たずして治世の功績が上がることであります。

臣等は取るに足らぬ小さなことを申し上げましたが、どうかお取り上げくださいますように。

((1) 初めに蘇軾とともに皇帝の教育に関わる人々の名が列挙され、その全員の希望でもって^{りくし}陸贄の意見書を皇帝に読んでもらおうとしたのはどうしてなのか。このとき^{てつ}哲宗皇帝は18歳、いまでいえば高校生の最終学年である。思えば、哲宗が10歳のとき^{そう}に教育係となったのは^{ていいい}厳格で狭量な程頭であった(第8章77ページ)。その後、蘇軾や蘇轍も含む錚々たる人々の講義を聞かされてきた。本当に素直な優等生であるならば、教師連中が期待する通りの立派な帝王になろうと日々^{ていいい}に精進したのであろうが、いくらか

でも自立心のある青年ならば、むしろ反発しない方がどうかしている。しかも、皇帝の位にありながら、実権は全て祖母である高太皇太后に握られていて、何一つ自由にならないのだ。さらに、その祖母と周りを囲む人々は父である神宗皇帝が自ら指揮をして鋭意進めてきていた改革政治を全てひっくり返してしまったのだ。ふつふつと反抗心が湧き上がり、成長とともに爆発寸前になっていて当然である。蘇軾等は、陸贄の意見を聞かずに暗愚な皇帝に成り下がったとレッテルと貼られた唐の徳宗のようにはならないようにとくぎを刺したわけであるが、果たして哲宗はこの文章を読んだのだろうか。蘇軾はこのときに限らず、第8章165ページでも見たように、耳に痛い意見も聞くようにと、一貫して皇帝に希望し続けている。(2) 明末清初の大学者である王夫之は、緻密で公正な議論で君主を説得して政治を正そうとした人物として三代（太古の理想化された時代）以降第一の人であると、陸贄のことを極めて高く評価している（『読通鑑論』）。王夫之は、同じように皇帝にしばしば優れた意見を具申した人物として漢から南宋に至る間の5人の人物を挙げて比較して、いずれも陸贄には及ばないとしている。そこに蘇軾の名もあり、「蘇軾は弁にして詭」と記している。平たくいうと、文章が巧みで説得力があるけれど、何となくごまかされているようなところがあるということであろう。実際、蘇軾の詩文をこれまでいろいろ見てきて、多くの人がそれに近い印象を持っているのではないだろうか。どこか腑に落ちないところがありながらも、心地よく酔わされてしまう、それが実のところ蘇軾の魅力なのであろう）

■記張元方論麦虫

べいふつ あざな げんしょう
米黻（字は元章）に関連するちょっとしたエピソード。米黻がようきゆう雍丘県知事であることは本章 298 ページで見ている。

げんゆう ようきゆう べいふつ
元祐八年五月十日、雍丘知事の米黻から手紙がきて、雍丘県で麦の葉を食べる虫が見つかり、ただし実は食べないという。

ちようげん ほう
たまたま張元方に会ったところ、このように言った。

「麦と豆には虫はつきません。もし虫がいるのならこれは異常なことです。葉を食べるというのですから、麦が病んで害にならずにすむということはないでしょう」

張元方はこのようにも言った。

「虫が害をなすときには、きっと小さな甲虫こうちゅうがいます。それを見たなら、すぐに腰から断って除かなくてはなりません。俗にこれを『見逃してはならん』といっています」

このようなことはこれまでに聞いたことがなかったので記録しておく。

（(1) 虫の害にはたびたび苦しめられてきたので、このようなちょっとした知見でも書き残しておこうと思ったのだろう。（2）この後、8月までの間に、蘇軾べいふつは米黻に会いに

ようきゆう ば せいけい
雍丘に行き、馬正卿とも語り合ったようだ）

■与潘彦明

この頃はんへい あざな げんめいに書いたと推測される潘丙（字は彦明）宛ての手紙を見ておこう。

潘丙こうは黄州で親しくした人である（第6章141 ページなど）。

お手紙を頂戴し、たいへんに心が慰められました。このごろはどのように過ごされておられますか。

お別れしてから、いつの間にやら九年、付け加わるものといえば衰えと病、いつになったら引退できますやら。いろいろなことが次々にふりかかってきて、とにかく取じかつ嘆ばかりです。

東^{おか}の坡をすっかり修繕なされたとのこと。懐かしい人々と行き来できるようになるのはいつになりましょうか。果たしてそのような日がくるのかと思うと、紙に向かって胸が熱くなります。

（「東^{おか}の坡の修繕」とあるのは、蘇^そ軾^{しつ}の建てた雪堂^{せつどう}のことであろう。黄州^{こう}を去るに当たって、雪堂^{はんへい}は潘^{はん}丙^{へい}の兄の子の潘^{はん}大臨^{だいりん}に託したのだった（第6章487ページ）

■行香子

心の内を詠んだ2首の詞。定かではないが、このころの作であろうと推測されている。

寓意

三入承明、(宮中に入ること三回)

四至九卿。(高位に昇ること四回)

問書生、(若い人に問いかけます)

何辱何榮。はずかし(何を辱めとし、何を榮えとするのですか)

金張七葉、かん きん ちよう(漢の時代に金氏、張氏は七世にわたって)

綢綺貂桜。(高い身分を示す衣服を纏い続けました)

無汗馬事、(でも、軍務に汗をかくこともなければ)

不献賦、(賦を献じることもなく)

不明経。(学問にも明るくなかったのです)

成都卜肆、(そのころに、占いを生業としていた嚴君平は)げんくんぺい

寂莫君平。せい と(成都でひそやかに暮らしていました)

鄭子真、てい し しん(鄭子真は)

巖谷躬耕。(深い谷間で畑を耕していました)

寒灰炙手、(冷えた灰も手を炙る火を再びおこすことがあります)

人重人輕。(人は重んじられることもあれば、軽んじられることもあります)

除竺乾学、(仏教を学ぶまでもなく)

得無念、(思念のないこと)

得無名。(名を顕さないことが得られるのでしょうか)

述懷

清夜無塵、(塵一つない清らかな夜)

月色如銀。(月は銀のような色です)

酒斟時、(酒を酌むと)

須満十分。(十分に心は満ちてきます)

浮名浮利、(名利などは浮ついたもの)

虚苦労神。(虚しく精神を苦しめ疲れさせるだけです)

嘆隙中駒、(人が嘆くのも、馬がわずかな隙間を駆け抜ける間のこと)

石中火、(石が火を放つほんの一瞬に)

夢中身。(夢の中にある身なのです)

雖抱文章、(心に文章を抱いていたところで)

開口誰親。(口を開いたら、皆がそっぽを向くだけ)

且陶陶、(しほし陶陶と)
ゆるゆる

樂尽天真。(天より与えられた真を尽くして楽しむうてはありませんか)
まこと

幾時歸去、(いつか帰って)

作個閑人。(閑な一人の人間になるのです)

対一張琴、(向かうのには、一張の琴)
ひとはり

一壺酒、(一壺の酒)
ひとつぼ

一溪雲。(そして溪に浮かぶ一つの雲)

■丹元子示詩飄飄然有謫仙風氣吳佖正繼作復次其韻

詩題は、「道士の姚丹元先生(本章296ページ)の詩は飄飄然として謫仙(李

はく 白)の風気がある。呉安詩(字は伝正) (本章306ページ) がそれに続く詩を作ったので次韻した」。

空を飛行する仙人になるのは偶然のこと、
人としての運命から、一瞬のうちに抜け出してしまうのである。

せめて詩だけでも姚丹元先生に続けたいと思っても、
天に輝く日を写すような句は真似できるものではない。

先生は夢の中で、
丹葉が懐に入ったと覚えて詩句を吐いたところ、

天帝の叱責を受けて、
天から蓬莱島へと墮とされてしまった。

蓬莱島は何もないところで、
我が才を養うに足りないと思ったのだが、
かといって天上界もなかなか厳格なところであるから、
しばしこの地上にいるしかあるまいと、

先生はここで流謫の日々を送っているのである。

ここに憐れなのは、呉安詩と蘇軾で、
不遇のまま頭が真っ白になってしまった。

とうとう先生と一緒にあって、
笑って東の海を指さして、

他に行き場もないからと、

いかだ
 桴に乗って蓬莱島へと漕ぎ出すのである。

ようたんげん (姚丹元)をおうきやう 蘇軾に紹介した王鞏が、姚丹元の書斎を詠んだ詩があり、それに蘇軾が次韻しているが、この詩のような面白味に欠けるので省略する)

■呉子野将出家贈以扇山枕屏

ごふくこ あざな しや
 呉復古（字は子野）が出家することになり、山を描いた扇を張り付けた
まくらびようぶ 枕屏風を贈り、この詩を添えた。呉復古はちやうよう 潮陽（現在の広州市の近く、か
かんゆ つて韓愈が流されたちやう 潮州のとなり）の人で、さんりやう 参寥師の知人。出家するために
どちやう 必要な度牒を得るために、蘇軾を頼って上京したようだ。

ごふくこ (呉復古は、蘇軾が30歳の頃に朝廷のいた官僚の子で、科挙に2回落第してからどう
じん 人として各地を巡りつつ多くの士大夫と交わりをもった。蘇軾はみつ 密州知事の任を終え
 て都に向かう途中で会っていて、こう 黄州流謫の時期にはしばしば手紙の往来があった)

扇の中の山は峨峨ががとして聳え立ち、

絶壁はまことに天が割いたものだ。

心とは世界を映し出す大きな円い鏡、

ならば、こうざん 衡山、かくざん 霍山の大きな山だって戸口から入ってくるのだ。

この屏風はろうげつし 老月師が得たもので、

画いたのは酔っ払い爺さんだという。

その人は、きつと胸のうちに雲夢^{うんぼう たく}の沢をおさめ、
手のうちに千の峰をおさめ、
指を弾く間に描き終えたのだらう。
山の低昂^{ていこう}するありさまは知り尽くせないほどで、
そこらの子供たちの弄びものにしておくのはもったいない画である。
屏風は折れば小さく畳めるものであっても、
枕元に立てれば世俗の奔走から遮断される。
貴君の出家の願いは昨日今日のことでなく、
仏法の水によってもはや垢は洗い終わっている。
峰を離れる浮き雲の境地で、
肘に腫物ができようが泰然と座っておられる。
屏風の山の中腹^{おもひ}に懷を忘れる貴君と、
いつかこの白髪頭^{ろうげつし}を並べたいと思う。

（「老月師」^{ろうげつし}とは誰なのか、定かではない。呉復古^{ごふくこ}が出家したことを詠んだ詩がもう 1
首伝わっていて、あるいはそれは蘇軾^{そ しか}の長男の蘇過^{そ かつ}の作品ではないかという説もある。
蘇過はあいかかわらず地方の小官として各地を転々としていた）

■表弟程德孺生日

6 月、程之元^{てい し げん あざな とくじゆ}（字は德孺）（本章 294 ページ）の誕生日にこの詩を贈った。

陛下が退席されて、儀仗の隊列も出て行くと、

千官は皆、皇居の広場から散り散りになる。

ふとわずかに聞こえてくるのは、

我等、蘇^そと程^{てい}のことをたまたま語り合っている言葉。

叔父と甥は長身であるところまでも似ると昔からいうが、

我等の寿骨^{じゅこつ}(耳の後ろの骨)が突き出ているのを見れば、

遠くからでも従兄弟^{いとこ}同士であることがすくにわかる。

貴君も私もかつて万人を活かしたけれど、

その報いを望むものではなく、

ただ五畝^はの田を得て帰耕することを希望している。

四代^{じんそう えいそう しんそう てつそう}(仁宗、英宗、神宗、哲宗)にわたって仕えてきた老人はほとんどいなくなり、

鶴髪^{かくはつ}(白髪頭)で何人がこの先の年を迎えられるのだろうか。

((1) 寿骨^{じゅこつ}について蘇軾自身の注で、「私と程之元^{ていしげん}はともに寿骨が耳を貫いているので、

一列に並んだ中から、二人を指さして従兄弟^{いとこ}の間柄にあるとすぐに人に知れるのである

」と記している。蘇軾の母は程家から嫁ぎ、程之元は蘇軾の母の兄の子である。(2)

やはり蘇軾自身の注で、「私は杭州^{こう}において、程之元^そは楚州において飢饉の歳に会い、

数万人を活かした」と記している。(3) 詩の終わりに「鶴髪^{かくはつ}他年^{たねん}幾個^{いく}

個^こか迎^{むか}える」と詠んだのは自身の年齢的なことを言っていたのだが、間もなく蘇軾の身

に大きな不幸がふりかかり、政治的局面にも重大な転換が訪れる。蘇軾は都に来て以来、

越州^{えつ}に出ることをしばしば朝廷に願っていた。その意に反して、6月26日、遠く北

の定州知事に任ずるとの辞令が下された。その後も越州への変更を求め、それを応援する人もいたのだが、9月26日に至ってついに定州に向かって都を去ることになる)

■祭迨婦欧陽氏文

都にいる間に二男の蘇迨^{そ たい}の妻の欧陽氏^{おうよう}が亡くなり、蘇軾はこの祭文をその霊に供えた。

(蘇迨^{そ たい} (22歳)が欧陽脩^{おうようしゅう}の息子の欧陽棐^{おうよう ひ}の娘と結婚したことは本章28ページで見ている。それからまだわずかな歳月しか経っていない)

昔、我が父は太師文忠公^{たい し ぶんちゆうこう} (欧陽脩^{おうようしゅう})より重い恩義を受け、婚姻^{こん}の宜^ぎを結んで、好^{よし}を永世のものにしたいと思った。よって、我が次男^{そ たい}の蘇迨^{そ たい}の妻としてそなたを求めたのだった。穎州^{えい}より我が家に来て、夫婦は賓客同士のようであり、親類の女性一同は皆がそなたと仲睦まじかった。そなたは上の者によく仕え、下の者をよくいたわり、振る舞いは欧陽家の家法によるものだった。まさに百年の寿命を得て、我が後のことを託そうとしていたのだが、何としたことか、俄かにこのようなことになり、我が白髪頭をもって、かえってそなたのために哭すこととなってしまった。これが定めであったのか。嗚呼、哀しいかな。

吉月良日をもってそなたを都の西にある恵濟^{え さい}の僧舎において仮の棺に納める。そなたの魂^しが識るのなら、我が家に帰ってくるように。朝夕に食事を供えるから、それを受け取って、仏僧への施し物とするがよい。

(ここには「吉月良日」とあるだけで、実際の日付はわかっていない)

■七年九月自広陵召還復館於浴室東堂八年六月乞会稽将去汝公乞詩乃復用前韻三首

詩題は「元祐^{げんゆう}七年九月、広陵^{こうりょう} (揚州^{よう}) から召し還され、また浴室院^{よくしついん}の東堂に寄寓した。八年六月、会稽^{かいけい} (越州^{えつ}) を乞うてまさに行こうとし、汝公^{ぶんこう}が詩を求めたので、前の詩の韻を用いて三首作った」。「汝公^{え ぶん}」は僧の恵汝で、「前の詩」は本章 21 ページで見ている。このときは越州に行く気でいたのである。

其の一

私は地方に出ることを願い出る文書を三度記した、

どれも字が曲がってしまっていたから、

朝廷の人々は私の眼には花が散って昏^{くら}くなったと笑ったことだろう。

「どうしてまだぐずぐずしているのかい」

上人^{しょうにん}様が問われたので、

「頭綱^{どうこう}八餅茶^{ちへいちや}を頂戴するのを待っているのです」

と、私は答えた。

(最後の句について、蘇軾自身の注で、「尚書^{しょうしょ}学士^{がくし}は頭綱^{どうこう} 竜茶^{りゅうちや}一斤を頂けることになっているのだが、今年はそれが都に着くのが遅れている」と記している。茶をもらえるま

で待っているとは、もちろん戯れの言である)

其の二

夢は呉山こざんの月廊げつちうを巡り、

覚めてからも白梅ろきつや盧橘ろきつがなお香っている。

会稽かいけいにいるのはほんのわずかのことであろう、

そこから故郷に帰るのが最良の策なのだ。

(最初の句について、やはり蘇軾自身の注で、「杭州の梵天寺には数百間の月廊げつちうがあり、寺には白楊梅ろきつ、盧橘ろきつがたくさんある」と記している)

其の三

これより東南に去って、いつ帰るのか。

ただ一羽、旅に倦んだ鳥には、いつと定めることはできない。

この一生の区切りを付けるのに何があるのかというと、

三年の光景を詠んだ六篇の詩だ。

(「六篇の詩」とはここに見た3首と、「前の詩」の3首である)

(この浴室院よくしつゐんに寄寓していた間のことと推測されるエピソードがあるので見ておきたい。南宋なんそうの費昶へいこんが著した『梁溪漫志』という随筆りようけいまんしに記録されている。『梁溪漫志』自体は史料的価値が高いとされているが、このエピソードは伝聞に基づくものであろうから、そのまま事実であったと信じるにはためらいがある)

ある日のこと、東坡は朝廷から帰宅して食事を終えると、腹をさすりながらゆっくり歩きつつ、侍児(身の回りの世話をする少女たち)に向かって、「この中に何かがあるのか、おまえたちに当てられるかな」と言った。ある者がすぐに、「お腹の中はすべて文章でございましょう」と言った。「そうではない」。別の一人が、「すべて識見でございましょう」と言うと、やはり、「そうではない」といった。すると、王朝雲が、「学士様のお腹の中は、時季外れの売れない在庫品でいっぱいなのでございましょう」と言ったので、東坡は腹をよじって大いに笑った。

(「在庫品」はかなりの意識ではあるけれど、言いたくても言えないことが蘇軾の腹の内には貯まっていたのである。兼好法師のいう「物いわぬは腹ふくるのわざ」である。このとき王朝雲は31歳で、ほぼ20年間、蘇軾の姿を間近に見て、すっかりその心の内を理解していたのだろう。それにしても、蘇軾のまわりにはいつもユーモアが溢れていたようである)

■祭亡妻同郡君文

8月1日、蘇軾の妻、王閏之が亡くなった。46歳であった。翌日、蘇軾はこの祭文を作った。

元祐八年八月二日、蘇軾は謹んで亡妻同安郡君王氏二十七娘の霊に家饌酒果を供える。

嗚呼。昔、先の妻、王弗が亡くなってまだ歳月を経ないうちに、従姉の後を継いで

君は我が妻となった。君よりも賢なる者はなく、婦人としての職務をすべて修め、母としての振る舞いは完璧であった。三人の息子を分け隔てなく見て、その愛は天から出るものであった。私が謫居するのに従って、貧しい暮らしも欣然と過ごし、豊かな町に行くことになっても顔に喜びを見せることはなかった。

私は君に、「帰ろう、故郷に帰ろう」と言っていた。しかし、君はその時が来るのを待ってはくれなかった。私を置いて先に行ってしまったのだ。故郷において、私が畑に行くのを誰が見送ってくれるのか、誰が門で出迎えてくれるのか。

どうすることもできない。涙が尽き果ててもはや目が乾いてしまう。旅先であるから仮に都の門の外に埋葬しよう。まことに君には何もできない。ただ同じ穴の内に入るのを待っていてほしい。願うのはここに言う通りになること。

嗚呼、哀しいかな。

(蘇軾に限らず宋代の士大夫が妻について書き記すことはそう多くあることではなく、
王閏之がどのような女性であったのかは、少ない手がかりから推測するしかない。そこから浮かび上がってくるのは、賢明にして慎ましやかで忍耐強い人であったということ、それはまず間違いがないだろう。先妻の王弗より9歳下の従妹で、嫁いだときに蘇軾は33歳で、特別試験の制科に非常に優秀な成績で合格し、詩文にも優れた若き天才として天下にその名がすでに鳴り響いていた。王弗がまだ無名時代のうちに蘇軾の妻となって、夫に向かってその行動を抑えるような助言もできたのとはかなり違っていた。王弗自身が自分の後には王閏之がよいと指名したと推量できるようなところもあり、奔放な蘇軾の妻として務まるのはこの娘であると知っていたのだろう。祭文に

「三人の息子を分け隔てなく見た」(原文は「三子は一の如く」)とあるのは、王弗が生んだ長男と自分が生んだ二男、三男に等しく愛情を注いだということで、これはまさに王弗の期待に応えるものであったろう。結婚してから6年後に杭州で、当時12歳であった王^{おうちやううん}朝雲を家に入れたときに、王^{こう}閨之は快く迎えたようだ(第4章199ページ)。当時の士大夫は複数の妾を持つことが多く、蘇軾も一時期家に数人の女性がいたらしいが、王朝雲に注ぐ愛情は格別で、中年以降は他の妾はそれぞれに行き先を定めて出て行かせ、蘇軾のもとには王朝雲だけが残った。蘇軾は、妻の嫉妬に悩まされたことはないという人に自慢したことがあるほどで(第6章324ページ)、王閨之と王朝雲の仲は良好であったようで、それはやはり王閨之が賢明にして慎ましやかで忍耐強かったのと、王朝雲もまた自分を拾ってくれた蘇軾と王閨之の恩に報いようと慎ましやかに振る舞ったからなのだろう。王閨之にも無理に己を抑えたところがなかったとはいえないだろうけれど、概ね極めて抑圧的であった当時の士大夫のもとに嫁いだほとんどの女性よりもより多く自己を犠牲にしたということは決していないだろう。林雪云氏は「蘇軾の妻妾に対する観念」(大阪府立大学人文学論集、2013年)の中で、上の祭文にある「三子は一の如く、愛は天より出ず」をもじって、「三妻は一の如く、愛は天より出ず」と、蘇軾は王弗、王閨之、王朝雲の三者に等しく愛を注いだと讃えている。訳者はそれにはもう手を挙げて賛成するにはなおためらいがあるものの、ここまで蘇軾の詩文を訳してきて、強く反駁しなければならない材料は何一つ見出すことはできない)

(上の祭文にある通り、王閨之は都の近くに仮に埋葬され、そのときに蘇軾が祭文を記した。一句四字の形式で綴られ、当然故人に対して悪いことは書かないので、必ずしも

内容に信頼が置けるものではないのだが、王閏之に関する貴重な資料であるので、こ
で見えておきたい。なおこれは逐語訳ではなく、大意を酌んだ「ざっぽ訳」である)

げんゆう
元祐八年九月十八日、蘇轍とその妻の史氏は謹んで家饌と酒果を供え、なき姉上の霊を祭るものである。私は幼いときから兄について学び、兄は師であり友であった。兄とは志気
が同じでないのだが、それでも兄に及ばないのを私は恥じた。兄は剛直で固く、他人と相容れ
ないところがあった。すでに世に名の知られるところとなり、しかし世と合わないところ
があった。私は兄のそばにいていつも心配でならなかった。姉上は女性として兄に優しく接
した。兄はふとした言葉をもって獄に入れられ、遠くの町に追われてしまい、食べる物にも困
った。ようやく帰還できてまだ幾年にもならないのに、姉上は亡くなってしまった。貧にして喜
びがあり、富んでも嘆くところがなかったのには、姉上を見る誰もが驚いたのだった。姉上は
変転の間にも、一切動揺することなく、兄の行くままに付き従った。姉上がこのように振る舞
えたのは本性からのことで、学んでできるようなことではない。親族は皆が嘆き、知る者は
姉上が報われることが少ないのを残念に思っている。必ず福が多く長生きてなければなら
ないはずなのに、まだその半ばで亡くなってしまったのは、どのような道理によるのだろうか。
三人の息子がいずれも立派であるのがせめてもの慰めである。兄は定州の知事として赴
任するので、ここに仮に埋葬することになった。兄より祭文を求められ、息子たちとともに祭
るものである。嗚呼、哀いかな。

(ここに「定州知事として赴任する」とあるように、越州への変更は叶えられず、定州に行くことがもはや確定していたのだった)

■夢南軒

8月11日、蘇軾は夢に故郷の生家に帰った。

げんゆう
元祐八年八月十一日、夜が明けようとして、まだ早かったので、うとうとしていると、
夢の中で眉山びざんの穀行こくこうの家に帰った。庭のあちこちを見て歩き、南軒なんけんに座った。
見ると農民数人がきて、土を運んで小さな池を埋め始めた。土の中に二本の大根
があった。客人が喜んでこれを食べた。私は筆を取って一篇の文を作った。

その数句に、

「南軒に座ると、向かいに立派な竹が数百本、野の鳥が数千羽」

目覚めて、惘然もうぜんとこれを見た。

南軒とは父が「来風らいふう」と名付けた建物である。

(妻を喪った悲しみが、蘇軾を故郷へと導いたのだろうか。かつて先妻の王弗おうふつを夢に見
て詞に詠んだこともあった (第5章35ページ))

■北海十二石記

蘇軾は義理堅く、石好きで、文章を書くのは苦にならない。だから、妻が
亡くなり、間もなく都を発たなければならない多事多用なこの時期にも、
頼まれればこのような文章を書いてしまう。先に見た呉復古ごふくこ (本章323ペ
ージ) のためにこれを記した。

とう
登州は下に大海を臨む。目の力の及ぶところに、沙門、鼉磯、車牛、大竹、小竹
のおよそ五つの島がある。沙門が最も近く、兀然と焦げ枯れた姿を見せている。そ
の他の島は、斜面が陰しく波の中に見え隠れし、まことに神仙が住むにふさわしい
ところである。上に石芝が生じ、草木は皆奇異で、多くはその名が識れない。また、
美しい石のあることで知られ、五色の模様があったり、古代文字のような窪みがあ
ったりする。

きねい りしちゆう ごふくこ かい
熙寧五年に李師中が登州知事となり、呉復古が訪ねてともに遊んだ。ちょうど解
賓王が政界を退いて登州に退居し、人を使わして島々から石を取り、色が粲然と
秀でるもの十二株を得た。

ちやうよう
たまたま登州に停泊している船で、海を巡って潮陽に行くものがあつた。呉復古は
解賓王に頼んで石を分けてもらい、十二個を得て帰った。それを住まいの歳寒堂
の下に置いた。近世の好事家で石好きな者は多いが、北の海の石を南の海に
置く者はいない。

げんゆう どうば こじ
元祐八年八月十五日、東坡居士蘇軾記す。

(1) 登州は現在の山東省、潮陽は広東省にあつて、両者間の移動には中国大陆の東
の縁を七割近くもぐりとまわることになる。士大夫の視点は常に陸にあつて、潮陽は
南方の僻地という捉え方になってしまうのだが、海からは別の風景が見えていたのだ
ろう。(2) ここに、島に石芝が生えるとの記述があることについては、後の 353 ペー
ジで詳しく見ることになる)

■大行太皇太后挽詞二首

妻が亡くなってまだ1カ月、蘇軾の運命を大きく変えるもう一つの死があった。9月3日、高太皇太后が亡くなったのである。62歳だった。これはその死を悼む挽詞。題にある「大行」とは亡くなって葬儀が終わるまでの呼び方。

其の一

まことに至高の方々であった、

仁宗、英宗、哲宗をお助けしたそれぞれの皇太后は……

その功績の高さは、漢代以降に類がない。

とりわけ大行太皇太后は元祐年間の天下の冠ともいべきお方で、

仁宗皇帝の完全な徳を受け継がれていた。

作為があるのは聖人の行いではないという、

大行太皇太后には私がなく、まさしく天のようなお方であった。

侍臣は経筵(御進講の場)で道の要諦を議論合って御講義申し上げたのだが、

皇室の家法は大行太皇太后を通してきちんと伝えられたのだった。

(1)「仁宗皇帝の完全な徳」について、蘇軾自身の注で、「臣はかつて宮中において仁宗皇帝の諡である『明孝』について論じたことがあった。すなわち、『明(明察)であつても仁でなければ、民は畏れるだけで敬愛することがない。仁であつても明でなけ

れば、民は敬愛しても畏れることがない』。大行太皇太后もまたこの二つ徳を兼ねておられる。それで天下の人々が思慕すること仁宗に近かったのである」と記している。なお「孝」の文字は歴代の皇帝の諡に用いられている。(2)「侍臣が道の要諦を議論した」ことについては、やはり蘇軾自身の注で、「宰相以下かつて経筵で祖宗以来の家法十余事を論じ合い、記録を残した」と記している。この詩では、そうするまでもなく家法は大行太皇太后によって伝えられていたというのである)

其の二

大行太皇太后の祖先(高瓊)は夷狄を退けて中国を安らかにし、
まことに国の支えとなった重鎮であった。

漢代には、先祖が治水によって年に千人を救ったことから、

皇后の地位に昇ったとされた人がいたが、

お父上の功績はもっともっと大きく、

百世にわたって祀られてしかるべきお方なのだ。

大行太皇太后がいまの陛下をお立てになったのは、

天がそうすることを知ってのことであつたし、

大行太皇太后が家のこと忘れて天下のために尽くされたことを、

陛下は常に念い続けているのである。

この御恩に天下の人々はどのようにして報いたらよいのだろうか、

まして疾は民のために勤められたことによると聞くのだから。

■朝辞赴定州論事状

9月27日、蘇軾^{でい}は定州知事の任に就くために都を発った。出発に当たって哲宗皇帝^{てつそう}に会って直接別れの辞を述べることを望んだのだが、それは許されず、この文章を記して提出した。

元祐八年九月二十六日、端明殿学士兼翰林侍読学士左朝奉郎新知定州蘇軾^{げんゆう たんめいでんがくし けんかんりん じどくがくし き ちようほうろうしん ち ていしゅう}は書状をもって申し上げます。

右の臣が聞きますに、天下の治乱は、下情(民に関する情報)が通じているか塞^{ふさ}がっているかに起因するとのことであります。最もよく治まっているときには、身分の低い者であっても、下情を上に通じさせることができます。最も乱れているときには、近臣^{えききゆう}であっても上に通じさせることができません。……(『易经』を引いてこの説を補強する)

……

臣^{わたし}は敢えて衰世の暗愚な君主を例に引くのではなく、唐の中興^{どう}の名君といわれた玄宗皇帝^{げんそう}について申し上げます。天宝年間の末に、小人^{てんぼう しょうじん}(君子の反対で、無見識で私欲を優先する者)が大臣の位にあって、下情が通じなくなり、鮮于仲通^{せん うちゅうつう}の率いる二十万の軍勢が瀘南^{ろなん}において全滅したことさえも玄宗皇帝は知らずにいました。そうしたことに馴れてしまったために、安祿山^{あんろくざん}が反乱を起こし、その軍勢がすでに黄河^{こうが}を渡ったときに至っても、玄宗皇帝は安祿山は忠臣であると思い込んだままであったのです。これはまさに下情が通じなくて、耳目が塞がれていたためであって、つ

いにここに至ってしまったのです。

^{わたし}臣は朝廷にありましたときに、しばしばこのようなことを論じてまいりました。陛下は即位されて九年となり、執政、台諫のほかには群臣と接しられることなく過ごしてられました。天下の人々はそれを訝しく思いつつも、太皇太后様が^{まつりごと}政を見ておられる間のやむをえない措置であると理解しておりました。いまは(十二日間の)喪が明けましたので、陛下が政を御覧になる最初の急務としましては、^{ようへい}壅蔽(情報を遮断するもの)を取り除いて下情を通じさせることにあるかと存じます。^{わたし}臣は不肖ではありますが、陛下によって^{かほくせい りあんぶし}河北西路安撫使(定州知事との兼任)に抜擢していただきましたので、まずは^{わたし}臣が下情を申し上げる第一番となって、ここに心を尽くして申し上げるべきであると考えるのであります。陛下におかれましてはどうかお耳を向けてくださいますようお願いいたします。

^{そそう}祖宗の法(初代皇帝以来の決まり事)として、国境地帯へと出る指揮官は、殿上において皇帝の面前で辞去することとなっております。しかし、陛下はどうしたことか^{わたし}臣がそのようにするのを拒絶されました。それはいかなる道理によるものなのでしょうか。

^{わたし}臣がお目通りいただくことによって任地に赴くのいささか遅れが出るようなことがあるとしましても、それはよもや十日を過ぎるものではありません。その間は、^{てんうんし}転運使が代わりとなるので職務に欠けることはありませんので、^{わたし}臣の移動に関わる役人の手当てがせいぜい十日分増えるだけのものでありましょう。陛下が政を御覧になる最初のときに、遠く国境地帯に行く者が天顔を拝することなく都を去るのをみて、心ある人々は、陛下は人の申すことを聞くのを嫌われ、また御心の内で辺事(外国と

の関係)を軽んじておられるのではないかと疑うであります。その兆はすでにここに現れているのです。

わたし 臣は陛下の御講読をお助けする役として、陛下のすぐお近くにお仕えすること前後五年になります。いわゆる親近の者といってよいであります。それが国境地帯へと出て行くのにお目にかかることができないのです。それでは日頃疎遠のより低い地位の者は陛下に何も申し上げることができないということになります。……(ここでまた『易经』を引く)……わたし 臣が上殿を許されないのは私個人にとってはとりたてて利害のないことでありますが、陛下が政を始められたばかりで、天下の人々がまさに注目しているそのときに、祖宗の故事を廃するようなことをなさるのは、聖徳を損なうことと小さくはないものがあるのではないのでしょうか。

わたし 臣は今月二十七日に都の門を出ます。どうあってもお目にかかることを求めるものではありません。ただ^{わたし}臣が上殿を許されるのを待っておりましたのは、少しく愚忠をもって申し上げたいと思うことがあるからでありました。お目にかかれないうちはそれを捨てなければなりません。どうか陛下におかれましては^{わたし}臣の誠心を察せられて、ここに記しますことを少しく御加納くださいますように。

いにしえ 古の聖人は何かを為そうとするときには、必ず先ず暗いところにて明らかなるものを観て、また、静かなところにて動くものを観て、万物が何によって成り立っているかを全て目の前に並べて観たのでした。このようにするなら、数年も経たないうちに、自然と利害の真実、邪正の真実が知れるようになり、そうってから物に応じて事を為すならば、成功しないということはないのであります。

小さなことをもってこのことを譬えましょう。舟を操る者は、水の流れが曲折するのが見えないことにいつも苦勞します。しかし、水際に立つ者にはそれはいつでも見えています。それはどうしてかという、舟を操る者は動に身を寄せていて、水際に立つ者は静に身を寄せているからです。あるいは、碁の勝負は国一番の名人であっても尽くすることのできないほどの変化があります。しかし、袖に手を入れて旁で眺めている者にはこの一手というのが見えるのです。それはどうしてかという、碁を打っている者の意は争いの中にあって、旁らで眺めている者は無心だからです。

もし人主が常に静にいてかつ無心であるならば、天下の誰が欺けましょうか。……(ここで漢代の事例を引いて静にして無心であった皇帝が立派な政治をしたことを述べる)……今陛下の聖智は人を遙かに超え、年齢はまさに盛りを迎えておられます。臣が願うのは、虚心にして理に循うことであります。いまはまだ一切何もすることなく、黙って庶事の利害と群臣の邪正を観るのです。三年を期限としてそれまでは待たれることです。利害の真実、邪正の真実が会得できましたならば、物に應じて行動なさるのです。そうすれば、天下に恨みの生じることはなく、陛下もまた悔いが生じることもなく、上下ともに太平の利を受けるであります。そうなれば山の竹を切り尽くしてもその功績を書き記すのに不足し、古の長寿の帝王の三人分もの長生きをされても陛下の御聖徳に報いるに足りないということになりましょう。このように考えますと、まずは陛下が早く行動し過ぎてしまうことを憂い、遅速を患わないことが大切であることは明らかなのであります。

臣はまた政は薬の処方のようなものであると聞いています。いま天下は大いに治

まっとうとまではいなくても、大病のない状態でありましょう。古の人はこのように言っています。「病があっても治さずにいるのは、中庸を得た医者である」。この意味することは、小さな病気までもことごとく治してしまおうとしないのは、悪い薬を誤って与えてしまうよりはずっと賢いということなのであります。万に一つの成功を当て込んで失敗してしまう禍よりもはるかによいということでありまして、^{わたし}臣が恐れますのは、急に事を進めて利を好む臣下が、陛下に軽々しく改変するのを勧めることです。このような説によって進もうとされましたときには、陛下におかれましてはどうか古の言葉を深くお考えになられますように。中庸を得た医者の安穩で万全の策を守って、悪い薬によって誤るようなことがありませんように。実に国家の利、天下の幸いはここにあるのです。

^{わたし}臣は憂国の心より我が身を忘れて死を冒して申し上げるものであります。

((1) 一読して蘇軾がかなり強い調子で皇帝にもの言っていることが知れるであろう。それだけ蘇軾には強い危機感があつたのだ。すなわち、^{こうたいこうたいごう}高太皇太后亡き後の国政の急激な変化を恐れていたのである。(2) 蘇軾の主張は常に一貫している。^{りくし}陸贄の意見書を皇帝に差し出しとき(本章315ページ)にも、下の者の意見を聞くことが大切であると述べていたし、^{おうあんせき}24年前に王安石の改革に反対する意見書を皇帝に提出したとき(第3章46ページ)にも、同様のことを述べていた。また、急激な変化を危ぶむ姿勢も一貫している。王安石の改革を批判したときにも、^{しばこう}司馬光が改革政治を全てひっくり返そうとしたのに反対したときにも、そうであった。(3) 蘇軾は保守派内の抗争の結果として不本意ながら国境地帯の定州に行かねばならなくなったのだが、高太皇太后の死によって、

そうした抗争は全く意味のないものになりつつあった。^{てつそう}哲宗皇帝の心は、自分が自由に政治を動かせるようになったら父の^{しんそう}神宗皇帝の改革政治を復活させようと、ずっと前から決まっていたようである。蘇軾にはそれがわかっていたから、定州に行く前にどうしても哲宗皇帝に会って直接言っておきたかったのだ。哲宗皇帝はそれを拒絶し、恐らく蘇軾のこの文章も一文字も読もうとはしなかったであろう。保守派の内輪揉めで蘇軾が都を去ったのは哲宗皇帝にとってはもっけの幸いで、次の段階として、蘇軾を追い出した連中も含めて保守派をいかにして都から一掃したらよいのか、哲宗皇帝はすでに思いを巡らせていたであろう。翌年の夏にかつて副宰相を務めた^{しょうじゅん}章惇（第8章1ページ）が朝廷に返り咲き、再びの改革政治が本格的に始動することになる。章惇はかつての蘇軾の親友であるが、失脚させられていた7年の間に、復讐の鬼と化して帰ってくるのである）

■東府雨中別子由

上の文章との前後関係は明らかではないが、いよいよ都を発つ直前に、蘇轍の勤める^{とうふ}東府において、雨の中、別れの詩を詠んだ。

^{とうふ}東府の庭のこの^{あおざり}梧桐の樹よ、

汝に会うのは、三年の間にこれで三度。

先の年は汝陰（^{じょいん}穎州）に行（とき、

汝は秋の雨に葉を鳴らしていた。

去年のまた秋の雨のときに、

私はこうりょう 広陵(揚よう州)から帰ってきたのだった。

今年ちゅうざん は中てい山(定州)にゆ行く、

白髪だらけの頭であるから、

次はもうないであろう。

この客人が去っても汝は嘆息するには及ばない、

いまは主人である汝もまたこの世界の客人なのだ。

君たいしゅう (蘇轍)との対はるか牀はきつと悠悠な先となるのだらう、

夜の雨はそれまでしとしと蕭瑟とむなしく響くだけだ。

起って梧桐の枝を折り、

君に贈って、僕は千里の旅に出る。

生きて帰り来るのか、

それはわからない。

いまのこの気持ちを忘れないでくれたまえ。

(やうたいしゅう 「夜雨対牀」を兄弟の理想の時間とするのは蘇軾の一貫した思いであった(第2章21ページ)。「三妻は一の如く」(本章332ページ)以上に、弟への「愛は天より出ず」と思わない者はいないであろう)

■謝仲適坐上送王敏仲北使

都を発った蘇軾は真つすぐ北に定州へと向かい、ほぼ1カ月後の10月

23 日に到着した。

これは移動の途中の相州そうでの作。王古おうこ（字は敏仲あざな びんちゆう）が朝廷の使者として
遼国りょう（契丹きつたん）に赴くのを、相州知事である謝卿材しゃけいざい（字は仲適ちゆうてき）が見送る
宴席で、たまたま居合わせた蘇軾がこの詩を詠んだ。王古はかつて名宰相
としてその名の高かった王旦おうたんの曾孫で、ここで出会ったことが一つの縁
として後に大きく作用することになる。

衝つくような風が黄河こうがの北の地を震わせ、
霧が飛んで、太行山たいこうさんの姿は見えない。

そのような中で出会ったのでは、誰が誰だがわからない。

馬から降りると、砂塵によって髯も眉も黄色になっている。

眼を洗って、やっと驚き、笑い合う。

ここに見るのは、

玉節ぎよくせつ（朝廷の使者の印）を手に北に赴く人おうこ（王古）ではないか。

喜ばしいことに、

ここに賢主人しやけいざい（謝卿材）がいて、

灯火の光が消えるのを惜しむまで送別の宴が設けられた。

出会いと別れは一つの夢の中のこと、

人は北へ行き、雁とは南へ翔び行く。

吾が生は寄せるが如きのみ、

老年を天の片隅で送ることになった。

幸いにも、貴君は明主に遇って、

朝廷において近くにお仕えするお方である。

役目を果たすに猶予はならない、

早くに帰還しなければならないのだから。

(蘇轍^{りょう}も遼国に派遣されたことがあった(第9章8ページ)。やはり冬で、新年の祝賀の使者として行くのである。ここに「猶予はならない」とあるように、王古^{おうこ}は恐らく蘇轍を追い抜いて先に進んで行ったのだろう)

■和錢穆父送別並求頓遞酒

都で親しくした錢勰^{せんきょう あざな ぼく ふ}(字は穆父)の送別の詩に、旅の途中で和して送り、合わせて頓遞酒^{とんでいしゅ}を所望した。頓遞酒とは宮中で醸造される酒の名であるという。

(蘇轍が都を離れるに際して、多くの人が送別の宴に参加したり、詩や手紙を渡したりした。旅の途中でせつせと手紙を書いたり、詩に和したりしたようだ)

貴君と私が並んで歩けば、二人の長身がことさらに目立った。

朝臣の列にあって、いつも親しく談笑していた。

羨ましいのは、

貴君には九人の男児がいて、

門戸がますますさかん壮なことだ。

残念なのは、

私はあちこち地方を点々としてきたのだが、

数えるといまだ八州で、数字が一つ及ばない。

ほのかに聞くのは、

朝廷は天下の賢才を招く心づもりであるらしく、

ならば私は西湖せいこを乞い願って、

北の地で浴びる塵を洗いたいものだ。

それより青州せいを求めるのもよいのかもしれない、

「青州従事せいしゅうじゅうじ」(有名な酒の銘柄)とはどういう人物なのか知ってみたいのだ。

(気安い間柄の友人に送った戯れの詩である。錢勰せんきやうとは数々の詩を唱和し、元祐げんゆうの四友(本章285ページ)と呼ばれもしたのだが、これがいまに伝わる2人の間の最後の作品で、錢勰はこの4年後に64歳で亡くなる)

■書丹元子所示李太白真

李白りはくを描いた画を、姚丹元ようたんげん先生(本章296ページ)が示したので、それにこの詩を書き添えた。定州ていに出発する直前に姚丹元が画を携えて訪ねてきたと見るのが普通だろうが、すでに旅に出た蘇軾のもとに、思いがけず姚丹元こうが(杭州ちゆうしゆを發った蘇軾の船を仲殊がふらりと訪ねたように(本章4ページ))現れたと想像するのも愉快であろう。

人の世は一粒の泡、

てんにん
天人もしはしそこに宿ったりするのだろうか。

りはく
李白は天から流謫の身としてこの世に降ろされたという、

本当はただ遊びにきたただけだったのではなからうか。

九州(中国)などは狭いとして、

この世界の八方の隅を自在に行き来し、

ある友人とともに巨大な鳥となって鳴きかわし、

ひとたび鳴いてはひとたび止んで、

たちまち三千年の年月が過ぎ去って、

とう かいげん
唐の開元年間にはどうやら道みちが行われている(正しく治まっている)ようだ、

少しの間だけそこに留まることになったのだった。

繋ぎ止めておくのはもとより不可能で、

まして、李白自身が国に用いられようと求めるはずもなかった。

ここに李白のために詩を作ろう。

聞いて、笑ってくれるであろうか。

西望太白横峨岷、たいはくざん が びざん びんざん
(西方、太白山を望めば、峨眉、岷山が横たわる)

眼高四海空無人。(李白の視点は高く、天下にひとかどの人物などはいないと見た)

大児汾陽中令君、ふんよう かくしぎ
(大きな子供としては宰相になった汾陽の人(郭子儀)が)

小兒天台坐忘真。てんだい しぼしび
(小さな子供としては悟りを開いた天台の人(司馬子微)がいたくらい)

生年不知高將軍、(それまで高將軍(高力士)などは知らなかったために)

手汚吾足乃敢瞋。(吾が足でその手を汚して怒らせてしまったのだった)

(終わりの諺には、李白と関わりがあった人物が挙げられている。最後の高力士は玄宗皇帝に仕える宦官で、李白が酔って意図せずして侮辱してしまったことから、高力士の讒言によって李白は南方に流されたといわれている)

■次韻曾仲錫承議食蜜清生荔支

蘇軾は、定州に到着すると早速、同僚から詩の唱和を求められた。副知事の曾孝広(字は仲錫)に、「蜜に漬けた荔支(ライチー)を食べた」という詩を示され、それに次韻した。

代北(定州)は寒いところであるから、

韭と萍を搗き合わせた和え物くらいしかないと思っていたら、

ここに、なんとほろぼる荔支がやってきていて、

暁の星のように輝いているではないか。

荔支は塩に漬けるとからからにしぼんでしまい、

蜜に漬けるためには皮剥ぎの刑に遇わなければならないとか。

これを食べると、

たちまち仙人にでもなったかのような心地、

李白の大法螺ではないが、

大海原で鯨と格闘してみたくなる。

枝をひねって取った実に、

近ごろ「^{じゅうはちじょうれいし}十八娘荔枝」という新しい名を付けたと聞くが、

女性をもって呼び名とするのはいささか品がないだろう。

(1) テーマが珍奇で、しかも次韻という制約があつて、さすがの蘇軾も苦勞したようで、牽強附会の作という評もある。それを読みやすくしただけの低レベルの「ずっぱ訳」である。(2) 蘇軾もこの詩には満足でなかったようで、もう一度次韻している。しかし、それもまた無理があるのかよく意味が通じない)

■次韻滕大夫三首

同じく副知事の^{とう き せい あざな こうこう}滕希靖（字は興公）が示した3首の詩に次韻した。こちらは^{せつろうせき ちんこうせき}雪浪石、沈香石という2種の石を詠んだもの。石好きの蘇軾にとってはよほど和しやすかったと思われる。

^{せつろうせき}
雪浪石

^{てい}
ここ定州には、

西から一万頭の馬が馳せくるかのように太行の山脈が迫り、

その勢いは天下の名峰泰山と、大きさも尊さも争うほどである。

^{ひ こ じょうどう おお}
飛狐、上党の山々が天下の脊梁をなして、落ちゆく日を掩ってしまうために、

このあたりではすぐに^{たそがれ}黄昏が訪れる。

東には、山が削られた先に二百もの郡があり、
北には、山の気に圧倒されてわずかな村が散在する。
定州の町の前で、千の峰が右巻きに並んで直立し、
崩れた崖に穴が削られ、土の門が開いている。
そこから城下へと石が飛び落ちてくるので、
かつてここを占拠していた異国の兵団は、
その音に「すわ敵襲だ」と肝を冷やしたこともあった。
いまや百年もの平和が続^{のろし}き、烽火があがることはなく、
山から崩れ落ちた石も、何事もなく枯^{にれ}れた榆の根元にころがっている。
黒い石に白い脈が入っているのを見て、
画師はそこに雪が浪うつ勢いを感じ取って競って描いた。
そこに天^{たぐみ}の工^{ふる}が斧を揮ったような痕はない。
四面を川の水で囲まれたように見える離^り堆^{たい}という石に似ているのだが、
その産地である蜀^{しよく}の土^{ひと}は私のほかにいないので、
誰にも同意を求めることができない。
老翁(蘇軾)は子供ように、雨だと言って水をこの石に注いで遊び、
水滴が鉢に跳びはねるありさまを、酒を手^ににゆったりと眺めている。
そのようにしていると、
この身が自ずと幻のように思えてきて、
何もかもが夢となって、

ただ故郷の山水が心に内に存在するのである。

雪浪石 其の二

私は先ごろ三度にわたって越州^{えつ}に行くことを願ったのは、
一万の谷を訪ね、水が交わり流れるありさまを見たかったからだ。

山の骨を切り開くのは造物者にしかできないことで、

我等にもできるのは、

八首^{はちしゅ}八手^{はちて}八尾^{はちび}の海の怪獣「天呉^{てんこ}」が浪から現れ出る姿を、

この石に見てとることである。

さらには、水を引いて池を穿つくらいのものできるのだが、

地の皮を巻いてこのような石を作ることはやはりできない。

石と言えば、

かの洛陽^{らくよう}の奇石はいまは誰が持っているのだろうか。

唐^{とう}の時代に李徳裕^{り とくゆ}と牛僧孺^{ぎゅうそうじゆ}は何かと争い、

奇怪な石を集めることまでも競ったのだが、

はてさて、実に愚かなことをしたものだ。

(唐^{とう}の中頃に李徳裕^{り とくゆ}と牛僧孺^{ぎゅうそうじゆ}が激しい権力争いをしたことは「牛李^{ぎゅうり}の党争」と呼ばれ、
党派争いが国政を乱す典型的な事例とされた。そのことをここに持ち出したのは、現実
の政治への危機感からであろう)

ちん こう せき

沈香石

山がぽつんと壁のようにそそり立つ――

硯に寄り添って、沈香石が悠遠な姿を見せている。

こう ぼく ちん すい こう

香木の沈水香が石に化したのだとか、

どのようにしてこのように固く蒼^{あお}くなったのだろうか。

かつて山中で、松が石に化したものを見た、

へき じゃ こう

辟邪香という香りを発する玉^{ぎよく}があるとも聞いている。

沈香石が本当に香るのなら腰に帯びてもよいのだが、

石はやはり石であるようだ。

ひゃく こう

百和香とはまことに貴重なもの、

それでも、焚けばいつかは灰燼になって尽きてしまう。

「柔は剛に勝る」とは老子^{ろう し}の名言、

されど、沈香石を見ると、そうとばかりもいえないようだ。

■石芝詩

せき し

石芝とは、きのこのような形状をした石で、仙薬の原料になると考えられていた。蘇軾は以前に、石芝を食べた夢を見て詩に詠んでいたが（第6章 81 ページ）、この詩の序文に「肉芝^{にく し}」なるものを食べたという驚くべきことが記されている。

私は昔、夢の中で石芝^{せきし}を食べ、詩を作ってそのことを記録した。今まことの石芝を海^{うみ}のほとりで得たところ、弟が前の詩に和した。

私は先ごろ都にいたときに、井戸を掘っていて小児の手のようなものを得たと言って持ってきた者がいた。臂や指が具わっていて、膚^{きめ}の理が生きているかのようにであった。ある隠者に尋ねると、「これは肉芝^{にくし}である」と言ったので、弟と煮て食べてみた。このことを追記して、また以前の詩に次韻する。

(弟が和したとある詩には、より詳しい経緯^{きょうい}がわかる序文が添えてあるので、それを見ておこう)

兄は昔黄州^{こう}にいたときのこと、夢の中で、人家の井戸のあたりを歩き、石の上に紫の藤が生え、赤い箭^やのような枝や葉が出ているのを見た。その主人は「これは石芝^{せきし}です」と言った。折って食べると、雞蘇^{しそ}のような味がして甘かった。八韻の詩を賦してこのことを記録した。

元祐八年、私は兄とともに都^{とう}にいた。登州から客人が来て、「海上の諸島には日に向かって生える石がたくさんあります。海の人々はこれを石芝と呼んでいます。これを食べると、茶のような味がして、しばらくすると甘みが増します。海辺の風流人にはこれを取って服する者がいて、人に益があると言っています」と言った。客人は一籃^{ひとかご}の石芝を兄に贈った。

私が前の詩に次韻した。

(これで見ると、登州の石芝は堅い海草^{かいそう}の類のようである)

土の中から嬰兒の掌^{てのひら}のようなものが出てきた、

爪や指もあつて肌骨きこつがはつきりしていた。

これを見て人々は怖がって走り、

食べようとする者などいなかった。

これは僕と君が天から賜ったもので、

頼まれたって人に与えるべきものではない。

昔の有名な仙人といえば、

許遜きょそん、許邁きょまい、許穆きょぼく、許翺きょかい……、

なんと、皆が同一の門戸である。

僕等の家は庶民であること三百年、

ただし、陰徳が数知れずあった。

祭祀の際には跪いて数々の供え物をしてきた。

しかし、仙人から見たら、

どれも枯れ枝、土くれみたいなものであったのかもしれない。

肉芝にくしはよく烹にあがり、石芝せきしはなかなか大きい、

この二つの前では、熊の掌のような珍味も笑って唾を吐きかけるべきだ。

成長した蠶かいこは繭を作り、いつ抜け出せるかとうずうずしている、

僕は夢に仙人になったことを想って、激しく心がたかぶる。

古来、仙薬は求めても得られないという、

仙界との真の契りは、

磁石と鉄のようにもとより定まっているものなのだ。

(我々には理解できないことだが、蘇軾は仙人になる薬が存在するのを信じていたようだ)

■書石芝詩後

上に見た石芝の詩に添えた短文。

中山(定州)教授の馬君は文登の人である。きっと石芝を得て食べたことがあるだろうと、この詩を作った。馬君も一篇の詩を賦した。

目が昏み、多く書くことができない。題字とこの短文だけを記し、あとは子どもに筆を執らせた。

(先に見た蘇轍の序文に、石芝は登州県の産物とあったから、同地(文登県は登州管内にある)の出身である馬教授(名は不詳)に詩を詠んで与えたのだった。このようにして、詩の贈答を通じて蘇軾は新しい任地でよい人間関係を築いていったのだろう)

■鶴嘆

「鶴の嘆き」という詩。

園中に鶴がいる。

人に馴れて、呼べば来そうなので、私の座っている脇へと招き寄せようとした。

鶴は不承知な様子、

横目で私を睨んでいる。

「昔、賈誼^{かぎ}という人は、鳥の心を詩に詠んだという。

もしかしたら、君もそうしてほしいと思っているのかい」

と、私は言った。

鶴は、

「我が生^{せい}は寄せるようなもの、

本当に孤独です。

三尺の長い脛^{すね}の上に瘦せた体を置いています。

俯^{つひば}して啄んでも、少しばかりで、食べ残してしまいます。

こんな身ですから、あなたに楽しんでいただけるようなことはできないのです」

そこで、ちょっと追って、堂(部屋)の上にあがらせてみた。

餌を投げてでも知らん顔をしている。

戛然^{キーン}と長く鳴き、堂から下^{はし}って趨^{はし}って行ってしまった。

鶴は、進むのは難しく、退くのはやさしいと心得ている、

私の及ぶところではない。

(実際にこのようなことがあったわけではないだろう。蘇軾自身のあるべき姿を鶴に投影したのであろう)

■劉醜廝詩

12 歳^{りゅう し し}の少年である劉醜廝^{りゅう そう げん}のことを詠んだ詩。詩の中で柳宗元の書いた

「童区寄伝」(子供の使役人である童(ここでの実態は奴隷)の区寄の小伝)について触れていて、関連するところが大きく、また、先に見てきたように、蘇軾は年を追って柳宗元に傾倒しつつあったので、まず「童区寄伝」を見ておきたい。

柳先生はこのように言う。(柳宗元はこのとき罪を得て南方の柳州に流されていた)

越人(南方の少数民族)は恩愛の情が薄く、男でも女でも、生まれたときから売り物とみなされる。齒が脱け代る年齢以上になると、父兄はこれを売って、利益を得ようとする。子が足りないときには、ほかの家から盗み取り、縛りつけて首枷、手枷をつける。髯が生えるほどの年齢の者であっても、力で負かされてしまって童(少年奴隷)にされてしまうことがある。それで、道で出会うと、傷つけ合い、殺し合うことが普通に行われている。幸いにも大きく成長できた者は、弱い者を縛って奪うようになる。漢人の役人はこのようなことを己の利益とし、童が得られるのなら、何をしようがそれを問わない。こうして越人の人口はますます減り、この状況から自力で脱出できる者はわずかしかない。

ここに区寄は十一歳でこのような境遇に打ち勝ったのであるから、実に珍しいことである。

桂部(柳州に属する)の従事である杜周士がそのことを私に話してくれた。

区寄は郴州の菟牧(薪の採取と牧畜を生業とする)の家の子で、家畜を連れて移動しつつ薪を採っていた。区寄は二人の賊に劫め取られ、後ろ手に縛られ、布の囊で口を塞がれ、連れ去られた。二人は四十里先の村に行って売ろうとした。区寄は偽って幼い子どものように恐れ慄いて泣いた。普通の幼い子そのままであったから、賊はこれをあなどり、二人で

酒を飲み、酔っ払った。一人が売る算段のために出かけて行き、一人は刃^{やいば}を道の上に突き立てたまま臥して眠ってしまった。少年はそとその眠りを伺い、背中の縛られているところを刃に押し付け、力を籠めて上下に動かし、絶ち切った。そして刃を取って賊を殺した。逃れてまだ遠くいく前に、商売に行った者が帰ってきて、少年を見て大いに驚き、殺してしまうとした。

少年はにわかに言った。

「二人の男で僕を分け合うのと、一人で僕を使うのとどちらがよいのでしょうか。あの男は僕にやさしくしてくれませんでした。でも、あなたさまが僕を生かしてくれて、恵みを与えてくださるのなら、何でもいたしましょう」

男はしばらく考えてこのように言った。

「おまえを殺すよりは売ったほうがよいだろう。二人で売って分け合うよりは、独り占めしたほうがよい。あいつがうまいこと殺されたのは、実はよいことだったのだ」

すぐに死骸を隠し、少年を、売る相手のところに連れていった。少年はより嚴重に束縛されて閉じ込められた。

夜中に、少年はころころ転がって縛られたところを爐の火に当て、焼いてそれを絶った。手は火傷したけれどためらうことなく刃を取って、先の賊をまた殺した。そして大きな声で叫んで、村中の人を起こした。

少年は言った。

「僕は区^{おう}の家の子です。奴隷なんかにはなりません。賊の二人が僕を捕らえたけれど、僕は幸いにも二人とも殺しました。どうかお役人にこのことを知らせてください」

村の役人は州の役所に告げ、州の役所は^{だいふ}大府に告げた。大府は少年を呼び、少年を視ると、まだ小さな善良な子であった。知事の^{がんしょう}顔證はこれを珍しいことだと感じ、手元に留めて^{こづかい}小吏にしようとした。少年は同意しなかったので、衣服を与え、役人に守らせて郷里に返した。

郷里のかどわかしをする連中は、目をそらして、その家の門の前を敢えて通ろうとはしなかった。皆がこのように言った。

「この子は、かの^{しんぶよう}秦武陽(十三歳で人を殺して誰もが恐れた昔の勇士)よりも二歳も若くて、二人の乱暴者を殺したのだ。近づくことなどできない」

(これは少年の勇敢さを讃えるとともに、少数民族が奴隷狩りの対象となって衰亡し、役人がその悪弊から利益を吸い上げていることを告発したものである)

^{りゅうじい}劉翁さんは^{ぼうと}望都県の民である。

病気で痩せ衰え、瓦を焼く窯の中で暮らしていた。

子がいて、^{しゅうし}醜厮という名で、十二歳である。

^{ひきご}醜厮は瓢を持って物乞いに歩き、

墓地で供え物の残りを得たり、

雪の中で落ちている薪を拾ったりしていた。

水に漂い火に焼かれる災難も、飢えて死ぬことも、親子でともにしようとしていた。

病んだ老人には一枚だけの薄い衣があり、

それで雪の降る夜もしのいでいた。

二人の乱暴者がやってきて、その衣を奪い取った。

哀しいことに、老人は飢えた鳥のように泣き、

そのまま凍え死んでしまった。

乱暴者は少年をあなどり、

好き放題をして立ち去ったのだが、

少年は遙かな雪道にもめげずに亭長^{ていちやう}のもとに走り、

我が仇^{しゆく}は祝^{せん}と苑という男だと告げ、

道を遮って捕らえてほしいと訴えた。

人々はこの話を聞いて涙を流し、

二人はついに縛り首となった。

少年は我が役所にきて詳しく訴え、

その心意気は我が同僚を驚かせた。

私はこのように言った。

「かの郴州^{ちん}の蒐牧^{じゅうぼく}の子にならって、

そなたを寄と名付けたい。

残念なことに、柳宗元のような立派な文章は私には書けないので、

そなたのため、拍子木を打って歌おうと思う。

さあ、聞いてくれたまえ」

——役所からの褒美は二万銭、

でも、家もなければ、まだ妻もない。

いつかは妻を迎えるとして、
 まずはきちんと髪を束ねるがよい。
 体もきれいに洗って、
 腰帯を締め、頭巾も載せたなら、
 小さな役人になるがよいだろう。
 読み書きを覚えて学問の道に進むもよし、
 弓矢を習って外敵と戦うのもよい、
 大きくなったらそなたの好むままに選べばよい。
 忠孝を尽くすなら必ず福がくる。
 昔、肋骨を折る災難に遭いながらも宰相になった者がいた。
 昔、葬列について笛を吹く仕事をしていながらも大臣になった者がいた。
 人の世のことはあらかじめわかりはしない。
 小さな子だからといって軽んじてはならない。

■釈迦文仏頌

11月11日、亡くなった妻王閼之のために、釈迦おうじゆん しの画を掲げて供養を行った。その画は友人の李公麟り こうりん（本章306ページ）が描いたものだった。

端明殿学士兼翰林侍読学士蘇軾たんめいでんがく し けんかんりん し じ とうがく しは、亡妻同安郡君王閼之のために、奉議郎
 李公麟り こうりんに頼んで釈迦とその十大弟子の画を描いてもらった。

げん ほう

すいりくどうじょう

元祐八年十一月十一日、水陸道場(供養のための仏事)を設けてその画を供養し、

しゅはいけいしゅ

しょう か

手拝稽首して頌歌を捧げる。

我願世尊、(お釈迦様に願います)

足指按地。(どうか大地に手と足を触れられて)

三千大千、(この全世界を)

浄琉璃色。(瑠璃色にお浄めください)

其中衆生、(その中にいる衆生を)

靡不解脱。(すべてお救いください)

如日出時、(日が出るとともに)

眠者皆作。(皆が目覚めるように)

如雷震時、(あるいは、雷が鳴って)

蟄者皆動。(全ての虫が動き出すように)

同證無上、(お釈迦様の御証は)

永不退転。(永遠に変わることがありません)

(同じころに、韓琦^{かんき}の祭文を記して、韓琦の霊に捧げている。韓琦は蘇軾が8歳のときにあこがれた4人のスーパースターの1人で、一時期定州^{ていしゅう}において遼国への備えを指揮したことがあった。蘇軾は軍務も兼任し、韓琦を見習って、軍備の現状を点検して改善に努めた。防衛上の様々な仕組みが汎骸化^{はんがい}していて、設備が老朽化し、士気が弛緩^{りけん}していた。蘇軾は制度の改革を朝廷に提案し、設備を改修する費用を捻出^{でい}するために度牒^{どてつ}の発行を朝廷に求め、また、自ら軍事訓練を行うなどの対策をとった)

■題毛女真

もうじょ
毛女という仙女の肖像画に添えた詩。

びん
鬢から霧が湧き、

まげ
鬟から風が吹き出し、

木の葉を綴った衣をまとう。

千年ぶりに帰ってきた毛女は、

「山や川はもとのままですけれど、

昔の人は誰もいません」

と、つぶやき、

しょうざん
商山に住む四人の仙人を訪ねるしかあるまいと、

一人静かに、月の光のもとを、

笛を吹きつつ去って行くのである。

(1) 商山しょうざんの隠者は本章 223 ページで見ている。漢代から千年を経てもなお山にいる
4人だけが毛女もうじょの知り合いだというのである。(2) このころに弟の作った2首の詩に次
韻している。どちらも、清汝老せいふんろうという道士から、仙薬および仙女の画を弟がもらったと
いう詩である。この詩に似て摩訶不思議なことを詠んでいて、訳者にはほとんど理解でな
いので省略する。)

■紫団参寄王定国

題にある「紫団参」^{し だんじん}とは紫団山^{し だんさん}に産する人参。この詩を添えて紫団参^{おう}を王^{きょう}鞏^{あざな}（字は定国^{ていこく}）に贈った。紫団山の名は、唐^{とう}の時代^{げんそう}に玄宗皇帝^{たいこう}が太行山脈^{わらが}のあたりに紫の雲が団っている（これは瑞祥である）のを見たという伝説に由来する。

（これもまた不可思議なことを詠んでいて、よく理解できないままの「ずっぱ訳」である）

深く刻まれた谷から、
太行山脈^{たいこう}は突兀^{とつこつ}としてそそり立ち、
紫の雲^{わらが}が団るばかりか、
日の光を下に見おろす高さがある。
昔から知られているように、
この山からは、剛^{つよ}い風が草木に向かって吹き降ろし、
真^まの気が茎へと入り込むことで、
羊腸^{ようちよう}の嶺^{みね}に人街芝^{じんかんし}（人参の別名）が生じる。
人参の根^{ひげ}の鬚^{たてがみ}は虎の鬚^{こが}のようであり、
根の縮こまったところは竜の腰^{こが}のようである。
蠶^{かいこ}のような形をしたものが最もよく、
試しに少し齧^かってみるだけで、

亀のような呼吸法を自由に行えるようになる。

私は古の明真先生いりこしえ めいしんのような者で、

仙界に至ったような境地に達しているので、

清らかな夜に、月の光が戸から差し込む頃に、

珠たまを井戸に落とすようにしてこの人参を服すと、

心の火は消えて灰となり、

汗をかくことも喘ぐあえこともなく、

すっかり静まるのである。

私はまだ人参を見分ける目は肥えていないけれど、

北の地に産するこの薬を君に贈ろうと思う。

三極みつまたに分かれた人参を、

仙薬きゅうてんを練る九転かなえの鼎で煎じるとよいであろう。

ともあれ私の言うことを聞いて口に含んでみるがよい、

酒や茶よりはよいはずであるのだから。

■寄餠合刷瓶与子由

定州ていしゅうの産物をプレゼントする詩が続く。これは、餠合りゅうごう（蒸し器であるらしい）

と刷瓶きつぺい（平らな鍋のようなものらしい）を弟に贈った詩。定州は磁器の産地で、

弟には実用性の高いものを選んだようだ。

老人は心も行いも日に日に^{ぐだぐだ}摧頹になり、
昨夜からの赤い残り火で手を^{あぶ}焙ることしかしていない。
小さな甑^{こしき}（^{りゅうごう}餛飩）、低い瓶^{かめ}（^{さつぺい}刷瓶）があれば事が足りて、
子供らと一緒にあらゆる煮炊きがでせる。
これを君に贈るから、
部屋で静かに栗でも蒸しながら、
僕が人のいない部屋で灰に字を書いているのを、想ってくれたらよい。
君の家の^{ボーイ}僮たちには、これを大切にしよう言ってくれ。
故郷の山の実には僕等が帰ってくるのを待っているはずで、
そのときにきっと役立つのだから。

■次韻劉燾撫勾蜜漬荔枝

同輩の^{りゅうとう}劉燾が蜜漬^{れいし}けの荔枝を詠んだ詩に次韻した。遠い南の夏の産物である荔枝は、北の寒地ではことのほか珍しく感じられたのだろう、^{てい}定州に来てから荔枝の詩を何度も作っている。それはあたかも後の運命を暗示するかのようでもある。

季節の新たなものを食べると、
満座の人々は必ずその名を尋ねる。
それと別れて久しくなると、

多くの人はその色や香りを忘れてしまう。

ここに蜜漬けの^{れいし}荔枝を得て思い出すのは、

葉は^{ようばい}楊梅に似て霧や雨に煙る雰囲気があり、

花は^{ろきつ}盧橘に似て風や霜をしのぐ気配があること。

^{じゅんさい}蒔菜に塩味噌を付けたのよりも旨いといつも納得し、

葡萄のような芳醇さは、わざわざ酒にするまでもない。

いま外では雪が舞い飛んでいる。

湧き上がる詩情とともにこの荔枝を嘗めようではないか。

■送曾仲錫通判如京師

蘇軾が^{てい}定州に着任してすぐに蜜漬けの^{れいし}荔枝を詠んだ詩に唱和することを求めた副知事の^{そうこうこう}曾孝広（字は^{あざな}仲錫^{ちゅうせき}）（本章348ページ）が都に行くことになり、この詩を贈った。

国境の町の年の暮れはいつも吹雪、

貴君との別れに、無理にも春の酒を出してきた。

ここでの日々は――

將軍の陣営で夜に兵を談じ、いつしか月がはいよいよ冴えわたった……

鉄の鎧をまとして馬にまたがって暁に出て、凍りついた河を踏み裂いて走った……

根から断ち切られた蓬や落ち葉が、黄色い沙とともに巻き上げられて、

林に咲くのは氷の花……。

いまからは——

貴君は、皇族の方々のために都へ行き、威儀堂々の行列の一員となる……

残された私には、

右にも左にも漢^{かん}の時代の名臣のような方々がいてくれるのだから、

その間で詩を嘯^{よる}き、諾^うとだけ言っていればよいのだ……

そんな私であるから、

ここにいるよりは故郷に帰った方がよいというのは、

使用人たちでもわかる道理である。

北の地に春の水が流れ出るよりも先にそりたいと思っている。

■書淵明詩

しょうせい
紹聖元（1094）年、蘇軾^し59歳。

紹聖への改元はこの年の4月に行われた。「紹」とは前代の事業を受け継ぐという意味。改元によって、哲宗皇帝^{てつそう}は父神宗皇帝^{しんそう}の聖なる事業を受け継ぐと天下に宣言したのであって、そのころから改革政治への回帰が本格化する。

これは陶淵明^{とうえんめい}の詩を書いて、それに添えた短い文章。

種豆南山下、^{ろざん}（南の山（廬山）のふもとに豆をまいた）

草盛豆苗稀。(草が盛んに繁るだけで、豆の苗はわずかしかなない)

侵晨理荒穢、(朝早くから雑草を引き抜き)

帶月荷鋤歸。(月の光を浴びながら鋤をかついで帰る)

道狹草木長、(道が狭くて草木が高く伸び)

夕露沾我衣。(夕べの露で着物が濡れる)

衣沾不足惜、(着物は濡れたところで構いしない)

但使願無違。(どうか我が期待にそわかないでほしいのだ)

陶淵明^{どうえんめい}のこの詩^みを^み覧て、皆で大きく嘆息した。

噫嘻^{あ あ ゆうべ つゆ ころも うるお}、「夕^はの露^はが衣^はを沾^はす」……、このために愧^はじるところを犯^はしてしまう者がどれほど多くいるのか。

元祐^{げんゆう}九年正月十六日、李^り之儀^{しぎ}、王^{おう}幾仁^{きじん}、孫^{そん}敏行^{びんこう}が一緒であつた。

東坡^{とうば}が記す。

((1) ここに掲げられているのは陶淵明^{どうえんめい}の「田園の居に帰る」という5首連作の第3首である。官職を棄てて帰郷したときの思いを歌っている。最後の「我が期待」とは、豆が刈圃^{かりぼ}に成長することである。(2) 「愧^はじるところを犯^はしてしまう」とは、農作業の辛さ、あるいはわずかな収穫しか得られないのを嫌って仕官し、つまりめ恥辱を被るようになることをいうのであろう。(3) 名の挙がっている3人は定州^{ていしゅう}の同輩である。李^り之儀^{しぎ}はすぐ次の詩に登場する)

■立春日小集呈李端叔

立春の日に少人数の集まりを持ち、李之儀（字は端叔）に戯れて詠んだ詩。この年の立春は1月17日で、上の短文の翌日である。詩の中で陶淵明に触れているので、詩題にある「小集」とは前日のことを指すのかもしれない。なお、李之儀とはかつて都にいたときに交流があり（第8章 253ページ）、蘇軾はその人柄と才能を高く評価していて、定州に着任するとすぐに都から呼び寄せたのだった。

白髪になってすでに十年、

新しい春には何とも耐えられない思いがする。

歳が新たになったとて驚くこともない。

親しい人たちとしばし語り合うのは――

「民の喜ぶ声が聞かれますのは、牛が元気だからであります」

「鴉がかわいらしく鳴くのは、雪がどっさり降るのであります」

「雪など降らないで、暖かであるのが蠶にはよろしゅうございましょう」

「このようにしていると、陶淵明が一月五日に斜川で遊んだのと似ていましょうか」

「我等の風流も、曲水の宴を歌った王羲之等にはさすがに及びませんな」

私が何をしているかという、

詩を作って老の日々を送っているだけ、

居眠りをしては故郷を夢に見ているのである。

そうした私を哀れんで、役所の面々はそれぞれ自由にやってくれている。

気持ちはすっかり衰えて、火の消えた灰、さもなければ枯れた枝。

それでも、悪い癖はもとのままで、食い意地だけは張っている。

北の地でこそ白^{れい}い荔^し支^しが食べたい、

故郷のあの紅い梨がほしい、

立春には青い菰を山盛りにしよう、

酒は黄柑^{こうかん}を漬けたものを用意しよう……。

諸君等との宴が終わって、帰って臥すと、

帳^{とばり}の内^{うち}で灯は消えようとしていて、かえって酔いが醒めてしまう。

葉の落ちる音がやたらと聞こえる寂しさに、

李居士^{りこじ}を呼びつけて、「三三^{さんさん}」についてもう一回、問いたですとしようか。

((1) 陶淵明^{とうえんめい}の斜川^{しゃせん}での遊びは、本章 8 ページでも触れている。友人との楽しいピクニックの理想形である。(2) 最後の「三三^{さんさん}」とは何かということについて、もっともらしい説は、「三かける三は九」という謎で、李之儀^{りしぎ}は定州^{ていしゅう}にきてすぐに董九^{とうきゅう}という妓女が気に入る、そのことについて吟味しなければならぬと蘇軾^{そし}が戯れたのだという。それが本当かどうかはわからないが、そうしたジョークが言えるくらいに心を許せる間柄であったのだろう。(3) この詩は一見するとたわいもない戯れの作のようであるが、蘇軾^{そし}のこのころの重苦しい心情を戯れのベールで覆い隠したものであるのだろう。李之儀^{りしぎ}は昨年^{てい}のうちに定州に到着し、蘇軾^{そし}はさっそくその後の都の情勢について尋ねた。李之儀^{りしぎ}は慎重に言葉を選んで答えたのだが、蘇軾^{そし}は哲宗皇帝が自ら意思決定をしている

(つまり蘇軾が最後に書き置いたことは完全に無視された) ことを言外に察知し、事態はただならぬ方向へと進んで行くであろうと予感した)

■中山松醪寄雄州守王引進

中山(定州)の松醪を雄州知事の王崇拯(字は拯之)に贈り、この詩を添えた。松醪は穀類に松を混ぜて発酵させた酒で、松の花あるいは松の節を削ったものが用いられたようだ。雄州は、間に保州をはさんで、定州とともに遼国(契丹)と境を接する州である。

(蘇軾は松醪がよほど気に入ったと見えて、「松醪の賦」を作っている。ちなみに、「洞庭春色」(本章141ページ)を詠んだ「洞庭春色の賦」と「中山松醪の賦」を書いた蘇軾の墨蹟は、書家の間では行書の手本として珍重されている。どちらの賦も訳すには不向きな韻文であるので、ここでは省略する)

鬱鬱蒼髯とした千歳の姿、

堂々の松が、自ら進んで杯の中の酒となって、

子供っぽい遊びに我が身を供しようとしたわけではない。

唐の人は荷の葉を酒杯として楽しむために、

亀が巢を作ろうとして切ってしまう前に葉を採ったという。

この酒を作る松の白い花を採るために、

枝を踏む鶴に手伝ってもらったのだろうか。

この酒で酔ったならば、雪の中でそびえ立つ松の姿を模して舞い、

酒から醒めたなら、風に嘯く松を模して辞を^{ことば}発するがよいだろう。

騎兵を走らせてこの酒を送るのは、

ほかでもない、

軍営で閑な折にでも詩を詠んでもらいたいからだ。

(以上、幾つかの詩で見てきたように、定州^{ていしゅう}にきてからいろいろな産物をプレゼントするのが一種のマイブームになったかのである。新しい任地に赴くと、誰もがこのようなことをする習慣になっていたのだろうか)

■書蜀僧詩

ある奇僧のエピソードを記した短文。

^{ごだいじゅうこく} (五代十国時代に) ^{おうげんちょう} 王彦超が ^{しよく} 蜀を平定し、^お なお残党を逐っていたときに、部隊と遠く離れてしまった。ひどく腹が減り、ある村の寺へと入った。^{あるじ} 主の僧はひどく酔っていて、あぐらをかいて態度が不遜であった。王彦超は怒って斬ってしまおうとした。僧には少しも恐れる様子がなく、王彦超は ^{すぐれもの} 奇 ^か かもしれないとこれを赦した。

王彦超は寺の食べ物^{そしよく} (蔬食=精進物)を求めた。

僧は

「肉ならあるが、^{やさい} 蔬はない」

と、答えた。王彦超はますます ^{すぐれもの} 奇 ^た と感じた。

僧は蒸した豚の頭を出した。食べてみると非常にうまかった。

王彦超は喜んで僧に尋ねた。

「そなたは酒を飲み、肉を食らうだけなのか。他に技^{わざ}はないのか」

僧は言った。

「詩なら詠める」

「ならば、蒸し豚を題に詠んでみせよ」

僧は筆を手にとると、たちまちできあがった。

背長毛短淺含膘、久向山中食藥苗。

蒸処已将蕉葉裹、熟時兼用杏漿澆。

紅鮮雅称金盤釘、軟熟真堪玉卻挑。

若把氈根来比並、氈根自合吃藤条。

王彦超は大いに喜んで、紫の袈裟と師号を与えた。

^{げん ゆう}元祐九年二月十三日、たまたま王彦超の玄孫である王訥とこのことを語り合ったので、ここに記す。

((1) 原文に「王中令」とあるのを、ここでは孔凡礼『蘇軾年譜』(1998年)に従つて王彦超としたが、李之亮『蘇軾文集編年箋注』(2011年)では王全斌だとしている。

^{おうきつ}王訥がどちらの玄孫であるのかわからないために確定しないようだ。王全斌なら宋の初めの出来事ということになる。(2) 蒸し豚の詩は、訳者には訳す力がないので、残念ながら原文のまま掲げておく。4句目に「杏漿」とあるのは、杏^{あんず}の仁^{さね}のエキス(本章166ページ)のことであろう)

■子由生日以檀香観音像及新合印香銀篆盤為寿

弟の誕生日（2月20日）に合わせて、梅檀^{せんだん}の香木で刻んだ観音像、新しい合印香^{ごういんこう}、そして銀色の篆字^{てんじ}を施した盤^さを祝いの品として贈り、この詩を添えた。

梅檀^{せんだん}や婆律^{ばりつ}は外国産の香木。

麝香^{じゃこう}は西山^{せいざん}（太行山脈^{たいこう}）の柏^{はく}の葉から香りを得たもの。

それらに香りのある貝を砕き入れるなどして調合したのが合印香^{ごういんこう}。

これを一匹の螢のように微かに焚くと、

盤^さに刻まれた無数の篆字^{てんじ}が現れ出る。

ふわふわと雲が立ち昇り、合わさってはまた分かれ、

香り^{めんめん}は綿綿と絶えることなく広がってゆく。

君の長寿を祝ってこれらのものを贈る。

君と僕とは、少年のころから古い経典を師とし、

その傍らで、老子^{らうし}や釈迦^{しゃか}の書物も学んだ。

ともに災厄に遇って蠅や蚊に攻められ、

事を為す間もなくたちまち老いに至ってしまった。

いま君は道^{みち}を論じて高い位にあり、

僕は定州^{てい}で厳めしく軍の指揮を執っている。

僕らはまだ国の恩に報いていないのだから、
ますます勤めなければならないので、
世俗に馴染んでなどいられないのだ。
とはいえ、白髪は抜き去ることができないまでに増えてしまった。
君に尋ねよう。

「いつ郷里に帰るのかい。

散り散りになってしまった己を拾い集めて、
ばらばらな己を修復するのは、いつなのかい」
この心を、合印香で薫らせるのなら、
お釈迦様もきっと我等の思いを聞いてくださるのではないだろうか。

(仏教に関わりがある詩は概ね難解で、この詩もほとんど理解できない。ただ、弟と思う切実な気持ちだけは伝わってくるので、その部分を強調して訳した。ひどい「ずっぱ訳」で、採点するなら最低ランク、どれほど甘く見ても 20 点を超えることはないだろう)

■次韻李端叔送保倅翟安常赴闕兼寄子由

詩題は、「保州^{ほう}の副知事である翟安常^{てきあんじょう}が都に行くことになり、李之儀^{りしぎ あざな}（字は端叔^{たんしゆく}）が送別の詩を作った。それに次韻し、合わせて弟に寄せる」。詩の中頃からは弟へのメッセージになっている。

てい ほう
定州と保州はともに国境に並んでいる。

眠っていても治められるほどに静かであることすでに百年。

我が身を顧みるに、

愚かでありながら知事の命を受け、

貴君と談笑しつつ、(刑を軽くするために)蒲の穂の鞭を用いている。

故郷の生家への道に並ぶ松はさぞや荒れてしまったであろう

——帰耕を果たした陶淵明^{とうえんめい}を想わずにはいられない。

君と遊んだかの池も草に埋もれてしまったであろう

——弟がいてくれないと詩も詠めないと嘆いた謝靈運^{しゃれいゆん}と同じ思いだ。

白髪となってますます募るこの帰心を、

てき
翟君に託して君に伝えるところ。

古来^{こくろ}、疏広^{そくわ}、疏受^{そじゆ}の二人の賢さに似る者は誰もいないのだが……

((1) これは詩としてのまとまりにはなはだ欠けるが、都において困難な立場に置かれている弟を思う兄の心を知ることにはできるであろう。(2) 漢^{かん}の時代^{そこう}の疏広とその兄の子の疏受^{そじゆ}が、朝廷の高位に昇るとすぐに引退して郷里に帰ったことは、第5章2ページで見ている)

■次韻李端叔謝送牛戩鴛鴦竹石図

ぎゆうせん 文んおうちくせき ず り し ぎ あざな
牛戩という風変わりな道士が描いた「鴛鴦竹石図」を、蘇軾が李之儀(字
たんしゆく
は端叔)に贈り、その謝礼として李之儀が詩を詠んだので、蘇軾が次韻

した。牛鬣は町で酒を飲み、銭がなくなると画を描いて質として置き、後に清算すると画を破り捨てたという。ここの画題に「鴛鴦」とあるように鳥を描くのを得意とした。

貴君は、西戎^{せいじゅう}(西方の敵国)について議論し始めると、
食事などそっちのけで、時刻を忘れてしまう。

しかし、王道に則った戦は、
陣を敷くまでもなく相手を畏服させるものであるべきで、
賊の城壘を破るなど言うに足りないことなのだ。

辺境を守るのに第一になすべきは、士^しを得ることだ——

この語は簡潔^{ことば}でよく要^{かなめ}を言い当てている。

貴君が将帥を論じる口は、
どうやら画^しを識る私の眼に似ているだろうか。

可笑しく思わないでほしい、
まあ、壁にかかったこの牛鬣^{ぎゅうせん}の画を見るがよい。

牛鬣は常々昔の奇人を師と仰ぎ、
意に適わなければ、いくら理^{ことわり}で責めても無駄であった。

牛鬣はいかなる人なのか、
わかろうとしたところで、
世間に現れ出たことがないのだから、

放念して黙っているしかない。

人々が言うことはどうせ誤りばかりである。

牛鬣は帰ろうと思えば、何も必要とするものはなく、

己を車として険しい坂も登っていただけであった。

虫が羽化すればもはや繭はいらなくなるのと同じで、

一万軸の画があったところで、

虫干しするのに開いたり閉じたりする面倒があるだけで、

無用の長物として掃い去ってしまえばよいのだ。

もはや黙って自身の心を温めていけばよい。

牛鬣のこの画を貴君に贈るから、

静かなところで、さりと開いて見ていただきたい。

新しい詩を作るときは、

あまり筆を縦ほしいままにしないほうがよい、

あちこちの野良犬どもがうるさく吠えるだろうから。

いつ時がくるのか、それはわからないけれど、

妙所に至るべくいまは精進するがよいであろう。

(求心力を働かせ損なった作品である。敢えてつながるように整理すると、蘇軾が期待を寄せる李之儀りしぎに対して、牛鬣のように世俗の規範を超越して生きる道を選ぶのであれば、いましばらくは地道な修養に努めなさいと、教え諭したということであるのだろう)

■次韻聡上人見寄

思^し聡^{そう}上人が寄せてきた詩に次韻した。思聡上人とは誰なのか、20年前に
杭^{こう}州副知事であったときに記した短文があるので、それを先に見ておこ
う。

法^{ほう}恵^え円^{えん}師^し（円^{えん}照^{しょう}大師）の少年の弟子、彭^{ぼう}九^{きゅう}は年は十一で、琴を善く弾き、応対は
大人のように明瞭である。まだ法名がないと自分でいう。同じ師の弟子は法名に
「思^し」の字がある。それで、「思^し聡^{そう}」と名付けることにした。請い願わくば、この名の通
りに仏法を得ることを。このことを書いて与える。

（いまや思^し聡^{そう}は31歳、蘇^そ軾^しの期待した通りの立派な僧になったのだろう）

貴僧とは、前身は同じ寺の者であったのに、

何の宿業によるのか、

私だけが国境の地で官職にある。

昔^{きょうくう}、鏡^{きやう}空^{くう}という僧は、杭^{こう}州に行ってたちまち悟ったのだが、

貴僧はもとより杭^{こう}州において修行を積んだのだった。

昔^{えんたく}、円^{えん}沢^{たく}という僧は、妊娠している女性を見て、

生まれ出る子はいまに我が弟子になるであろうと言ったのだが、

貴僧と私の縁はそれくらい深いものがある。

帰りたい我が心は、

民を治める義務を忘れさせるくらいに強い。

この先は羊を追うことを生きる術にしようかと思う。

おうようしゅう

欧陽脩先生との縁で杭州の山に泉が湧き出たことがあった、

残念ながら、私にはそこまでのことは起こらない……。

おうようしゅう

ろくいちせん

(欧陽脩との縁によって湧いた泉、「六一泉」は第9章162ページで見ている)

■次韻王雄州還朝留別

ゆう

おうそうじょう

あざな

じょうし

雄州知事の王崇拯（字は拯之）（本章372ページ）が都に還ることになり、

その送別の詩。

しんそう

りょう

かつて真宗皇帝が初めて遼国と和を結んだときに、

ゆう

りいんそく

境を接する雄州の知事になったのが李允則。

その威名は八十年を経たいまも鳴り響き、

精悍なその顔を、雄州庁舎の壁に掲げられている画に見ることができる。

貴君が雄州の知事になると、

まさしく李允則と風流(気風)が似ると聞こえ、

太平の気運がいよいよ巡りきたのであった。

ところが、貴君がもう行ってしまうというので、

雄州の娘さんたちは、別れの歌を悲しく唱えている。

都に還れば、今度は詩人たちが挙って貴君を讃える詩を詠むであろう。

いつの日か貴君と朝廷において並び歩むことがあるだろうか。

もしもそうなったら、ひどい白髪頭を恥ずかしく思わねばならないだろう。

■三月二十日多葉杏盛開

あんず杏の花が数多く咲いたことを詠んだ3月20日の詩。題にある「た ようきょう多葉杏」は、葉が多く出から咲く品種であるという。

月の光のもと、天より下る露は花の蕊しべを潤す。

日の光のもと、暖かな風は花びらを散らす。

春の工たくみは睡ねむることなく、毎夜、この花を開かせる。

かぐわ芳しいこの花を、誰が刻み作ったのか。

天然の性質はもとより清らかかつ華やか、

香りがあるのかないのか、尋ねる人を悩ませ、

斜めや横に揺れる影は、あたりに愛らしさを振りまく。

ここ中山ちゅうざん(定州)は昔から戦の多い国、

陣営に立てた旗にはいつも殺気が浮かび、

かの高台には勇み立つ兵士が並び、

かの川辺では悲愴な覚悟の刺客を見送ったのだった。

この花が開いてからは、

ぎょく はたえ

玉の肌が殺伐とした塵を洗い流し、

むしろここを遊び人の巢窟に変え、

さらには温雅な人々の家にしたのである。

こうかい おも

私は老いて江海を念い、

酒を飲むこともなく、むなしく嘆いている。

果たして帰る日はいつなのか、

紅い桃が霞に燃えるときがもくろというのに。

この花が来年も開くときには、

酒杯を挙げて、蜀の風光を望みたいものだ。

(最後の句について、蘇軾自身の注で、「梓州を願って蜀に帰ることを思っている」と記している)

■三月二十日開園三首

同じ3月20日、杏の花の咲く庭を開放して人々を招き入れ、3首の詩を詠んだ。

其の一

ひげ びん

髯も鬢も白い人々が、

がやがや

儻々と語り合いながら、のどかな園林の中を、ぞろぞろと歩き回っている。

人というものは、もとより花より団子である、

この將軍の並み並みならぬ意を識^{こころ}てもらいたいものだ。

（最後の句について蘇軾自身の注で、「この日、父老に酒食を散じた」と記している。

「花より団子」の原文は「小人はただ羹^{スープ}を啜^{すす}る」である。蘇軾は軍を統括する職務も兼ねていたので、ここでは敢えて「將軍」と自称している）

其の二

西園^{さいえん}は鍵で鎖され、夜は静かにふけてゆく。

なおも遊ぶ人がいたのか、

柳の陰に臥せっている――

天より露が下り、

鶴^{ねむ}は睡りから覚める、

落ちる花と飛ぶ柳絮^{りゅうじょ}にすっぽりと埋もれて……。

（眠りから覚めたのは、酔客か、鶴か、仙人か、それとも蘇軾であろうか）

其の三

鬱鬱^{うつうつ}とした蒼い髯^{あお ひげ}――すなわち松は、我が道を学ぶ友。

絲絲^{し し}とした紅い萼^{あか がく}――すなわち海棠^{かいどう}は、我が郷里の人。

翠^{みどり}の竹が並ぶ川べりの路、

柴の門へと明るい月の光が送ってくれる……

それはいつのことであろうか。

かいどう しよく
(海棠が蜀の花であることは第6章52ページなどで見ている。最後は故郷の家へと歩む道を想像しているのである)

■雪浪齋銘

上の詩で、西園せいえんを開いて人々に杏の花を見せ、晩春の日々をいかにものどかに送っていたかのようなのであるのだが、都では事態が急を告げていた。かつて高太皇太后こうたいこうたいごうの指揮する反動政治によって放逐された新法党の人々が続々と都に召還され、逆に保守派の人々は次々に政権から追われ、3月26日、弟は副宰相の地位を失って汝州知事じょとして都から出されてしまった。新法党はさらなる報復合戦が繰り返されないよう、保守派を徹底的に叩き潰しておこうと画策し、その標的とされたのが蘇軾であった。保守派内の争いにおいて、蘇軾はしばしば詩文で先帝を誹謗したと批判されていたが、またしても同じことが蒸し返され、それをもって蘇軾を死刑に追い込もうとした。范純仁はんじゅんじんのように懸命に救おうとする人たちもいて、極刑はひとまず回避され、蘇軾から名誉ある学士の称号を奪って、遠く五嶺ごれいの南のいわゆる嶺外の地にある英州に移すことが決定された。それは4月11日であったようだが、なお紆余曲折があったのか、蘇軾のもとに朝廷の指令が届くまでには1カ月ほど時間がかかった。これは4月20日の日付のある銘。

私は中山(定州)の庁舎の後ろの庭で黒い石を得た。白い脈が走り、蜀の孫位
や孫知微が画に描いた石の間の奔流のように、水のあらゆる変化を尽くしている
かのように見える。また、白い石を曲陽県(定州に属する)で得た。大きな鉢をつくって、
これらを置き、上から激しく水を注ぐ。それにちなんで我が書齋を「雪浪齋」と名付け
た。

その銘に曰く、

蜀の二人の孫氏が水の変化のすべてを描き切った、
その画には伝わらずにかの世に逝ってしまったものもあった。
不思議なことに、それはこの二つの石に存在していたのだ。

石は雪の浪を翻し、水の理を具えている。

芙蓉のような一丈八尺の鉢を置き、

仙界の井戸から酌んだ水を、

芙蓉の根元へと注ぐ。

私は銘を作るが、多言は用いまい。

紹聖元年四月辛酉。

(先に雪浪石を詠んだ詩を見ている(本章350ページ)。そのときにも鉢に石を置いて水
を注いでいたのだが、さらに遊び心が昂じて、一丈八尺の巨大な鉢を作り、二つの石を
置いたのだろう)

■三国名臣

4月24日、蘇軾^{でい}はまだ定州にいた。

前漢^{ぜんかん}の士は智謀^{ちぼう}に長けていたが、名義^{ごかん}には薄^{たっ}かった。後漢^{ごかん}の士は風節^{ふうせつ}を尚^{たっ}とんだが、権略^{けんりゃく}には疎^そかった。この両者を兼ねていたのが三国時代の名臣であった。なかでも諸葛孔明^{しよかつこうめい}は抜き立てて、古代の三代の聖人を補佐する大臣であったとしても、世の中の評価は変わりはない。

紹聖元年^{しょうせい}四月二十四日、書く。

（劉備^{りゅうび}はその最後のときに、もしも我が子が愚かであったならば、君が皇位に就いてもよいと、諸葛孔明^{しよかつこうめい}に言い残したという。実際に息子は愚かであったのだが、諸葛孔明は誠心誠意仕え、ともすれば降りかかる疑いを避けようと、もっぱら前線に出て指揮を執り、ついには陣没した。蘇軾のこの文は短く、取り立てて内容はないものの、この時期に蘇軾は晩年の諸葛孔明の心情に深く思いを馳せていた推測することができるであろう）